

蠍の尻尾

深波 月夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

主人公とエスパディア型の武装神姫、シャウラさんの物語。
なるべく毎日23時30分頃更新。

武装神姫SSWIKIより、設定をお借りしている点があります。

『鋼の心』く Eisen Herzく』ALC様

『不良品』不良品オーナー様

『岡島士郎と愉快な神姫達』でこちゅー様

『妄想神姫』妄想の人様

『Mighty Magic』マイティの人様

『ウサギのナミダ』トミスけ様

『橘明人とかしまし神姫たちの日常日記』神姫の父様

『ツガル戦術論』ツガ戦の人様

『魔女っ子神姫』ドキドキ☆ハウリン』新井しーな様

『2036の風』キラバト様

『神姫ちゃんは何歳ですか』優柔不断な人(仮)様

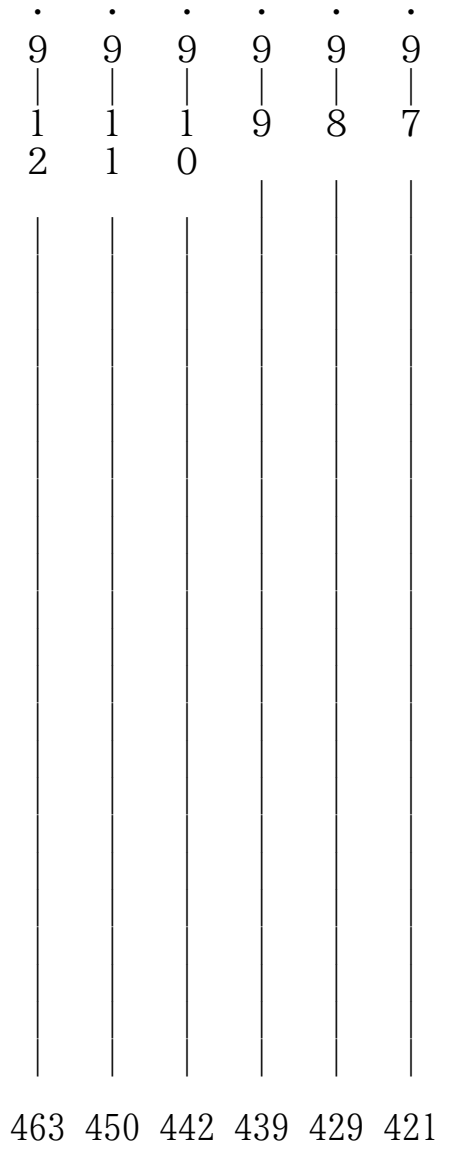
以上の各位よりお借りしています(する予定)。

目次

$\begin{matrix} \cdot \\ 3 \\ \\ 6 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 3 \\ \\ 5 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 3 \\ \\ 4 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 3 \\ \\ 3 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 3 \\ \\ 2 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 3 \\ \\ 1 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 2 \\ \\ 8 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 2 \\ \\ 7 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 2 \\ \\ 6 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 2 \\ \\ 5 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 2 \\ \\ 4 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 2 \\ \\ 3 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 2 \\ \\ 2 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 2 \\ \\ 1 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 1 \\ \\ 5 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 0 \\ \\ 5 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 0 \\ \\ 4 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 1 \\ \\ 4 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 0 \\ \\ 3 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 0 \\ \\ 2 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 1 \\ \\ 3 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 1 \\ \\ 2 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 0 \\ \\ 1 \end{matrix}$	$\begin{matrix} \cdot \\ 1 \\ \\ 1 \end{matrix}$
134	126	121	118	114	109	103	94	87	80	75	68	60	55	48	44	40	32	26	22	18	13	9	1

• 6	• 6	• 6	• 6	• 0	• 0	• 0	• 0	• 5	• 5	• 5	• 5	• 4	• 4	• 4	• 4	• 4	• 4	• 3	• 3	• 3	• 3	• 3	• 3	
 4	 3	 2	 1	 9	 8	 7	 6	 4	 3	 2	 1	 7	 6	 5	 4	 3	 2	 1	 1	 1	 1	 9	 8	 7
272	264	254	251	247	244	239	234	230	220	212	208	205	201	195	191	187	180	175	172	163	157	153	147	141

9	9	9	9	9	9	8	8	8	8	7	7	7	7	7	7	7	7	0	番 外 ノ 1	6	6	6	6		
6	5	4	3	2	1	4	3	2	1	9	8	7	6	5	4	3	2	1	0	1	0	8	7	6	5
416	411	406	399	393	388	382	378	372	366	363	359	356	353	349	344	337	332	328	322	313	301	291	286	281	



その日、俺は久しぶりにK市の駅前にある、大きなゲームセンターの入り口を潜った。わざわざゲームのために電車を使うのも変な感じだとも思ったが、何年か前まではそれが当たり前だったんだよなあ。それを考えると、なんだか可笑しくなってくる。

しかし平日の夕方って時間帯にしては、筐体は幾つか空いているし、これなら待たずに始められそうだ。よく見ると、挑戦受付中の表示も見える。

「さて、いよいよ初陣だが、いけるな？」

「はい、主」

俺の武装神姫、シャウラ。

クワガタをモチーフにした、エスパディア型だ。

武装神姫。

この身長15cmほどのフィギュアロボットが、2038年の今、大ブームを巻き起こしている。特にバトルロンドと呼ばれるバトルゲームサービスは爆発的に人気が広がり、今では世界的に広まっている。テレビで、ラジオで、その話題を聞かない日はないほどだ。もともとフィギュアロボットによるバトルサービスはバトルロンドが初ではなく、その下地もあって一気に広がった感じだろうか。

で、遅蒔きながらそのブームに乗り、初めてのバトルロンドと洒落込もうと言うわけだ。といっても、今回はほとんどがデフォルトの武装じゃないんだが。まあ、思うところもあるしな。筐体に座って、武装のセット。データでも出来るっちゃ出来るんだが、このスタイルに慣れるためにも、実際に手を動かすつもりで持ってきてある。両肩に、デフォルトの組み換えで可動式のシールドを備え、ヘッドセットと胸の装甲もそのまま。あとは両足にオリジナルの強化脚と、投擲用のナイフ。メインの武器はこれまたオリジナルのロングポールアックスだ。あとは左腕にアームガードをつけるだけの軽装備。サイドボードに予備のナイフをセットし、武装させたシャウラをメインにセット。

久しぶりの感覚に、深呼吸をしてからスタートボタンに手を伸ばした。

夕日に照らされるビル街。風に舞う砂埃の中で、白刃が振るわれる。鎧に身を包んだ騎士型のサイフォスタイプ。右手には両刃剣コルヌが握られている。次々と剣閃を繰り返すサイフォスに対し、左右のシールドで受け流しつつ斧の一撃を狙うシャウラ。

袈裟斬り。盾が受け流す。横薙ぎの斧。後ろに跳び、かわす。追撃するかのように投げられたナイフをコルヌが打ち落とし、ようやく一息。

サイフォスは考える。鋭く打ち込まれる剣が、二枚の盾に阻まれる。まして巨大な刃を持つ斧が守勢に回れば、これを抜くのは難しい。しかもあの斧。破壊力だけを考えれば、如何に自慢の甲冑も容易く打ち砕かれてしまうだろう。その威力故に動きは単調で、避けるのは難しくはない。が、その一撃を警戒すれば攻め切れない。

互いに決め手を欠いたまま距離を取るのも、幾度目になったか。牽制として、ボウガンを放つ。斧を盾にして防ぎつつ、青い影がビルの後ろに駆け込んだ。

「仕留め損ないました、マスター」

『コルヌだけだと決め手に欠けるかな。あの両肩、基本武装の組み替えにしているいい動きだ』

「足も早い。オリジナルでしょうが、あの脚の性能も中々侮れません」

自らも駆けながら、対戦筐体のシステム越しに伝えあう。バトル中は、神姫とマスターの間には常時通信回線が開いている。必要ならば、サイドボードとして登録してある武器を電脳空間上の神姫に送ることも出来る。

「撃ち返してこないところを見ると、完全な近接特化と考えて良いでしょうか」

ビルの反対側に身を隠したサイフォスが問う。サイドボードに何か仕込みがないとも限らない。が、有るなら温存する局面でないのも確かだ。相手との距離はさほど開いてはいない。お互いに駆ければ、

一瞬の内に間合いに入る。

『決めてしまおう。肉薄して、接近戦だ。お前の合図でサイドボードを送るから、二刀で決めろ』

「承知しました、マスター」

『大分いい調子で打ち合えたな』

「しかし、決め手には欠けます」

『むしろ好都合だ。あれだけ真正面からぶつかれば、嫌でも斧を警戒する』

本来、シャウラの得意とする武装は剣だ。今回は目的があつて、あえて外してある。普段通り剣を持たせれば、接近しての格闘戦ならそうそう引けはとらない。そんな柔な鍛え方はしてないしな。

『主、指示を』

「ああ、次の動きは……」

さあて、どっちに転ぶにしても、決め所、かね。

エスパディアが飛び出してきたのは、ほぼ同時だった。度胸はいい。こちらの飛び道具を、来ないと判断したか。あるいは見切ったのか。どちらにせよ、接近戦は望む処なのだ。相手が脚を止め、構える。一息に駆けて、斬る。それだけだ。その時。壁が、爆ぜた。続いて、足元。反射的に、脚を止めた。何があつた。次の瞬間に、何かが体にぶつかった。動けない。拘束されている。何が、あつた。

ばかな。

真つ先に頭に思い付いたのはその言葉だった。こちらの出足をくじいたのはアームガードに隠されていたビームガン。ここまで射撃武器を隠していたこともそうだが、それよりも、最大の武器である大斧を、投げつけてくるなんて。しかし次の瞬間、理解した。左右に翼を広げたような形の斧は、その刃をビルの壁面に食い込ませ、サイフォスを磔にしている。コルヌを持つ右手も動きを封じていた。

走り込んでくるエスパディアの両手には、先ほど投げたものと同じ

ナイフが握られている。刃が短い投擲用のナイフでも、こちらは完全に動けない。急所に入れば一撃で勝負はついてしまう。

狙われていた。剣を持つ手を下げ、駆けるその一瞬を狙われたのだと理解した瞬間、頭の中が真っ白になった。

「マスターー！」

自分の神姫の声に、反射的にボタンを操作した。

武装を解いてケースに納めると、シャウラを肩に乗せた。申し訳なさそうな顔の相棒に、気にするな、と指の腹を頭に乗せる。今日の戦いは、勝ち負けはどうでもいいって言ってあったんだが、勝つつもりで来ていたらしい。続けようと思ってはいたが、一度切り変えた方が良さそうだ。とりあえず移動しようと、席を立つ。

「待ちなさい」

ふり返ると、さっき対戦したサイフオスがマスターと一緒に立っていた。

「貴方達、先の戦いはどういふつもりですか」

「突然ですまないね。どうもコイツ、さっきの対戦に納得がいかなかったらしいんだ。失礼だとは思うんだが、話だけ聞いてやって貰えないかな」

「それは構いませんけど……納得がいかないってのは？」

無然とした表情の騎士が、口を開く。こんな苦々しい顔をされるよいうなことをした覚えはないんだが……。

「先ほどの戦いの幕切れは、どういふつもりなのですか。射撃武器を隠していたことは何を言うつもりもありません。あまりに見事な立ち会いに、私もマスターも、その存在を疑わなかった。そこは策として認めましょう。問題はその後です。そこまで見事に隠した切り札を単なる威嚇に使い、拘束が成功したとはいえ特攻とは、あまりに無策。勝ちを譲られたようにしか思えません。そうだとしたら、私への、いえ、私のマスターへの侮辱。如何なるつもりであのような……」

「ストップ。その辺でやめとけ。充分伝わったろう。興奮しすぎだ」

よほど頭に来ているのか、一気に喋るサイフォスをマスターがたしなめる。成る程、そんな風に受け取られちゃったのか。

「不躰な奴で本当に申し訳ない。もしよかったら、答えてやってくれないか？」

こつそりと小声で、こうなるとうるさい奴なんだ、と付け加えるマスターに、俺は苦笑した。少し付き合うくらい構わないだろう、そんな気持ちになってくる連中だ。こぼれてくる笑いを押さえるのが大変だ。自然、口調が砕けてフランクなものになった。

「あー、まず誤解なんだが、射撃武器な。あれは隠していたわけでも切り札にしてたわけでもないんだ。ウチのはね、どういうわけだか火器管制プログラムがプリセットされてなかったんだよ。つまり、録に射撃武器は使えないんだ」

「そんな馬鹿な、武装神姫である以上、そんなことは……」

「まあ、普通はないんだろうな。でも、そうなんだ。だから、人間がやるように目で見えたものに向かってトリガーを引くくらいしか出来ない。つまり、切り札と呼べるほどの物にはならないんだ。実際、あれはいざと言うとき用のビームサーベルなんだよ。ビームガンとしても使えるが、そうそう当たるもんじゃない。いくら相手が身動きとれないっていつても、ね」

拘束して、ビームガンで蜂の巣にするべきだった。そう言いたかったのだろう。まずは前提となる誤解を解く。が、まだ納得はしてないようだ。俺は言葉を続けた。

「それに弾道計算も出来ないから、投擲もそこまで得意じゃない。拘束が決まったっていつても、長く続くわけじゃないし、なるべく素早く勝負をつける必要があったのさ。サイドボードに何かあるんじゃないかとは思ってたが、まさかナイフごと真つ二つにされるとは予想していなかった」

ビームガンも、ナイフ投げも、決め手にするにはあまりに精密さに欠け、威力も低い。拘束を外されるまでの短い時間で勝負を決めるには、あの方法しか無かった。それが俺の思い描いた勝利への筋道だった

た。まさか拘束された相手が、左手一本でナイフごと胴を両断してくるとは思わないだろうか？

「譲るつもりは毛頭なかった。こっちの想定を越えてきた、君らの地力の勝利だ」

ようやく納得がいつてくれたようだ。騎士型は振り上げた拳の下ろし方に迷うような顔をしてる。

「……先ほどの、侮辱という言葉は訂正しましょう。しかし、解りません。なぜ貴方は、銃器も使えない神姫などと、バトルロンドに参加しているのですか」

あー、そう来たか……シャウラが一瞬、身を縮ませた。

「……確かに、ウチのは遠距離ではさつぱりさ。だけどき、銃が使えりや勝てるってほど、単純なもんなのかい？ バトルロンドってのはさ」

喋りながら、俺は気づいた。

「俺は神姫に触り始めてまだそんなに経っちゃいけないけどさ、格闘戦一本でリーグの上の方まで行ける神姫だっている。要は戦い方だと思ってたんだが、違うのかい」

今、俺は。

「少なくとも、銃を使えない、初陣の神姫が戦ったにしちゃ、いい勝負だったと思うがね」

意識していないだろうかといえ、自分の神姫をコケにされて、怒っているんだ。

「……と、いうことだそうだ。現に、お前、十分苦戦してただろ。『銃も使えない』神姫相手に」

唐突に相手のマスターが割って入った。良かった。実は俺も、話のまとめ方に困ってきていたんだ。

「きちつと頭を下げてこい。過ちを進んで正すのも、大切なことだ。さっきのお前の言葉は、自分自身も貶める」

「……申し訳ありませんでした」

苦い顔は、自分に向けたものでもあるのだろう。謝罪の言葉を受けると、シャウラと場所を変えることにした。

「どうだった？ 初めてのバトルの感想は」

「……うまく、出来ませんでした」

申し訳なきような声だ。シャウラは火器管制システムがゴツソリ抜け落ちた状態でウチに来た。いわゆる初期不良の機体だった。俺自身はバトルだけが目的で神姫を買ったわけじゃないし、なんとも思っていないんだが、本人は相当気にしている。

「うまく出来なかった。どの辺が出来なかったんだと思う？」

「さっきのサイフォスが言うように、ビームガンで遠い間合いから攻めていけば……」

「そんな攻め方、練習してきてないだろう？ 今回のバトルでは、駆け回りつつ間合いを詰めての接近戦を狙う、って作戦だ。それで勝てなかったのは、作戦を立てた俺の責任でもあるさ」

「そんなことは」

「そういうものだろ、バトルロンドって。とりあえず、当面の目的は勝つことじゃない。だから、勝てなかったことは気にしないでもいい」

「では、主はなんのためにバトルロンドをされるのですか？」

「シャウは勝ちたいのか？」

「当たり前です！ 主に勝利を捧げるのも、武装神姫の勤めなんですから」

「そうか、俺は楽しんでゲームが出来れば、別に勝っても負けてもよかったんだけど、シャウがそう言うんなら、真面目に勝ちに行こうか」

手を抜いていたつもりはないが、本気でなかったのは確かだ。でも、この小さな相棒がここまで本気になってるんなら、マスターである俺も本気にならなきゃ失礼だな。

「じゃあ、とりあえず、一勝を目指そうか」

「はい、主！」

ゲームセンターに通う生活なんてのも久しぶりだが、悪くないとも思う。一度は嫌になったそれを、『悪くない』と思えただけでも、武装神姫を始めた意味があると思う。

まずは、俺のために意気込んでる相棒に、一勝プレゼントしないと、
な。

「Insect Arms製、MMSオートマトン、神姫、クワガタ型
エスパディア、IAL01、セットアップ完了、起動します」

自動再生されるその音声が、私の記憶の最初の一步。

湿り気を帯びた風が頬を撫ぜる。AIに連動した日本標準時刻の
カレンダーが私に『夏』という季節を教えてくれる。窓から差し込む
光が夕暮れを告げ、私の口からは自動再生のメッセージが流れ続けて
いる。

「Я（ヤー）の名前、何?」

「君の名前はシャウラ」

蠍座の尻尾の星からとった名前だよ、と言って、私の顔を覗き込ん
だのがオーナーだろうか。横に置かれたPCに表示されたステータ
スからも、そうらしいことが読み取れる。

「よろしく、シャウラ」

この時から、私は始まった。

これは、私が私になるための物語だ。

「お、ついに神姫買ったのか?」

「意外だね、ああいうオートマトン系のホビーは苦手なのかと思って
た」

「俺もそう思ってるよ」

俺の反応がおかしかったのか、二人が笑い声を上げる。

それも無理はないな、と思ったのでそのまま流す。元々はユーザー
の生活サポートアンドロイドとして販売の始まった神姫も、昨今のホ
ビーバトルブームを受けてかバトルロンドという対戦ゲームサービ
スが流行りだ。しかして武装神姫は高校生が軽い気持ちで手を出す
には敷居が高い。本体価格も高価だし、定期的なメンテナンスも必要
だ。バトルまで視野に入れれば、高額な武装パーツや消耗品類も必要
になる。普通の趣味に較べて、カネがかかるのだ。それだけの高額な

投資を、苦手なものにわざわざかける奴はいないだろう。

「まあ、新しく神姫を始めるのは歓迎かな」

「何買ったんだよ？ エスパディア？ 最新型じゃねーか」

「またクセのある奴選ぶんだね」

「近接特化だろ？ でもそこは育て方次第ってやつか」

この二人はそんな高価な趣味を抱える、俗に言うオタク仲間だ。俺の通う工業系の学校の中でも成績は良い方ではないが、趣味の方面では相当なもので、特に神姫バトルでは県の代表になるほどの実力者だ。武装パーツも学校の機材を使って自分達で作ったり、カスタマイズしたりしている。

「武装とかどうすんだ？ やっぱなんか自作したりすんのか？」

「最近はこのホビーバトルのパーツ使う人も増えてきてるしね、そっち系なら流用するのも簡単だし」

「いや、当面はバトルとかする予定ないんだけど……」

「でもフルパッケージで買ったんでしょ」

「エスパディア買ったたら、武装も純正で固めた方が運用楽だしな。いいなー最新型。今度でいいから、武装いじらせろよ」

二人の興味は、目下のところエスパディアの武装のようだ。無理もない。武装神姫としてリリースされている製品も弾を重ね、旧商品との差別化を図ろうと各メーカー必死の企業努力をしている。その中で新規参入メーカーである Insect Arms 社が送り出した最新型であるエスパディア。バトルロンドの猛者である友人二人が興味を持つのも仕方あるまい。

「そのうち、気が向いたらね」

そんな俺の反応をよそに、二人の会話は徐々に初心者育成講座めいてきた。そこまで入れ込む予定は今のところないのだが、二人の心情を察するに仕方ないところか。手に持ったパックのジュースをすすりながら聞き流すことにする。

「あ、そういうや二人に聞きたかったんだ、エスパディアって、射撃系の管制プログラム入ってないの？」

「え？」

武装神姫の武装には、それぞれ専用の管制ソフトがプリセットされている。様々な武装を組み換えるだけでも正常に機能するのはそのお陰だ。特に射撃系の制御は、武装のコントロールだけでなく、測距や弾道計算など、射撃に必要な基礎計算プログラムも含まれている。それはおよそ武装神姫なら必須と言えるのもので、普通ならインストールされていないことなど考えられない。それが二人の共通した意見だった。

……が、ウチに来た神姫にはそれがなかった。バックアップデータを取るときに、メモリに空き容量がやたらと多いのが気になって、調べてみた結果だ。俺としては別に困らないのだが、一応初期不良の疑いがあるのでメーカーに問い合わせを勧められた。初期不良が認められれば、無償での交換も効くだろう、とのことだ。

「……ということらしいよ」

「やっぱり、冴は不良品だったのね」

「そうみたいだね、多分」

この家に来てからの、短い記憶がよぎったような気がする。

隙間だらけの本棚と、雑多な工具に、ほんの少しの模型。殺風景な、記憶のすべて。

不良品。

その言葉が意味するところは分かってるつもりだ。

武装神姫の素体は、精密機械だ。不良を抱えた素体は、メーカーに回収後、例外なく破棄される。それがソフトウェア的な不良であつても同様だ。

「じゃあ、メーカーへの連絡と、返送手続きをお願い。恐らく、一週間程で正規品が届くはず」

努めて事務的に告げる。

驚いたような顔をされたのは気のせいだろう。

「別に交換なんてしないよ?」

「でも、冴は不良品で……」

「普通に生活する分には不都合はないんでしょ。それに、射撃武器が

使えないからって、バトル出来ない訳じゃない。要は戦い方じゃない？」

「……そう、エスパディアは、牙は、格闘戦では負けない」

口をつけて出たのは、プリセットされた記録にあった、エスパディア型のセールストーク。刀剣での近接戦闘に特化した『格闘戦最強の新鋭機』。

不良を抱えた私は、すがってしまった。もしかしたら、廃棄されずにすむかもしれないという、希望に。それは工業製品のAIとしては、間違った選択。でも私は、私でいたかった。こんな思いを抱く私は、やはり不良品なのだろうか。

「……いいよね、それ。気に入った。格闘戦最強か」

とつきに出てきた大言壮語を、いたく気に入った様子のおーナー……昨日今日起動した私でも『格闘戦最強』という肩書きを実現するのが、簡単でないことは分かる。謳い文句は所詮、謳い文句でしかないのだ。それでも、目の前のおーナーは無邪気にそれを喜んでいるようだ。

「あんまりバトルロンドに興味があつたわけじゃないけど、気に入つたな。目指してみようか、『格闘戦最強』の神姫」

「……はい」

否はなかつた。私が私であるために。

不良品の私が、私であり続けるために。

プリセットされたデータの中から、自然と基本選択される言語パターンを変えていた。

「ならば今この時より、私は主の望む刃となりましょう。よろしくお願ひします、我が主」

「うん、改めて、よろしく、シャウラ」

これは、私が私になるための物語だ。

私が主の神姫として、生きていくための物語だ。

私はシャウラ。

主の望むものを裁つ刃。

『英雄ってのはさ、英雄になろうとした瞬間に、失格なんだよね』

画面から流れる台詞に混じって、シャウラが素振りをする音と、マスターの使ってるリユーターの音が聞こえる。

『もうひとつは、オマエ、なにがあつたか知らないけど、見てらんないよ。そういうの、ウザいからさ』

昔の特撮を見ながらゴロゴロするのは、唯一絶対のボク、アルキオネの趣味だ。マスターのコレクションから持ってきたこの話も、もう三十年以上前の人気シリーズの一作だけど、このシリーズは未だに人気だし、ボクも大好き。週末にはテレビで最新作を流している。こうして好きな特撮を見ながらポテチを貪り、コーラ味のジェリカンを飲む時間だけは何があつても譲れないね。活発なランサメント型らしくない？ よく言われるけど、ボクみたいに引きこもるのが好きな、型破りな神姫だつているのさ。

『確かにアイツは馬鹿だが……』

『俺やお前よりマシな人間、でしょ？』

しかしこの話、何がいつて、今出てきた緑のヤツが好きなんだよなあ。カッコいいし、銃がメインの武器なのに格闘もやる。オマケに重装備の追加があるなんて、ホントにカッコいい。まあ、最後は死んじゃうんだけどさ……。

『先生……また、旨いもん買つて帰ります……』

ああ……。

たまらぬ……。

大好きな話ほど、終わると寂しい。

なんで死んじゃうんだろう。

見終わった映画をプレイヤーから片付けながら、さっきのシーンを思い出した。そりゃあお話だから、登場人物にはなんかしら決着がつかないと納得いかないし、ラストシーンみたく『全部なかつたことに

なりました!』はどうかと思うけど、大好きな話や人がいなくなってしまうのはやっぱり寂しい。こんな時だけは、自分が感情のある神姫なんだって思う。

ボクら神姫は、CSC（コア・セットアップ・チップ）が作る感情を持つている。これが他のフィギュアロボットとの大きな違いで、今の武装神姫ブームにも大きな役割を果たしていると言われている。コアとの組み合わせで性格や特性が異なり、唯一無二の個性が出来るんだそうだ。

CSCの入っている胸をさする。今、ボクは、寂しいと感じている。それはいいことなんだろうけど、やっぱりモヤモヤする。感情があるからって、いいことばかりではないんだらうなあ。しんとした部屋に、変わらず素振りとりユーターの音が聞こえてくる。ええい、人（?）が落ち込んだらというのに、むしろくしゃする。こんな時は、マスターを連れ出してうさを晴らさねば。自宅警備員を自称するボクでも、たまには外に出たくなるのだ。

「めずらしいな、アルがバトルがしたいなんて」

「フン、ボクにもたまにはそういう風向きの日があるのさ」

「……」

今日はせっかくのお休みの日なのに、突然駄々をこねだしたあの子の提案で、作業を中断した主と一緒に二駅離れたゲームセンターまで来ている。あの子は気まぐれなくせに、言い出すと聞かないところがある。私も訓練を中断して同行することになった。

「装備はこの間と一緒でいいか?」

「勿論」

軽い口調で、主のお手製のレッグパーツと、少しカスタムを加えたアサルトライフルを握っている。自分でも気づいている、私はあの子のことをあまりよくは思っていないようだ。いい加減で、怠け者で、自堕落で……。

「準備は出来た?」

「オツケー、いつでも行けるよん」

主の手が、あの子をコンソールに運ぶ。それを見る私の胸がざわざわと波立つのは、何なのだろう。電子音がバトルの開始を告げるのが、どこか遠くの音のように聞こえてくる。

バトルステージは「廃墟のビル街」。風が吹くたびに、土煙が舞う。その土煙を切り裂くように、Zeil3. 6mmガトリングキャノンが弾幕を作る。相手のランサメントはまるでアイススケートで滑るようにかわしていく。レッグパーツはオリジナルだろう、ホバークラフトのように走れるらしく、朽ちたビルや瓦礫を盾に、何でもないように走り続けている。ターンやジャンプ、姿勢を変えたりスピードを変えたりと、多彩な動きはこちらの弾が影を捉えることさえ許さない。

「コマンダー、攻撃が当たりません！」

『慌てるな、今当たらないうのは作戦の内だ。落ち着いて作戦ポイントまで追い込め！』

「サー、コマンダー！」

コマンダーからの指令で、廃ビルの隙間の路地に弾幕で壁を作る。廃墟の迷路の中で、相手は確実に道を選ばされている。コマンダーの作戦通りだ。

『相手は録に撃ち返してこれてない、圧倒出来るぞ』

「サー、足が自慢のようですが、追い切れない速度ではありません」

恐らく足でかき回して勝負するタイプなのだろう。唯一手に握られているのはロングバレルのアサルトライフルで、銃剣が付けられている。が、その機動力もこちらの火力には手も足も出ないらしい。ガトリングの作る弾の壁に遮られ、間合いを取ることで精一杯だ。追い詰めていることを悟られないように、慎重に追う。コマンダーの作戦通りに追い詰めてさえしまえば、あの軽装では、直撃は耐えられないはずだ。

しかし、この相手、決して弱くはない。事前に確認した戦績では二戦二勝と戦歴の浅い新米だと思ったが、単に経験戦闘数が少ないだけだ。おそらく、本人がマスターのどちらかがバトルを好まないのだから。

う。個々に性格の違う神姫には、バトル嫌いの個体が生まれるのも珍しい話ではないらしい。

『次の路地に誘導しろ！　そこは袋小路だ、一気に押し潰しちまえ！』

「イエッサー！」

コマンドーの声に、雑念を振り払う。狙い通り、相手はビルとビルの間にある細い通りに逃げ込む。ここならばもう逃げ場はない。路地を曲がる。壁に囲まれた空間に、ありったけの弾丸を放つ。が、いない。ガトリングの弾が空しく壁に痕を穿っていく。

「ッ！　どこに……」

「チャオ」

上。目に飛び込んでくる不敵な笑顔と、赤い機影。それを追いかけるように、無数の銃弾。そして降りかかる斬撃に、何が起こったのかも分からぬまま途切れる意識を手放した。

「……すごい。壁を走り抜けるなんて……」

「装備の特性をうまく生かしたね。ホバーやローラー装備ならではの意表のつき方だ。これがストラーフのレッグか何かだったら、相手も壁を蹴って上空に逃れるのを警戒したかもしれないなかったけどね」

袋小路に追い詰められた後、何事もないかのようにそのままの勢いで垂直に壁を走り抜け、相手の上に飛び込むなんて、到底私には真似出来ない技だ。追い込まれているように見せていたのか、それとも、一瞬の機転で不利を覆したのか。どちらにしても、やはり、あの子は強い。主も細かく指示を出す私の時と違い、安心して見ている様子で、指示のひとつも出す様子がなかった。私なんかと違って、強い……また、胸がざわざわと波立つ感じ。なんなのだろう、この感覚は……コアにバグでもあるのだろうか。それとも、感覚器官の不調？　コンソール上には、またひとつ白い星が表示された。

「お疲れ、どうだった？」

「久しぶりに駆け回って疲れたねー。でも、いいストレス解消にはなったかなー」

戻ってきたあの子を笑顔で迎える主。それを見ると、胸のざわつきが強まる。

バトルそのものも久しぶりだというのに、あの子は強い。それも、普段から訓練をするでもなく。日常的に遊んでだらけている姿からは、想像も出来ないほどだ。

その一方で、最近の私は勝率があまり芳しくない。今のところ、十五戦して九敗と、大きく負け越している。敗因の多くは、得意のレンジに持ち込めていないことだと主は教えてくれた。射撃装備の相手のかぎす、間合いという名の盾を抜く術が、今の私には決定的に不足しているのだそうだ。さらに相手が飛行装備をしている場合、もはやなす術がない。

主は「今の装備構成には穴があるから、仕方ない」と仰有っていた。でも、やはり私は、私自身がうまく出来なかったことを思い返し、今もあの子との差を感じ、胸をざわめかせてしまうのだ。

相変わらずアルは強いな。それが率直な感想だった。アルは装備に対するセンスが半端じゃない。大体の装備は一度使ってみれば特性を掴むし、二、三度使えば使いこなせてしまう。それは起動した時からずつとそうで、もはや天性と言う他なかった。まあ、本人がバトルをするより特撮見ながらゴロゴロするのが好きなせいか、どうしてもバトルが強いつてイメージはないんだけどな。

一方のシャウは勝率そこそこで、今のところ、十五戦して六勝。この成績なのには理由がある。格闘戦しか出来ないシャウは、普通の神姫以上に弱点が多い。デフォルトの装備を使えば空を飛ぶことも出来るんだが、まだ実際にバトルでは使わせてない。それには一応の理由もあるんだが……。

ここまで来たついでだし、シャウもバトルさせてみるかな？

『左、回避！』

主の声に、反射的に岩影に飛び込む。爆風。装甲に、弾けとんだ石があたる。相手の武装は、恐らくフォートブラッグの滑空砲。長距離からの榴弾砲による爆撃には、接近戦用の装備しかない私では、手も足も出ない。緩急をつけるためか、辺りが静まり攻撃の気配が消えた。狙撃武器を持つ相手に距離を詰め切れないのは、今までから考えでもよくないパターンだ。

『相手の位置は大体掴めた、フィールド外れの岩山の上辺りだね』

そう、今までの、よくないパターン。主はいつもの確で、驚くほど素早く指示してくれる。それに応えられないのは、私の方。

「私も、バトルを？」

「そう、せっかくここまで来たんだし、アルのバトルも大分早く終わつたし。勿論、シャウがよければだけど」

いちいち確認なんてとらなくなったっていいのにさ。そんなこと聞かなくたって、マスターがバトルしようなんて言ったらアイツがイヤだなんて言うわけがないのに。

基本、ボク達神姫にマスターに対する「NO」はない。人間の大事な意思決定に、強い強制力を持ってないのは、そりゃあ所詮はホビーだからだ。中にはキャラとして嫌がってみせたり、言うことを聞かなかつたりする神姫もいるけど、あくまでもキャラクターの範疇だけだしね。

「はい、主がお望みなら」

ほら、やっぱり。そんな中でもアイツはさらに、マスターの意思を汲もうとするタイプだし、負けこんでて乗り気でなくてもそう答えるさ。

いつもの装備をセッティングして、ポッドに接続。バトルフィールドは岩山。レッグパーツで走破性を強化しているアイツには苦手とも得意とも言えない地形だ。あとは、相手がどんな装備かによるけ

ど、ね。

最初の一撃を見たときに既に胸の中に沸き上がる苦手意識と不安感。それを極力無視して走り続ける。今のところ致命的なダメージはないが、時間の問題であることは否めない。柔軟なばねがある私のレッグパーツなら、不整地であつても駆け続けるのは難しくはないが、距離がありすぎる。

負けたくない。

負けたくない、負けたくない。

逸る気持ちに体はついてこれず、少しずつ足にもダメージが溜まっていく。このままでは、長くは保たない。

『勝ちたい?』

苦い顔をしていたのだろうか。主が柔らかい声で語りかける。

「当たり前です」

きつい顔をしたかもしれない。でも、私は必死だった。私は、もっと強くなりたい。神姫としての当然の感情に、主の為に、という気持ちに乗る。主の為に、勝ちたい。

『よし、なら、勝ちに行こうか。左側の岩場に飛び込んで』

足場に突き出る岩の上を跳び移るようにして、指示された場所へ向かう。いくつもの岩が突き出たそこは、身を隠すにはいかにも頼りなかったが、主の指示はいつもと同じで自信に溢れていた。爆風が、一瞬前にいた場所を薙ぎ払う。この不整地で一步でも足を止めれば、たちまち餌食にされてしまう。それをうまく駆け抜けられているのは、レッグパーツの高い性能のおかげだ。主の作ってくれたこのパーツは小型ながらも高い走破性と機動力を持っている。向かう先を悟られないよう、フェイントを挟みつつ、駆ける。次の一步で、ゴール。突き立った岩と岩の間に入り込むのと、最後の爆撃が蹴った岩ごと足首を砕くのは同時だった。それを最後に、また少し爆撃がやんだ。

『こっちが身を隠すと、一面薙ぎ払えるように時間差で一気に複数発撃ち込んでくる。合図をしたら、その爆風に乗って、垂直に跳ぶんだ』

ただ緩急をつけたのではなかったことを、主は分かっていた。それだけ冷静に戦況を把握していたのだ。それなら私は、ただ残された脚で高く跳べばいい。私は主の意思を乗せる刃になる、ただそれだけを考える。

『今！』

「はいっ！」

碎けていない方の脚で地を蹴る刹那、強い力で更に打ち上げられる。巻き上げられた煙を払い除けて、私は青い空に放り出され……。

『装備変更、転送！』

私の背に、青く輝く翼があった。反射的にエンジンを回す。唸りをあげて、私の体は大空を切り裂いた！

『後は、相手のところまで一直線だ！』

「はい！ 征きます！」

ここしばらく、訓練を続けていた新装備。機動が体に染み込むまでは実戦では使わないと言われていたウイングパーツ。デフォルト武装の組み換えで作られた翼は、咄嗟であっても、もう十分操作を心得ている。

『榴弾は弾速が遅いし、直撃しなければ爆発もしない。冷静に避けて』

加速。数拍遅れで敵の砲弾。かわす。鋭い動きで次々と。見える。向かってくる弾道が読める。相手がどこにいるのかが分かる！

『接近したらライフルに注意。サブで何を持つてるか分からないからね』

「了解です！」

腰のサブアームを展開し、幅広の剣、ジユダイクスで体の正面を隠す。果たして、予想は当たっていた。硬質な音と衝撃が、ジユダイクスを叩く。連射してこないところを見ると、スナイパーライフルだろうか。相手が展開していた機械脚を収納し、動き出すのが見える。遅い。展開したサブアームで、二門あった滑空砲を叩き斬り、自分で抱えていた両刃剣リノケロスで胴体部に一撃。パワーダイブ気味に突っ込んだ勢いがあってか、足で岩肌を削りながら体を制止させる。

ゆつくりと立ち上がり空を見上げると、『IP シャウラ WIN』の表示。慌ただしくて、ついていくのがやっとだったが、今まで勝つことの出来ない相手から、勝ちを得ることが出来た。その事実もまだ頭の中に染み透らない内に、私の意識はバーチャルから溶け出し始めていた。

まったく、結果だけ見たらアイツの圧勝じゃんか。もともと接近しての格闘戦になれば、そんなに悪くないんだから。ただ、アイツに今までに足りなかったのは格闘に持ち込む方法。前のレッグパーツだって悪くはなかったけど、例えば今回みたいに距離が大きく開いちやったりすると、機動力が足りなくて、距離を詰めるより先にやられちゃうわけだからね。マスターが何を考えてるか知らないけど、機動力だけならデフォルトの武装で戦った方がいいだろうに。あーあ、あんなに喜んじやって。元々相手の懐に飛び込めた時点で勝ち確定の相手じゃないさ。

あー……何となく自覚はあつたけど、やっぱりボクはアイツが苦手みたい。口うるさいし、面白味がないし、なのにマスターはアイツばかり構ってるし……今回のバトルだってボクの時とは違って細かく細かく指示を出してる。あー、胸がモヤモヤする！ 面白くない！ そんなボクの気持ちを知らずに、マスターは二人で勝ったお祝いなんて、呑気なことを言ってる。こうなったら、何かワガママを通してやろう。

「主……これは……」

「んー、必要な道具の一式、つてところかな」

あまり広いとは言えない部屋に、段ボールが積まれている。宅配業者から届いたらしい荷物は、起動したばかりの私の想像もつかない量だった。

驚くやらあきれるやらの私を他所に、主はザクザクと段ボールを開け、中身を取り出していく。出てきたのはクレイドルとバトルロンドのトレーニングマシン、それから私にはよく分からない金属の板や玩具の箱、それにドリルの刃のような工具の類いや雑誌類だった。

一体何が始まるのだろう。主は喜色を湛え、忙しくなるなー、と呟いた。

武装神姫を迎えてから一週間程が過ぎた。俺の当面の目標はバトルロンドに出るための準備だ。そのために買った物は流石に結構な分量で、昨日は開封するだけで終わってしまったが、幸い明日は休日だ。今夜は十分に作業の時間が取れる。

家に帰ると着替えもそこそこに早速作業に取りかかる。まずはPC周りの配線からだ。トレーニングマシンはバトルロンドの環境を再現出来る高性能なものを用意した。友人にも相談してみたが、上を目指すなら最初からある程度のもを買った方が、最終的な出費は抑えられるとのことだ。PC側にもある程度の性能を求められるのが難点らしいが、元々PCはそれなりのものを使っていたため、問題にはならない。このマシンの決め手になったのは、十分なデータがあれば様々な神姫の戦い方を再現してくれるところだった。これで俺が学校に行っている間にも、シャウに課題を与えることが出来る。配線もあまり苦労はなかったが、細かいところはシャウにも協力して貰う。

接続を確認して、立ち上げる。取り敢えず単純なトレーニングメニューを呼び出し、実際にやってみることにする。

「どう？ やってみた感じ」

インカムマイクの位置を直しつつ、話しかける。トレーニング中は、神姫の意識はバーチャル空間にあるため、こうした設備も必要なのだ。勿論なければならぬ構わないのだが、最近まで使っていた物が使えると言うので、引つ張り出してきたのだ。

「実際に体を動かすのとあまり変わらない気がします。でも、なんと
言うか……空気が違うような感じはしますね」

「バーチャルだとそんな感覚があるんだよ。言葉にしにくいけど、重さのない透明な幕がかかったような感じがあるよね。それじゃ、トレーニングを始めてみようか」

最初は簡単な、ミツシヨンクリア形式のトレーニングからだ。モニタの中でポリゴンが集まり、丸太のような形を作る。同時にシャウには、デフォルトの武装パーツが装着される。

『Training mode... ready...』

インカムマイクから電子音が聞こえてくる。バトルロンドに参加するにしても、どれくらい動けるのかを知らなければ話にならない。まずはそこからだ。武装神姫でのバトルは、俺にとっては全くの未知数だった。

その日から、私は主の出される課題を消化するのが日課になった。課題は様々で、制限時間内に目標を破壊するものや、決められた機動で移動をするもの、或いは目標の攻撃を受けないようにするものなど、およそ戦闘に必要な動きを学習するためのものが中心だ。

主は主で、学校から戻られると私に新たな課題を与え、工作机に向かつて熱心に何かを作っている。

そんな日々が一週間も続くと、主が何を作っていたのかが分かる日が来た。

「今日からトレーニングでもこれを使っていこう。でもその前に、試着もして貰わないとね」

そう言う主は、武装パーツを取り出した。細身のレッグパーツに小振りなナイフホルダー。中には二振りのナイフが収まっている。それと、これも小振りなアームガード、これはなにか仕掛けのありそ

うな作りになっている。最後に、巨大な刃をもったロングポールアツクス。成る程、トレーニングマシンと一緒に届いた荷物はこれだったのだ。ここに来てからまだ日は浅いが、主について分かったことがある。主はあまり説明をしない。今回のように、結果を見れば得心がいくことは多いが、何のためにそうするのか分からないことも多いのだ。でも主を黙って信じていけば、その道は見えてくる。私はそう結論付けた。

「さてと、まずは試着だけど、一人で出来そう？」

「いえ、初めてですし、主にお願いしたいのですが」

「そう？ それじゃもつとこつち来てくれる？」

丁寧到大腿部のジョイントを外し、機械式の脚に差し替える。外した方の足も、丁寧な扱いでレザートレーの上に並べて置かれた。左太ももの、接合部分のジョイントにはナイフホルダーを固定。左腕の甲側にはアームガード。先端を見ると、ビーム発振機にもなってる様子。そして右手には大斧を握る。さらに主は基本の装備パーツの中からいくつかを取り、両肩に可動式のシールドを取り付けた。

「まあ、最初はこんなもんだろ。ちよつと部屋の中を動いてごらん」

「はい」

言われるままにとんとんと、軽くステップを踏む。大きくジャンプし、続けてバク宙。そのままクラウチングスタートで、一気にダッシュ。なにもないところでわざとカーブし、床をS字に駆け抜ける。

「仕上がりは上々だね。ストラップのパワーレグには負けるだろうけど」

今度は配達された段ボール箱に、割りばしを刺したり付箋を貼ったりしたものが出てきた。

「好きにやってごらん」

成る程、主の意図が読めた。壁のような箱と平行にダッシュ。横から飛び出している割りばしを斧で両断。次に貼られた付箋にはナイフを投げつける。そのまま走ると、次は縦に付き立った割りばしが二本。横風ぎに斧を振るい、一撃で両断する。次はわざと高く貼られた

付箋に、一息にジャンプし、間近からの一撃で付箋を切り裂く。しかし着地点には短い割りばしが三本立っている。落下しながら回転。遠心力をつけた斧で切るだけでなく、なぎ倒す。

パチパチパチ……。

見上げると、主が拍手をくださっている。好きにやれと言われたままにとった行動が、これでよかったのだと安堵する。

「これなら夜の訓練はこの装備でいけるね。当面の目標はレッグパーツで走るのに慣れること。舗装地、不整地、岩場なんかもメニューに入れる。それからもうひとつ。武器の方は斧に限らずだけど、防御が出来るようになること。剣も使うし、ナイフも使う。かわすだけでも良いけれど、出来たら防御を練習してほしい。大丈夫？」

「了解です。するとしばらくデフォルトの装備は使わないのですか？」

「取り敢えず、そうなるね」

なんとなく、不安が過り始める。デフォルトの装備は、神姫にとっては一番使いやすい装備でもある。それを減らすということが、私を支える支柱を外されたように感じた。

「さて、それじゃ訓練にしようか。俺の方も、まだ全部完成ってわけじゃないんだ」

主はまだ何かを作られるつもりらしい。私は主の手のひらに乗り、トレーニングマシンの方に運ばれる。

「でもこの調子なら意外に早く装備に慣れてくれそうだね。試しにこの装備で一度、バトルロンドに出てみようか」

来た。私はい、と短く答える。勝ちたい。勝って私は、私でいたい。主に望まれる私でありたい。そんなことを考えながら、私の意識はトレーニングフィールドに向かっていった

「Insect Arms製、MMSオートマトン、神姫、カブト型ラ
ンサメント、IAD01、セットアップ完了、起動します」

初めて目を開けると、そこは机の上だった。わりと片付けられた部
屋の中、小型のモバイルPCの隣で、ボクは目覚めた。

「私の名前、決めてくれるかな」

アルキオネ。マスターらしい人はそう言った。牡牛座の星から
とつたんだ、とも。なんで牡牛座？ と聞くと、蠍座の反対だから、と
答えてくれたが、ちんぷんかんぷんだ。

これが、ボクの最初の記憶。

これは、ボクが生きるための物語だ。

その次の日から見るものすべてが輝いて見えた。

プリセットされた記録とは、比べ物にならない刺激。それは例えこ
の狭い部屋の中でも変わらない。本棚を彩る雑誌の背でさえ、虹色の
ようだ。人工皮膚に当たる風や、窓から差す光、木がざわめく音、ボ
クにとってすべてが興味の対象だった。部屋の中を虫が飛んでいる。
アレは蚊だったかな？ マスターが見つけたらきつと潰してしまう
だろう。ボクは腕を伸ばすと、難なく羽の部分をつまんだ。網戸を少
し開け、外に放り出す。これでよし。その隙にもう二匹部屋に入っ
てきたのは気にしないことにする。キリないし。この世界には、ボクの
興味を引くものが多すぎるのだ。

ふと視線を移すと、この家のもう一人の神姫、シャウラが剣を振つ
ている。ボクら神姫にとって反復練習は意味がないと思われがちだ
が、そうではない。同じように見える繰り返しの中で、少しずつ条件
を変えてベストな動きを探っているのだ。そうして少しずつ動作を
最適化していくことで、無駄のない動きが出来るようになる。そし
て、全く同じ条件で動けることなど戦闘中にはまずあり得ない。だか
ら反復練習の中で多くの条件を予め学習しておくのは、無駄ではない
のだ。

ぼんやりとその様子を眺めていると、あることに気づいた。どうや

らシャウラは、汎用プログラムで剣を振っているようだ。武装神姫は様々な武装を管理する専用プログラムをプリセットされている。それは格闘装備でも同様で、ある程度の攻撃動作として用意されている。言うなれば、格闘ゲームの技のようなものだ。始めはどんな神姫でもそこからスタートする。当然その技だけでは不都合があることも出てくるので、それを汎用動作で補ってやる必要がある。それを繰り返す内に、その神姫だけの動きが作られていくのだ。シャウラの動きは、既に専用動作の域を出始めている。エスパディア型の発売はランスメントと同じだから、早く見積もつても一月ちよつと。その間にここまで動きが出来上がっているということは、たゆまぬ努力をしてきた証拠だ。

シャウラがこつちに気づいた。

「貴女は修練をされないのですか？」

「んー、ボクあんまりそういうの興味ないんだよねー。運動しなくても、ボクらの体は鈍らないしねー。アンタはさ、それやって楽しいの？」

ボクが聞くと、シャウラは不思議なものを見るような顔をした。

「楽しいか楽しくないかで考えたことはありません。私にとって、これは必要なことですから」

その答えに、今度はこつちが不思議なものを見るような顔をした。楽しくないのに、何で練習してるんだろう？ ボクには理解出来ない。

「分かんないなー、強くなる必要があるってこと？ 何で必要なの？」

「……貴方には、きつと分かりません」

なんだい、急に不機嫌になって。嫌な感じ。

「分かんないって何だよ、そりゃ分かんないさ、教えてもくれないんだもの。自慢じゃないけど、ボクは起動したばっかなんだから」

「分からないならいいのです。きつと、分かる必要もないのですから」

感じワル。何さ、ちよつと早く起動したからってエラぶつちやつてさ。

「なんだい、強けりやそんなにエライのかさ」

その言葉に、向こうもカチンと来たようだ。ジョートーだ。こつちはとつくに頭に来てるんだかね。

「だったら、どつちが強いかショーブだ！ アンタが負けたら、その頭にくる態度、謝って貰うからね！」

「……面白い、あなたが負けたらその腹立たしい物言い、改めて貰いましょう」

特に難しい設定はしない。お互いにデフォルト装備でバーチャル空間に入る。空を飛ぶのは久しぶりだ。エスパディアの通常装備ではそれほど速く飛ぶことは出来ないが、鋭く動ける。遮蔽物のないこの場所なら、高く上がればすぐに相手を見つけられる。いた。赤い機影がこつちに向かってくる。……向かってくる？ いけない！ 咄嗟に降下。一瞬前にいた場所を、光弾が迸る。私の軌道を追いかけるように、次々と撃ち込まれてくる。ランサメントの売りはその豊富な火器を同時に使えることだ。言わば乱射乱撃のエキスパートなのだ。一瞬の間を置いて、今度はマイクロミサイルが白煙を引いて襲いかかってくる。短いターンを繰り返し、ミサイルの追尾をかわす。すかさず襲ってくるビームの嵐は、中々接近を許さない。弾幕を嫌って高度を上げる。が、このフィールドには隠れるところなどない。どこに行っても相手は狙い撃てるし、距離を取ればこちらが攻撃出来ない。適当なところでループし、急降下をかける。マイクロミサイルの渦に頭から突っ込む格好だ。左手に装備されていたファイラータを投げつける。目の前で次々と誘爆するミサイルの爆風を突っ切り、接近。手にしたリノケロスを振りかぶる。

「近づいてしまえばー」

「……と、思うだろ？ 甘いんだなコレが！」

斬りかかってきた剣の横腹を、回し蹴りの要領で蹴り飛ばす。勢いのままもう一回転、左腕のグラントを叩きつける。意表を突いた動きだったはずなのに、流星は格闘特化型、サブアームを展開してしっか

り防いでいる。思わずヒュウ、と口笛を吹く。殴り付けた反動を殺さず、バックステップで距離を取り、牽制で数発撃ち込む。一瞬足を止めたシャウラから、一気に距離を開く。

ランサメントの特徴は火器管制能力の高さが評判だが、実はその重装備に反して機動力も低くはない。逃げ足と追い足の速さこそが、現行の砲戦特化型であるフォートブラッグやムルメルティアとの一番の違いで、移動砲台と評される所以だ。

再び上へ逃げるシャウラ。三次元的な動きでこっちの攻撃をかわしながら追ってくる。足の速さではやはり地力が違う。でも、こっちも逃げながらの射撃だ、近づかれるまで時間は稼げる。しかし何だね、ここまで互いに有効打なしか。これだけバカスカ撃ってんのに、巧みな機動で片っ端から避けられる。もしかして、ボクって弱いのかなー？

焦る。追い足はこちらの方が速いはず。なのに、追い付けない。一直線に飛ぶことさえ出来れば、さした距離でもないのに、それが一番難しい。手足の振りに合わせてバーニアを吹かすことで細かく姿勢や軌道を変えているため、スピードに乗れないのだ。しかし、回避運動を止めれば捕まってしまう。昨日今日起動したばかりの神姫を相手にこの様では……悔しさに唇を噛む。

『楽しそうなことしてるじゃないか、俺も混ぜてくれ』

主の声？ まだ学校から戻られていないはずでは？

驚いて姿勢を崩し、失速する。危ない、とにかく上へ上がらなくては。弾幕の途切れた隙を狙って急上昇。どうやらあの子も主の声に驚いたようだ。

主の声に、感覚を取りもどす。そうだ、バトルロンドでは、私は主の意思を乗せた刃。主の指示に従えばいい！ そう思っただけで先ほどまでよりも動ける気がした。改めて相手を視界に捉える。

驚いた。家に帰ってきたら、二人で仲良くトレーニング中だったとは。しかもその内容が、普段通うゲームセンターでもお目にかかれな

いほどの好勝負ときてる。俺はついトレーニングマシンにインカムマイクを繋いで、口を出した。このまま見てるのも面白いが、この勝負はもつと良くなる。それをこそ、俺は見てみたい。

「シャウは全部回避しようとしすぎだ。教えたら、周りにあるもの全てを盾にしろ。いくら速度で優位をとっても、それじゃ接敵出来ない。思い出せ、格闘戦でも、全部の攻撃を避けたわけじゃないだろ」

その言葉だけで掴んだようだ。回避を最小限にし、攻撃を受けている。勿論まともに喰らっているわけじゃない。剣を盾にして、受けているのだ。これだけでも、追いつく足は格段に速くなる。

「アルはもつと狙って撃て。当てるばかりが狙いじゃない、偏差射撃を使ってやり易い方に誘導するんだ」

それまで散漫だったアルの射撃に、明確な意図が開始される。弾幕の壁がただの板から意思を乗せた迷宮に変わった。偏差射撃とは、意図的に弾幕の薄い部分を作り、相手を誘導する戦法だ。これで相手の軌道を無限のものから予測しやすいものに制限をかけるのだが、シャウもただやられてばかりではない。時に予想を覆し、弾幕の壁を剣の盾で破って突進してくる。

思った通りだ。エスパディアとランサメントは、装備構成から戦術まで、お互いに噛み合うように設計されている。敵としても味方としても、決して交わらず、一番近くにいる存在なのだ。シャウが弾幕を突破し、接近。盾にしたサブアームのジュダイクスを振り払う形で一撃。それを後ろに倒れこむことでかわすアル。足を止めて追撃の構えを取るシャウに、跳ね上がる勢いで両足を叩きつける。たたらを踏んだ一瞬の隙に体勢を立て直す。再び追いつがって振るわれた剣をグラントを盾代わりに受け止める。目まぐるしく攻防が入れ替わり、息が詰まるようだ。接近戦でも、アルはシャウにまったく引けをとらない。俺はアドバイスをすることも忘れて、見入ってしまった。

決着は、不意に訪れた。突然鳴ったアラームに、思わず体が硬直したほどだ。

『Time up!』

画面の中央に大きく表示されたその文字に、何が起こったのか分か

らず、しばらく馬鹿みたいに画面を見つめ続けていた。

『D r o w g a m e !』

表示が切り替わる。互いに有効打なしの引き分け。

この結末に、一番納得がいかなかったのは実際に戦っていた二人だろう。お互いに難しい顔をして起き上がった。無理もない。片や起動したてのランサメントを仕留め切れなかったシャウに、片や得意のレンジで勝負をかけるもすべて回避されたアル。互いに見るべきものが見えたはずだ。しかし、お互いにギクシャクとしているのは気のせいか？　まだ相手を素直に認められていないのかもしれない。特にアルは起動してまだ二日目だし、そういうこともあるのだろう。

「どうだった？　模擬戦の感想は」

「やっぱりバトルは嫌いじゃないけど好きでもないなー、ボクは」

「そうか？　中々強かったじゃないか。起動してすぐとは思えないくらいだったぞ」

「それでも、ボクはあんまり強いとかそういうの、興味持てそうにないなー」

その言葉に、シャウは憮然とした表情を浮かべていた。

「シャウはどうだった？　ランサメントは最新機種だから、バトルする機会もあんまりないし、何か活かせるものも見つかったんじゃないか」

「そうですね、今回は仕留め切れませんでした。我が身の未熟さを痛感しましたね」

その言葉に、アルは舌を出している。うん、もしかしてこの二人、あんまり仲良くないのか？

「もしかしてさ、二人共、仲良くない？」

「ええ」

「うん」

あえて聞いた問いにぴったりハモって答える二人。やれやれ、こんなに相性いいのに、前途多難だな、こりや。

「どうも、俺です。故郷の父さん母さん、お元気ですか。息子は残念ながら、今割とピンチです。」

「ああ？ テメエなめてんのか？」

「アンダヨー、ヤンノカコラー」

「……」

「……」

目の前には、睨み合う四体の神姫。その半分はウチの神姫、シャウラとアルキオネです。一触即発な空気がバリバリで、周囲からの視線も痛いです。アルはアークさんと煽り合っています。シャウは飛鳥さんと無言でメンチをきりあっています。

拳句周囲からの好奇の視線というか、物見高い皆様のひそひそ声が痛いんです。特に店員さんは先ほどからハラハラした目線を積極的に送ってくださいしています。タスケテー。

一体何でこんなことになってしまったのでせう。

事の起こりは数十分前……。

今日も馴染みのゲームセンターで、バトルロンドをしようと自動ドアを潜ったところで、たまたま学校の仲間と出会ったところから始まった……。

「よう、こんなところまで来てるのか？ お前の家って、少し離れてるだろ」

「ああ、地元でやるよりはここの方が居心地がよくてね。今日はバトルロンか？」

「それもあるけどよー、今日はG&Sの機体を仕上げたくてよ。次の大会に向けての最終調整ってやつだな」

友人が口にしたのは、神姫とペアチームを組んで戦うホビーバトルだ。もともとは武装神姫以前から流行している、プレイヤーが操作するロボット同士が戦うバトルゲームだったのだが、そこに神姫を加えたレギュレーションがG&Sだ。こいつをはじめ、有名な神姫プレイ

ヤーの中にはこうした神姫以外のホビーに手を出している連中も多い。

「そっちがお前の神姫？ エスパディアだけじゃなくてランサメントもいるじゃねーか。金回りがよくて羨ましいな」

「お前だって二体持ちじゃないか。連れて来てるんだろ？」

「ああ、白雪、梅夜、出てこいよ」

顔を出したのは、飛鳥型とアーク型だ。

「どうも……」

「よ、つと。なんだ、シケた面だなア、アニキのダチかい？」

この一言がきつかけだった……。

「なんだと、確かにマスターは上から下までユニクロでも平気だし、身だしなみにだらしないところはああるし、よく変なセンスのシャツ着たりしてるけど、そんな風に言われるアレではないぞ！」

……けなしてるのか、それとも本気なのか。

「主。斬り捨てても宜しいですか。宜しいですね」

こっちはこっちで一足飛びに沸点超えてるよ。

そこから始まったののしりあいから、バトルロンドで決着をつけることになるまで裕に五分以上この調子だ。

今日は普通にバトルロンをしに来ただけなのに、どうしてこんなことになったんだ？ まあ県の代表ランクのプレイヤーと試合する機会なんてそうそうないんだし、これはこれでチャンスと考えるべきか？

なんにせよ、あの飛鳥型と、アーク型……どっちにとっても鬼門だな……。

バトルフィールドは市街地。乱立するビルと網の目のように配置されたハイウェイのあるステージだ。道路はすべて舗装地で、陸戦でも機動力を生かした闘いが出来る一方で、高いビルの陰は空戦でも障害物として使える、戦術的なステージだ。

その中で、シャウは飛行装備で手に入れた大幅な機動力に振り回されている。それが俺の初撃の感想だった。シャウには基本武装の組み換えで、よりスピードの出るセッティングをしてある。アーンヴァ

ルほどではないが、それに迫るくらいの高速型だ。その代償として、基本装備の持っていた鋭い機動性は失われている。一直線に向かつていって斬り捨てる、そのことに特化した装備と言える。

一方で飛鳥型は、空戦神姫の最高傑作と言われ、優秀な機動力と格闘性能を兼ね備えている。flak17 1.5m機関砲を二門有し、接近戦しか出来ないシャウより射程が遥かに広い。飛行能力も、最高速度で言えば、シャウの飛行装備より遥かに遅い。が、旋回半径が小さいという特徴を持っている。互いに格闘戦が中心の機体だが、速度が速く旋回半径の大きいこちらの攻めは、一度いなされたら再度攻めるのに時間がかかる。大きな距離を回らないと元の位置を狙えないからだ。しかも相手は威嚇射撃が的確で、こちらの強みの最高速度をうまく出させない。威嚇をすり抜けての接近戦も、ここでは打ち合わないと決めてかかっているようで、のらりくらりと回避。そして攻撃をいなし切れば即追撃姿勢で追い討ちをかけてくる。シャウが一撃当てれば勝つだけの自信はあるが、その一撃を当てるまでが遥かに遠い。こちらが一回斬りかかる度に三回は細かく仕掛けられていて、逆に攻められているような気分だ。しかも周囲はいつの間にかビル群立ち並ぶエリア。障害物が多くなればなるほど、細かな動きが出来ないこちらに不利。

広く動ける空を求めて上空へ。当然読まれていたようで激しい銃撃を受ける。かと言ってビル群に沈めば機動力が生かせず、外へ出れば狙い撃ちされる……。

「流石、中々の巧者だな。これならビルの林の中で、足を使って飛ぶしかないんじゃない？」

『足を使って？』

インカムをつまんで位置を直しながら、短くアドバイス。シャウの表情から曇りが晴れる。

「そう、長続きはしないから、極力短時間でね」

そのための下準備は整ってる。そのために今まで脚の使い方を覚えさせてきたのだ。俺は今回の策を一言で伝える。シャウの表情から、迷いが晴れたように見えた。

一方、こちらアルキオネ。

こっちはこつちで厄介極まる相手だね、こりゃ。

相手の武装を見てると、舗装地を高速で駆け巡りながらロングレンジのビームで一撃を狙うタイプ……なんだけど、問題がふたつ。

ひとつは敵の射程がこつちより長いこと。一方的に撃たれる場面がかなりある。それを裏付けるふたつ目は、敵のスピードがこつちより速いこと。彼我の距離の選択権は、ほぼ常に相手が握っていることになる。

相手が狙ってきてる時にはこつちも反撃出来るけど、狙いにくいのだよねホントに。走り回りながらハンドビームガンで牽制しつつ、狙えらなったらレーザーキャノン。手持ちのグレネードやアサルトライフルであれを削り切るのは、正面からだとは大分無理がある……せめて、足を止めさせないと勝ちはないかなあ。

「さて、どうしようかね。舗装地なのはお互い有利。細々高架で立体交差するものの、大きく回られると脚の差で追い付けない。なんとか足止め出来ればいいんだけどなあ」

『アル、まずは地の利を生かせ。自分だけが有利になる、そんな場所があるだろうか?』

あつた。高架の先に、途切れた道路。あそこに追い込めば、嫌でもスピードを落とさざるを得ない。でも、そんな簡単に引つかかってくれるものか? ボクが相手なら、答えはNOだ。幾らなんでも見え見えすぎる。

『相手を信じるんだ。今の浅知恵は、きつと乗り越えてくるぞ?』

「乗り越えられたらダメじゃないのさー!」

ビル影から現れては撃ち込んでくるアーケ型に応射しつつわめく。『相手は強い。こつちの作戦に乗らないくらいに分別はあるさ。その自信の裏をかく。見え見えの罠にでも乗って来てくれるなら、それを破る何かがある。コレを踏まえて、一歩先を攻めるのさ』

「なるほど、そゆことね……!」

エスパディア型は林立するビルの中に沈んだきり。しかしあのスピードを生かすなら、林の外へ逃れようとするはず……そこが最大の攻め時だ。私は高度を上げ、レーダーの感覚を研ぎ澄ます。

『このビルの檻の中なら、相手の武器である速度は思うように生かせねーだろ、無理に動いたところを仕留めにかかれ』

「了解！ 音紋確認！ 地面すれすれで向かってきます！」

しかし、先ほどまでの大味な機動が嘘のように、道路を縫って向かってくる。こちらからも迎え撃つ。頭を出してくる地点に向けてタイミングを合わせ、爆弾を投下。あのスピードからでは、突っ込んでくるしかない。爆音、爆炎、爆風。しかし、飛び散る瓦礫はビルのものばかり。

『白雪、下だ！』

かなりのスピードで突っ込んでくるエスパディア。

避ける。ビルの角を挟むように。地面から、激しい擦過音。そして、向かってくる。

『バカな！ 自分の足を地面に押し付けて無理矢理曲がったつてのか!?!』

それを証拠に、両足のソールパーツはボロボロになっていて、所々フレームをむき出しにしている。

『白雪、この一撃をかわせばまだ次に繋がる！ なんとかやり過ごせ！』

「了解！」

両翼下の機関砲で弾幕を作る。これで迂回するか、弾丸でスピードを削られた状態で突っ込んでくるかしか出来なくなる。しかし、ダメージのある状態ではそうは遅れは取らない。ましてや迂回をするなら旋回力はこちらが上。同じ展開を繰り返すだけなのだ。はたしてエスパディアは、向きをわずかに変え、迂回ルートをとった。

あれほどこちよこまか駆け回ってたランサメント、ついに観念したようにゆっくりと高架橋の前に仁王立ち。やっとこさ正面からのタイマン、つてワケだ。しかしまだ分かってねえ。あの高架橋は奴さんの後ろで途切れてやがる。つまり俺の機動力を削ぐための見え見えの

罨、ってところか。舐めくさってくれるよなア……。

一気にフルスロットルに突っ込む。唸りを上げて、先のない橋を駆け上る。お互いに手持ちの火器を撃ち合うが、牽制にもならない。互いの主砲、スーパーシルバーストーンとアトラスランチャーが放たれたのもほぼ同時、ビーム同士が弾けて大きな爆発を起こす。その爆煙を裂くように、位置を入れ換えて赤い影が二つ飛び出した。

「見せてやるア！ 取って置きをよオ！」

着地と同時にウイリーターン！ 三輪の外側一輪だけで急旋回！

そのまま一気に突っ込む！ 絶望の表情を浮かべやがれ！ ……笑って、やがる……？

刹那、爆音と同時に体が浮いた。いや、落ちている。何だ、何が起こりやがった!?

「グラッチェ……絶対戻ってくるぞと信じてた……自慢の技で、ボクの罨をすり抜けて、勝ち誇って！ だから見えなかったんだよ、帰り道にしかけたこの罨に、ね」

野郎、手持ちのグレネードを橋の足元にばら撒いてやがったのか……!?! 落ちながらも瓦礫を蹴って近づいてくる。ヤバイ。パトロクロスに乗っていたら逃げられない！

「さよならだ！」

無防備な腹側をアサルトライフルの弾が強かに撃ち抜く。一瞬遅れて起こった爆発。避けようもない至近距離。広がる光と裏腹に、意識は暗闇に放り出された。

機銃の弾幕とビルの壁、ふたつの障害を出来る限り小さく避ける。

主の策は壁や地面に足を押し付けることで無理やり旋回半径を小さくすること。

『右、回避』

短い指示に従って、急旋回。さつきまであればほど長かった飛鳥型との距離がみるみる縮まっていく。ビルの隙間に高く陣取った白い機影が、もう一駆けで掴めるくらいに。両足を突き出し、思い切り地面に擦り付ける。激しい擦過音と土煙。主翼の角度を変え、ブースター

を噴かす。重力に逆らって、一気に体を持ち上げていく。煌めく外壁に映った私の影を、機銃の弾痕が追いかける。が、私は捕まらない。

『蹴れー！』

反射的に壁を蹴る。同時にロール。勢いそのままに、剣を叩きつける。雄叫びが、知らずに迸る。

「やああああっ！」

刃が翼を捉える。揚力を失って、黒煙を引きながら飛鳥型は墜ちていく。ファンファアールと共に『2P TEAM WIN』の文字が大きく表示された。

「凄えな、飛びながら壁を蹴って無理やり軌道を変えるなんて……あんな技、どうやって教えたんだ？」

「技として教えたわけじゃないよ。ただ、メインの装備が速度重視のセッティングだから、細かく動くのは苦手になっちゃうだろ？ それを克服するために、最初からあの足の使い方を教えてただけさ」

最初から。主はそう言って微笑んだ。最初から、飛行装備を背負うことを見越していたのだと、私は初めて知った。

「しかし驚いた。アーンヴァールとストラーフの良いところ取りみてーな動きだったじゃねーか。ゲームが変わっても、相変わらず強えーんだな」

「飛鳥の足じゃ真似出来ないだろ？ シャウの努力の賜物さ」

努力の賜物。主の一言が胸のCSCに染み込んで来るような気がした。私のことを、主が認めてくれたような気がして。

「ランサメントの方も相当なもんだよな。レッグパーツはどっちも自作か？」

「基礎フレームは両方とも流用元があるけどな」

喜びに浸っていたところに、ふっと、疑問がわいた。主は私のレッグパーツや武器などを自作しているし、メンテナンスも手馴れた様子でしてくれる。主のお部屋にも専門的な工具があるし、材料などを扱うショップもよくご存知のようだ。でも、主は武装神姫については基

本的なこともご友人から聞きかじったことが大半のようだし、専門誌なども最近になって買いはじめたような所がある。学校は工業系ということだし、そこで学ばれているのだろうか？ それとも、もしかして、主は以前は別の神姫を？

「どうだった？ 空戦神姫とのドッグファイトは」

「あ、はい、やはり速度は問題ありませんが、低速域での旋回性が課題ですね」

話しかけられ、私は意識を切り替える。バトルロンドの後は大体反省会。それは勝った試合でも例外はない。

「そうだな、今回は地面を使ったけど、何かしら対策を考えないと」「足を止めての近接戦闘なら劣るとは思いませんが、今回は動きで意表をついたようなところがありましたからね。奇襲が決まったようなものです」

「そうだね、と主もうなずく。」

「やっぱりさー、射撃武器を載せた方がいいんじゃないのー？ 当たらないにしても、威嚇や牽制には使えるでしょ？」

「いや、シャウの装備はこのままで行く。なんせ俺達の目指すところは『格闘戦最強』だからな」

あの子も話に参加してくるが、主が言下にそれを否定している。

格闘戦最強。それは私達が目指す目標。私と主を繋ぐ絆でもあり、同時に呪いのようなものでもある……。

「まあなんにせよ、今日は二人共格上相手によくやったな」

相手は県内でも優秀なランカーだそう。自信を持っていい、そう主は言われた。少しでも、主の望むものに近づけただろうか。私の問いに、答えはなかった。

「よし、服を買いにいこう」

その日、唐突にマスターはそう言った。

「行っておいでよ、ボク特撮見てるから」

コーラ味のジュエリカンを飲みながら、振り向かずにボクは答える。今見てる所からが、ちょうどこの作品のクライマックスだ。クライマックスなのは最初からだけど。

「一緒に来ないのか？ それだとサイズが分からないじゃないか」

「なんでマスターの服を買うのにボクのサイズが必要なのさ」

「いや、買うのは二人の服だ。シャウとアルじゃあ微妙にサイズ違うだろ」

服？ ボクらに？ 何で急にそんな話に？

そんなこんなで、マスターについて出かけた先は、Y 駅の近くにある神姫センターだ。普段通っているゲームセンターとは流石に規模が違うね。バトルスペースも大きいし、併設された神姫ショップにも専門的な品物が並んでいる。マスターが向かった先は、その中でも神姫サイズの服を扱うショップだ。

この時代、武装神姫といえばバトルロンドを始めとしたバトルサービスが代名詞になっているが、中には今まで通り、生活をサポートするパートナーとして活用する人も多い。そんな人達には神姫サイズの服も需要がある。自分の神姫をおしゃれに着飾る人もいれば、ビジネスの場に連れて行くためのスーツを着せる人もいる。勿論バトルに使える耐久性を持った服の開発も進んでいて、中にはフリフリヒラヒラの服を着せたままバトルに参加する神姫だっているんだそう。そのあたりはボクの趣味じゃないので、マスターにそんな趣味がなかったことには感謝している。

でも、マスターのところに来て一月、ついにマスターが隠していた願望を露にしたのだろうか。突然ボクらに服なんて。一体どんな服を着せようというのだろう。正直ボクとしてはキラキラした服とか

は趣味じゃないので、ジャージかなんかがあれば充分なんだけども……いや、そういう服ならまだいい。本当に趣味に走った服を買うようだったらどうしよう。ふとショーウインドウを見ると、神姫サイズのマネキンがチャイナドレスやナース服、あるいはブレザーのような服に身を包んでいる。いやいやいや！　こんな服をボクが着るってのはどうなんだい!?　そんなボクの心境はお構いナシに売り場はシーズン物のコーナーになり、水着を着たマネキンが並んでいる。ワンピースからパレオの着いた可愛いもの、果てはスクール水着まで……いやいやいやいや！　どうかと思うねマスター！　自分の神姫に水着を着せて侍らすとか、どうかと思うよボクは！　そういうのはボクの担当じゃないんだよ!」

「この辺りかな。シャウ、アル、どんなのがいい?」

アウトロー!　はい、アウトですよー!　ダメだこのマスター!　早くなんとかしないとー!

「私が選んでよろしいのですか?　そうですね、それなら……」

ツーアウトロー!　何でそんな乗り気なのー!　むしろそういうのダメな雰囲気普段から出してるくせにー!　ダメだこの神姫ー!　いや、諦めたらそこで試合終了ですよ、ここはやはり、常識派神姫として一言釘を刺して、T o L O V E るな展開の芽は摘んでおかないとー!

「この、朝顔の柄のなんてどうでしょう?」

「いいね、帯の色はどうしよう?　同系色で合わせようか?　でも、こつちの色にした方が合うか……?」

ん?　帯?　え、水着じゃないの?　よく見ると二人は水着コーナー隣の、浴衣を選んでいる。アレ?　これはもしかしてボク、相当恥ずかしいのでは?

「シャウが寒色系で合わせるなら、アルはこつちの赤っぽいやつがいかな。で、帯をこつちに合わせると……アルはどう思う……?　って、どうした?　なんか変な顔してるぞ?」

「ていうか……なんで浴衣……」

「なに言ってるんだ、今日の夕方地元で祭りがあるからそこに着ていく

浴衣を買いに来たんじやないか。またテレビに夢中で聞いてなかったな？」

あう……そういうこと……そう言われればそんなことを言われたような気もするが、既に記憶の霞の向こうだ……なんか無性に腹が立ってきたぞ！ 後でなんか仕返ししてやろう。覚えてろ、まったく……。

その後も色々と見て迷いはしたが、結局シャウもアルも一番最初に良いと感じた朝顔の柄の浴衣を買った。青と赤の色違いで、帯も格子柄の緑と黄色を選んだ。女の子の浴衣の着方なんてよく分からなかったが、流石に大手の流通品でしっかり取扱説明書が同封されていたのには正直驚いた。

「どうですか、主。どこがおかしくはないでしょうか」

「多少おかしかったって、そもそもマスターだって分からないんじゃない？」

むう。その通りだ。自慢じゃないが、帯の結び方だって今回の説明書を読んで初めて知った。もつとも、着付けを俺がやるわけにもいかなかったなので、結局説明書を渡して自分達で着替えてもらったのだが。

「似合うよ」

月並みな感想しか出てこない。こういうとき、何か気の利いた一言でも言うものなんだろうか。そんなことを考えながら、二人を両肩に乗せて家を出る。

地元のお祭りと言っても、規模としてはそれなりだ。通りには御輿も出るし、屋台の数も種類も出る。通りを一本外れた神社では松明を焚いて古流剣術の演武なんかの催しもある。真剣を使つての演武をシャウはいたく気に入ったようだ。アルはなんだか知らないがやらと食べ物ねだってくる。いくら日常的に神姫を連れ歩くのが一般化されているとはいえ、神姫用の食料品の供給はそう多くないし、あってもかなり割高だ。結局普通のサイズを買って、大半は俺の胃袋に収まっている。今は綿菓子小さくちぎって食べているが、半分以

上は例によって俺に押し付けられている。そろそろ腹が苦しいぞ……。

「今日はありがとうございました、主」

「ん、楽しんでくれたんなら何よりだ」

「でもマスター、何で急にお祭りだったのさ？」

時間もそろそろ宵の口に差し掛かる頃だ。人通りも少なくなってきた、俺達も帰り支度を始めたところで、聞かれた。

「いや、特に理由なんてないよ。強いて言うなら、こういうこともあるんだって、知って欲しかったから、かな」

神姫は人間と違って、自発的に出かけることはほとんどない。世の中にどんなものがあったても、俺がその気にならなければ知らないままで終わってしまう。それはあまりにももったいないじゃないか。二人にはいろんなことを知ってほしい。せつかくこの世に生まれてきたのだから、世界は広いのだと、感じてほしい。ウチの神姫は放っておくと自分の興味があることだけになってしまおうというか、内にこもっていく気がする。そういう意味では、今日の外出は大成功だと言えるだろう。

何でもない一日だったが、こんな日もたまにはいいだろう。

「よし、出来た」

作業机の上に金ヤスリを置く。ふと窓の方を見ると、ちょうど日が登ってくるころだった。

「徹夜になっちゃったか……」

背もたれに寄りかかって体を伸ばすと、首の辺りからぎぎぎきという音が聞こえた。

「仮眠取る前に、少しでも片付けるかなあ」

工具類はあまり使わなかったが、ヤスリ掛けで出た金属粉は机の至るところに散っている。とりあえず手元にあったウェットティッシュで手の届く範囲を拭き取り、始末する。床の上も簡単に拭くが、掃除機まではまた今度だ。

「後は仕上げだけど、学校の工作室で片付けるか」

机の上に視線を落とすと、二振りの剣が朝日を受けて鈍く輝いている。銘も決めないといけない。そんなことを考えながら、ベッドに横になった。少しなら仮眠を取れる。意識はあつという間に溶けていった。

一振りごとに空気を切る音が鳴る。その日の課題を早目に終わらせた時は、こうして武器を振るのが私の日課だった。最近はまだ素振りをするだけでなく、演武を行うこともある。先日、主に連れていってもらった神社で見た演武は、巻き藁を両断した技の凄みだけでなく、美しささえ感じた。その時の動きを元に、自分の体で再現してみる。巻き藁までは用意出来ないなので、真似るのは動きだけだ。

一連の流れを終え、振るっていた訓練用の棒を傍らに置き、次は片刃の双剣、ジユダイクスを握る。得物が変われば、振り方や重心の取り方、動き方はすべて変わってくる。神姫によつてははじめて扱う武器であっても、天性の才能で扱える場合もあるという話だが、私はそこまで器用には出来ない。私に出来るのは、ひとつひとつを積み重ねる方法だけだった。これもただ素振りをするだけでなく、流れを作つ

て体を動かす。しかし、先ほどと違って動きのイメージが明確でなく、上手い流れが作れない。

「だめですね……なにかお手本になるようなモーションデータでもあればよいのですけれど……」

と言ってみたところで、プリセットされた攻撃モーション以外に何かを思い付くわけでもなかった。

神姫はそれまでのロボットフィギュアよりも遥かに柔軟で豊かな思考が出来ると言われている。それは神姫に採用されているCSCによるものだが、いかに土壌が豊かでも、知らないものは出来ない。やはり一度、人間の武術についても学ぶべきだろうか……。

そこまで考えて顔を上げると、テレビには白い背景に影絵のような、絵文字のようなものが写され、ナレーションが流れている。またアルキオネが特撮番組を見ているのだろうか。

バトル嫌いで、自堕落で、だらしないいつも遊んでばかりいるアルキオネだが、バトルの強さは本物だと認めざるを得なかった。あの子が起動してひと月と少しが過ぎる。その間に行ったバトルは少ないが、いずれも見事なまでの勝利を飾っている。私が時間をかけて少しずつ積み重ねた強さを、あの子はすぐに軽々と飛び越えていくだろう。そのことが悔しく、身を切られるほどに羨むときもある。この短い間にさえ、私にその才能の半分でもあればと思ったことは、一度ではない。あの子が望めば、主の求める『最強』という称号もすぐに手が届いてしまうかもしれない。そうなったとき、私は一体どうなってしまうのだろうか。役立たずの不良品と思われたら、そう思うだけで不安でばらばらになりそうになる。しかし、あの子はバトルには関心を持っていない。そのことに私は安心を覚え、同時にたまらない自己嫌悪に陥るのだ。

頭を振って、湧き始めた嫌な考えを振り払う。テレビにはやはり特撮ドラマが映されていた。何の気なしに眺めた画面では銀色の双剣を握った鎧の騎士が怪物と戦っている。この動きは！

「アルキオネ！」

「んー、なーにー、シャウラも一緒に見るー？」

こちらを振り向きもせずに答えるアルキオネ。普段なら腹立たしいその反応も、今は気にしない。

「ええ、今のところ、もう一度見られますか？」

「いいよー、んじゃ、ぽちっと」

画面が切り替わる。黒いコート of 男性が、銀色の鎧を纏うシーンだ。それが終わると、怪物が騎士に襲いかかる。両手に構えた剣で、次々と襲ってくる怪物を斬り捨てる。時に回転し、時に蹴りを挟み、流れるように戦っている。

「珍しいね、アンタが特撮見たがるなんて」

「ええ、殺陣が動きの参考になると思ってる」

「そういうことかよー、面白いのにー」

アルキオネは残念そうだが、私にとつて興味があるのは物語部分ではない。あくまでも演武の参考になる動きが見たいのだ。

「アルキオネ、この銀色の騎士が出てくるシーン、もっとありますか？」

「んー、あるよ。んじゃ順番に流してあげるねー。だけど……」

「だけど、何ですか？」

「話に興味を持つとは言わないから、ボクのオススメも一緒に見てよ。アクションシーン中心にすれば参考にはなるだろう？」

「……まあ、参考になるなら」

少し遅い帰り道を早足で歩いた。工作室での作業が思ったより延びてしまったのだ。一応家には遅くなる旨のメールを送ったが、返信は来なかった。いつもならシャウが何かしらの返事をくれるのだが……。

「ちがーう、こうだつてば」

「……こうですか？」

家につくと、珍しく賑やかだ。アルが特撮見ながらなにか喋ってるのは珍しくないけど、シャウも一緒になって、何をやってるんだ？

「……で、こう、と」

「そうー！　そこで台詞！」

「そ、蒼天の霹靂！ 牙忍！ クワガらいZ……」

「なにしてんの、二人で」

沈黙。後ろで流れている三十年以上前の特撮だけが賑やかだった。笑顔満面のアルに対して、シャウは顔を真っ赤に染めて、今にも泣き出しそうな表情をしている。

「えーt……」

「違！ 主、これは、違うんです！」

「マスターマスター、あのね、ゴウライジャー出来たんだよ！ 見てみて！」

「違うんです！ これは、演武の訓練の一環で……」

「いいじゃんかよー、見てもらおうよー、マスターにもさー」

うん、二人とも楽しそうで何よりだ。

『here come new challenger!』

画面のメッセージが新しい挑戦者の来訪を告げる。ステージがポリゴンの屑になり、再構成される。市街地が一瞬の内に平原へと変わる。平原は所々に丘などはあるが、基本的には遮るものがないステージだ。

「索敵、始めます」

『うん、このステージなら隠れるところはないけど、油断しないで。目視だけに頼らないように』

まずは敵の居所を突き止めるのがバトルの基本だ。その時の位置取りや動き方で相手の武装を予想することも出来る。

「発見しました、これは……」

『ジュビジーか……』

向こうもこちらを捉えたようで、パウダースプレーヤーで牽制射撃をしてくる。取り立てて特別な装備はしていない、ノーマルなジュビジーだ。が、それはこのバトルが決して楽ではないことを示していた。

『先手必勝だ、今の内に削れるだけ削ろう』

「征きます!」

私が今回使っているのは、主が作り、先日完成したばかりの二振り
の剣。銘を『鬼姫』という。今日の目的は、この剣の使い方に慣れることだ。普通に使う分には基本武装のジュダイクスとさして違いない。が、この剣は文字通り、専用品だ。柄も私に合わせて長めに作られ、刃部分はカスタムナイフ用の鋼材を削り出したものだという。

重く作られた刃が、風を斬り体を引きずるほどの一撃を見舞う。だが、ジュビジーは神姫の武装の中でも一、二を争うほどの高い防御力を誇る。堅牢な曲面装甲は剣の打点をずらし、逸らせてしまっている。

「手応えありません。上手く捌かれました」

勢いが逸らされた分、速度は失わなかった。高速ですれ違うように距離を取る。

「もう一撃、征きます」

再度、勢いを乗せて大振りの一撃。今度は体の正面を狙って、上段からの打ち下ろし。しかし、ジュビジーは真つ向から受け止める。渾身の力を込めて放ったそれも、その装甲に僅かな傷跡を残すだけだった。打ち下ろした反動を利用し、上空に上がる。

「手応えは確かにあつたのですが、ダメージは通っていませんね」

『流石に堅いな、防御に回られると厄介だ』

「もう一撃、仕掛けますか？」

『いや、相手は手慣れてる。ただ繰り返しても同じことだ。接近して手数で勝負しよう』

「承知！」

大きくターンして、三度突撃。不規則な機動で向かってくる銃撃をかわしつつ、二振りの剣をサブアームで展開する。今度は左右同時の横薙ぎ。が、それも腰の可動装甲とハンマーシードで受け止める。その上から、二撃、三撃。自身の手にもリノケロスを握り、更に一撃。胴体部を直撃するが、並の神姫なら斬り伏せられるその斬撃でさえジュビジーの装甲は受け止めていた。寸刻体の浮いたジュビジーに、意図せず一步、距離を取る。

『右、防げ』

主の声に、咄嗟にサブアームを上げる。その刹那、強かな一撃が襲ってくる。一步分の間合いが私を救った。

「キュベレーアフェクション……」

それはジュビジータイプの最大の特徴である、攻撃用の装甲。三本の爪状の甲殻が、巨大な腕のように振るわれたのだ。

本来であれば、それはジュビジーの堅牢な殻を象徴する、独立稼働する二対六枚の翼のような防御装甲だ。しかし、その甲殻にジュビジーのスキル『収穫の季節』が加わると、途端に凶悪な爪牙へと変化する。防御の上からでも早期の勝負を望んだ理由がこれだった。鉄壁の装甲を誇るジュビジーは、スキル発動まで耐久し、スキルで逆転

を図る戦術が一般的だ。故に、スキル発動までの僅かな時間で勝負をつけるのが理想だが、その防御力の前に有効な攻撃は少ない。

『スキルが発動したか。一度距離を開けて、仕切り直しだ』

「は、はいー」

左右から同時に六本の爪が襲いかかる。咄嗟にサブアームの剣で払い除けるが、ジュビジーはキュベレーアフェクションのパワーに任せて迫ってくる。とても距離を開けるどころではない。とにかく一撃でも加えて、はね除けなければ。リノケロスで装甲の隙間の素体部分を狙うが、巧みに弾かれる。それに構わず、追撃。ガードの上から打ち付ける形だが、とにかく密着距離に居続けるのはまずい。サブアームでの斬撃。ガードの上からではあるものの、直撃。だが、ジュビジーは自ら体を浮かせて衝撃を逃がしている。

『上へ逃げろ』

ダメージの軽減と引き換えに、ジュビジーは距離を取った。その隙を突いて上空へと退避。

「通常の攻撃では装甲を抜けません」

『流石に重装甲だ。さあ、どうやってあれを突破する?』

主が問いかける。単純な攻撃では破れない。加速をつけた攻撃さえ真正面から受け止めて見せたのだ。あれは単純な防御だけでなく、こちらの氣勢を削ぐ意味でも効果は充分だった。

しかし、このバトルに勝つだけなら、道筋は立つ。相手の足ではこちらの機動力に追い付けない。それはつまり、ガードの上からでも一撃離脱を繰り返せば判定で勝ちを拾うことは出来るということだ。だが、主の求める答えは、あの装甲の突破方法だ。主が答えを求めてくるということは、答えは私の中にあるはず。

通常の攻撃では相手の防御装甲を抜けないのは既に試した。防御の隙間を縫うのも至難の業だ。と言うことは、防御を打ち破るほどの攻撃力を持つ、通常以上の攻撃を繰り返すということになる。言うのは簡単だが、それこそ簡単には出来ない。が、試していない攻撃がひとつある。

「こちらにもスキルを使う、ですか……」

ジユビジーは防御型スキル『シエルプロテクション』や攻撃スキル『収穫の季節』を使いこなして守りを固めつつカウンターを狙っている。それを破るためにはこちらでもスキルを使うというのが常套手段だ。しかし今回はスキルに必要なジュダイクスを装備から外してしまっているため、『パッシング・シエイブ』や『スピナ・シザーズ』という基本の大技は使えない。残っているのは……。

「あの技、まだ実戦で使ったことがないんですが」

『初めての時つてのは、そりゃあるさ。むしろ、実験台としては好都合だろう。ジユビジーの堅牢な甲殻に、果たして通用するかどうか』

主はこの困難を前にして、たまらなく嬉しそうだ。

攻撃スキルは武装ごとに決められた、モーションプログラムだ。特定の装備、あるいは決められた複数のパーツを装備することで、条件を満たしたときに強力な攻撃プログラムが使用出来るようになる。それは言うなれば格闘ゲームの大技に相当する。

そして、私のようにオリジナルの武装を使う神姫でもスキルは同ように存在する。事前に組んだプログラムの発動条件を満たせば、オリジナルのスキルを使用することが出来る。中には独自の経験からスキルを編み出す神姫もいるというが、今回のスキルは主の組んだものだ。訓練では何度も使っているが、上手くいくだろうか。

『気負うな、って言っても難しいだろうけど。初めて使う技なんだから、ダメだったらまた改良すればいいのさ。気楽に試してこい』

不安がなくなるわけではないが、私の中に闘志が湧いてくる。私は主の望むものを裁つ刃。それでいいのだ。今、主が私に望まれているのは、この試合に勝つことではない。極論、負けてもよいのだ。私に課せられているのは、あの堅牢な殻を撃ち破ってくることだ。それ以外は忘れても構わない。

「征きますー！」

『おう』

主の短い返事は、十分に私の背を押した。ひととき大きな弧を描き、今日一番の加速。はじめこそパウダースプレイヤーを撃ってくる

ものの、こちらの意図は丸見えだ。すぐに甲殻を閉ざし、『シエルプロテクション』の態勢を取る。お膳立ては整った。主の組んだスキルプログラムが通常のそれに威力で劣るとは思えない。残るのは私がそれを出来るかどうか、それだけだ。

両方のサブアームで構えた剣を、眼前で交差させる。スキルプログラム『無銘・大顎』発動。交差した剣が中央で結合、ロックされる。目の前に迫ったジュビジーのキュベレーアフェクションの甲殻を、今は巨大な鋏となった刃が挟み込む。

我知らず、雄叫びを上げる。数瞬の間をおいて、刃が甲殻にめり込んだ。一度食い込んでしまうと、呆気なく感じるほど、すっと、大鋏はキュベレーアフェクションを押し斬ってみせた。ジュビジーの目が驚きで見開かれている。そのまま剣の連結を解除。もうひとつの攻撃スキル『ディアホーンストラッシュ』、発動。本来はジュダイクスで使用する追撃スキルだが、同様の特性を持つ二振りの剣でそのまま使用出来る。密着するほどの間合いから、二本の剣を十字に叩き込む。その勢いのまま、一回転。足でブレーキをかけて止まったときには、バトルBGMはファンファーレに変わっていた。

「ん、良くやったな」

「はい」

バーチャルから戻った私に、いつもと変わらぬ労いの言葉。それが堪らなく嬉しく感じるのは、今日の勝利のせいだろうか。

「とりあえず、適当な場所で反省会しようか」

それも、いつも通りの習慣。今日の反省点はなんだっだろう、足を完全に止めてしまったことか、それともスキル使用前に削り切れなかったことか、と頭の中で候補を挙げる。

「なあ、あの人じゃないか」

「えー、お前聞いてみるよ」

装備を片付け、筐体の外に出ると、にわかにギャラリーが騒がしい。きつと、私のバトル中にいい試合が行われていて、その試合をしたオーナーを探しているのだろう。このゲームセンターでは試合の様

子を大型モニタで再生しているので、それ自体は取り立てて珍しいことではない。

「あの、さっきの試合のエスパディア、あなた達ですか？ ジュビジーと対戦してた……」

「ええ。何か？」

「やつぱり！ すごかったです、さっきの試合！」

「キュベレーアフェクションって、あれ、正面から壊せるんですね！俺、あんなの初めて見た！」

ギャラリーの少年達は興奮ぎみに主に話しかけている。ということとは、この少年達は私の試合を観てくれていた、ということだろうか。それを思うとなんだか急に恥ずかしいような気持ちになってくる。それからどんな話を聞いたのか、良く覚えていない。が、最後に応援してます、と言ってくれたことだけは不思議とはつきり覚えている。

「良かったじゃないか、シャウ。俺達にもファンがついたら嬉しいぞ」

「からかわないでください」

少し怒ったような顔をしてみせる。わざわざ言葉にされると、余計に気恥ずかしい。主はそう感じないのだろうか？ 手慣れた風にお話しされていたけれど……。

「まあなんにせよ、注目されてるってことはこれからは対策されることも頭に入れておかないとな」

対策。まったくそんなことを考えたこともなかった。しかし、バトルロンドは対戦ゲームだ。当然装備やスキル、コンボなどに強弱や相性があり、流行になったり対策を立てられることは日常的にある。今回の私のスキルはオリジナルだから、再現されたり、ましてや流行ったりすることはないだろうが、対策を立てられる可能性はあるのだ。いや、これからも上を目指すなら、幾種類もの対策があつて当然の立場になっていくと思っていた方がいい。

「まあでも、対策への対策なんて、立てられてから考えればいいさ。まずは、今日の足元を固めようか」

「はい、主」

「今日の反省点は？ 俺は密着時に機動力が完全なデッドウェイトになつてたところが引つ掛かったんだけど」

「私も同感です。基本構成として、一撃離脱を掛けるのと、密着して継続戦闘をするのでは、やはり使える機動力の質が大きく違ふと感じました」

「スピードタイプは出来てきたから、今度はデフォルトに近い装備で密着して戦う戦術に手を出してみるか」

「それもいいと思います。理想としてはバトル中の組み替えで、スピードタイプと、機動力タイプを使い分けられれば、とは思いますが」

「うん、それはこちらの今後の課題だな。スピードタイプの機動力を上げる方法はもうすぐ出来るからちよつと待つてな？」

結局、サイドボードの内容精選、現状装備の底上げ、機動力タイプとスピードタイプを即切り替えられるシステムの構築、といった辺りが落とし処になった。

「すぐには無理だが、今年が終わる頃にはまとまるようにするよ」

「つまり、その後はそれに対応出来るように、訓練が増えるわけですね？」

「そうなる」

沈黙。主は人差し指を立て、ゆつくり近づけてくる。私は右こぶしを差し出し、その人差し指にあわせる。

「装備の方は任せます、主」

「それを使う方は 任せた、シャウ」

その日は、私達はバトルシーンハイライトに選ばれたらしく、反省会をする間にも何人かの自称ファンが、話をしに来てくれた。これがすべて明日の敵だとは思わないが、次に無様をさらすわけにはいかない。

私の中に、改めて闘志の灯が点った気がした。

「神姫強盗?」

学期が変わってしばらく経っても、友人達との会話に大きな変化はない。相も変わらず神姫が話題の中心だった。その日の帰り道、他愛もない会話の中で出てきた言葉だったが、俺は声を上げた。

武装神姫に限らず、ホビーバトルはどれも趣味としては金食い虫だ。充分な資金と手間をかけたカスタムパーツは神姫の性能を高めたり、強力な武器になったりする。それはバトルロンドで上位を目指すプレイヤーやコレクション趣味のある好事家にとっては大枚を払いたいても手に入れる価値のある品となり、自然、それを狙った窃盗団や強盗団なんて話も耳にすることはある。

特に悪質な手口では、そうした犯罪に神姫を利用する事件もあるという話だ。神姫をはじめ、一般的に流通しているアンドロイドには当然人間に対して危害を加えたり、犯罪行為に加担するような行動は取ることが出来ないようにプログラムされているが、鍵をかけることが出来るなら外すことが出来るのも世の常で、そうしたセーフティプログラムを外すノウハウもアンダーグラウンドでは存在するらしい。無論、それが違法であるのは言うまでもないが。

「違うよ、神姫強盗じゃなくて、強盗神姫」

「何が違うんだ、日野?」

「君の言ってる神姫強盗ってのは、神姫のパーツなんかを狙った強盗のことですよ? そうじゃなくて、神姫がお金を強盗する事件がこのところ起こってるんだってさ」

なるほど、それで強盗神姫か。分かりづらいことこの上ない。

「神姫だけが現れて、顔やら腕やら切りつけられるんだってよー」

「プロテクト外されてるのか。しかし、神姫の体格じゃあ財布ひとつ持っていくにしても大変だろうに」

「てかよー、第一に財布抱えた神姫が走り回ってたら、幾ら夜でも目立つよなー」

そりゃあそうだ、と笑いが漏れる。神姫の身長は千円札と同じぐら

い、と言うのは神姫プレイヤーの間では有名な話だ。それからすると、大抵の長財布は神姫よりも大きいことになる。自分よりも大きな財布を背負って走り回る神姫がいれば、物珍しさも手伝ってすぐにSNSにも流されるだろうし、犯人の居場所なんかも分かりそうなものだが。

なににせよ、未だに犯人は捕まっていないらしいし、自分の活動する地域でそんなことがあるというのは嫌な話だ。しかも事件にセーフティプロテクトを外された神姫が関わっているというのは正直ぞつとしない話でもある。プロテクトを外された神姫がその気になれば、人間を殺すことだって簡単だ。バトルホビー用とはいえ、刀剣類は十分な殺傷力を持っているし、銃火器類はエアガンなんかよりはるかに危険なものが多い。自分達が普段神姫に接しているからこそ、その危険性は普通以上に身に染みて分かっている。

駅での別れ際に、せいぜい気をつけろよ、と投げかけられたのでお互いにな、と返し、電車に乗り込んだ。

そんな話をしてから、一週間ほど過ぎた夜。

それは俺の日常の中に、唐突に姿を現した。

その日は休日で、普段通っている場所よりも遠いY市に遠征していた。バトルロンドにも流行があり、場所が変われば流行の武装や戦法も変わる。常に新しい風に触れることで、自分達の中のかなにかが澱んで固まってしまわないよう、月に一度は遠征をする。それはシャウと俺のどちらが言い出すともなく、自然と決まったことだった。

その日は遠征には珍しく、勝ちに恵まれていた。高機動での格闘戦という、シャウのメイン戦法が有利に働くことが多かったのだ。そのため、つい時間を過ごしてしまい、ゲームセンターを出て、隣のハンバーガーショップで夕食と反省会を済ませた頃には十時半を回っていただろう。店を出て駅に向かう道すがら、何の気なしに入った裏路地で、それは起こった。

突然何か降ってきた。それは俺の肩にぶつかり、そのまま落ちることなく肩の上に乗っていた。その何かは俺の耳元で「金ヲ出セ」と囁いた。

「うわっ！」

とつさに鞆を振り回して払い除けるが、鋭い音と共に鞆に大きな切れ目が走る。それは、黒い神姫だった。よく見ると、その神姫の手には大振りなナイフが握られている。顔がバイザーで覆われていて表情が読めないのが、余計に恐怖感をあおる。

「金ヲ出セ」

抑揚のない口調で、再び脅される。ゆつくりとこつちに歩み寄る影は、15cmとは思えないほどの威圧感を放っている。

やばい。動けないどころか声も出せない。手に握られた刃物は10cmにも満たないが、セーフティプロテクトを外された神姫がその気になれば、人間を殺すことだって容易いという事実が、余計に俺の体を縛り付ける。腰が、抜けた。それを情けないと感じる余裕もない。

ゆつくりと、跳躍。飛び上がった黒い影を、横から激しくぶつかってはね飛ばす。眼の前を横切って壁に叩きつけられる黒い神姫。

「ご無事ですか、主！」

シャウだ。どうやら鞆の中でケースが開いたらしい。手にはいつも持ち歩いているリノケロス握っている。こちらを振り返らずに確認するシャウが、かつてないほどに頼もしい。

黒い神姫がゆつくりと立ち上がる。思わぬ反撃を受けたためだろうか。そのまま跳躍し、夜の闇の中に溶けていった。

「大丈夫ですか、主、お怪我は？」

へたり込んだ俺の元に駆け寄ってくるシャウ。よく見ると、今にも泣き出しそうな顔をしている。大丈夫、と返事はするものの、すぐに立ち上がれない。なんともみつともない様だ。

「こんばんは、どうかしましたか？」

尻餅をついたままの俺に、よれたコートの男性が近寄ってくる。酔漢だと思われるのかもしれないが、それも無理はない。俺の回りには鞆の中身が散乱しているし、大丈夫ですと返した声もまだ震えていた。男性は辺りを見回しつつ、目の前でしゃがみこんだ。

「ああ、申し遅れたね。怪しい者じゃないんだ。おじさんは、こういう

ものです」

黒い手帳を開いて見せる。成る程、警視庁MMS担当捜査課の方らしい。名前は榊。階級は警部補であるようだ。ついでだから名刺もどうぞ、と差し出される。名前と役職、連絡先だけのシンプルな名刺だ。

「酔っぱらいつてわけじゃなさそうだね。なにかトラブルかい？」

警察……ならば今起きた突拍子もない出来事を信じてくれるかもしれない。なにしろ、神姫による強盗は事情通ならずとも耳に入るレベルのようだ。俺は今あったことを簡単に話した。

「不運だったね。いやなに、最近この手合いが増えててね、警察としても困ってるんだ。それで、神姫を持つてるおじさん刑事にも、こうして夜間のパトロールが回ってくるのさ」

手帳をしまいつつ、手を差し出してくれる。ごつごつとした手をとると、ゆっくりと引き起こしてくれた。

「怪我がないようにでなによりだ。でも鞆の方はひどい有り様だな。被害届、出すかい？ それなら近所の交番まで送っていこう」

確かこのあたりだと近くの交番までは少し距離があるはずだ。せっかくなのでお願いすることにした。何より、もしもう一度さっきの神姫に出会したりしたらと思うと、一人で歩くのがいかにも頼りなく思えた。手早く荷物を破れた鞆の中に押し込め、シャウには上着のポケットに収まってもらおう。警戒しているのか、剣は持ったままだ。

「いやまったく面目ない話だけどね、実行犯である神姫を取り押さえるか、奪われた盗品の受け渡しルートを解明するかしないとおさまらんのだがね。現実問題、警官を動員しての夜間パトロール増員程度が関の山なもんでさ」

はあ、と生返事を返す。世間話のつもりだろうか、あまり心地よい話ではない。それでもこの夜道に会話が途切れないということだけに限れば、大分ありがたいことだった。

「まあ、注意喚起の一環とでも受け取ってほしいんだがね。事件は概ね、Y駅の西口側で起こっている。特に夜間でも酔客が利用するタク

シー乗り場を中心に、ね。目撃情報からみて、機種は恐らくストラーフ……」

「あの、それを聞かせてどうしようっていうんです?」

「だんだんと話の内容が捜査情報じみてきた。これは本当に、聞いてしまつていいことなのだろうか。そんな一抹の不安がよぎる。」

「注意喚起の一環だよ。まあ、下心としては、万一強い神姫プレイヤーがああ神姫を取り押さえることが出来たら、と思わなくはない」

「神姫プレイヤーとして上位ランクにいるなら分かりますけどね。俺のランクは良いとこ下の中くらいですよ?」

俺がバトルロンドを始めたのはせいぜい二ヶ月前だ。確かにバトルロンドの上位に位置するプレイヤーは警察に捜査協力をしたりすることもあるようだが、俺の経歴はまだ初心者と言つて差し支えない。第一、ここは遠征先だし、神姫プレイヤーとしての俺が知られてはいるはずはない。

「まあ、期待値込みだと思つてくれ。アマチュアボクサーがプロに転向したら、他の選手よりは期待されるだろ? それと似たようなもんさ」

いぶかしむ俺と裏腹に、榊刑事の表情は変わらず穏やかだ。

「……なんのことですかね」

「なんのことででもないさ。単にゲーム好きなおじさんの勘、だとも思つてもらえればいい」

さ、着いたよ、と榊刑事は笑顔を向けてくる。繁華街の交番は深夜の時間帯にもかかわらず何人かの人があった。被害届を作る間も、榊刑事は俺の傍らで事情説明を手伝ってくれた。

「神姫強盗に逢った!」

「マジかよ、大丈夫だったのか?」

「無事だよ。鞆はダメにされたけどな」

一夜明けて月曜日。あんなことがあっても日常は変わらず訪れる。

昨日は結局家に帰ったのは日が変わる寸前で、暇をもて余したアルが帰りが遅いと怒り、何があつたのかを聞いてまた怒り、まあ散々だった。

「でもよ、出会したりしたら出会したで、やつつけちまえばよかったのによー」

「無理だ。お前な、あれメチャメチャ怖かつたんだぞ」

「でも君のエスパディア、それなりに強いじゃない。花道の飛鳥に勝つたんでしょ」

「無茶言うなよ、日野。確かにシャウがいてくれたお陰で助かったけど、アレはもうバトルロンドとは全く別物だ」

それは例えるなら、剣道の試合と真剣の斬り合いだ。下手をしたら、実際に自分が死ぬかもしれないと言う空気の中では、いつものように平静的自分を保てない。少なくとも俺はそうだった。

バトルロンドは、ゲームでありホビーだ。そこには事故事例こそあるものの、基本的には負傷したり、ましてや死亡したりすることはない。特にバーチャルバトルが主流となつてからは、直接戦う神姫が破損したり再起不能になつたりする事態も大幅に減つてしていると聞く。ましてやプレイヤーである人間が負傷することなどありえない。数件の例外も、リアルバトル中のアクシデントによるものだ。

それに対して、今回の件は明確な悪意がある。昨夜はたまたま立ち去ってくれたが、最悪シャウが傷ついたり、下手をすれば失つたりすることになつていたかもしれないのだ。現実とは違う。確かに神姫を悪用する犯人に対して怒りはあるが、だからと言って積極的に関わりたいとは思えなかった。

「なんだよー、そんなに恐かつたのか?」

「逆にお前は恐くないのか？ 自分の神姫を失うかもしれないのに」

俺は恐かった。高々半年にも満たない付き合いだが、今や神姫を抜きにした生活というのは想像出来ない。悪意をもった相手に壊される、なんて尚更だ。それは花道も理解出来たようだ。

「まあ、道端で突然襲ってくるんじゃないや自分で戦うわけにもいかんしな、G&Sやレジエンド・バトルの機体使うわけにもいかんし」

花道が口にしたのは、どちらもプレイヤーが直接操作するタイプのホビーバトルゲームだ。このタイプのゲームはプレイヤーの視覚や触覚をフィギュアに接続して操作する。ゲーム専門紙では近々武装神姫でもこのシステムを導入する予定があるらしい。成る程、このシステムを使えばあの黒い神姫と直接戦うことも出来るだろう。だが、それには専用の筐体が必要だし、何より本体側は何も出来ない。この手のゲームでプレイ中に貴重品を狙われる事件が多発し、ロッカー完備の新筐体が出るなどして一時期話題になったものだ。

「そうだね、それなら動けない間に財布だけ抜かれるんだから、怪我はしないですむね」

日野が茶化したように言う。

「でさ、結局その神姫はどんなやつだったの？」

「正直そんなにまじまじ観察する余裕なんかなかったからな、ざっくりとだけど……ヘッドにバイザー着けてて、手には大振りのナイフ握ってて。ストラップのだと思うけど、強化レッグ履いてた、かな。本体も多分ストラップだと思うんだけど、色が真っ黒だったし、確証はないな」

昨日会った榎という刑事もおそらくストラップだと言っていた。

「悪魔型かー」

「多分だけどな。なんにせよ、遠征するならばらくY駅周辺は避けた方がよさそうだ。あのあたりによく出るらしいから」

「そうだね、気をつけようか」

日野は遠征計画変えないとな、と呟いている。二人は県下でも有名なプレイヤーで、頻繁に遠征をしている。Y駅と言えば県内でも有数の盛り場で、神姫ショップを併設した大型の神姫センターがあること

でも有名だ。そこに行けないとなると、同レベルのセンターは県内には見当たらない。遠征の距離が伸びるのは、高校生にとっては痛手だ。

「でもよ、そんなことに使われる神姫はどうかしてやりてーよな」

花道が呟くように言った。

「何だよ、急に」

「だってよ、どんなことに使われたって神姫が悪いわけじゃねーだろ？ 悪いのは、そんな使い方をする人間の方じゃねーか。それなのに、何かあれば悪く言われるのは神姫だ。そういうの、我慢出来ねーよ」

花道はこういう奴だ。時々、青臭いくらいの正論を吐く。そういえば少し前に神姫絡みの犯罪が大きく報道されたときも、一番怒ってたのは花道だった。

「だからって、自分の神姫を危険にさらすの？ 避けられる危険なら避けた方が身のためだよ」

「それはそうだけど、俺はやっぱり嫌なんだよ、そういうのがよ。だって、神姫は悪くねーだろうが」

花道と日野の言い分は平行線だ。花道の言っていることは、正論だ。しかし一方で、不必要な危険を避けるべきと言う日野の意見も処世術としては正しい。どちらも正しいことを言っている。結局はどちらも折れず、駅で別れるまでその話は続いた。

日野の言い分はもつともだ。俺だって不必要に神姫を危険にさらしたいとは思わない。でも、花道の熱の籠った言葉も、分かる気がする。神姫は悪くない。それは確かなのだ。昨夜はナイフを握った神姫に恐怖を感じたが、それは神姫が人間でも変わらないではないか。そう考えると、犯人に使われている神姫が急に哀れに思えてくる。今後、警察がどう動くにせよ、神姫に救いが無いではないか。

そんなことを考えているうちに家に着いた。玄関を過ぎると、テレビが点いている。それ自体は別に珍しいことではないが、シャウトアルが二人揃って見ているというのは中々ない光景だ。

『シリーズ特集、今日のテーマは神姫による犯罪です。今回は、全国で

違法に営業している、いわゆる神姫風俗について……」

二人が見ているのは、夕方のニュース番組だ。画面には『増加する神姫を使った犯罪』という文字と、コメンテーターが持っているグラフィックが映し出されている。

「なあ、シャウ。昨日の強盗神姫なんだけどき。あれって、もし捕まったらどうなるか、分かる？」

「そうですね、基本的に私達神姫は法的には物、どなたかの所有物ですから、直接罪を問われることはありません。ですが、違法な処置を受けて犯罪に使用された物ですので、警察が押収、調査の後は廃棄されてしまうのではないのでしょうか」

「そうか、やっぱり」

廃棄……その言葉が急に重くのしかかってきたように感じた。

花道の言う通りなのだ。神姫が自分から人を傷つけたわけでも、財布を奪ったわけでもない。それなのに、その神姫の未来は断たれてしまう。犯人が捕まったとしても、たいした罪にはならないだろうに、こんな理不尽なことがあるだろうか。

「どうかなさったのですか？」

俺は昼間の花道とのことを話した。話しながら、だんだんと俺の中に静かな怒りが灯っていくのを感じた。知らないうちに花道に感化されたのだろうか。

「主はどうなさりたいのですか？」

話し終わると、シャウが静かに問いかけた。

「主が望まれるのならば、私はそれを成しましょう。私は主の望むものを裁つ刃。それでいいのです。主は何を望まれるのですか？」

「そうだね、それはボクもそう思うなー」

アルも横から話に入ってくる。

「マスターがその強盗神姫を止めたいって言うんならさ、やるよ、ボクもシャウも。でも、そうしたくないって言うんならそこまでさ」

どうやら二人共、マスターである俺の意思決定に従うつもりのようにだ。

そうだな、俺はどうしたいんだろう。確かに自分や神姫をわざわざ

危険にさらしたくはない。しかし、このままではあまりに神姫というものに救いが無いように思う。そして、今の自分に出来ることは、あまりにも少ないのだ。それでも。

「俺は……止めたい」

俺は少し考えた後、言った。

「勝手な言い分だろうけど、俺はあの神姫を救いたい。そのために二人を危険な目にあわすのは済まないと思う。でも、俺はやっぱり何もしないでいるのは出来そうにない」

青臭い理想論だ。まったく、これでは花道のことを馬鹿に出来ない。自分に何が出来るとも分からない。それでも、何もせずに見過ぎしたら、きっと俺は後悔する。

「なら、決まりだね」

「やりましょう、主」

二人は笑顔を向けてくれた。それだけでも勇気づけられる思いがある。まずは、自分に出来ることをはつきりさせなければならぬ。俺は財布の中から先日もらった榊刑事の名刺を取り出した。榊刑事なら、もしかしたら何か方法を教えてくれるかもしれない。

名刺の連絡先に電話を掛けてみる。どうやら個人持ちの携帯番号のようで、数度のコールの後に直接榊刑事が電話を取った。

「もしもし」

『ああ、先日はどうも』

俺が名乗ると、榊刑事はすぐにこちらにピンと来たようだ。先日の件で、協力したい。何か自分に出来ることがあったら教えてもらいたい。端的に用件を伝える。

『そうですね、それでしたら明日の夕方にK駅の近くにある「COLL」という喫茶店で直接お話出来ますか』

榊刑事は詳細な場所を丁寧に説明してくれた。時間と場所を手早くメモし、お礼を言って電話を切る。指定された場所までは電車で一時間ほどかかる。明日の帰宅後に支度をして行っても約束の時間には間に合うだろう。

翌日、終業のチャイムと同時に学校を飛び出す。時間的には急ぐ必

要はまったくないのだが、気持ちの方はそうもいかない。シャウトアルに支度をさせて、自分も身支度を整える。念のために、武装パーツもケースに詰め込み、持ち出す支度をする。全員の支度が整ったら、いよいよ待ち合わせ場所に向かう。

既にして戦いに行くような気分だが、それはまだ大分早い。まずは榊刑事との情報交換が先だ。

一時間ほど電車に揺られ、時間どおり待ち合わせに指定された喫茶店の入り口を潜ると、榊刑事は既にカウンターの端に席を取っていた。他に客はおらず、ゆつたりとした空気とジャズが流れている。こんな用事で来たのでなければ良かったのだが、仕方ない。榊刑事の隣に座り、コーヒーを注文する。

「やあ、遠い所をわざわざどうも」

「いえ、こちらこそ呼び立てしてしまいました」

「いやいや、礼を言わなけりやならないのはこっちの方さ。ただね、警察ってのも不自由な職業でね。市民の皆さんが協力してくれるって言うんなら諸手を上げて喜ばにやならないところなんだが、中々どうして、上手くいかないもんでね」

相変わらず掴み所がないと言うか、どこまで本気なのか分からない。長年刑事なんかをやっていると、本心を伺わせないようになるのだろうか。

「そう、そのことなんです、俺は例の神姫を止めたいと思って来たんですが」

「ああ、その話を聞く前に、ひとつ確認しなきゃならんことがあつてね。君が件の神姫を止めたいという想いだ、君一人の意思かね？」

にわかには榊刑事の表情が変わる。

「分かっていてと思うが、君は危険な行動を取ろうとしている。そのことについて、君の神姫は納得しているのかをまず聞いておきたいんだ」

「はい、ここに来る前に二人にも話してあります」

俺がうなずくと、榊刑事はしばらく俺の目を見つめてきた。やがて

何かに納得したような表情を浮かべると、静かにコーヒーに口をつけた。

「それは結構。さて、それじゃあ本題に入るけどね。協力してくれるのは非常にありがたいんだが、捜査情報ってやつは一般市民には漏らせないことになってるんだな、まあ当然なんだがね」

「ええ、分かっています。その上で、俺にあの神姫を止める協力をさせて欲しいんです。榊刑事、言ってみましたよね。強い神姫プレイヤーが、あの神姫を止めてくれたら、って。もし何か、俺に出来ることがあれば教えてもらいたいんです」

俺は一息に言い切った。それを聞くと榊刑事は、コーヒーを一口すすり、封筒を机の上に置いた。

「それはそれとして、これは独り言なんだがね。最近では職務中に喫茶店に入ってコーヒーなんぞ飲んでる不良警察官がいてね。こともあろうに捜査情報の入った封筒を置き忘れるなんて奴もいるんだそうだ」

封筒を裏返すと、『神姫による連続強盗傷害事件に係る捜査資料』と、書いてある。

「まあその封筒は店のマスターの手で無事回収されて事なきを得たんだがね、けしからん刑事もいたもんだよ、なあ、マスター」

カウンターの向こうで初老のマスターがやれやれ、またか榊、と呟いている。どうやらそういうことらしい。

「君は僕に神姫を止める方法を教えて欲しいと言ったが、まあ立場上一市民にそういうことをお願いするわけにも行かなくてね。そういう意味では力になれず、残念だよ」

そう言うのと榊刑事は自分の分のコーヒーを飲み干し、それじゃまた、と言って出ていってしまった。席には封筒が置かれたままだ。

俺はなんだか肩透かしを食らったような気持ちでその後姿を見送った。俺はてつきり、ここに来れば解決法を授けてもらえるような、そんな甘い気分だったのだと気づいて、急に恥ずかしくなった。店のマスターがゆつくりとコーヒーを差し出し出してくる。

「お客さん、初めてだね。榊の奴とはどこで知り合ったね？」

「あ、一昨日です。Y駅の近くで」

「あいつのことだ、君、何か困りごとだったんだろう」

「分かるんですか」

「ああ。榊の奴とも長いからなあ。もう十年も前、新米刑事として赴任してきた頃から、ここであいつがコーヒーを飲むのは決まって何か面倒事があるときさ」

初老のマスターは笑いながら、パイプに火をつけた。このご時勢に珍らしい、電子煙草ではない本物のパイプだ。

「今もあいつはたまにここに来て、今みたいなことをしよる。本当に困った奴さ、本人の言う通り、まあ不良警官だな」

随分手馴れていると思っただが、なるほど、こんなことをするのも今回が初めてではないらしい。紫煙をくゆらせながら話すマスターの顔は、どこかなつかしい物でも見るような表情だ。

「まあ、やることはでたらめだが、ああ見えて筋は外さない奴だよ。あなたの困りごとにもきつと力になってくれるさ」

マスターが俺の肩に手を置く。喫茶店の店長には似つかわしくもない、意外とごつごつとした手だ。もしかすると、昔は何かやっていたのかもしれない。

「そうだ、お客さん、その忘れ物なんだが、最近こまかい物を読むのが辛くてね。良かったら代わりに中を確認してくれるかい」

「分かりました、ありがとうございます」

「なに、礼を言うのはごつちの方さ。じゃあ、よろしく頼むよ」

そう言うと、マスターは榊刑事の空けたカップを片付け始めた。俺は自分の分のコーヒーを一口飲むと、忘れ物の封筒に手を伸ばした。

榊刑事の置いていった封筒の中身はY駅を中心とした地図だった。十箇所ほどにペンで印が打たれており、その横には日時が書き込まれている。どうやら事件が起きた場所を記録したもののようだ。写真も同封されていて、それは現場の記録写真のようだった。ひとつの現場につき、向きや角度を変えて数枚ずつといったところか。それらを見ると、一連の事件は決して広くない範囲で起こっていることが分かる。が、場所の関連性は見えてこない。せいぜい、Y駅の西側の繁華街近くの、あまり人通りのない裏通りで起きているのだろうか、と思わせる程度だ。一方で日時の方は、一応の傾向が見えた。事件が起きているのは概ね深夜の十時から一時くらいまでで、そのほとんどが日曜日だ。俺が事件にあったのも、確か日曜日の十時半から十一時頃だったはずだ。あの場所にタイミングよく榊刑事が来られたのも、同じように目星をつけたのだろう。

しかし、後一步が足りない。確かに日曜日の深夜、Y駅西側の繁華街とまで絞れば上出来なのかもしれない。だが、一人で探すとなると広すぎる。俺はいったん思考を切り上げ、温くなったコーヒーに口をつける。そういえば、シャウとアルを連れてきてるんだった。考えも行き詰っていることだし、二人に見てもらえば、新しい切り口も見えてくるかもしれない。一般の喫茶店で神姫を出すのは憚られるかもしれないと、マスターに断りを入れると、他に気にする客もおらんからな、と笑って許してくれた。

早速ケースから二人を出すと、地図を見せた。普段滅多にこういうところには来ないので、アルは周りの方にも興味津々で考えてくれているのかどうかも分からない。シャウは熱心に地図を見つめて、一生懸命に考えている様子だ。

「この範囲、全部を神姫が一人で回るのは困難ですね。それに盗品の財布を持って移動したことを考えるとそんなに遠くまでは行けないはずです」

「そうなんだよな。もし犯人が近くにいて、神姫と盗品を直接回収し

ているなら話は分かるんだけど」

「でも、人気のない裏路地で常に同じ人物が目撃されていたら、幾ら何でも怪しくありませんか？」

確かにそうだ。もしこの件数の事件の影に似た風貌の人物が目撃されていたとしたら、とつくに警察が目星をつけているだろう。

「そもそもさー、その神姫は毎回バッテリー充電しに帰ってるんだよねー？ ってことは犯行現場の近くに犯人のアジトがあるってことじゃないかなー」

唐突にアルが割って入る。が、実際はそうとは限らない。もし神姫が自力で帰るのではなく、犯人が何らかの方法で神姫を回収しているとすれば、犯人の根城が近場とは限らないのだ。

三人で頭を付き合わせてみても、答えは出そうにない。コーヒークップを持ち上げると、いつの間にか空になっていることに気づいた。ふと視線を上げると、マスターと目があった。

「考え事の最中悪いんだがね、そろそろ時間は大丈夫かい？ いや、ゆっくりしていつでももう分には店としちゃあ構わないんだが」

マスターの声に時計を見ると、確かにもう八時を過ぎていた。紳刑事と別れてから一時間以上考え込んでいたらしい。店内には相変わらず他に客はおらず、緩やかな空気が流れていた。マスターに謝意を伝えると、急いで地図と写真をカメラで写して画像データにして保存する。それを封筒に収めてマスターに手渡し、改めて礼を述べる。

「なあに、礼なんか要らんよ。それよりも、この店が気に入ってくれたらまたお客として来てくれると嬉しいね。今度は、紳の奴とは関係なしでな」

笑顔で見送ってくれるマスターにまた礼を述べ、店を後にした。事件が解決したら、報告がてら、今度はゆつくり来よう。そんなことを考え、急ぎ駅に向かった。

次の日の放課後、俺はシャウとアルを連れてY駅にいた。地図の上から読み取れる情報だけでは分からないこともあるのではないかと思ひ、実際に現地に足を運んでみたのだ。例の強盗神姫に出会すとは

思っていないかったが、念のため武装も全部装備させてある。

駅の西口から出ると、すぐ繁華街の入り口に繋がっている。平日の夕方ではあったが人通りも多く、とてもではないが神姫が一人で歩けるような場所とは思えなかった。

それほど急いだつもりはないが、全ての現場を巡るには三時間ほどかかった。長いようだが、現場ひとつに二十分位の計算だ。榊刑事にならない、自分なりに現場の写真を撮ったり現地をうろついたりしながらでもこの時間なら、地図を見て思ったよりも実際はもっと狭い範囲で事件が続いていたということだろう。

その足で駅前に店舗を構える大型の家電量販店に向かい、携帯で撮影した写真をプリントアウトしてもらった。なにかを集中して考えるときは、漠然とでもそれに触れられた方がいいと俺は思っている。その点、紙媒体は便利だ。アナログかもしれないが俺のように感じる人間が途絶えない限り、紙媒体の物もなくならないだろう。写真は全部で数十枚あり、昨日「COL」で撮った画像データも印刷すると、簡易プリントでもそれなりの時間がかかった。時計を見ると、もう九時近くなっている。普段なら夕食も済ませてシャウと今日の課題の反省をまとめている頃だろう。俺は写真を受け取ると確認もそこそこに地元に向かう電車に飛び乗った。

昼間は学業、夜は探偵紛いの生活をしていると慌ただしくて一日が飛ぶように過ぎていく。いや、時間ばかりが飛ぶように過ぎていく、と言った方がいいかも知れない。一日の周期が圧縮されたような感覚だ。今日の昼休みも、貯めた分の課題を片付けていたらあつという間に過ぎてしまった。なにせ、家に帰ってから学校の課題を片付ける余裕がまったくない。二日間とも遅い夕食を取って風呂に入り、シャウと翌日の課題を打ち合わせていたらあつという間に日が変わっていた。

「自分でやりたいと決めたのだから文句はつけんが、それにしたってもう少しどうにかならんか……」

一人恨み言を呟く。普段なら返事を返してくれる友人二人は、今頃

なにをしているだろう。一人教室に残って課題を片付ける友人に救いの手を差し伸べる、なんて真面目な側面はあの二人にはないのだ。自然と思考は課題から薄情な友人達へ変化し、頭を振ってそれを追い払うことの繰り返しになっていった。

「これは、まだまだかかる奴では……」

そんな言葉がもれ出る頃には、集中力は完全に途切れ、結局昨日までの分の課題を片付けるだけで終わりにすることにした。駅前のハンバーガーショップでセットを注文し、席でポテトをつまみながら昨日の写真を広げ始めた。この事件現場は、何か共通点があるはずなのだ。特に、神姫の回収方法が分からない今、その謎に迫る唯一の手がかりが写真だと言ってもいいだろう。しかし、内容を見てもどれも繁華街の裏通りが写っている、としか言い様のない写真ばかりである。それをもう一步、何か共通項でくくれないだろうか……。

「なに見てんだ？ 課題終わったのかよ」

「風景写真……にしちや薄汚いところばっかりだね」

「花道、日野、いたのかよ？」

二人は席の後ろからひよっこり現れ、テーブルの上に散らかった写真を眺めている。一応捜査資料の写しもあるという引け目から、写真をまとめ始める。

「よー、なんの写真だよ、これ」

「ちよつと知り合いに頼まれてな。共通点を見つけてほしいんだとや」

写真をグループごとにまとめてクリップで止め、封筒にしまい込むには、ちよつとかかりそうだ。

「へえ……あ、分かった、コレ。ポストだよ」

「はあ、良いから貸せよ、片付けるんだから」

「ちよつと、一応聞いてよ」

「片付けながらなら、耳だけ貸してやる。ポストがどうしたって？」

「いや、その写真の場所さ。全部郵便ポストが近くに写ってる」

俺は写真をまとめる手を止めた。

「どういうことだ？ 日野」

「いや、どういふもこういふも。多分それ、何枚かペアでひとつの場所の写真になつてゐるでしょ？　で、全部は確認してないけど、ポストの写つてゐるグループはとりあえず三つ見つけた。借りていい？」

ざらざらとクリップでまとまつた写真をばらしてチェックする。

「まずこのグループはここ、ビルの影のところに写つてゐる。次のグループは割りとド真ん中。でその次はここ、ちよつと見辛い位置だけど、これ多分ポストだよな？」

確かに、日野の示したグループには、全て写真に写る位置に郵便ポストが立っていた。

「日野、残りのグループも一緒に探してくれないか？　もしそれが正解なら、ありがたい」

俺は画像データに保存した地図をプリントアウトしたものに、ボールペンでポストの位置を書き足した。そうしてゐる間にも有能な友人達は十ヶ所中七ヶ所の現場写真にポストが写つてゐる、つまり犯行は郵便ポストの近くで行われている、という仮説を立ててくれた。

「日野オ……ダブルチーズ奢つてやるわ……」

「いいよ、そんなの。そんなことよりさ、それ、もしかして強盗神姫に関わる話なんじゃないの？」

「もしそうだったら、俺達も乗せてもらいたいんだがよー、どうよう？」

ノリが軽すぎる……やはり自分一人で考えなければならなかったとしても、自宅に戻つてから一人で写真と向かい合うべきだったと後悔し始めた。

「二人の要求はなんだ？　それによつて聞けるものと聞けないものがあるぜ」

確かに強盗神姫を探すにしても、一人よりは人数がいた方が都合がいい。実際は榊刑事を始め、警官もあの辺りを巡回するくらいはしているのだろうが、如何に訓練されてゐるとはいへ悪意を持って襲つてくる神姫を相手にするには若干頼りない。海外でも神姫を使ったテロ事件などが起きているが、そのための警備にはやはり神姫が使われ

るのが一般的だと聞いたこともある。神姫を相手にするには、神姫を出すのが最善手なのだ。その点、この二人の神姫なら強さは申し分ない。

「いや、こないだ花道とも話したんだけどさ。俺もなんて言うか、神姫を犯罪に使うのが許せないって言うか……そんな気になってきたんだよ」

「俺は元からだぜ、とつくに頭にきてるんだからよ」

どうやら花道に感化されたのは俺だけではなかったらしい。しかし、やはり危険が伴うのは事実だし、神姫を危険にさらす行動なのは間違いない。特に二人は年が明けたら公式の全国大会県予選が控えているはずだ。

「お前達の気持ちは分かったけどよ、神姫達はどうなんだよ。実際に危ない橋を渡るのは俺達じゃない。そのことを納得してるのか？」

俺は榊刑事に問いかけられたのと同じ質問をする。

「う……それは……」

「俺の所は俺がやるって言えば問題ないと思うぜ」

「そういうことを言ってるんじゃないんだ、花道。確かに神姫は俺達オーナーが言えば嫌とは言わないだろうさ。でも、神姫にだって意思はあるんだ。それを無視して無理やり危険なことをやらせるんじゃないか、神姫強盗の犯人と何も変わらないじゃないか」

「む……確かにそうだが……」

「とりあえずお前達は、今日の内にでもそれぞれの神姫と話してくるんだな。俺達のエゴに無理に付き合わせるわけにはいかない」

結局、その場はそれでお開きになった。俺としても力のある神姫を仲間に加えられないのは心細くはあるが、そこは譲れない。神姫をこの場に連れてきていない以上、話の進め様がないのだ。ただ、自分の神姫の協力が得られるならば、そのときは力を借りることは約束した。実際のところは、俺の方から頼んで協力をしてもらいたいくらいの気持ちなのだが、仕方ない。

正確に言えば俺の目的は警察に先んじて強盗神姫を取り押さえることだ。そうでなければ神姫は警察に証拠品として押収されてしま

い、その後は廃棄されてしまう。俺はそれを防ぎたい。そのためには、少しでも人手が必要なのは確かなのだ。

自我のある神姫がただ殺されてゆくのが嫌だなんて、我ながら偽善的な考えだと思う。第一、倫理プロテクトを外されているであろう神姫に、果たして自分の意思がどれほど残っているのかも疑問がある。それでも俺は、救いたいと思った。そこで手を伸ばさなければ、俺は一生後悔する。

明日になれば、日野と花道が手を貸してくれるかどうか、結果が出るだろう。その結果がどちらであつても、俺がやるべきことは変わらない。でも、俺の友人が俺と同じ考えが出来る人間だというのは少し嬉しかった。今日は何日かぶりに落ち着いた夕食を取れる。そのとき、シャウとアルにこの話をしてやろう。そんなことを考えていると、車内アナウンスが最寄り駅に着いたことを告げた。

翌々日の放課後。俺達三人は学校最寄の、駅前のハンバーガーショップにいた。

やはりと言うべきか、日野と花道の神姫も、強盗神姫を捕らえるというマスターの提案に反対はしなかったらしい。それを受けて、参加する神姫も含めて作戦会議を持つことになった。本来なら神姫の持ち込みは校則で禁じられているが、それぞれの鞆の中でケースに収められ、放課後まで待つてもらった。窮屈な思いをさせたが、早ければこの週末には事件は起こるのだ。それに間に合わせるためには急がねばならない。

注文もそこそこに、俺達は店の奥の、空いているテーブル席に陣取った。席には俺と日野、花道の三人。テーブルの上にはそれぞれシャウとアル、イーダ型のリリイ、アーク型の梅夜と飛鳥型の白雪が並んでいる。

「で、具体的にはどうするんよ」

向い合わせのテーブル席で、花道が尋ねる。作戦の立案は任せてある、とでも言いたげだ。

「まずは、役割分担だな。理由は分からないけど、強盗神姫は郵便ポストの傍で事件を起こしている。ここまではいいな？」

二人と神姫達がうなずく。本当のところは、それも分からない。だが、現場の写真から見て取れた共通項として、偶然と考えるのは不自然だ。今回は、郵便ポストの近くという仮定の上に立っている。それは本来ならば危険なことではあるのだが、十の内の七つである。もし仮定が外れていても、俺達の行動が空振りで終わるだけだし、そもそも強盗神姫が本当に現れるかどうかさえ確定ではないのだ。

「俺達がやらなきゃならないことは大きく三つ。まずは相手を見つけるところだが、これは俺達がそれぞれに別れて探すしかない。主に事件が起きてるY駅の西側を中心に、郵便ポストのある辺りをしらみ潰しにする」

「つつてもよー、いくら三人それぞれに探すとしたって、範囲は結構広

いぜ。徒歩で見回りするのはキツくねーか？」

「いや、Y 駅では市が観光客向けにレンタサイクルを貸し出している。今回はそれを使おうと思う」

探す側の数が増やせない以上、機動力で補うしかない。自転車ならば小回りも利くし、降りて置いていくのも簡単だ。

「続けるぞ。ふたつ目は、見つけたら速やかに警察に連絡することだ。これはとにかく連絡を密にして、見つけた奴が足止め担当、残る二グループが現場に向かいつつ通報、って形を取るのがベストかと思う」

警察も無能ではない。今回の件では、該当地区の巡回強化はしているだろう。俺が巻き込まれたときだって、あと五分足止め出来ていれば、榊刑事が来てくれたことになるのだ。そこまで都合よくはいかないだろうが、通報出来れば数分で警官が駆けつける体制は出来ているだろう。

「三つ目は逃がさないこと。理想としては取り押さえることなんだが、無理をする必要はない。今回の目的は強盗神姫を警察に引き渡すことだからな」

これは普段のバトルロンドと違い、互いの条件が異なるためだ。相手はその場から逃走しなければならぬが、俺達はそうではない。極端に言ってしまうえば俺達は負けてもいいのだ。足の片方も破壊して、その場から逃げられなくしてしまえばあとは警察に任せることが出来る。もつと言えば手がかりになる証拠を確保しさえすれば、逃げられたって構わない。

「まあ作戦と言っても、そんなに細かいことはないね。逃がさないように気をつけるだけで、後は時間を稼ぐだけだっていいんでしょ？」

「日野の言う通りだ。後は全員の携帯のGPS機能を使って、お互いに位置を確認出来るようにすることと、発見したらすぐ他のメンバーに連絡を入れることを徹底するくらいだな」

本音を言えば、強盗神姫に遭遇するのは俺がいい。日野の神姫はイーダ型のリリィだけで、強盗神姫と一対一で向かい合う必要が出てくるし、花道は熱くなると他に目が行かなくなる可能性がある。何より、二人の神姫は公式戦を控えているのだ。幾ら時間を稼ぐだけでも

いいとは言え、余計なリスクは背負わせたくない。

「とりあえずこんなところだけど、何か質問はあるか？」

「そうですね、相手の神姫の装備や動きなどを教えてもらえますかしら」

手を上げたのは日野の神姫、リリイだ。

「俺が見た限りではストラーフのレッグパーツとナイフ以外は、ヘッドバイザーくらいだったな。動きに関しては正直、よく分からない。ただ、逃げるとききの跳躍力はかなりのものだったから、いざ戦闘となったときも立体的に動いてくるんじゃないか、って程度だ」

「ほとんど何も分からないのと同じですわね。人目を避ける以上、相手はあまり大きな火器は使わないでしょうし」

まったくその通りだ。正直な話、実際に見たと言っても相手と戦ったとは言えない。相手としては逃げることを優先するだろうし、激しい戦闘にはならないということも充分考えられる。

「相手の神姫をよオ、ブツ壊しちまっちゃあマズいんだろう？」

花道の神姫、梅夜だ。

「そうだ。犯人を探すための証拠として警察に引き渡さなきゃならぬいし、そこまでやる必要はない。それに、もし戦闘になったとしても自分達の安全を守ることを最優先させてほしい」

「まだるっこしいな。ブツ壊してメモリだけ引っこ抜くんじゃダメなのかい？」

「さっきも言ったが、今回の目的は警察に証拠として引き渡すことだ。無理に破壊しなくてもいい。それだけリスクが上がるからな。それと、これは俺の考えだが、俺は出来たら強盗神姫を止めるだけじゃなく、救ってやりたいと思ってる。その意味でも、破壊は避けてほしい。もつとも、これは俺の考えだから賛成出来ないんなら、強制はしないが」

「へっ、ウチのアニキも甘っちょろいが、輪をかけて甘ちゃんかよ」
「梅夜」

花道が梅夜を睨み付ける。口ではそんなことを言うが、花道は俺の考えに賛成のはずだ。梅夜もそこはわきまえているだろう。

第一、神姫の武装でコアや頭部などの基幹部分を破壊するのは困難だ。バトルロンドはあくまでもホビーの範疇で、見た目の派手さと較べると破壊力はない。特に神姫の『命』に関わる部分は堅牢に作られていて、リアルバトルでも神姫がロストする事態はほとんどなくなっているはずだ。

その一方で、俺の目的を達成するためには、神姫を取り押さえて、確保する必要がある。警察が取り押さえてもいいが、強盗神姫自身を救うためには、いわば警察に恩を売る必要が出てくるのだ。単に協力をしただけでなく、出来れば実際に犯行に使われた神姫を取り押さえたという実績がほしい。が、それは俺の心の中にしまっておく。出来たら、俺の個人的な思いで、仲間の神姫にまで余計なリスクを負わせたくはない。

「一般の方が、巻き込まれた場合は？」
シャウが手を上げる。

「まずはその人の安全確保かな。とは言っても最終的にはそれぞれで臨機応変に動くしかないが」

これはマスター達の側で考えておくべきことだ。そもそもどういう状況で相手を発見出来るかがまったく分からない。見つけたときには既に他の人が襲われていることだって考えられるのだ。

「私達は二人ペアですから、一人が相手をしてもう一人が避難誘導したらいいですね」

「そうだな」

「そうすると俺だけはそういう状況に遭ったらちよつと面倒か……」

「お前ん所は飛べる装備もねーからな。いいんじやねーか、日野が見つけた場合は足止め専門、そうでなかったら通報係、ってことで」

それでいいかも知れない。日野は直情傾向の花道と違って、クレバーな戦い方を好む。リスクを排除して足止めに徹するとなれば、それなりの戦い方をするだろう。

その後は、個別の動きを確認する流れになった。白雪と梅夜は自分達の連携について話し、リリイは日野と細かな動きのパターンを打ち合わせている。その傍らで俺は地図を広げ、三人分の役割分担を書き

込む。当日はこの地図が命だ。今までの事件が起きた場所も同時に書き込んでいく。

作業と打ち合わせは三時間にも及び、終わったときには全員がそれなりに疲労を覚えていた。が、これはまだ準備作業に過ぎない。実際の戦いは、これから始まるのだ。

そして日曜日。作戦の日がやってきた。

日曜日、午後九時。

俺達三人は、Y駅の近くにあるハンバーガーショップに集まった。既にレンタサイクルの準備も整い、神姫もそれぞれが準備を済ませている。作戦といっても、やることはほとんど見回りと変わらない。それでもばくばくとハンバーガーを頬張る花道が羨ましくなる程度には緊張をしている。

「緊張してても、しょうがねーだろうがよ。出てこねー可能性だってあるんだぜ」

まったくその通りである。だが、だからといって同じように割り切れるとは限らない。その辺りは性格の差という奴だ。日野は日野で、地図を確認しながらコーヒーを飲んでい。同じ場所で事件が起きたことはないが、一応郵便ポストの位置はすべてチェックしてある。三人で分けても一人十箇所ちよつとずつ受け持つ計算になる。

「そろそろ時間だ。それぞれの担当場所に移動しようか」

日野が地図を片付けながら言う。時計は九時半を回っていた。「うっし、行くか」

花道に続いて席を立つ。店の外には十二月の風が冷たく吹き付けていた。俺はネックウオーマーを少し持ち上げ、自転車に跨る。

「それじゃ、また後で」

「見つけたらすぐ連絡な」

「お互いにな」

言葉を交わすと、三人はそれぞれの受け持ちに向かう。

誰が当たりを引くのか、ここからは運試しだ。

走り始めてから二十分ほど経つたろうか。三つ目の担当箇所に着し掛かったときに、短い悲鳴が聞こえた。自転車を立てかけ悲鳴の聞こえた方に入っていく。薄暗い路地裏に、若い女性が仰向けに転んでいる。神姫ケースを手に、駆けつける。違っていたら、それはそれでいい。

「助けて……」

女性は細い声で助けを求める。その肩には……。

「強盗神姫！」

その姿を確認し、ケースのロックを開封。ケースからシャウとアルが飛び出す。シャウが一気に加速し、距離を詰める。双剣、鬼姫を振るって女性の肩から神姫を弾き飛ばす。アルは弧を描き距離を開けつつも女性が逃げるのををフォローする位置に立つ。

「こっちへ」

手を取って立ち上がらせると、路地から押し出すようにして女性を逃がす。即座に携帯を取り出し、他の二人に連絡を入れる。相手の神姫はやはり逃げ腰だ。アルが牽制射撃をしつつ、シャウが退路を断つ動きを見せる。

「シャウ、アル、いいぞ、思いつきり行け」

俺が合図を出すと、アルの弾幕が姿を変える。意図的に弾幕の厚さを変えた、偏差射撃に切り替えたのだ。相手がそこに飛び込むとシャウが待ち受けるという構えだ。黒い神姫が壁を蹴って上空へ逃れようとするのを、サブアームで展開したジュダイクスで迎え撃つ。が、ジュダイクスがナイフと接した瞬間、嫌な音がした。ただ剣と剣が触れ合う音ではない。

「シャウ、流せ」

俺の声に、反射的に刃を払って受け流す。逃がさないようにアルの射撃が逃げ道を塞ぎ、それを嫌って黒い神姫は再び距離を取る。

「これは……」

ナイフを受けたジュダイクスには、刃に切れ目が入っていた。あのナイフはただの刃物ではないらしい。音から察するに、超音波カッターのようなものを流用しているのだろう。強化プラスチックで出来た市販の武装程度では、受け止めることもままならないようだ。

「ジュダイクスは盾に使って構わない。鬼姫ならばそのナイフとも渡り合えるはずだ」

素体の腕で構えた二振りの剣は俺が自分で作ったカスタム品だ。材質も市販品とは違い、鋼を使っている。いくら超音波カッターでも

そう簡単には切ることは出来ないはずだ。

シャウは都合四振りの剣を構え、黒い神姫と改めて向かい合う。バイザーのアイラインが赤く光った。

「邪魔ヲ、スルナ」

感情のこもらない声。そして跳躍。壁を蹴り、一息で彼我の距離を詰める。一閃。早い。手数では上回るはずのシャウを、尚速度で圧倒している。元々飛行装備に重量武器を扱うエスパディアは、空中でバランスをとるためのカウンターウエイトとして腕を振り回すことを余儀なくされることが多い。見た目よりも実際の攻撃に割ける手数は多くないのだ。それでも一刀で四刀と互角以上に渡り合う黒い神姫の技も、並みではない。加えて、半端に足を止めてしまったことが災いしている。決して機動力では劣らないはずの相手に振り回されているのだ。

「シャウ、動きを止めるな。アル、なんとか頭を押さえられないか？」

「やって出来ないことはないけど、一発限りだよ？」

「二度仕切り直さないと、シャウが保たん」

今はなんとか凌いでいるが、飛行装備に一撃でも食らったらお仕舞いだ。

「んじや、一発お見舞いしてやりますか！取って置きの奴、行くよー！」

声と共に全身の武装パーツがパージされ、空中で甲虫の姿を形取る。

「ロートケーファスラスト！」

赤いカブト虫となった武装が、唸りをあげて突進する。それは神姫にとっては巨大な鎚と同じだ。大質量の一撃に、黒い神姫はトンボを切って反転、ロートケーファを踏み台に、更に上空へ跳んで破壊鎚を軽く避ける。しかしその一瞬、シャウが体勢を立て直す。

「今だ、組み替えろ」

この狭い路地では速度よりも小回りの利くセッティングの方がいい。この組み替えのために専用のプログラムを作ったのだ。一瞬の

内にパーツの配置がいつもの速度重視のセットから、正当なエスパディアの武装に組み替えられる。上空に逃れた黒い神姫の更に上を取り、一撃。弾かれるように落ちてくるが、膝を使って着地の衝撃はうまく殺している。そこを狙って、真横からアルがアサルトライフルを撃ちながら、距離を詰める。ロートケーファも頭上から追撃の構えを見せる。何度目かの、跳躍。しかし今度は逃げるためでも、シャウに向かうためでもない。距離を詰めたアルに向かって突撃してきた。

咄嗟に射線の確保より、身を守るための構えを取る。大振りで横に薙いだナイフが、着剣されたアサルトライフルの銃身を二つに断ち切る。追撃の回し蹴り。巻き込まれながらも自分から跳んだのだろう、着地後回転してすぐ立ち上がる。更に追撃の構えを見せる神姫に、今度はシャウが割り込む。が、さつきまでの空中戦と違い、ここには足場がある。左右からの連撃を片方はナイフで、もう片方は膝を使って受け流す。そのまま爪先蹴り。爪先にもナイフが飛び出している。ジュダイクスで、止める。逆薙ぎの後ろ回し蹴り。これも鬼姫で受ける。更に追撃で向かってきたナイフをジュダイクスが受けたのは、偶然とも思えた。だから、次の一撃はかわせなかった。三連撃ではなく、四連撃。繰り出された足刀が、シャウのヘッドバイザーを直撃、体ごと蹴り飛ばす。

「アル、支援」

ロートケーファが再び突進。一方のアルには手持ちの武器がない。ロートケーファを組み上げるために武装のほとんどを取られてしまっている。しくじった。ロートケーファスラストは大技だ。隙のない状態で闇雲に繰り出して当たる技ではない。これなら手持ち火器のひとつでも予備を持たせておくべきだった。

「ロートケーファを戻して装備だ。シャウ、行けるか」

「……っ、はい！」

シャウは片側が砕けたヘッドバイザーを頭から振り落とす。地面を蹴り、地表すれすれを加速していく。が、そこはストラーフの土俵だ。突き出した剣は、回し蹴りで弾かれる。逆薙ぎ。今度はナイフが

受け止める。しかし止まらない。入れ換えるようにして二本のジユダイクスが追撃。しかし黒い神姫も動きを止めない。後ろに飛び退き、かわす。それを追うようにシャウが更に追撃。が、大きく飛び退いたかと思えば、壁を蹴って距離を詰めてくる。斬撃。辛うじて避けたシャウの頬に一筋傷が走る。寄ると思えば離れ、離れると思えば寄る。決して侮ってはいなかったはずだが、それでも尚黒い神姫は強い。相手の攻撃を、体ごと大きく避けて、距離を開ける。その距離を詰めようとしたところを、ようやく体勢を整えたアルの射撃が割って入る。

「強い……」

シャウが呟く。黒い神姫は逃げるつもりはないらしい。代わりに、赤いアイラインがこちらを睨んでいる。戦う気になつてくれたのは、こちらにとつては好都合だ。しかし、闇雲に打ち合つても切り崩すのは難しい。勿論、当初の目標を考えれば、この状況は最上と言えるだろうし、見方によっては既に勝つていても言える。だが、俺自身の目的を考えれば、今は相手に当てたための一手が足りない。せめて最初のように、空中戦に持ち込めれば話は違うのだが、足技をうまく織り込んでくる相手に地上戦では主導権を取りづらく、力比べでは不利だ。

「アル、一瞬でいい、あいつの動きを完全に止めることは出来るか」

「狙い撃てば出来ないことはないね。その代わり集中するよ？」

弾幕を張りながらでは出来ないということだ。

「シャウ、もう少し踏ん張れるか」

「言うまでもなく」

「よし、次が勝負だ。決め時はこっちで作る、それまで耐えてくれ」

「承知」

青と黒の影がぶつかり、離れ、またぶつかる。離れるたびに火花が散るように、激しく。動きを支援する砲火は飛ばない。アルは今、俺の指示した時を待っている。ナイフが閃く。それを、盾代わりにしたジユダイクスが受ける。その表面には、深い傷が幾筋も刻み込まれている二閃、三閃。互いに、力比べには持ち込まない。打ち付け、弾く。

目まぐるしく攻守は入れ替わり、一時として留まることはない。

緊迫した空気に胸を押しつぶされそうだ。まだその時は来ない。しかし、来るはずだ。今までの動きから見て、必ずやって来る。おそらく、アルもその時を狙っている。

青と黒の影は、離れ、ぶつかり、また離れる。その繰り返しの中で、狙っていた時は唐突に訪れた。黒い影の、跳躍。距離を詰めるシャウに向かい、壁を蹴る。

「アル、そこだ」

「オツケーマスター、いつけえーッ！」

黒い神姫の蹴ろうとした壁が爆ぜる。蹴り足が充分な力を伝えず、宙に放り出されたような格好になる。

「スキル発動、無銘：大顎！」

二つの刃が交差し、巨大な鋏を形作る。黒い神姫はくりりと宙を回転し、サバーカレグに遠心力を加えた踵落として迎え撃つ。鋏が鎚のような足を挟む。鋭い音が鳴り響いたのは一瞬だった。装甲ごと、フレームごと、一撃で左脚を断ち落とした。

決着のついた瞬間だった。

片足を失った黒い神姫は、それでも立ち上がろうとした。が、右の手が光弾に弾かれ、ナイフを取り落す。そのままうつ伏せに倒れた神姫を、シャウが鋏でアスファルトに縫い付けるように押さえ込む。このまま確保するにしても、まだ残った右脚には大振りのナイフが生えている。素手で押さえ込むにはあまりに危険だった。まずは完全に無力化しなくてはならない。俺は携帯端末から伸びるコードを、手早く神姫の背中にあるコネクタに接続、端末から停止コマンドを打ち込む。ここに至って、激しくもがいていた黒い神姫はようやくおとなしくなった。俺は、大きく息をついた。

「苦労様、シャウ、アル」

その言葉で、二人からも力が抜けるのが分かった。ここからは、俺の戦いだ。そう思考を切り替えた俺の後ろから、がやがやとした気配が近づいてきた。恐らく花道達か、警官がやって来たのだろう。

「ここからは、俺の戦いだ」

眩いた俺の声は、周囲の喧騒に飲まれていった。

翌週の日曜日。

俺はFront Line社の研究室があるというビルの一室にいた。約束の時間には少し早く到着してしまったようだ。出されたコーヒーは既に温くなっている。

強盗神姫を確保した後、すぐに警察はやってきた。本当に僅かな時間差で、俺は目標を達することが出来たのだ。制服警官の姿に混じって、榊刑事の姿もあった。

「いや、君の友人からの通報で駆けつけたんだがね。大活躍じゃあないか」

「ご期待に添えましたか」

「それ以上さ。それは犯人に繋がる手がかりとしては十二分だからね」

ハンカチにくるまれた黒い神姫は、俺の手の中にある。

「そのことなんですけど、榊刑事。捜査が終わった後この神姫は、どうなるんですか?」

「……どう、とは?」

一瞬、榊刑事の表情が動く。無言でその瞳を見つめると、観念したかのように口を開く。

「捜査資料といっても、これは違法な処置をされてることが明らかだからね。捜査終了後に、適切に処分されることになる」

適切に処分される。シャウの言った通りであるということか。

「榊刑事、お願いがあります。この神姫を処分するなら、俺が引き取りたいのですが」

本来、そんなことが許されるのかどうかは分からない。が、俺がこの黒い神姫を救うために出来ることはこれしか思い浮かばなかった。榊刑事は今度は表情を変えず、無言で名刺の裏に何やら書き、俺に渡ししてきた。

「ここではなんだ、場を改めて話そう。次の日曜に、その場所で。それまで、この子は預かっておくよ」

そして俺は名刺の裏に書かれた日時に、指定されたこの場所に来た。まさかその場所が神姫開発の最大手メーカーであるFront Line社の研究施設だとは思わなかったが、榊刑事に呼ばれてきたことを告げると、すんなりと通されてしまった。一体どんな伝手があるのだろうか。

「やあ、お待たせしたようで、申し訳ないね」

ぼんやりとそんなことを考えていると、扉が開いて榊刑事が現れた。横には白衣の研究員らしい人を連れてくる。

「呼び立てたようで、済まないね」

「いえ、こちらこそ、無理なお願いをしまして申し訳ないと思っております」

「あ、こちら研究員の菊川くん。Front Line社には捜査協力をお願いしていてね。今回も黒い神姫のメモリを洗ってもらうのに、手を貸していただいたんだ」

「どうも、菊川です」

さて、と呟きながら向かいの席に榊刑事が腰を下ろす。

「あ、菊川くん、僕もコーヒーもらっていい？」

「榊さん、ここを喫茶店かなんかと勘違いしてんじやないですか」

「いいからいいから、頼んだよ、ブラックでいいから」

文句を言いつつ、自分の椅子を戻しながら菊川さんが部屋を出ていく。

「さて、彼がいない間に本題に入ろうか」

やはりさつきのは、彼を立たせるための口実だったのだろう。もともと、押収した証拠品の横流し、ということになるのだろうかから、当然と言えば当然だ。下手を打てばそのまま告発されかねない。

「君から言われたストラーフの話だがね、結論から言えば、君に引き取ってもらうことは、可能だ。勿論出所については口外しないように頼むよ」

「じゃあ……」

「まあ慌てなさんな。出来るかどうかで言うなら、という話なんだから」

身を乗り出す俺を、窘めるように言う。条件があるのさ、と榊刑事は続けた。

「君には二回、チャンスをあげよう。キミの持てる力全てを使って、僕の神姫を倒せれば、キミの望み通り、件のストラップを君に渡そう」
「榊刑事の神姫を？」

「そう。まあ、試験みたいなものだと思うってくれ。要は違法な処理をされた神姫が万一暴走したとして、それを君が制圧出来るだけの力量を持っているんだ、と示してほしいわけさ」

元々が無茶なお願いだっただの。このくらいの条件がつくのは仕方ないだろう。榊刑事の言い分ももつともだ。チャンスが二回あるというのは解せないが、元よりどんな条件であっても挑むしかないのだ。

「バトルロンドで勝負、ということですか」

「まあ、正確にはバトルロンドじゃあない。この施設を貸してもらおうと思っただけ。まあ、堅苦しいことのない、何でもありのルールで」
バトルロンドではない、ということはリアルバトルだろうか。この規模の施設ならそのための設備があってもおかしくない。

「そういう条件で、どうかね？」

「結構です、お願いします」

即答か、と榊刑事は微笑む。しばし無言の空気が二人の間に流れる。

「コーヒー、持ってきましたよ、榊さん」

「ああ、ちょうど良いところに戻ってきた。早速で悪いんだけどテスト設備を使わせてもらいたいなんだが」

「今からですか？　せっかくコーヒー淹れてきたのに」

「まあいいからいいから。さ、行こうか」

エレベーターで移動した先には、大型のバトルフィールドがあった。普段はここでテストバトルや試作武器の実験が行われているのだろう。菊川さんが準備のためにやら走り回っている。

「アンジェリクス。支度はいいかい」

「ええ、シロウ。いつでも行けますよ」

部屋の中から姿を現したのは、二又の槍を持った騎士型だった。相手が入っているのは見ただけで分かる。身に付けている鎧もカスタム品だ。

「そつちは、そのエスパディアさんで勝負かい？」

「ええ、頼むぞ、シャウ」

「はい、主」

平然と答えてくれるシャウだが、ヘッドギアは壊されてしまったので、今回は着けていない。ジユダイクスにもいくつも傷が入ったままだし、シャウ自身も頬には傷が残っており、そこは小さく切ったマスクングテープで保護している。どれも戦闘自体には影響しないはずだが、戦う前から傷だらけだ。

「ひとつ、お手柔らかに頼むぜ」

特にそれを気にした風もなくそう言うと、榊刑事は反対側のゲートに回った。フィールドは特に何の変哲もない、障害物や起伏もない殺風景なフィールドだ。ゲートにシャウをセットし、フィールド内に送り込む。

試合開始のブザーが鳴る。同時にシャウが躍り出て、一気に加速する。騎士型の特徴は、その格闘能力の高さと防御性能の高さだが、同時に機動力はすべての神姫の中でも最低ランクだ。そのため、基本戦術は待ちに徹することが多い。しかも今回は、どちらも飛び道具の類いは持ち合わせていない。接敵しての格闘戦ならば、シャウはそうそう劣りはしない。機動力で優位を取りつつ、一撃離脱を図るのが今回の作戦だ。

「征きますー！」

四刀を振りかぶり高速で襲い掛かる。一息に彼我の距離が詰められる。

「伸びよ、長顎アントニオ」

螺旋に巻かれた槍が突き出されると同時に、その螺旋が緩み長さが伸びる。鋭い突きに伸びる勢いも加わり、高速で迫る。

「くっ……！」

サブアームを振った勢いに合わせてバーニアを吹かす。急激に機動を変え、それでも尚アンジェリクスに迫る。その刹那。アンジェリクスが素手の拳を突き出す。幾ら機動を変えて減速されたとはいえ、高速で迫る神姫は砲弾も同じだ。騎士型のアンジェリクスが、素手による格闘戦が得手とも思えない。が、その拳が触れるか触れないかの内に、シャウの機動が乱れた。何があったと思う間もなく、地面に墜ちる。

「なんだ、どうした、シャウ!？」

「答えられないさ。アンジェリクスのブラックアウトカーテンを喰らったらね」

「ブラックアウトカーテン……?！」

「そう、神姫の中枢部に強制停止信号を打ち込む装備だ。もつとも、今は神姫の整備・開発や警察なんかで資格を取らないと扱えないし、制御プログラムを入れてるだけでも公式のバトルには参加出来なくなるという代物だがね」

「再起動するまでに必要な時間は優に五分。それだけあれば制圧はたやすい」

アンジェリクスはそう言うと、手にしていた槍を構え直す。シャウは地に伏したままだ。試合開始十三秒。勝負はまさに一瞬でついでしまった。

「まあ、アンジェリクスの性能は初見殺しの塊だ。騎士型をベースにしていると言っても中身はフルカスタム、フレームからして神姫の性能の限界まで追求している。拳句に伸縮式の槍、長顎アントニオに暴走神姫鎮圧用のブラックアウトカーテンまで備えている。正直バトルロンドの延長で考えても、反則だな」

ぼさぼさの頭を掻きながら、榊刑事が言う。

「だがね。違法な神姫と戦うなら、これでも最低ラインだ。イリーガルな神姫は基礎性能も通常の神姫より遥かに高いし、武装もバトルロンドのそれからは考えられないほどの規格外。違法な処置をされた神姫を鎮圧する、つてのは並大抵のことじゃあないのさ」

榊刑事の言う通りだ。ゲームでありホビーであるバトルロンドの

原則から考えると、ブラックアウトカーテンの性能は明らかに過剰に過ぎる。触れただけで即相手を鎮圧出来る装備など、バトルのゲームバランスを崩すだけだ。それは明らかに違法な神姫や暴走する神姫を制圧するための、規格外の装備だった。

甘かった。悔しさが胸の中にこみ上げる。アンジェリクスは普通に戦っても相当に手強い神姫だろう。それと何でもありというルーで戦うのだ。どんなことが起こっても不思議ではないと想定するべきだった。バトルロンドの常識で測るべきではなかったのだ。翻つて、黒い神姫と戦ったあのときが、どれほど幸運に恵まれていたのかということにも気付かされた。

「これが本当にイリーガルな神姫との戦いであれば、あなたの神姫は破壊されていましたね」

アンジェリクスが言葉を続ける。俺ははつとした。そうだ。俺はどこかで、これを試合だと考えていた。バトルロンドの延長で、黒い神姫と戦うときほどの緊張感を持っていなかったことに気づかされた。最悪、シャウを失うことになるなんて意識はまったくなかったのだ。

「さて、どうするね？すぐに二回目を始めても、こちらとしては構わないが……少し考える時間もいるかな？」

「そうですね、お願いします」

考える、以前の問題だ。とにかく意識を切り替えなければならぬ。これは、試合とは違うのだと。黒い神姫と戦ったときのように、負けられない戦いなのだ。

「ふむ、それじゃあ、そうだな。一時間くらい間をおこうか。菊川くん、その間にコーヒー淹れてもらっていいかね？」

「……さつき飲まなかったじゃないですか」

「それと、作戦会議が必要なら、さつきの部屋を使うといい。その他には使える場所もないだろうしな。菊川くん、構わないよね？」

「好きにしてください。まったくもう、勝手なんだから」

未だ再起動の終わらないシャウを回収すると、俺は無言でエレベーターホールへと向かった。何が、ここからは俺の戦いだ。胸の中で、

俺は自分自身に毒づいた。

「再起動完了、始動します」

自動音声が流れて、シャウが瞳を開く。再起動は無事終わったよう
で、少し安心する。

「私、どうして……確か、バトルフィールドでアンジェリクスさんに向
かっていった……」

「そのあと、神姫を強制的に動けなくする攻撃を喰らった。俺の作戦
ミス、いや、考えが足らなかつたせいだ。済まない」

俺はシャウに向かって頭を下げる。

「そんな！ 頭を上げてください！」

「相手の想定レベルを低く見すぎていた。それ以上に、負けたらどう
なるかということに、あまりに無自覚なまま勝負に挑んでいた。俺は
あの黒い神姫を直接倒せれば、後は俺がどうにかすることだと、自惚
れていた。戦うのは俺じゃないのにな」

しばしの沈黙が場を支配する。

「それでも、望みが絶たれたわけではないのですね？」

「ああ、榊刑事が何を考えているかは分からないが、俺に与えられた
チャンスは二回だ。もう一度、アンジェリクスに挑戦することは出来
る」

しかし、アンジェリクスは近接戦闘で張り合うにはあまりに危険な
相手だ。中距離には伸びる槍、長顎アントニオがあり、それを掻い
潜つてもブラックアウトカーテンがある。高速で飛行するシャウの
動きに拳を合わせてこれくらいだ。単純な一撃離脱では通じない
可能性が高い。かと言って触れられてはいけない相手に密着距離で
戦うというのはあまりに無謀だ。

「策はあるのですか？」

「ある。なりふり構わない策だが、今回も俺達は挑戦者だ。どんな手
段でも、選んではいけない」

一時間後、俺はバトルフィールドのある部屋に戻ってきた。

「お、いい顔になってるな。次はないぜ？」

「ええ、俺もそのつもりです。始める前に、ルールの確認をしていいですか」

「確認するまでもないと思うがね。どちらかが動けなくなったり、負けを認めれば勝負あり、その他は何でもあり、さ」

「何でもあり。その上で、俺の持てる力は全部使ってもいいんですよ」

俺の言葉の含む意味に気づいたのか、榊刑事が微笑む。

「構わないとも。君の持てる力を全部使って、アンジェリクスを倒せるかい？」

「ええ、倒してみせます。俺の神姫達で」

ケースから出てきたのは、シャウト、アルの二人。どちらもフル装備だ。

「構いませんよね。さっきのルールには触れてないと思いますが」

「ああ、構わないとも。アンジェリクス、準備は出来ているな？」

「私はいつでも構いませんよ、シロウ。それでは始めましょうか」

そう言うと、率先してエントリーの支度を始める。アンジェリクスの手には、一時間前の勝負と変わらず長槍、長顎アントニオが握られているのみだ。他に武器を持つつもりはないらしい。だが、見た目が当てにならないことは既に学習済みだ。そうでなくても、どんなスキルが飛び出してくるか分からない。策は既に伝えてあるが、注意を払うに越したことはない。エントリーゲートに二人をセットし、フィールドに送り込む手はずを整える。

「アルキオネ、私はあなたが嫌いです」

「なんだよ、急に。でも奇遇だね、ボクもだよ」

「でも、今だけは、手を貸してください。主のために」

「ふん……言われなくなっただってそのつもりだったの」

「二人共、勝つぞ」

ボタンを押し、二人がフィールドにエントリーすると、試合開始のブザーが鳴る。こちらの強みは機動力だ。シャウトが一気に距離を詰める。

「さつき同様の呐喊ですか。あまりに無策」

正確に打ち込まれる槍の攻撃を、双剣を盾にして受け流す。しかし今度の攻め手は一人ではない。シャウの背後から無数の光弾がアンジェリクスに迫る。

「支援があるうと、距離があるうと、私の槍は逃がさない」

長顎アントニオが大きく振られる。それに触れた光弾がことごとく弾け散った。一撃の重みが尋常ではない。今攻撃に使われたアクティオンやアトラスのビームも、決して低い威力のものではない。それを一撃でかき消してしまうアンジェリクスの腕力が異常なのだ。

『アル、機動力ではこちらが上だ。構わず撃ち込め』

「りよーかい、どんどんいくよー!」

銃弾、ミサイル、光弾と、次々に撃ち込まれるがアンジェリクスはまったく意に介さない。あまりに射撃を無視するので、シャウも思い切って突っ込むことが出来ない。牽制をしつつ切り込む機会を狙っているが、相手もシャウに狙いを絞っているようだ。蜂のようにアンジェリクスの周りを飛び回るが、足を止めさせる程度の効果しかない。

「ふむ、雨滴のようなものとは言え、煩わしいですね。切り払うとしましょう。シロウ、行きますよ」

『おう、やっちゃってくれ』

足を止め、槍を構え直す。

「スキル発動、『最果てにて輝ける槍』」

長顎アントニオが不気味に輝く。次の瞬間、横に薙ぎ払われた槍の一撃が衝撃波を生み出し、アルの射撃を吹き散らす。あれだけの格闘性能を持ちながら、スキルで遠距離にも対応出来るのか。オリジナルのスキルが来るだろうとは思ったが、威力も射程も想像より上だ。

『シャウ、アル、大丈夫か』

「問題ありません、掠めただけです」

「こっちも大丈夫、まだいけるよ」

どちらも距離があつた分、耐えられた。そう思わされる一撃だった。あんな強力なスキルを制限なしに撃てるのだろうか。そうだと

するとシャウが牽制し、遠距離からアルの射撃で勝負をかけるという第一の策は早くも潰えたことになる。

『射撃で切り崩せればと思っただけど、そこまで甘い相手じゃないか』
『二の手に切り替えるよ、マスター！』

言うが早いのか、アルの全身から武装パーツが弾け飛ぶ。それに合わせ、シャウの方も武装を解く。

「ブラウヒルシュ！」

「ロートケーファ！」

二人の武装パーツがパージされ、赤いカブトムシと青いクワガタムシに組み替えられる。青の影と赤の影。二つの影が同時にアンジェリクスに迫る。

「これしきッ！」

ブラウヒルシュもロートケーファも、神姫にとっては巨大な鎚も同じだ。アンジェリクスは槍の石突きを地に立てると、迫り来る鉄槌をなんと素手で受け止める。ブラウヒルシュもロートケーファも、並みの神姫なら一撃で吹き飛ばせるだけの威力は充分に備えている。それを片手で受け止めるなど、なるほどアンジェリクスは性能的にも規格外の能力を誇っているらしい。だが、流石に背後にまで手は回らない。そこにシャウが猛然と切りかかり、鬼姫の一撃が背に入る。さらにアルの撃ち込むバウドリーが追い討ちをかける。が、どちらも決定的なダメージは与えられていない。それどころか、ブラウヒルシュとロートケーファを押し返し始めている。

『規格外の性能って、ここまでかよ……』

「おおおッ！」

叫ぶアンジェリクス。ロートケーファの力を逸らせ、自由になった一瞬でブラウヒルシュに全力を向ける。両手で角を掴み、振り回してロートケーファに投げつける。その間もアルはバウドリーを撃ち続けてはいるが、口径の小さい拳銃では、ほぼ全くダメージが通らない。

「数を出せば勝てると思いましたが？ この程度では私の装甲を抜くことは出来ませんよ」

如何にフレイムから選定しているとはいえ、この差はあまりに圧倒的だ。防御力だけでなく、力比べでも及ぶべくもない。まったくでたらめな性能だ。

「主、三の手、征きます」

『頼む、斬撃でも足止め程度のダメージしかない。もっと大きい火力をぶつけるしかない』

「ユーハブコントロール！」

「アイハブコントロール！」

ブラウヒルシュとロートケーファが武装パーツに分解し、別の形に組みあがる。二匹の甲虫は姿を消し、ひとつの巨人の姿をとった。その右手には、両刃の大剣が握られている。

「行けえ、ヘラクレス！」

リノケロスとジユダイクスが合わさった大剣、ギラファブレイドが上段から振り下ろされる。並の神姫であれば一撃で叩き潰せるほどのそれを、長槍の腹で受け止める。

「合体武装ッ……！」

『そのまま押さえ込め。押さえ込めさえすれば……』

剣を受けた槍がきしむほどの力で、アンジェリクスを押しさえ込む。動きを縛った状態ならば少なくともブラツクアウトカーテンは繰り出せない。後は、あの装甲を削り切るだけだ。

「行くよ！ スキル解放！」

「こちらも、参ります！」

「ブラストホーンラッシュ！」

「無銘：大顎！」

距離を詰めつつ銃を乱射し接近するアルに、大鋏を展開するシャウ。鋏となった鬼姫で背後を切り込み、銃底で腹を殴りつける。くの字に曲がったアンジェリクスの体ではヘラクレスの剣を支え続けることが出来ず、床に叩きつけられる。

「やった!？」

「気を抜かないで。まだ来ます」

ヘラクレスを前衛に、いったん距離をとる。どの道、距離の選択権

はごちらにあるのだ。彼我の距離はいつでも詰められる。

『それよりも、起抜けの一撃に警戒を。またあの広範囲スキルを撃つてこられたら、こっちの装甲はほとんどないからね』

ヘラクレスが武装パーツのほぼすべてを使って構成されている以上、二人の防御はほとんど丸裸だ。ここに『最果てにて輝ける槍』が撃ち込まれたら、目も当てられない。倒れたアンジェリクスがゆっくりと立ち上がる。ヘラクレスの打撃とスキルの二連撃でも決定打にはならなかったらしい。ここまで来ると、もはや規格外なんて言葉も生ぬるく感じてしまう。

「今のは少し効きました。ただの連携ではなく、支援を絡め、合体武装を駆使してくるとは。装備型のそれと違い、独立型のヘラクレスは操作が難しいと聞きましたが」

装備型の真鬼王と違い、独立して動くヘラクレスの操作は確かに難しい。特に、シャウはブラウヒルシュを一機操るのが精々で、訓練ではヘラクレスの操作に集中してようやくだった。そのため、今回はアールが主体で操作した。今まではシャウとの連携がうまく行かず、黒い神姫との戦いでも使えなかった。言わば取って置きの奥の手だったのだ。

「あれでも倒れないか……」

「本当に、何かの冗談のような耐久力ですね……」

裾の埃を払うような仕草をして、改めてこちらに向かって構え直すアンジェリクスを前に、二人の緊張が高まる。

「さて、ここからが本番です。行きますよ、シロウ……」

『あ、サレンダーで』

「……」

「……」

「……」

『……』

榊刑事の突然の降参宣言に、俺も、フィールド内にいる三人も、言葉を失った。何故だ。試合展開はアンジェリクスに有利だし、こちらの攻撃はほとんど効果がない。それなのに榊刑事は自ら敗北を宣言

してしまった。何かの罠かと一瞬いぶかしんだが、システムが勝敗を告げる。戦闘時間十五分三十秒、間違いなく、俺達の勝ちだった。

「いやあ、流石に強いねえ。おじさん形無しだよ」

「何を言ってるんですか、こっちの最大火力を受けても平気だったくせに。あのまま続けられてたら、削り切れてたかどうか分かりませんでしたよ」

「いいんだよ、元々の性能が違い過ぎるんだから。それに、こっちとしては片膝でも着いたら辞め時だなあとは思ってたしね。なあ、アンジエリクス」

「私は初めて聞きましたけどね、そのこと」

アンジエリクスは突然のサレンダーに納得がいていないのか、不満顔だ。

「まあそう言わないで。ほら、最初の条件的にはイリーガルな神姫を制圧出来るだけの力を見せてほしい、ってことだったじゃあないか。アンジエリクス、君はそこいらのイリーガルよりよほど強いだろう？ その君に地を舐めさせたんだ。これは、大したことじゃあないか」

目的から考えたら、確かにそうだ。違法な処置、と一言で言ってもその程度はピンキリだ。そのすべてがアンジエリクスのように基礎の基礎から戦闘特化、というわけではない。

翻って考えると、そもそも今回の試験自体が怪しい。なぜ二回もチャンスがあったのか。なぜ二対一でも試験が続いたのか。今にして思えば、一連の内容は、見た目からは判断出来ない武装や素体強度を見せ付けた、いわば「イリーガルと戦うとはこういうことだ」という格好のお手本のようにさえ見える。

「榊刑事、もしかして、最初からこの展開を狙ってませんでしたか？」

「さて、何のことやら」

「榊さん、半年くらい前に来た人にもそんなこと言ってませんでしたっけねえ？」

「さてさて、最近物忘れが激しくてなあ」

こんなことをちよくちよくやっているのだろうか。大分前から薄々感じてはいたが、やはり食えない人だ。

「まあ、何はともあれ、合格だよ。あれだけのことが出来れば、生半可なイリーガルには負けまいだろう」

正直まだ事態が飲み込み切れないところはあるが、当初の目的は果たせたようだ。俺の神姫達は、認められるだけの力を示してみせた。過程はどうあれ、それは確からしい。

「件のストラーフだが、引き渡すにしても今すぐ、つてわけにはいかない。それに関してはこちらからまた連絡を入れるよ。今日はせっかくここまで来たんだ、君の神姫も一度ちゃんとメンテナンスしてもらおうといい。構わないよねえ、菊川くん？」

「白々しい、元からそのつもりだったんでしように。ええ、いいですよ、そう言われると思って支度はしてあります」

それは正直助かる。シャウの頬には黒い神姫と戦ったときの傷がまだ残っている。小さく切ったマスクングテープで保護はしてあるし、あつても支障はないのだろうが、俺は気にしてしまう。第一、如何に神姫とはいえ女の子の顔に傷が残っているのはやはりよろしくない。

「すいません、よろしくお願いします」

「はいはい、つと。君も災難だね。この人に目をつけられたら、ただじゃ済まないぜ」

「何を人聞きの悪い。これでも公僕だぞ？」

「普通、公務員はこんなこと言われないんですけどね。まあいいですけど」

そう言うと、菊川さんはシャウとアルを手に乗せ、さっさと部屋を出ていった。

「さて、それじゃあ戻ろうか。君には伝えておかなきゃあならないこともあるしね」

やはりメンテナンス云々は人払いの口実だったらしい。勿論、そうであったとしても本職に診てもらおう機会を得られるのはこちらとし

てもありがたいのだが。

「例の、ストラーフのことですか」

俺の言葉に、榊刑事は笑みを浮かべたまま頷いた。

年の暮れも迫ったある日。俺は喫茶「COL」にいた。マスターの淹れてくれたコーヒーを飲みながら、新聞に目を通す。地域ニュースの欄に載っていたその記事は、大きいとは言えないが、小さい扱いでもなかった。

『神姫を使った強盗犯、逮捕』

記事によると、郵便局員であつた犯人は、神姫を使って深夜に通行人を襲い、金品を奪つたあと自身の担当する区域の郵便ポスト内に身を潜ませた。これを翌朝、通常の郵便物回収に紛れて自分で回収するという方法で犯行を重ねていたらしい。相手にしてみれば逃げ込むポストは担当区域内ならどこでもよかつたわけで、ただ散発する犯行現場からこのこと実を洗い出すのは難しかったことだろう。その意味では盗品の回収ルートを押さえることは事実上ほぼ不可能で、犯行現場で神姫を押さえることしか犯人を洗い出すことは出来なかつた。

俺は新聞を閉じ、コーヒーをすすつた。相変わらず、この店にはゆつたりとした時間が流れている。

「よお、お手柄刑事のぐに到着だ」

ドアチャイムも無粋な電子音ではなく、昔ながらのドアベルだ。扉を潜つて現れたのは、榊刑事だった。

「やあ、お待たせしたかな」

「時間通りですよ。今日は俺の方が早く伺つただけですから」

一番奥の席から、榊刑事を迎える。相変わらず店内には他に客はいないが、用心に越したことはない。

「犯人は起訴されたよ。自供もしているし、証拠も揃つてる。特に今回はMMS保護法や、国際MMS保護条約を含む、いくつもの法律や条例に触れている、悪質な事件だ。まあ暫くは出てこられないだろうな」

「ええ、ニュースや新聞で見ました。ですので、俺が知りたいのはその先の話です」

焦らない焦らない、と榊刑事は微笑み、マスターにコーヒーを注文

した。マスターの方も用意をしていたのか、すぐに持つてきてくれる。

「例のストラーフ……個体名はセロというようだが、人間に危害を加えてはならないという基本プログラムごとAIを書き換えてあった。自己判断能力も無くし、マスターの忠実な操り人形になるように、な」
コーヒーを一口飲む。俺は黙ったまま次の言葉を待った。

「そうなってしまうと、元々の人格プログラムを復旧するのはほぼ不可能だ。正常な状態に戻すためには、一度リセットをかけるしかない。もつとも、そうしてしまえば元々の人格とは、似て非なる別人格になる、というだけ。セロ自身を救えたかという点、これはもう本人に聞いてみるしかない」

そう言うと、榊刑事は鞆の中から緩衝材の包みを取り出した。

「約束通り、セロは君に引き渡そう。どうなればセロが救えたことになるのか、僕には分からない。君が納得するような形に出来るよう、特に処置はしていない。やったのは特殊素材に変えられていた外装の交換だけだ」

半透明の包みから見えるセロの体は、普通のストラーフと同じカラーリングになっていた。

「あとは、先日話した内容を踏まえた上で、どうするか君が判断してくれ」

「AIITSD……どの程度まで出ているんですか？」

AIITSDとは、人工知能外傷後ストレス障害と言われるもので、高度な負荷がかかった人工知能が、何らかの機能不全や障害を起こすものだ。今回のように傀儡として人間を傷つけたストレスは、例えば断片的にでも記憶として残っていたら何らかの障害を残すだろうと、アンジェリクスを倒した日に榊刑事から伝えられていた。

「それはこれから先、どうするかにもよるな。既にセロの自我は破壊されていて、修復は不可能だ。そのままにするのなら、操り手が変わるだけにすぎない。だが、リセットして人格プログラムを再構築するのなら、消したはずの記憶がどの程度影響を残すのか、これはやってみないと分からない」

榊刑事はいつになく真剣な表情で話している。

「君は、この子を救いたい、と言った。自我を失い、心を壊され、そんな神姫をどうやって救うつもりだね」

「はい、俺の神姫達とも話したのですが、一度リセットをかけて、何も知らないただの神姫としてウチに迎えようと思っっています」

ほう、と榊刑事は呟く。その表情に、次の言葉を待たれているように思えた。

「俺にも、どういう状態が神姫にとつての幸せなのか、分かりませんが、でも、出来たら事件の記憶なんてすべて忘れて、まっさらな状態になつてくれたら、と思います。神姫に罪はありませんから」

実際に人を傷つけたり、金品を奪ったのは間違いなく目の前の神姫、セロだ。しかし、それは無理やりそうさせられていたということだし、オーナーこそが罪を問われるべき問題だと思う。

「そうであっても、A I T S Dを患う可能性は否定出来ない。それでもいいんだね？」

「ええ。勿論何かあるなら、出来る限り支えたいと思っっています」「そうか」

榊刑事がコーヒーに口をつける。俺の思うところはそこだ。神姫は人間のパートナーだ。だからこそ神姫の善し悪しはそのオーナーによるところが大きい。神姫が悪性ならば、そのオーナーの性が悪なのだ。勿論神姫と対等な関係を築いたり、神姫に支えられた、救われた人間だつて多くいる。俺は、そんな神姫を助きたい。目の前で苦しむ神姫がいたら、救つてやりたい。それが今回は、セロというストライフだった。

「これは、独り言なんだが……」

ゆつくりと榊刑事が再び口を開く。

「Front Lineの研究者に、A I T S Dの研究をしている男がいてね。確か研究症例を欲しがっていたなあ。まあ昨今は研究費用なんて雀の涙みたいなもんだし、見返りは期待出来ないだろうけど、何かあつたら声をかけてやると喜ぶかもしれないなあ」

「菊川さんのことですか？」

「さあねえ、これは独り言だからなあ。そんな名前だったような気もするし、違うような気もするし……」

榊刑事はそんなことを言っているが、おそらくはそのつもりで菊川さんと引き合わせてくれたのだろう。食えない刑事ではあるが、その話自体はありがたい。

「じゃあ、質問を変えます。榊刑事は、何でそこまでしてくれるんですか？」

「そうだなあ、何故だろう。多分、おじさんに近い何かを、君が持っているからじゃあないかな」

「近い何か、ですか」

「ああ。君は自分自身を懸けて、他の神姫を救いたいと言った。その心意気を感じるところがあった。まあそういうことにでもしておいてくれよ」

「そうですか、それならそういうことにしておきます」

「おや、追求しないのかい？」

「ええ、多分、それ以上は言つもりがないでしょう？」

榊刑事の表情が緩む。

「そうしてくれるとありがたいね。今日はもう行くのかい？」

「ええ、この子を起こしてやりたいですし、シャウ達も待っていますから」

受け取った包みを鞆の中にしまい、席を立つ。街の雑踏が俺を迎える。今日の内にはストラーフは起動出来るだろう。名前をつけてやらなくては。俺は頭の中で、ストラーフに合う名前を考え始めた。

「行くツス！ 姉さん！ 今度こそ一本頂くツスよ！」

「甘い、そんな大振りでは、まだまだ！」

ジレーザロケットハンマーの一撃を、サブアームで展開したジュダイクスが受ける。その力を受け流し、鬼姫の一撃が入る。

「うぎゃああツス！」

「これで二十本目ですね、メサルティム。あなたの持ち味は力なのでから、それをただ振り回すだけでなく、当てるための方策を身に付け

なさい。それが出来ない内は、私から一本取るなんて、出来ませんよ」
「くうううっ！ もう一本、お願いするツス！」

バーチャルのトレーニングモードで、シャウが熱心にストラーフに稽古をつけている。

ストラーフが起動してから一月が過ぎた。セロと呼ばれたストラーフは、メサルティムと名づけた。元々の性格がそうだったのか、やたらと熱苦しい性格で、シャウのことを姉さんと慕っている。

「よくやるねー、二人共。もう少しゆるゆると生きること覚えて方がいいのにさー」

「アルはきつと、もう少し動くことを覚えた方がいい、と思われてるんだろう。お互い様さ」

一人神姫が増えても、ウチの中は相変わらずだ。シャウは新しく出来た妹分と訓練に精を出し、アルは変わらず特撮を見ながらだるだるとしている。ミーシャも今のところは元気で、心配されたAITS Dは表面には出てきていない。

「さあ、私から一本取れないようでは、いつまでも公式バトルには参加出来ませんよ！」

「くっそおおー！ 負けねツスよー！」

画面の中では、ミーシャは左手に持ったモーニングスターを振り回しながら突撃している。どうにも直情傾向で、駆け引きなどは縁遠い。これはこれで、ひとつ強みを見つけて、自分の優位を押し付ける戦い方を身に付ければそれなりにはなるだろうが、それはまだ先の話だろう。

「ところでマスター。さつき携帯に榊サンから連絡来てたよ」

「……またか」

あれ以来、榊刑事はたまに連絡を寄こす。その内容は、大概録でもないことが起こっているときで、警察だけでは解決出来ないときだ。一般市民を巻き込むことが出来ないなどと、どの口で言っていたのかと思う。

「シャウ、ミーシャ、適当なところで切り上げてくれ。出かけるぞ」

インカムマイクをつまんで位置を直しながら、二人に告げる。まっ

たく、忙しいことだ。しかし、こうなつてひとつ、いいと思うことがないでもない。苦しんでいる神姫に手を差し伸べることが出来る。勿論、それは俺の自己満足に過ぎない。だが、今はそれで充分だ。その自己満足に、俺は自分自身を懸けることが出来る。

「主砲のビームが空を薙ぐ。足を大きく左右に振って、それにバーニアを合わせる。光の筋が体を掠めるように通り過ぎて行く。」

『その調子だ。ワイトウルースの粒子砲は取り回しは良くないけど威力は高い。直撃はもらわないように注意して』

「承知ー」

元々ワイトウルースの粒子砲は対空攻撃には不向きだ。加速。一息に相手との距離が縮んでいく。接近を嫌って、ラピッドランチャーとルインM21が弾幕を形成する。が、鬼姫とジユダイクスを盾に、火線をつつ切る。時折飛んでくるインフェルノキャノンにだけ注意を払えばいい。

「こつちに来ないでくださいーい！」

相手の声は悲鳴にも似た響きだ。が、構わず一気に飛び込んでいく。手を伸ばせば、そこはもう私の間合いだ。薙ぎ払うように鬼姫を振るえば、インフェルノキャノンは火を吹いて爆発する。その爆風に乗って、急上昇。すぐにループして、接敵する。二刀を揃えて、上段から振り下ろす。その一撃で、勝負はついた。

『IP シャウラ WIN』

バーチャルの空に、勝者として私の名前が表示された。

よく晴れた空に、桜の花びらが散っている。夕日を受けた花びらは、赤い光を放っているように見えた。

あの事件から四ヶ月。季節は春になっていた。が、年度が変わっても俺達の生活に大きな変化はない。強いて言うなら、一応受験を控えた身として、勉強に充てる時間が増えたことと、榊刑事から譲り受けたストラップをサブ神姫として鍛える時間が増えたこと、くらいだろうか。勿論、シャウの鍛練も欠かしていない。今日のワイトウルース戦も見事だった。

「相手に恵まれましたね。重砲撃装備の神姫には、やはり電撃的に勝負をかけた方がいい」

「まあ、接近戦になれば砲撃装備は重りにしかならないからね。それにしたってここのところ、勝率が良くなってるよ」

「こんなところで歩みを止めるわけにはいきませんか」

なんとも真面目なことだ。まあ気持ちは分かる。このところ勝ち星を稼いでお陰で、そろそろひとつ上のセカンドリーグへの挑戦権が得られそうなのだ。セカンドリーグの真ん中辺りまでいくと、花道や日野と肩を並べるくらいだと自惚れられる。もっとも、セカンドリーグに上がればそこは今まで以上にバトルに様々なものを賭けたプレイヤー達がいる。そう簡単には勝ち進めないだろう。

「ご主人ー、そろそろ自分もデビュー、ってわけにはいかないツスカねー……」

「メサルタイム、貴女は私から一本取るまでデビューはしない、と自分から言ったではありませんか」

「うう……そうなんスけど、このままじゃ姉さんにどんどん離されていく気しかしないツス……」

鞆の中からミーシャが這い出してきて話に加わる。

あの事件の後俺のところに来ることになったストラーフ型には、メサルタイムと名づけた。バトルにも強い興味を持つてはいるのだが、起動早々に自らが姉と慕うシャウに対して「トレーニングで一本取って、自分の強さを見てもらってからデビューするツス！」と豪語し、以来シャウに負け続けて今に至る。

「そんなこと言ってもなあ。ミーシャは飛行タイプの相手にも当てられるようにならないと、結局キツくなると思うよう？」

「ううう……自分、そういう細かいのは苦手ツス……もっと！ズドーンといって！ バーンと当てて！ ドカーンとやっつけるのが好みツス！」

「その、当てることが出来なくて、一本が取れないのではありませんか」

「……返す言葉もねツス」

ミーシャはしゅんとうなだれる。ミーシャは一応ハンドガンも持つてはいるが、それはあくまで間合いの調節のためのサブ兵装であ

り、相手を倒し切るためのものではない。主力はあくまでもチーグルサブアームで扱うジレーザロケットハンマーとモーニングスターだ。もう少し立体的に戦う術を持たなければ、先に進むのは難しいだろう。そうは言っても、正直なところ、デビューした頃のシャウよりは今のミーシャの方が強いだろうと思っただけはいるが、それは黙っておくことにする。

「早く私から一本取れるように精進するのですね」

そう言っただけで顔を赤くするシャウに苦笑する。ミーシャに対してはどこまでもお姉さんを気取るつもりらしい。

「姉さんはすぐセカンドリーグに上がるつもりッスか？」

「そうですね。可能な限り早く上に挑戦したくはありますが……主の準備の方が間に合えば、ですね」

「まあ、そうだね。今のペースだと順調なら五月の大会あたりで昇格出来るかな。その頃ならまだ余裕は作れるはずだし」

サードリーグはほぼすべての公式試合がバーチャルで行われている。準備と言ってもするべきことは日々のパフォーマンスを維持するくらいのもので、特別にするべきことは何もない。それくらいならば受験勉強の合間を縫って羽を伸ばすことも出来るだろう。

「……姉さん、帰ったらすぐ、一本お願いするッス。このままじゃどんどん離されていく気しかないッス」

「そんな平常心を欠いた心地で挑んで、一本取れるつもりでいるのですか。まあ、稽古は受けて立ちますが」

『Winner 1P』

「また負けたッス……」

「またやってるっすかー。よくやるっすなー、本当にー」

頭を垂れるミーシャを茶化すように、アルが声をかけている。あれで本人は慰めているつもりだそうだから、声をかけられる方はたまらないだろうと思う。

「それでも良くなつてはきていますよ。途中の打ち合いでは小さく素早く立ち回ることが出来ていましたし、跳躍や壁蹴りで立体的に動く

ことも出来ていました。もともと、勝負を動かそうという気持ちが入ると大振りになって、攻め手が単調になるところはまだまだ課題ですけれど」

シャウの評価は的確だ。シャウ自身、自分のバトルが終わるところやって課題の評価を欠かさなかったためでもあるが、こうやって指導する側に回っても適役だ。もともと、実戦中はどう見ても鬼教官のそれなのだが。

「後は立体的に動くときには充分に気をつけないと。空中では姿勢や勢いを変えることが出来ないから、逆にそこを突かれると簡単に逆転されちゃうからね。特に飛行型を相手にするときにはそこを注意かな」

「ボクみたいに、遠距離武装をガッツリ積んで、つてわけにはいかない？」

「まあ、本人の適正や好みもあるからなあ。ミーシャはストラーフだから、射撃武器にも適正がないとは思わないけど」

ミーシャの好みはどう見ても一発の威力がある大技系だ。サブアームによる格闘戦も出来なくはないが、訓練している技はプロレス系。この間は訓練でネイキッド相手にジャーマンスープレックスを決めていた。

「だって、一撃でドカーン！ つてやる方がキモチイイじゃないツスカ……」

ストラーフの特徴はパワーだ。一番古い型でありながら、素体状態でのパワー比べなら最新型に至るまでのどの神姫と較べても遜色はない。そのパワーを最大限に活かす方法として、その論は間違いではないが、如何せん大味なのだ。一撃の攻撃力に懸けるなら、それ以上にその一撃を当てるための方策が大切になる。

「そういうえばミーシャ、明日は毎月の定期メンテの日だよ」

「うーっす……ご主人、定期メンテってこんな頻繁にやるものなんスか？ ひと月に一度つて、結構な頻度だと思っすけど……」

「そうは言ってもね。菊川さんは技師としては一流だし、申し訳ないけどミーシャはお古でウチに来たってこともあるし。正直アフター

フォローがちゃんとしてるってのはありがたいことだしね」

定期メンテというのは勿論方便だ。実際はA I T S Dの検査を中心にやってもらっている。今のところ表面には何の症状も出ていないが、何がきっかけで表面化するかわからない。勿論何事もないのが一番ではあるが、安心するためにもしつかりとした経過観察が必要なのだ。

「とりあえず、今日も一本取れなかったんで筋トレするツス……」

「あ、じゃあボク重りの役やりまーす」

言うが早いか、腕立て伏せの体勢をとるミーシャと、その上で胡坐をかくアル。

「うーん、あれには効果はあるのかな……?」

「さて。人工筋肉と小型モーターで動いている神姫に筋トレが有効という話はいぞ聞いたことがありませんけれど」

ミーシャの趣味というか、体を動かすことは好きらしい。それ自体は珍しいことではないが、筋トレのようなことが好きなのだ。

「最適な動作を探すって意味では、トレーニングの有効性は否定しないけれど、腕立て伏せや腹筋の動作が有効活用される場面を想像出来ないんだよなあ」

「レクリエーションのようなものでしょう。適当なところで休みなさい、明日のメンテでよくない結果が出ないとも限りませんから」

騒がしいような、賑やかなような。こうして今日も、いつもの毎日が過ぎていった。

一夜明けて定期メンテの日。電車に揺られること一時間ちよつとの、Front Line社の研究施設にやって来た。一応研究員である菊川さんの研究対象として認識されているらしく、受付の人もすぐ取り次いでくれるようになった。エレベーターで目的の階に着くと、研究室は目の前だ。

「お、来たね。どうだった、ここ一ヶ月の調子は」

「別段どうってことないツス。相変わらず姉さんには勝てねツスけど……」

「特に不調とかはないんですけどね。いつも通り、お願いします」

俺の手の平に乗っていたミーシャが、机の上に移る。

「それじゃ、いつも通りに済まそうか」

机の上のトレーに乗って、隣の計測室に運ばれていく。普段なら三十分ほどで戻ってくる。勝手知ったるなんとやらで、コーヒーメーカーを動かし始める。しかしこの日は、菊川さんはそれより大分早く計測室から戻ってきた。

「結果から言うかね。A I T S Dの症状、出たよ」

A I T S Dとは、神姫などのオートマトンに搭載されている人工知能が過度のストレスにさらされたあと、何らかの形で機能不全や障害を起こすものだ。ミーシャの場合は、人を傷つけてはならないという基幹プログラムの一つを破壊され、マスターの操り人形として犯罪を行っていた。そのことが原因で、何らかの不具合が出る可能性があることは、榊刑事からも言われていた。

「刃物に対する恐怖症状、かな。専門的な言い方を省いて端的に伝えると、ね」

「刃物に対する恐怖って……訓練中はそんな様子はなかったんですが。相手をしているシャウのメイン武器は剣なんですけれど」

「ああ、自分に向けられる分には平気なんだね。そうすると、恐怖症状はどうやら、『自分が刃物を持つこと』に対する恐怖、なのかな」

今回の検査では、身体性能検査の一環という名目で、ナイフを使わ

せようとして発覚したらしい。確かに言われてみれば、メインの武装を決めるときにミーシャは刃物を避けていたようにも思える。ストライフとしてはナイフ類を使うのが一般的なはずだ。

菊川さんの見立てによると、原因はやはり傀儡として人を傷つけていたことらしい。解除されていたとはいえ、人間を傷つけてはならないというのはAIにとっては基幹プログラムのひとつだ。それに反する行動をとり続けていたというのは、神姫のAIに多大な負荷をかけることに繋がる。ミーシャの場合は凶器として使われていた刃物が事件の象徴として記憶されていて、過剰な拒否反応を示しているのではないか、ということだった。

「榊刑事からも聞いていましたけど、リセットされてもそういう記憶は残るものなんですか」

「うん、普通はキレイさっぱりなくなってしまう、って思いがちだけれどね。AIの記憶領域の外に痕跡として残る場合があるんだよ。事例としてはリセットされた個体が、武装の使い方を覚えていたり、スキルの使い方を知っていたりすることは稀にあるそうだよ。思考の癖みたいなものが残る事例もあるし、リセットすると全部なくなってしまうというのは、思い込みに過ぎないのだと思うね」

「治療というか、それを解消する方法はあるんですか」

「日常の生活やバトルをしていて、不都合はなかったんだらう？ それなら症状を出さないように避けるだけでもいいと思うけどね。根本的な治療となると、長くかかるんじゃないかな」

AIの研究は、学問としては新興のもので、まだまだ分からないことも多いと聞いた。その中でもAITSDはここ数年の武装神姫ブームで世間的な認知も増えてきたが、専門の研究者も少なく、その治療法自体もまだ確立されていないと言いがたいらしい。対処療法として、症状を引き出さないように勤める、というのも間違いではないだろう。

「ちなみに、どんな症状が出たんですか」

「うん、ナイフを手にとった時点で発作的にパニックに陥ったので、停止信号を打ち込んだ。その時のメンタルログで恐怖感情が強く出て

いたんだけど、まあ詳しく解析するのはこれからだね」

いくら人間に近いAIを持つているとはいえ、神姫も分類としてはロボットだ。外から停止の命令を打ち込まれれば、逆らうことは出来ない。

「とりあえず、今は寝かしてあるから、起こしてあげて。今日のところは原因の特定が出来ただけで良しとして、簡単なメンタルチェックだけして終わりにしよう。話は合わせてね」

菊川さんはそう言うと、目蓋を閉じたままのミーシャをトレーに乗せて差し出した。

「再起動完了。始動します」

ミーシャの口から再起動を告げる自動音声の流れ、終わるとゆつくりと目を開ける。

「あれ、ここは……自分、確か定期メンテを受けに来て……?」
辺りを見回して、不思議そうな声を上げるミーシャ。どうやらパニックを起こしたときのログは本体側には残っていないかったらしい。

「ああ、計測機器側の不具合だね。君の側に再起動信号が誤って送られてしまったんだよ。すまないね、こちらの落ち度で」

菊川さんがさらりと伝える。

「とりあえず、計測機器の方は復調したからさ。君さえよければ再開したいんだけど、具合はどう?」

「いや、なんか頭がボーっとするというか……再起動かかったせいなんスかね?」

「何か不調が残るようなことなんですか? 再起動って」

「そういうことはないはずだけど、まあ調子が悪いなら運動系の検査は飛ばして、メンタルチェックだけにして帰るかい? 本格的な不調なら……」

そ知らぬ顔をして話を合わせる。

「ああ、申し訳ないんですけど、この後の予定もあるので、簡単に済ませてもらってもいいですか。検査を受ける側がこんなことを言うの

もなんですけれど」

予定があるのは嘘ではない。わざわざこの日に合わせて呼び出されたのだ。あまり気乗りする話ではなさそうなのが気にはなっているのだが。

「ああ、そういえばそうだったね。まあ、今回はこちらの不手際だし、本当ならば不調があるときほど、しっかりした検査を受けてもらいたいけれど。しかし僕の言った通り、榊さんと関わるとただじゃ済まないだろう?」

「ええ、痛感してますよ」

呼び出しの主は、榊刑事だ。あの事件以来、時々連絡を寄越しては、俺を雑多なことに使っている。確かに目の前で苦しんでいる神姫を救いたいという俺の視野は、榊刑事と関わることで一気に開けたという思いはある。が、いいように使われているという感否めない。

「まあじゃあ、そういうことならささっとやっつけてしまおう。どうせ待ち合わせはK駅前のお喫茶店だろう?」

「ええ、そうです。よろしくお願いします」

やはりあの喫茶店は榊刑事が協力者と話をするときに使う店のようだ。薄々感じてはいたが、俺や菊川さんのように便利に使われている協力者は何人かいるのだろう。今度はどんな難題を言われるのか。まったくもって有能な公僕がいたものだ。そうしている間にも菊川さんはミーシャを連れて計測室の方に入っていった。この後のことを考えるとため息が出てくるが、とりあえず新しいコーヒーを飲むくらしいの時間はあるだろう。俺はゆっくりと席を立つと、コーヒーメーカーを動かし始めた。

「突然呼び出して済まないね」

「まったくです。どうせ録でもないことなんでしょうし」

「当たり前だ」

にやりと笑いながら、榊刑事は言った。喫茶「COL」の一番奥の席は、俺と榊刑事が話すときの指定席になりつつあった。他に客がいるわけでもないのだが、一応は人目を憚る話になるときもある。そういう意味では流行らない喫茶店の奥、というのはいかにも好都合だった。余談ではあるが、時々この店の経営が本気で心配になる。

「実はね、今度この辺りで大がかりな賭けバトルが行われるそうなんだ」

「裏バトル、ってやつですか」

裏バトルとは、公式な大会やゲームセンターでの草バトルを表とするなら、文字通りアンダーグラウンドで行われる違法なバトルだ。ここで行われる賭博行為も違法だが、参加する神姫も違法な改造を施されていたり、公式では禁止されるような破壊力の武装を使ったりと、ルール無用のバトルが行われているらしい。勿論そんな環境で神姫の安全など配慮されるはずもなく、バトルは残酷な見世物となって終わることも珍しくないらしい。

「それで、どうしろって言うんです？ まさか裏バトルに参加して来い、なんて言うんじゃないよな」

「いやあ、話が早くて助かるね、今日の君は大分冴えてるじゃないか。うん、早い話が、そういうことなんだ」

軽い冗談のつもりだったが、そうはいかないらしい。数カ月前まで一般市民に協力を求めるなんて出来ない、と言っていたのはなんだったのか。

「まあ簡単に説明するとだ、今回の裏バトルには中々の大物が絡んでるらしくてね。警察の方にも、いわゆる圧力ってやつがかけられてるね」

「それと俺が裏バトルに参加することと、どう繋がってくるんですか

？」

榊刑事はまあ焦らない、とコーヒーに口をつける。

「ひとつは、今回のバトルには、その大物の子飼いのマスターが現チャンピオンとして参加するのさ。そいつを押さえてしまえば、その大物が裏バトルに関与したことを示す証拠になる。もうひとつはそのバトルが大がかりなものになる、つてところがミソでね。僕に情報を流してくれてる奴が、一人くらいなら参加枠に推薦出来そうだ、つて言うんだ」

「で、バトルに参加してチャンピオンを倒して身柄を押さえてこい、と？」

「いやいや、そこまでは望んでないさ。まあ、それが一番こちらの手がかからなくて有り難いが、そこまでお願いするわけにもいかないだろう？」

この数カ月の付き合いで、榊刑事もすっかり厚かましくなったものだ。それも彼なりの冗談なのかもしれないが、正直どこまで本気なのか分からない。自分がそんな荒事に役に立つとは思えないが、仮に役に立つとしたら本気で身柄の確保まで言い出しそうな性格ではあるのだ。

「最善手としては君にチャンピオンの神姫を押さえてもらうことなんだが、それが無理なら会場から出さないようにしてほしいのさ。一応警察としては、バトルの最中に会場に捜査に入るつもりはあるが、三下相手に手間取っている間に本命に逃げられる可能性もある。確実にチャンピオン本人か、その神姫は押さえたい」

「そこまで出来るんなら、何も俺が中に入る必要はないんじゃないですか。第一、本当にそこまでやれるんですか。圧力がどうのつて言つてませんでしたっけ」

「そこはね、君。おじさんにだつて理由つてもものがあるのさ。第一、警察が不当な圧力に屈して悪党を見逃しました、じゃああまりに情けなからう？」

一瞬、榊刑事の表情が真剣なものになる。確かに、この人の犯罪に對する想いについては信用出来るところはあるのだ。警察だけで、

もつと言えば自分だけで事件を解決出来ないことに対する憤りのようなものは度々感じたことがある。

「とにかく、捜査員を駆り出すことにかけては心配しなくていいさ。そこはおじさんのなけなしの面子にかけても、約束しよう。それと、中に送り込めそうだと行って、誰でもいいわけじゃあない。説得力、って奴が必要なさ。例えば、今売り出し中のサードリーガーが、セカンドに上がる前の実戦訓練を希望している、って言うような、ね」

「カバーストーリーまで出来てるんじゃないですか……」

「ははは、まあ例えはの話さ」

笑いながら、コーヒーを一口飲む。

「まあ、考えておいてくれ。こちらから送り込むんだったら君が一番適任なのは間違いないんだが、君にも都合つてもものがあるだろうからね。出来たら一週間以内に返事をもらえるとありがたい」

それじゃ、と榊刑事は席を立った。相変わらず、言いたいことだけ言って、さつさと行ってしまふ。おそらく勤務中に抜け出てきているのだろうが、忙しないことだ。そんなことを考えていると、空いたカップを片付けに来たマスターが、新しいコーヒーを持ってきてくれた。

「サービスだよ。君はあいつに、よく付き合ってくれてるからな」

礼を言って、カップに口をつける。豊かな香りが広がっていく。

「あいつが何でこんなに神姫犯罪を憎んでいるか、聞いたことはあるかい？」

「いえ、榊刑事はあまり自分のことを話してくれませんか」

だろうな、と言うとマスターは啜えた。パイプに火をつける。

「あいつはね、神姫犯罪に巻き込まれて、大事なものを亡くしちゃってるんだ」

マスターはそう言うと、ゆっくりと、紫煙を吐いた。

——十年ほど前。

店の席に、一人の男がいた。男はこのご時勢に珍しく、電子煙草ではない紙巻を吸っていた。店の方も珍しく、特に禁煙というわけではない。店主の私自身も煙草呑みであるし、多少のこだわりも持っていた。それだけに、禁煙政策の進む昨今でも、頑なに煙草を手元から離さない男に多少の親近感を覚えたことを今でも忘れていない。注文のコーヒーを差し出すと、男は軽く会釈して受け取った。

「お客さん、この店は初めてかい？」

「ええ、待ち合わせの相手がね、一度入ってみたい店だと言うから、寄らせてもらいました。いい店ですね、ここ」

「そう言ってくれると嬉しいね。ご鼻屑にしてくれりやなお嬉しい」

そう言つて笑顔を見せる。すると男が徐に煙草の火を消した。直後にドアベルが鳴る。なるほど、待ち合わせの相手が来たらしい。

「ごめん、遅くなっちゃって」

「なあに、今来たところさ」

「……今来たところなのに三本も煙草に火をつけて、火遊びでもしてたのかしら？ いい加減煙草なんて止しなさいよね」

「残念、これを止めるのは俺が死んだときだけさ」

困ったように嘯く男に、あきれたような表情を向ける娘さん。面白い客だ。はじめの印象はそんなものだった。

「あ、ここのお店って、神姫を出しても大丈夫ですか？」

神姫……聞いたことがある。確か生活サポートを目的とした15cmくらいのロボットだ。たかが15cmで何が出来るのかとも思うが、ここ最近では様々な媒体で関連広告を目にしない日はない。それを考えると、売れ行きも悪くないのだろう。

「ええ、構いませんよ。他に気にするお客さんもおりませんし」

我が店ながら、客入りはほとんどない。店自体が半分道楽のようなものだから仕方がないのだが。

「良かった。出ておいで、アンジェリクス」

「はい、ご主人様」

鞆の中から涼やかな声が聞こえる。後から知ったが、アンジェリクスはその声の美しさに特徴のある、「ミネルバ」という機種だったらしい。音楽に特化して作られていて、インターネットには自分の作曲した曲をミネルバに歌わせる、という動画も作られたりするらしい。長い金髪と青い目が美しい、と思った。

「アンジェリクス、貴女からもシロウに言っておいて。煙草の匂いがつくからそんな不健康なものを吸うのはやめて、って」

「でもご主人様も、その匂いをお嫌いではないのでは?」

「それとこれとは別よ。私は貴女に煙草の匂いがつくのが嫌なの!」

「やれやれ、目の前では極力遠慮するように心がけさせてもらおうよ……それと、何度も言うように悪いんだが、俺の名前はシロウじゃなくて征司郎、な」

「何度も言うように悪いんだけど、長いんだもの。諦めて」

男がやれやれ、と言うように頭を掻く。

——今にして思えば、それは幸せな過去だった。

「ミネルバ型? アンジェリクスってサイフォス型のはずじゃあ……?」

「それは今のアンジェリクスだな。アンジェリクスは元々榊の恋人の神姫の名前だったのさ」

昔を懐かしむように、マスターが目を細める。その光には、楽しかった頃を思い出すような輝きがあった。

「でも、それなら何で今のアンジェリクスは、榊刑事の神姫で、騎士型なんですか?」

「それにはな、わけがあるのさ……」

マスターはパイプを口から離し、ゆっくりと煙を吐き出した。煙の向こうに見えたマスターの瞳は、うって変わって悲しい色を帯びていた。

「そんな……これは……」

新聞の一面には、にわかには信じがたい記事が踊っていた。それは、この店の客として、よく知っていた人の死を告げる内容だった。

『Y市内で爆発、テロか』

『死者一名、負傷者多数』

『目撃者の話では、神姫と思しき影が爆発物を運んだ可能性』

目に飛び込んでくる内容が、頭に入らずに素通りして消えていく。顔写真も掲載されている。間違いない。あの神姫を連れてきた女性だ。あれ以来、度々店に顔を出してくれるようになり、その肩にはいつも、あのミネルバ型の神姫を乗せていた。呆然としてみると、不意にドアベルが鳴る。入り口の方に目を向けると、あの時一緒だった煙草好きの彼が立っていた。

男はコーヒーを注文すると、黙ってカウンターの真ん中に座った。流れるジャズと、コーヒーを淹れる音だけが、店内に響いていた。カップと皿の立てる音がうるさいくらいに聞こえた気がする。黙ってコーヒーを差し出すと、男も黙ってそれを受け取った。

「苦いな……」

コーヒーを飲み終えて、男はそれだけを呟いた。

「これは、独り言なんだがね、マスター……」

「はい」

長い、長い、沈黙の後で、男は喋り始めた。

「犯罪捜査規範という奴があつてね、近親者が被害者になった場合、その捜査から外される、って決まりがあるんだな……おかしいだろう？

誰よりもその事件の解決を願う人間が、その捜査の場にいることが出来ない、なんて……」

返す言葉が、なかった。それは胸の内をそのまま吐き出したような言葉だった。怒りも、悲しみも、苦しみも、恨みも、すべて緘い交ぜにした感情のうねりが、そのまま言葉になったようだ。

「現場には遺留品が残っていた……おそらく、実行犯はじきに特定さ

れるだろう……でもね、あいつを殺した犯人は……殺すように命じた
主犯は、別にいる……」

歯を軋る音が聞こえてくるようだった。

「あいつは、ある企業の不正を調べていた……その証拠を、集めていた
……それを、揉み消すために……殺されたんだ……」

途切れ途切れに語る声は、無理やり絞り出されているようだった。

男が黙ると、沈黙が店内を支配する。流れ続けているジャズは、遠
いどこかで流れているように聞こえる。それなのに、水滴が、テーブ
ルを打つ音が、耳に届いた気がした。

「結局、実行犯は逮捕されたが、榊の言う真犯人とやらは捕まってい
ない。榊が言うには、捜査に横槍を入れられて、捜査本部も解散。背
景のない単なる殺人事件として処理されてしまったそうだ」

その爆破事件のニュースは、俺も覚えている。当時の報道でも神姫
を使った新しいテロの可能性があると、大々的に取り上げられて
いた。確かに犯人はすぐに捕まった記憶があるが、その後については
良く覚えていない。日々のニュースに紛れてしまったような、おぼろ
げな記憶があるだけだ。

「それから何年かして、奴さんは新設されたばかりのMMS犯罪捜査
の専任に回された。それがあいつの意思なのか、上に嫌われたせいな
のか、俺には分からんが。それと同じ頃に、あいつは自分の神姫を
買った。それが、今のアンジェリクスだよ」

「そんなことがあったんですね……」

「ああ、恋人とその神姫を亡くし、閑職に追いやられ、おまけに本当の
仇は今も平然としている……それからは、あいつの怒りの矛先は、神
姫を使った犯罪に向かい続けているのさ」

マスターは何度目かの紫煙を吐き出しながら、言った。

「本当なら、市民を巻き込んだ捜査なんぞ、許されるはずがない。今度
のことだって、圧力に屈しない、なんて言っただけはいるが、そのどこま
でが私怨だか、分かったもんじゃあない。あいつが言うんだから捜査
に人を駆り出すのは本当だろうが、例え結果が出たとしても、あいつ

が上役から認められるってことはないだろうな」

そうだったのか。榊刑事に感じていた執念のようなものの正体が見えた気がした。あの人も、大切なものを失ってきているのだ。もしかするとさつき話していた裏バトルに関わっている大物というもの、榊刑事の言う真犯人と関係があるのかもしれない。

「でも、マスター、何でそんな話を俺にしてくれたんですか」

「なに、年寄りの気まぐれだよ。君はあいつによく付き合ってくれているし。あとは、そうだな、君も、どこかあいつと似た匂いがするから、かな」

「似ている？」

「年寄りの勘みたいなものだ。違ってはいるならそれはそれでいい。気を悪くせんでくれよ」

「まあ、神姫を使った犯罪を嫌ってるところだけはそうかもしれないね」

否定する理由もないので、適当な相槌を打つ。

神姫は人間に対して拒否権を持たない。それは、自分の死を賭けた場でも変わらない。死んでこいと命令されれば、どんなにそれを嫌がっていても最終的には従うしかないのだ。そのことに、たまらない嫌悪を感じた。神姫に爆弾を持たせた相手も、命賭けのバトルをさせるのも、それを楽しむ連中も、そのすべてに怒りを感じた。それとも、機械にすぎない神姫に、死という概念を当てはめる俺がおかしいのだろうか。

「さつきの話、どうするつもりだね」

「裏バトルの話ですか。そうですね、とりあえず榊刑事に尋ねたいことがいくつもありますね」

「尋ねたいこと？」

「ええ、例えば……俺が倒さなきゃならないチャンピオンと、その神姫のこととか？」

俺の怒りは、静かに、しかし確実に灯っていた。

普段は静まり返っているであろう廃倉庫街に、その夜は多くの人が集まっていた。街灯もまばらな海沿いの一角の暗がりには、少し肌寒い海風を掻き消すような熱気を持っていた。

「ここが今日の会場、か」

時間としては宵の口といった頃だが、近くを走る交通機関は終わっている。こんな辺鄙な場所では、昼間だって人が来ることは少ないだろうが、おかげで大分歩かされた。周りは本当に港湾施設くらいしかないので、通報があつたとしてもすぐには対応出来ないだろう。榊刑事の、意地にかけても人を出すという言葉を疑うわけではないが、若干心細さを覚えた。が、それを飲み込んで足を進める。ここまで来たら乗り掛かった船だ。

立ち並ぶ倉庫の中で、ひとつだけ明かりが漏れている。あそこが今日の祭りの場所だ。俺が中に入ろうとすると、入り口で黒いスーツにサングラスの男が無言で遮ってくる。心臓が鳴るのが自分でも分かった。が、震えそうな手を悟られないように力を込める。その男にあらかじめもらっていたパスを見せると、ようやく道を開ける。さしたことはしていないのに、安堵感は大い。出来ることなら、もう帰りたいくらいだ。さっきまでの小さな決意は、あつという間に揺らいでいた。

とにかく落ち着かねば。深呼吸して辺りを見回す。さして広くもない倉庫の中には外以上の熱気が溢れている。誰も彼も目をぎらつかせ、興奮と期待感を隠そうともしない。皆今日の日を待ちわびていたのだろう。反吐が出る。今しがた萎れた決意が、なんとか頭をもたげてきた。

入り口の横では酒や賭け札を扱っているようで、景気よく金がやり取りされている。まるで競馬場だ。倉庫の中央には透明のアクリルのようなもので作られたドームがいくつか設置されていて、あの中がリングになるのだろう。その上には四面のモニタが天井から下げられていて、早くもそれぞれの試合の賭け率が表示されていた。既に賭

けは始まっているらしい。さらによく見ると、二階にも席が用意されているようだ。一階のそれが簡素なパイプ椅子を押し込んであるのに比べると、大分余裕があるようで、どうやらVIP席のようなところらしい。

事前に聞かされているルールは単純明快で、大きくふたつ。ひとつは、自分の神姫が破壊されるか、ギブアップをすれば決着。つまり、神姫そのものを壊さなくても勝負が決まるルールにはなっている。が、参考に、と榊刑事からもらった動画ではサレンダー宣言の後も、神姫を破壊しつくすまで攻撃が止むことはなかった。ゆつくりと破壊されていく神姫と、それを楽しむように歓声を上げる客達の姿は正直耐え難く、結局途中で見るのを止めてしまった。もうひとつのルールは、勝ち上がるごとに神姫の武装や神姫自体を自由に交換することが認められていること。試合中に武装を破壊されたり、神姫が負傷したりしていても交換出来るということだが、このルールを使えば自分の主力武器や神姫を温存して戦うことも出来る。もっとも、有名な参加者の神姫や武装、戦い方などは、割とオープンなものだし、榊刑事からも少なからぬ量の情報をもらっている。それを考えると今更隠す意味はあまりない。逆に俺のように事前情報がない参加者の方が少ないのだから、純粹に神姫の負傷対策のルールなのだろう。だが、馬鹿正直にそれに付き合っつてやる必要はない。事前の情報が少ないのはこちらの強みでもあるのだ。それは最大限に活用させてもらうとうよう。

人の間を縫って、案内された通りに進むと控え室にされている部屋についていた。が、大型のモニタがひとつある以外はただの大部屋に作業用のスペースが少しと、申し訳程度に工具の類が用意されているだけだった。部屋の中には既に十人程度の人と、同じくらいの神姫がいる。それでも参加者の数を考えると、ほぼ全員揃っていることになる。顔を見渡してみたが、事前に教えられていたチャンピオンらしき顔は見当たらない。流石に別室なのだろう。壁際に設置されたホワイトボードには今日の対戦表が貼り出されている。トーナメント形式の四回戦制で、基本的には同時進行で試合が行われるらしい。

「チャンピオンは、反対側のブロックか」

幸運なのか不運なのか、チャンピオンとは決勝まで当たらないようだ。

「ご主人、そんな事より一回戦の相手はどうなってるんすか？」

「名前は分かるけど、それだけ見ても対戦相手のデータは分からないな。割と出たところ勝負になる」

ケースの中から、ミーシャが顔を出す。少しでも対戦相手のことが知りたいのだろう。登録されている名前は、サムライマスター、となっている。もらった情報の中には入っていないが、名前だけ考えたら紅緒が出てくるのだろう。それとも短絡的に過ぎるだろうか。名前だけならなんとでも言えるのだ。要はこの表から分かることなんて、自分の対戦順くらいのもものだ。

「不安は分かるけど、少し落ち着け」

「ううう……筋トレしていいツスか？ どうにも落ち着かないツス……」

「鞆の中で出来ることなら、好きにしていっていいよ」

「まー落ち着けて方が難しいからなー、分かるわー」

「お前が言うのか、アル」

ミーシャはともかくとして、どう考えてもアルは緊張とは一番縁遠い。今だって、その表情は弛緩しきっている。

「なんにせよ、まずは勝たなきゃ始まらない。ミーシャ、いいね？」

「ううう……姉さんからなんとか一本取れたと思ったら、このザマツス……もつと普通にデビューしたかったツス……」

このひと月、ミーシャもシャウも、火が出るような訓練をしていた。勿論強くなるためではあるのだが、今回の勝負はリアルバトルなのだ。それは文字通り、負ければ現実に破壊されてしまう戦いだ。二人は毎日のように、訓練に熱をあげた。結果、今日のバトルにミーシャも出られる、とシャウが認めたのだ。

「自信を持ちなさい、メサルティム。貴女は私からも、一本奪ったのですよ」

「そうは言っても、有効打を一発入れただけツス」

「なら、最初の試合で見せてやりなさい。貴女のその一発が、どれだけ恐ろしいかを」

話している間に、時間はやって来た。会場に入ると、ひととき大きな歓声上がる。シードの二人を除いて、一回戦は六試合。その内の半分が一斉に行われる。対面から、相手が入ってくる。相手の神姫はやはり紅緒だ。甲冑を着込み、腰の二本差しと背中にも刀を背負っている。

「なんの捻りもなかったツスね」

「相手は重装甲だけど、甲冑相手なら相性は悪くない。落ち着いていこうか」

神姫との会話は、お互いヘッドセットだ。リアルバトルではバトルロンドと違い、神姫との通信を機械がサポートしてはくれない。多少アナログだが、相手のことを気にすることなく指示が飛ばせるだけましだろう。

試合開始のブザーが響く。沸き立つ観客の声を背に、ジレーザロケットハンマーを振りかぶったミーシャが一息に距離を詰める。大降りな一撃だが、それでいい。

「相手の刀じゃあジレーザの一撃は防げない、大振りで構わないから、どんどんプレッシャーをかけて」

「了解したツス！」

紅緒も刀を抜き放つが、あんな細い刀身なら受けた瞬間に砕き折ることが出来る。相手もそれが分かっているらしく、おいそれと距離を詰めてはこない。もつとも、お互い接近戦にならないければ始まらないのだ。どこかで必ず向かってくるはず。その主導権を渡さなければいい。こちらの攻撃はジレーザもモーニングスターも、一撃必倒だ。斬撃と違って、打撃は甲冑を着込んでも本質的な威力は変わらない。

「ミーシャ、モーニングスターを思い切り振って、誘い出せ」

「どりゃあああ！」

弧を描いて投げつけられた刺鉄球が紅緒のいた辺りを薙ぎ払う。紅緒はその大振りの投球をかわし、鎖の内側に走り込んでくる。が、それは誘いだ。鎖を手放し、素早く体勢を立て直すと回転そのままの

勢いで、飛び込んできた紅緒にハンマーを叩きつける。

「ぐっ!？」

「おおおりゃああ!」

咄嗟に剣で防いだようだが、ハンマーの一撃はそれをへし折り、そのまま紅緒の胴を打ち据えた。その威力は、重い甲冑を着た紅緒を宙に浮かせるほどだ。

「まだ浅い、警戒を怠らないで」

そうは言っても、フルスイングの一撃だ。警戒と言っても体勢を立て直す以上のことはおいそれと出来ない。が、紅緒も吹き飛ばされた先で、大の字を描いている。

「ははは、これは参ったな。為虎添翼が一撃保たぬとは」

倒れていた紅緒が、ゆっくり立ち上がる。

「これは主殿、一回戦から温存などと、甘いことは言っておられぬな」
「そのようだ。仕方ない」

その言葉を待っていたように、紅緒は背中に背負っていた刀を抜き放つ。だがそれは、刀というにはあまりにも武骨すぎた。

「此なるは斬馬刀。鎧武者の甲冑ごと斬り伏せるために作られた、秘蔵の刀よ。この威力、先ほど砕いた数打ちと、ゆめゆめ同じと思わぬことだ」

「確かに、あれは中々折れないツスね……」

刀と名は付いてはいるが、斬馬刀はおよそ刀と呼ぶには大雑把過ぎる。それは鉄塊に刃を立てたような、鎚と同じ分類にする方が正確な武器だ。

「さあ、往くぞ。その鎚で、我が斬馬刀が止められるか!」

鎧の武者が走り、跳ぶ。大上段から打ち下ろされる斬馬刀の一撃を、辛うじてハンマーが受け止める。地に足を着けて、もう一撃。サブアームの関節が軋る。

「くっ、まだまだツス!」

密着距離を嫌って、ミーシャの手に握られたハンドガンが火を吹く。が、所詮リボルバーだ。撃ち切ってしまうえば、弾を補充する暇はもらえそうもない。足元に撃ち込まれ、飛び退る紅緒。そこをめぐけ

て、横薙ぎにハンマーを振り回すが、斬馬刀で受け止めている。派手に吹き飛んだように見えるが、自ら跳んで威力を逃がされただけだ。

「あんな鈍重そうな装備で身を固めてるのに、意外と身軽だな」

「感心してる場合じゃねッス、どうしたらいいッスか!？」

「構わないから、振り回せ。ただし、闇雲に振るうんじゃ駄目だ、全部狙って、当てに行け」

「それでいいなら、得意科目ッス！」

勢いよく跳躍し、豪快に床めがけてハンマーを叩きつける。そのまま回し蹴り。ハンマーを警戒していた相手の横腹に踵の一撃が突き刺さる。

ハンマーは言わば、見せ札だ。その威力は折り紙つきで、当たれば只ではすまない。反面動作が大きく、見切られやすいが、それは見逃し厳禁の狙い玉のようなものだ。その動きには嫌でも注目せざるを得ない。しかし、ハンマーに注目すればその分、ミーシャのもうひとつの武器である体術が活きるのだ。

たたらを踏んだ紅緒に追撃のハンマー。横薙ぎの一撃は、身を屈めてかわされる。そこはまだ射程の内だ。足を刈り取るように水面蹴り。紅緒は屈めた体をばねにして、大きく後ろに跳ぶ。一度守りに回ってしまえば、斬馬刀のような重量武器は取り回しにくい。その重量そのものが足枷なのだ。着地にも、大きく膝を使って隙を作る。

「そこおー！」

その隙を、ミーシャは見逃さない。タイミングを合わせて、突撃する。が……。

「掛かったな！ スキル発動、蒼天斬月！」

その動きに合わせて、紅緒も前に跳ぶ。斬馬刀ではなく、腰に残ったもう一振りの刀が閃き、鋭い一撃が放たれる。蒼天斬月はその居合い抜きの技だ。斬馬刀を放り出したことで、枷から解き放たれた刃がハンマーの柄を両断し、斬り飛ばす。斬馬刀では不利な守勢に回ったのも、重さから着地で大きく身を屈めてみせたのも、誘いだっただけだ。背を向けたまま、刃を鞘に納める。

「そこだー！」

「うおおおお！」

居合い抜きに使われた刃は、言わば死に剣だ。身体中のばねを使って放たれた蒼天斬月は、体勢を戻さないことには次の行動に移れない。その必殺の一撃を、ミーシャはハンマーを犠牲に受けきったのだ。勝利を確信した紅緒の腰を、チーグルサブアームが掴む。そして……。

「りやあああああッ！」

ミーシャの身体が弧を描く。固い床面に、ジャーマンスープレックスが炸裂した。ミーシャが立ち上がると、逆にゆっくりと倒れ伏す紅緒。歓声が一際大きくなる。この瞬間、俺自身も勝利を確信していた。

「まだだ……」

天を仰いだまま、紅緒が声を上げる。

「我はまだ、動けるぞ……」

刀を杖に、無理やり立ち上がる紅緒。もはや緑に動けるようには見えないが、その目には戦意は未だ灯っている。

「この勝負、神姫が破壊されるか、主殿の降伏によってしか決さぬはず……我はまだ、動けるぞ……さあ、尋常に勝負といこうではないか……」

ふらつきながらも、刀を正眼に構える。紅緒はまだやるつもりだ。だが、そのダメージは決して小さくはない。バトルロンドであれば勝負が決するほどのダメージは既に入っているはずだ。ミーシャも迷っているかのように、視線を送ってくる。当然だ、これ以上戦えば紅緒の破損は免れない。

「どうした、臆したか？ 来ぬのなら、こちらから行くぞ……？」

足取りは覚束ないが、紅緒はゆっくりとミーシャに向かってくる。誰もそれを止めるものはいない。相手のマスターでさえ、止めないのだ。

「……ミーシャ、狙え」

「ッ！」

ミーシャが、ゆっくりと構えを取る。

「デモリツシユ……クローツ！」

駆ける。一息に。チーグルサブアームが振るわれる。その凶悪な爪先が、獲物を捕らえる。金属同士を叩きつけるような激しい音。

「なんと……ッ！」

紅緒の手に握られていた刀が。その背後に突き立っていた斬馬刀が。一瞬の間をおいて、砕けた。

「これで、もう戦う術はねーツス……勝ちの目も」

「見事……私の、負けだ、主殿……」

諦めたような嘆息の後、対戦相手はサレンダーを宣言した。

勝ち名乗りを上げたミーシャを回収すると、もうひとつの試合は終わっていた。だが、直接俺と当たる相手の試合は終わっていないかった。それは、あまり幸運なこととは言いがたかった。今回のルールでは、試合は一回三十分と、かなり余裕を持って設定されている。それは決して勝負がつかなかった試合のために設定されているのではないのだ。

一回戦前半の最後の試合は、一方的な虐殺に姿を変えていた。

一方のムルメルティアは重装だった。ヴァイントシュトースサブアームと強化レッグのヴァイントシュティレを同時に装備し、インターメラル3・5mm主砲を両肩に一門ずつ備えている。太股のホルスターには、メルテユラーM7速射拳銃が二丁。しかもサブアームにはミサイルポッドとガトリングガンを備え、見るからに大火力だ。

もう一方のバツフェバニーは、もはや戦意は残されていないかった。それをわざと当たらないように狙いを外し、ガトリングを撃っている。ムルメルティアのマスターは、高笑いをあげていた。

「サレンダーだつて言ってるだろおッ！ 何で止めてくれないんだよッ!？」

「てめー、ルール読んでねーのかよ？ ここの勝負はなあ、サレンダーなんて受け付けてねーんだよ!！」

弾丸が次々に撃ち込まれ、足を止めるわけにはいかない。それほど広いわけでもないフィールドを、バツフェバニーは懸命に逃げ回っている。

「やめてくれー！ お願いだからー！ お願いだからー！」

高笑いは止まない。アナウンスが、試合の終了時刻まで残り五分を告げた。

「なんだあ、お楽しみはオシマイかよオ……」

一瞬、バツフェバニーのマスターの顔が安堵に緩む。が、嘲笑がそれを引き裂く。

「そいじや、さっさとバラバラにしちまってくれや。次の試合でまた

お楽しみといこうぜエ！」

この声に、歓声が沸く。そこからは、まさに虐殺だった。

とつくに武器も残されていない相手に、ガトリングの火線が集中する。三つ編みの髪が。腕が。脚が。千切れて飛ぶ。動けなくなるところを近寄り、残った手足をサブアームで力任せに引き千切っていく。四肢をもがれたバツフェバニーが涙を流しているのが、中央のモニタに大写しにされる。何かを呟いているのまではつきり見えるが、その言葉は一層の盛り上がりを見せる観客達の声にかき消された。観客席より遙かに近いのに、そのマスターが叫ぶ声さえ聞こえないほどだ。ヴィントシュトースサブアームの巨大な手が、バツフェバニーの頭を掴んで持ち上げる。

「それじゃア皆さん！ 皆さんの、せーので打ち上げますよオ！ さん、はい！」

客席からは、割れんばかりの声で『せーの』の声が上がった。

「マスター。次はボクがやるよ」

控え室で、静かにアルが言った。

「あのバツフェバニー、確かそれなりに名前の通った神姫だったはずだ。二丁拳銃の、トウーハンドって呼ばれてた」

「うん。戦ったことはなかったけど、動画はボクも見ることがあるよ。シャウラの訓練データでも、モーションを使ってたはずだ」

アルの声はどこまでも静かだった。

「よし、頼む」

「それからさ。次の試合、ボクからもお願いがあるんだけど」

一回戦の後半が終わり、十五分のインターバルをはきんで、二回戦が始まった。二回戦は同時に二試合ずつだ。相手のムルメルティアの武装は重装で、一回戦で見たときと変わっていない。それに対するアルは、極端なまでに軽装だった。両足にはホバー装備のオリジナルレグ。両手にはサブマシンガン、コーカサスを二丁。あとは胸の装甲とヘッドギアのみだ。

「なんだア？ その軽装備は？ 一回戦のストラーフはどうしたよオ？」

俺もアルも答えない。ただ一瞥をくれただけだ。

「分かってねエなア、神姫の強さってのはよオ、装備なんだよ、装備。そんなカスみてエな装備で、俺達に勝てるっても思ってたのかア？」

もはや視線すら送らない。ただ試合開始の合図を待つばかりだ。その間ずっと、相手のマスターは謳い続けている。

「本気出すよ、マスター」

「ん。思いつきりやって来い」

短いやり取りのすぐ後に、試合開始のブザーが鳴った。

「食らわせてやれエ！ ミサイルパーティーだ！」

ほぼ同時に、腕のミサイルポッドから大量のマイクロミサイルが吐き出される。白煙を引きながら迫ってくるミサイルに怯むことなく、アルは駆け出した。両手のコーカサスが火を噴くと、ミサイルが次々に爆発する。でたらめに撃ち落としているわけではなく、自分の走る軌道に邪魔なものだけを選んで撃ち落としている。アルには、それが出来る。

本気になったとき、ボクは頭の中でスイッチを入れる。

ひとつ目は、覚悟。いつもとは違うことを、自分に理解させるためのスイッチ。正直ボクは、バトルは嫌いだ。本気を出すのも面倒くさい。その気持ちを区切るためのスイッチ。

ふたつ目は、認識。このスイッチを入れると、まるで時間がゆっくりになったように感じられる。感じるだけで、本当に時間がゆっくりになるわけじゃない。でも、それだけで充分。無駄な動きが極端に削ぎ落とされる。必要な動きだけを厳選出来るし、今みたいにかくさんミサイルが飛んできても、自分に邪魔なものだけを選ぶことだって出来る。

今は、それで充分。

次に飛んでくるのは、砲弾。相手のインターメラル3. 5mm主砲

だ。鋭くターンして、S字に回避。土煙がゆつくりと舞い上がる。一発、二発。炸裂音までゆつくりだ。

あと少し。あと少し。

三。

二。

一。

ガトリングの射程に割り込んだ。相手の左腕がゆつくりと持ち上がり、砲口がこつちを向く。まっすぐにボクの方に向けられる。

それを、待ってた。

ボクの口の端が、ゆつくりと上がるのが分かった。

試合が開始して、一、二分も経っただろうか。ムルメルティアの左腕、ガトリング砲が爆発した。

「な、何だア！ 何があつたア！」

答えは簡単だ。アルが、走りながらガトリングの砲口を撃ち抜いたのだ。二丁のコーカサスは火を噴き続けている。今度は右肩。次いで、左肩。主砲が立て続けに爆発。コーカサスと同じくらいしかないガトリングの砲口を撃ち抜けるのだ。それに比べたら3・5mm主砲の砲口なんて、大口を開けているようなものだ。

「何だ！ 一体何が！ 何が起こってるんだア！」

サブアームが両方とも根元から吹き飛んでいる。それでも、アルは射撃の手をまったく緩めない。ムルメルティアを中心に、時計回りに回りながら撃ち続ける。一周、二周……回り続けると、ムルメルティアの膝が弾ける。右膝、続けて左膝。今度は膝の関節のみを狙い続けたのだろう。ムルメルティアが両膝を着くと、走り続けていたアルが、ゆつくりと、ゆつくりと歩き始める。正面から、まっすぐ。

「くそッ！」

太股のホルスターから、メルテユラーM7速射拳銃を抜く。が、その反撃さえも許さない。両手に握られた拳銃も、いままでの銃火器と同じように爆発した。もはやムルメルティアに武器は残されていなかった。

「まっ！ 待て！ サレンダーだ！ サレンダーする！」

相手のマスターが大声で降参を宣言する。だが……。

「うわあッ！」

帽子の耳が、順に飛ぶ。続いて、ヘッドセットも宙を舞う。

「ひいッ！」

悲鳴が上がる。しかしアルはまったく躊躇しない。さらに帽子も、眼帯も飛ぶ。既にさつきから、サブマシンガンは単発に切り替えられている。一発一発、惜しむように弾を撃ち込んでいく。膝立ちだったムルメルティアが、仰向けに倒れる。それでもまだ射撃をやめない。身体には一切弾を当てず、四肢だけを削り取っていくように。

「おい、テメエ、サレンダーだって言ってるだろうが！ 何で止めねエ！ 止めろ！ 止めろこの野郎！」

その声がまるで聞こえないかのように、アルはゆつくりと歩み寄っていく。射撃の間隔は少しずつ長くなっていくが、止むことはない。

「助けて……」

小さく、ムルメルティアが呟く。その顔からは、さつきの哄笑の中でバツフェバニーを解体したのと同じ神姫とは思えない。既にサブアームどころか、肩関節も股関節も砕かれた拳句、リアユニットの基部が重石になってわずかな身動きさえも取れないムルメルティアの傍らで、アルは静かに言い放った。

「そう言っただけで命乞いした神姫を、一度でも助けたことがあるかい？」

何の感慨も込めず、何の感情も込めず。その言葉に、ムルメルティアが目を見開く。

「許して……お願い……許し……て……」

大きく開かれた眼から、涙が零れ落ちる。それでもアルは、表情一つ変えず、引き金を引いた。

試合時間は四分三十五秒。俺達は準決勝への切符を手に入れた。

「お疲れ」

「ん。疲れた」

やっぱり、本気を出すと疲れる。なんと言おうか、頭の中を隅々まで使ったような気になるんだよなー。

「お……お疲れさまッス」

メサルタイムがやたらと畏まつてる。なんだか変な感じだな？

「どしたー？」

「アルキオネさん……強かったんスね……今まで知らなかったツス……」

おー、中々言うねー。でも確かに、メサルタイムが来てから本気を
出す場面って中々なかったからなー。

「どうだー、見直したかー？」

「正直、ただの特撮オタクだと思ってたツス」

即答か。こいつマジで正直だなー。後で覚えてろー？

「でも、最後、何で止めを刺さなかったんスか？」

「んー？ 自分だったら止め刺してた？」

「正直、自分には分かんねツス……」

「そうだなー。マスターが、そう思ってたから、かな？」

「そうだな」

マスターが頷く。まあ、お決まりのところだと、君にそんなことさせられない、とかその辺りかな？

「これより上の勝負になると、相手も強くなってくる。そんな相手に死力を尽くされたらたまらない。ここでサレンダーを認めておけば、この先も相手はこう思うだろう。被害を拡大するよりは、サレンダーを認めた方がいい、ってな。つまり、この先も積極的に装備を破壊していけば、相手のサレンダーを誘える」

……なんだい、その理由は！ ボクはどうかと思うね、そういうの！ しかも眼の前の悪魔型はすっかり感心して、そこまで考えていたとはー、みたいな顔になってるし！ どうかと思うよ、そういうの！

「口だけは御達者ですね、主。そうは言っても、そんなことはさせられないと思っただんでしよう？」

「……まあ、そういう面も、ある」

……まったく、素直じゃないね、ウチのマスターは。

準々決勝で、最も早く勝ち名乗りを受けたのは俺達だった。

もう一方のBブロック一試合目は、優勝候補のチャンピオンの試合だ。俺達の試合とは別種の盛り上がりを見せていた。チャンピオンの神姫はマオチャオだ。装備も基本的には通常のマオチャオのものだが、特徴的なのは争上衣の拳をヴェイントシュトースに換装しているところだ。

対戦相手も、奇しくも同じマオチャオ型。こちらは両手を旋牙に換装して、ぶちますいーんずを展開している。が、四体いる内の半分は既に叩き落されているようだ。

「さて、後半分、ぶちぶちと潰してやるのだ」

チャンピオンのマオチャオは、インファイターボクサーのようなスタイルで、すばやく前進する。丸いリングの中を右へ左へ身体を振りながら、ますいーんずの射撃を受けつつ突進する。狙いは残ったますいーんずだ。あつという間に壁際に追い詰めると、鋭い連打を見舞う。ますいーんずの耐久力ではあれは耐え切れないだろう。ヴェイントシュトースの拳はますいーんずと同じくらいの大ききがあるのだ。しかし、その一機を犠牲にして旋牙が背後を狙う。唸りを上げるドリルだが、敵を捕らえるには至らない。背を向けたままスリッピングで横に避ける。さらにそのまま裏拳気味の一撃を腹に見舞う。が、一瞬早く後ろに飛んで勢いを殺していたようだ。流石にマオチャオ型、反応の速さは折り紙付きだ。

「チャンピオンの神姫、まだ本気は出していないようですね」

シャウが誰にともなく言う。チャンピオンの神姫はフレイムライガーとあだ名され、炎を扱うはずだ。しかしまだ、それらしい動きは見せていない。再度、残ったますいーんずに狙いを定めている。

「マオチャオの機動力を突進することに特化して鍛えてあるんだ。やっぱり密着距離は危険な相手だな」

一方で対戦相手のマオチャオは、セオリーどおりの戦い方だ。ますいーんずの火力で牽制し、高い跳躍力で攪乱しながら旋牙の一撃を

狙っている。どちらの一撃も、まともに食らえば必殺だ。しかし、防御の技術ではライガーの方が一枚上手に見える。ボクシングで言うブロッキングと同ように、ドリルを支える腕をはじいて狙いを逸らせているのだ。そして、牽制であるますいーんずはほとんど落とされ、ライガーが密着する場面が増えている。得意とする距離は同じだが、攻撃のバリエーションも豊富で、跳び回っているはずのマオチャオが徐々に壁際に追い詰められている。

「壁を背負ったな」

「狙っていましたね」

やはりチャンピオンの神姫の技量は尋常なものではない。フツク気味のドリルの一撃をダッキングでかわし、屈んだ身体を伸ばす勢いで下から拳を突き上げる。くの字に持ち上げられたところを、打ち下ろしの右。電光石火のコンビネーションに、リングに叩きつけられるマオチャオ。場内のボルテージは上がる一方だ。

「追撃にいきませんね」

「もともと、あのチャンピオンの神姫は正統派だ。倒れてる相手への追撃なんて、考えないだろう」

それどころか、勝ち誇るように両手を挙げて観客にアピールをしている。その貫禄は、まさにボクシング王者のそれだ。崩れ落ちた身体を何とか持ち上げ、構えなおすマオチャオ。それに対し、悠然と構えるライガー。

「さあ、そろそろ決めてやるのだ」

その宣言に、一層観客は熱狂する。逆に苦い顔をするマオチャオをねめつける視線は、まさしく肉食の猛獣のようだ。一瞬置いて、突進するライガーの進路を、ますいーんずが遮る。それを一撃で屠り、なおも突進。だが、拳を振りぬいたその隙に、マオチャオがドリルを向けて自ら突っ込んできた。はげしい金属音が場内に響く。それが収まったときの光景は、想像を絶するものだった。

「なんだと……?」

「旋牙を……止めた……?」

暴力的に旋回するドリルは、ヴァイントシュトースの巨大な手に挟ま

れ、その回転を止めていた。

「教科書通りとは言え、今のは中々面白い手だったのだ……だから」
ライガーの顔が、愉悦に歪む。

「今度はちよつとだけ、本気出してやるのだ」

右拳から、炎が吹き上がる。左手で旋牙を握ったまま、大きく振りかぶる。炎を纏った拳が、渾身の力で叩きつけられ、マオチャオの身体が、軽々と外壁まで吹き飛ばされる。争上衣には、深々と突き刺さった拳の跡が刻まれている。

「さて……今ならサレンダーを受け付けてやるのだ」

胸の前で拳を打ちつけ、勝ち誇るライガー。マオチャオはまったく動けない。

試合時間は十二分。終わってみればチャンピオンが正当な強さを発揮して勝利した。

「強い……」

「ベタ足で殴りあう姿の方が印象的だけど、踏んでる場数が違うな」

「やり合っても、勝てる気がしないツス……」

ミーシャは早くも気を飲まれている。しかし、確かにそれだけの強さを見せ付けられた。

「メサルティム、そんなことを言っても、もしかしたら貴女があれを相手することになるのかもしれないですよ」

「冗談じゃねツスよ！ 決勝なら、それこそ姉さんの出番じゃないツスか。自分は、一回戦でもう充分ツス」

事前の打ち合わせでは、準決勝からはシャウを出す予定だ。これより上に挑むのに、温存する局面でもない。シャウも、上位に残る相手を想定して訓練をしてきたのだ。しかし、上位陣が俺の戦績を調べれば、すぐにシャウの戦い方には行き着くだろう。触れ込みとしては俺は売り出し中のサードリーガーということになっているのだ。となれば、何か対策を取られても不思議ではない。そういう意味では、決勝でシャウを出さないという選択肢も、ないではないのだが、それは黙っておくことにする。

しばらく待ったが、準々決勝の後半が始まった。もうひとつの試合も気になるが、目下の関心事は次の対戦相手が誰になるかだ。試合場には、黒いアーンヴァルとエウ克蘭テが入っている。アーンヴァルの方は一回戦をシードになった神姫で、榊刑事からもらったデータにも情報が載っていた。

「普通なら、本命はこちらですね」

「盲目の死天使、か」

黒いアーンヴァルの二つ名を呟く。盲目の死天使とあだ名されるあの神姫は、戦闘中に一切眼を開かない。それが彼女達の流儀だそう。そんなことをしても不利になりこそすれ、利点は何もないのだが、それでもこの地域の裏バトルで名を成している。

試合開始の合図と共に、二体の神姫が宙に舞い上がる。アーンヴァルもエウ克蘭テも、共に空戦を得意とする神姫だ。必然的に舞台は地面を離れる。先手を取ったのは、エウ克蘭テだ。最高速度ではアーンヴァルに大きく劣るエウ克蘭テだが、トップスピードまでの加速力ならエウ克蘭テが勝る。白い翼を大きく羽ばたかせて、エウロスを振るい襲い掛かる。対するアーンヴァルは、手にしたビームサイズを展開し、それを打ち払う。

「出たぞ、死天使の鎌だ」

その二つ名を象徴するような武器。元々アーンヴァルは、格闘戦には致命的に不向きだ。素体状態の腕力は、武装神姫の中でも一、二を争うほどに非力で、その精緻な動きは射撃や狙撃の方に向く。それでもなお、この神姫とオーナーは格闘戦という方法で戦果を上げているのだ。

「速度を上げてきましたね」

何合打ち合ったのか、徐々にアーンヴァルがその速度を上げてきている。最初はトップスピードに乗ったエウ克蘭テがペースを支配していたが、距離を取られることが多くなってきた。しかし、射撃武器を持たないアーンヴァルが一度攻めかかれば、エウ克蘭テはそれをいなして腕に装備したゼピュロスを応射する。

「どこかで見たような展開だな」

「私が白雪さんと戦ったときと同じです」

そうだ。花道の神姫と戦ったときも、最高速度で劣る飛鳥型が、射撃武器をうまく使っていたことを思い出す。あの時も、攻めているはずのシャウが逆に攻め掛けられているような感じが拭えなかった。この戦いも、繰り返し攻め掛けているアーンヴァルの方がゼピュロスの射撃で押されているようだ。

「しかし、本当に眼を開けてないんだな……よくあの速度で回避機動が取れるもんだ」

アーンヴァルは一撃加えては即座に離脱する姿勢を崩さない。しかしエウ克蘭テもその一撃をしっかりと守り、ゼピュロスで追撃する姿勢を崩していない。このままではいかに速度を上げようとも、アーンヴァルの勝ち筋はないように見えた。が、転機は突然訪れた。

「攻撃のリズムが変わった……?」

「あのアーンヴァル、シャウと同じことをやってる」

高速で飛ぶアーンヴァルは、方向を変えるのが難しい。速度が速い分だけ、大回りにならざるを得ないのだ。それを小さく回るためには、簡単だ。

「足を……!」

場内がざわめく。床やドームの天井を利用して、曲がる方向に足を押し付けて無理やり曲がっているのだ。シャウが出来るのだからほかの神姫にも出来るのが道理とは言え、こんなことまでしてくるとは恐れ入る。徐々に攻撃の間隔が短くなっていく。まだエウ克蘭テは受けることが出来ているが、応射する余裕はなくなってきている。

「誘われてるな」

僅かずつだが、エウ克蘭テの位置が天井に近づきつつある。意図的に下から突き上げる攻撃を増やしているのだ。

「あの技は……!」

アーンヴァルが、天井を蹴った。その軌道は見事な逆V字を描き、エウ克蘭テの翼を背後から切り裂いた。あれもシャウが白雪との戦いで見せた技だ。しかし、アーンヴァルのレッグパーツは着陸脚と

しての側面が強く、あんなことが出来るというのはおよそ信じがたい。シャウの武装脚と違って、あんなことをするのは想定されているはずもなかった。地に叩き付けられたエウ克蘭テは動けない。死を告げる黒い天使はゆっくりと近づき、獲物の首を、無常にも刈り取った。翼をもぎ、首を狩る。それも死天使のやり方だ。どこまでもこのやり方を変えず、自分の流儀で戦うのが死天使のスタイルらしい。

正統派のチャンピオンと違い、死天使はこの場では完全な悪役だ。もつとも、その無慈悲な残酷さを楽しみにしている観客も多いのだろう。歓声はひとときわ高まっている。

「事前の情報から、ある程度分かっていたこととはいえ、こっちの装備の完全な性能上位機だな」

「しかも元々アーヴアルは高速戦闘用ですからね。その点でも私より性能は高いでしょう」

「チャンピオンに挑戦する前に、厄介な相手を倒さなければならんか」

観客席から大きな声が上がった。もうひとつの試合にも決着がついたのだろう。勝つことが目的ではないにせよ、ただ負けるわけにはいかない。理想を言えば決勝を勝って、神姫を押しえるのが最善手なのだが、一筋縄で行く相手ではない。

「さてさて、どうしたものかな」

俺は一人、嘆息交じりに呟いた。

休憩時間が終わり、いよいよ準決勝が始まった。準決勝からは一試合ずつ行われるようになる。その分この先は賭博の方でも大きく金が動く。試合前の休憩時間は、既に目の肥えた観客達による賭け馬予想の時間となっていたことから明らかだ。

例によって中央のモニタには、この試合の払い戻し倍率が表示されている。それによると、やはり盲目の死天使の方が遥かに優勢で、俺の方は万馬券扱いだ。まあ、俺はこの裏バトルではポツと出の新人だし、そこは仕方ない。むしろ二回戦のアルの勝ち方で、僅かに人気が付いたかな、という程度だ。

「シャウ、行けるか？」

「ええ、主が望むのならば、いつでも」

シャウの装備は、高速セツティングにしている。低速で機動力を武器にすることも考えたが、射撃武器のないシャウが、高速目標相手に間合いの選択権を押さえられるのはやはりまずいということになった。追加の可動式垂直尾翼で、以前よりも旋回速度は上がっているが、この狭いフィールドでどこまで効果が出るかはちょっと疑問だ。「エウ克蘭テの戦いで見てたと思うけど、鎌は刃の方を受けるようにして。ポールを受けると、刃はその分食い込んでくるから」

「承知しています、主。少し興奮気味ですか？」

「そりゃあね。裏バトルのダークヒーロー、悪役、ヒール、そういう役どころを食っちゃまおうって言うんだから、緊張も興奮も多少はするさ」

背後には、盲目の死天使同様に大きな翼を背負って、シャウがフィールド内部に入る。

反対側からも、巨大な機械翼を背負った、黒いアーンヴァルが入場してくる。やはり、その瞳は閉じられたままだ。

「貴女達との踊りは、面白いかしら……？」

不意に相手のアーンヴァルが、通信回線を開いてくる。

「精々私の無聊を慰めてくださいましね……？」

そう言うのと、手にしていたヘッドセンサーアネー口を被った。

「面白いかどうかは分かりませんが、死力は尽くさせていただきます」
シャウがフィールド内で答える。鬼姫とジユダイクスは既に展開済みだ。ついでに言えば光線系武装と戦うことも見越して、菊川さんに頼んであらかじめ対電磁処理を施してもらってある。これで金属の塊であるシャウのメイン武器に、ビームサイズと打ち合う性能を持たせることが出来ている。

「シャウ、相手はさつききのゼピュロスの射撃をほとんど全てかわしきっている。並みの腕前だと思ふなよ」

「……重々、承知」

試合開始の合図と共に、宙に駆け上がる黒と青の影。試合場のほぼ中央で、互いにぶつかり合う。高速飛行型の神姫同士、トップスピードに乗るまでは時間がかかる。が、その間を惜しむように激しく打ち合う二人の神姫。手数の上ではシャウが有利のようだが、四刀を持っているもすべて同時に使えるわけではない。重量武器である実体剣を振るうためには、カウンターウエイトとして対になる動きを取らなければ機体バランスが保てないからだ。

「相手の技量はこっちより上だ。手数を惜しむな」

「元よりそのつもりです」

お互い、回避機動をほとんど取らずに打ち合っている。回避のために軌道を変えれば、その分速度が落ちる。それを嫌っているのだ。回転数が徐々に上がっていくのが外からも見てとれる。ここからが本番だ。

「そろそろペースを上げていくぞ」

「足を使います、主」

高速を維持したまま、床に足を押し付けて無理矢理曲がる。一本調子だった攻撃リズムに、急な変化が現れる。

「あら、貴女も、同じことが出来るのね……?」

相変わらず目を閉じたまま、冷静に死天使が笑う。天井に足を押し付けてクイックターン。成る程、さすがの技量だ。

「面白いわ、もっと、もっと踊りましょっ!」

回転数はさらに上がり続けている。あのクイックターンは技としても相当ピーキーな部類だ。安全な機動とは程遠い。それでも、死天使は余裕を見せている。むしろ余裕がないのはシャウの方だ。

高速装備の神姫の戦いの肝は、機動力の奪い合いだ。如何に相手の速度や機動を制限するかに勝負の鍵は隠されている。特に、翼という弱点を背負ったの戦いになる以上、一発一発が致命傷だ。もし翼に攻撃を食らえば、それまでは自分の武器だった速度が、そのまま自分に牙を剥いてくる。そうなる前に、寸刻でも速く相手を追い詰めねばならない。

特に、今回の相手はアーンヴァルだ。空戦での最高速度や対応力では一歩劣っている。相手に速度で劣るということは、この狭いフィールドでは否応なく壁に押し込まれることを意味している。速度が上がるほどに、最高速で劣るシャウは追い込まれていくのだ。

刃が激しく火花を散らす、両者とも一瞬たりと動きを止めない。既に何合打ち合っただろうか。相手の意表を突くはずだったクイックターンも、幾度となく繰り出されている。だが、そこはまだ俺の手の内だ。

「頃合いだ、シャウ」

「はー」

相手はうまく誘導されている。クイックターンよりも速く反転し、翼に一撃を見舞えば決着だ。シャウは天井を蹴り、逆V字に跳んだ。この一瞬のために、何度も打ち合わせ、反転のタイミングを読ませたのだ。狙い澄ました、必殺の一撃。大きく振るわれた鬼姫は、不可避の一撃になる、はずだった。

「あら……」

「!？」

反転速度が速い。いるはずのないところに、死天使はいた。それは相手にとっても意外なことだったようで、互いにすれ違ったまま、あらぬところで得物を振るっていた。

「主、今のは？」

「タイミングが被った。あちらでも、同じことを狙っていたな」

死天使も、仕掛けるタイミングを狙っていたのだ。攻撃の速度、リズム、間合い、それらすべてを相手に読ませ、最速の切り返しで一撃を狙う。その策も、仕掛ける時期も、それと意図せず全く同じだった。「驚いたわ。貴女、そんなことまで出来るのね？」

「お互い様でしょう」

再び、打ち合いが再開される。こちらの手札は全て切ってしまった。相手も似たようなところではあるのだろうが、地力の勝負に持ち込まれればこちらが不利だ。激しく散る火花と裏腹に、思考は冷たく冷え込んでいく。どうする。どうにかして、勝ち筋を見つけないければ。

我がことながら、よく持ちこたえている。背中の翼は風を切り、エンジンとはつくにフル回転で回り続けている。だが、黒い天使にはまだ余裕がありそうだ。それも当然、相手は最速の神姫、アーンヴァルだ。しかも本来の装備とは異なり、装甲までぎりぎりに削り込んでいる。神姫一人を大空に撃ち出すのにも余りある推力を持っているのだ。

「貴女、やっぱり面白い方なのね。どうしましょう、とても、とても楽しいわ」

すれ違い様に、天使が微笑む。が、その微笑みは死を告げるものそれだ。

「どうしましょう、もったいないわ。これほど踊れる方、滅多にいませんもの」

心底楽しそうな声。振るわれる鎌は殺気に満ち溢れている。それでもなお、天使は楽しんでいるのだ。おそらく、互いの命を賭けた舞踏会。それこそが死天使の無聊を埋める愉悦なのだろう。

「でも、この先まで、貴女の羽についてくれるかしら？」

さらに速度が上がる。私の翼は、既に限界だ。徐々に、本当に徐々にだが、押し込まれ始める。旋回から打ち合いまでの距離が縮まる。充分な加速を得られない。一度押し込まれ始めると、一撃一撃の速さが段違いに上がったように感じられる。そして、その重さも。

「あら、やっぱり貴女、ここまでなのね」

天使が微笑む。まだだ。まだ私は、主の策をなし得ていない。必死に速さを振り絞る。しかし、性能差は明らかだ。徐々に床面が近づいてくる。押し返せない。

「貴女、とても素敵だったわ。とても楽しい一時をありがとう」

反転が間に合わない。そう思った次の瞬間、私の翼は両断されていた。

シャウの姿が、地に落ちた。一瞬遅れて、切り落とされた翼も。さらに数瞬遅れで、黒い天使も降り立った。落下の衝撃で、鬼姫はシャウの手を離れてしまっている。ゆっくりと歩み寄る天使は、俺の視線に気づくと、微笑んで会釈した。

「本当に楽しかったわ。ありがとう。そして」

シャウの手が、なくした鬼姫を求めるかのようにさまよう。それを見て、天使の笑みが、死神のそれに変わる。両の手に握られた大鎌が、ゆっくりと振り上げられる。

「さようなら」

「撃てー」

瞬間、光が弾けた。持ち上げられたシャウの腕に備えられていたアームガードから、ビームが放たれたのだ。一発、二発。本体を逸れた光の矢は、しかし黒い翼を撃ち抜いた。三発、四発。落下のダメージもあるのだろう、至近距離だが、狙いが正確とはとても言えない。五発、六発。そのうちのひとつが、ヘッドセンサーを吹き飛ばす。ようやく開かれた天使型の瞳は、驚愕の色を隠さなかった。完全な奇襲。元々、相手を視認していないのだ。そこにどんな装備が隠されているか、死天使には知りうるはずもなかった。

仰向けに倒れる天使。シャウはビームガンを向けたまま、ゆっくりと身体を起こした。この奇襲が、俺の考え付いた最後の策だ。追い込まれるふりをして落下の衝撃を和らげる距離まで押し込まれ、わざと相手の一撃を食らう。その後、止めを狙う相手の隙を突いて隠し通したビームガンで反撃。だが、そのためにメイン武装の翼を賭けるな

ど、まったく、下策も下策だ。今までの飛行タイプとの戦いでは、全て翼を切り落としてから止めを刺しているのが死天使の特徴だったとはいえ、一撃でやられないという保障も、どこにもない。だが、だからこそ相手もその演技を疑わなかった。

シャウが立ち上がる。砲口は天使に向けられたままだ。が、決め切れていない。おそらく、そろそろ残弾は切れるはずだ。

「あは、あははは、あはははははー！」

仰向けの天使が、大声で笑い始めた。その目は、大きく見開かれている。

「貴女、本当に楽しいわ。本当、こんなに面白かったのはいつ以来かしら。ねえ、オーナー？」

「本当に。退屈しねえなあ、神姫バトルってやつあよ」

相手のオーナーも、こちらに回線を開いた。

「サレンダーだ。翼あやられちゃ、次の試合には勝てねえ。それでいいだろう？」

「ええ、ええ、勿論ですとも。こんなに楽しい相手、ここで殺してしまつてはもつたいたいわ」

リアユニットをパージした天使が、ゆっくりと立ち上がる。その顔は満面の笑みに彩られていた。

「貴女、次に踊るときは翼なんてもがず、先ず首を刈つてあげる。ええ、それがいいわ、そうしましょう」

そう言うと、笑顔でシャウに会釈をした。シャウは未だに、ビームガンの構えを解こうとしない。

「それでは、御機嫌よう」

黒い天使はそれだけ言うと、オーナーと共にさつと背を向けて試合場を立ち去った。

準決勝の試合が全て終わり、控え室には、俺達の他は誰もいなくなった。他の参加者は試合が進むにつれ、一人、また一人と消え、今や一人も残っていない。次の試合が最後なのだ。連戦にならないように配慮された、休憩という幕間。だが、俺達の間流れている空気は悲壮なものだった。

「ウイングパーツは全損、リアユニットも落下の衝撃で破損。飛行装備はもう使えないな」

「これから決勝ですのに、完全に陸戦用装備しか運用出来ないのは痛いですね」

準決勝での勝利は、まさに薄皮一枚のところでもぎ取った勝利だった。それだけに、その損害も馬鹿にならない。次の試合をどう戦えばいいのか、その組み立てからやり直した。

「榊刑事が今この瞬間にも踏み込んでくれないかな……」

そんな、ありえない期待もつい口をついてしまう。計画では、決勝で戦っている最中に踏み込む手はずになっている。つまり、どうあっても決勝戦をまったく戦わないわけにはいかないのだ。

「リアユニットが使えないとサブアームも乗せられない。足が無事だっただけでも良しとするしかないのかな」

「そうは言いますが、陸戦であるチャンピオンと戦うのは、少々不安があります。まして、私のスタイルではあの突進を防ぎ切れるかどうか」

まさしく、そこが問題なのだ。一応、事前の予定では、チャンピオンの神姫とはシャウが戦う予定でいた。いかに跳躍が得意なマオチャオとは言え、空を自由に飛べるわけではない。空戦ならば、シャウの土俵だ。そのはずだった。が、今やその作戦は根本から瓦解していた。

「やっぱり、ボクが決勝出ようか？」

「いや、駄目だ。手はずでは決勝の途中から、榊刑事が来る。となると試合場の外は大混乱になる可能性が高い。そのときに相手のマス

ターを見失うわけにはいかない、そのための見張り役として、アルはどうしても外せない」

警察が踏み込んだ時点で、相手が逃げ出すという可能性も否定出来ない。その場合も、アルならば武装をロートケーファに変形させ、空から追うことも出来る。機動力と眼を考えるならば、現状アル以外には持ち駒がない。

「武装パーツは交換出来るって言ったって、予備のパーツなんかそうそうないしなあ」

神姫の武装は高価なものだ。弾薬のような消耗品や、駆動部分などの保守部品ならともかく、そうそう予備まで用意出来るものでもない。カスタム品にまで手を出せば、その金額は天井知らずに上がっていく。それがあつたからこそ、準決勝という舞台でも、翼の破損による対戦相手のサレンダーが成つたのだ。

もつとも、仮に今ここに新品の武装セットがあつたとして、パーツを換えてすぐに元通り、とはいかない。実際に使う側としては、パーツごとにフィーリングが違つたりするらしい。特にシャウはひとつの武装を使い込んで実力を発揮するタイプだ。そうした微妙な感覚の差異が、実戦では大きな狂いになりかねない。

「さてはて、どうしたものか……」

「主、危ない！」

突然、シャウが飛び出す。硬質な音が響く。何かが、俺に向かって飛んできた、のか？ 肩の可動装甲を盾にして防いだらしいシャウが、入り口の方をねめつめた。

「あー、本当に死天使さん、負けちゃつたんだー、決勝はあの人とやるつもりだったのになー……」

そこには、金髪の男が立っていた。気だるそうな声をかけてくる。あの顔は覚えがある。

「試合前に、こんなところで何の用ですか」

そこにいたのは、チャンピオンだ。傍らには、マオチャオではなくハウリンが控えている。どうやら、さっきの音はあのハウリンが放つた一撃のようだ。脚部の脚甲・駆狗の爪は大型のものに換装されてい

る。それ以外の武装は見当たらないところを見ると、さっきの一撃は蹴りだったのだろうか。

「んー、決勝で当たるのが、見たこともない新人さんだっというから、挨拶？」

「それはどうも、気を遣ってもらったようで」

とんでもない挨拶があったものだ。シャウが気づかなければ、怪我では済まなかったかもしれないと言うのに。

「いやーねー、サードリーグで売り出し中の新人だっというから、どんなもんか見に来ただけだよー。いいねー、やっぱり、キラキラしてて。高校生ぐれーかな？ そのくらいの頃ってさ、ユメとか、キボーとか、見ちゃってんだろーなー」

声に反して、その眼はぎらついていた。その光は、憎しみ、だろうか。

「そーいうのってさー、ムカつくんだよねー、マジで。こんなところまで来てさー、そういうの見たくねーんだよねー。あんまりにもムカつくんで、つい一撃やっちまったわー」

「数年前まで、公式の試合にも出て成績上げてた人とも思えないですね。なんか表のリーグに恨みでもあるんですか」

チャンピオンの略歴は、もらっていた。何年前か前、公式の試合で八百長を噂され、以来表のリーグから姿を消している。それ以前から公式の裏バトルに参加しているという話があったのは事実のようだが、公式リーグへの浅からぬ思いはあるようだ。

「……あー、オマエ、マジでムカつくわ」

瞳に燃える光に、怒りの色が差した。

「決勝では、テメーの神姫、ぶっ壊してやるよ。二度と神姫に触ろうなんて思えなくなるくれー、徹底的に、よ……」

吐き捨てるようにそう言うと、チャンピオンはハウリンを伴って去っていった。

「シャウ……」

「はー」

「どうしよう、か……」

完全に計算外だ。チャンピオンの神姫として情報をもらっていたのは試合に参加していたマオチャオだけだ。だからこそ試合中の見張りはアルだけで、と考えていたのだが、もう一体神姫がいるのでは話が変わってくる。

「あのハウリン、強いな……」

「ええ、今の蹴りの鋭さ、マオチャオのそれに比べても見劣りしません。防げたのは、本当に偶然でした」

つまり、チャンピオンは騒動になった場合、あのハウリンをけしかけてくる可能性がある。そうなると、見張り役であるアルはチャンピオンを見失う可能性が出てくるのだ。それは避けなければならぬ。

「もう一枚、カードが要るか」

とは言え、手持ちは限られている。現状唯一機動力を温存しているアルは見張りから外せない。そこから考えると、選択肢はひとつしかない。

「やっぱり編成を変える必要があるな」

三人の神姫が、こちらを振り向いた。全員、その表情は真剣なものだった。

試合場に入ると、それだけで割れんばかりの歓声が俺達を迎えた。視線を上げると、四面モニタに賭け率が表示されている。最終倍率は八対二でチャンピオンが有利。妥当なところだ。むしろ、二割も俺に賭けている客がいることに驚いた。チャンピオンの対抗馬だった、盲目の死天使を下したことで、期待感が上がったのかもしれない。

「さて、頼むぞ、ミーシャ」

「ううう……ご主人の神姫だったことを、今日ほど恨んだことはねーッス……」

決勝直前の控え室で、悩んだ結論がこれだった。アルは既に、チャンピオンを見張れる位置に移動している。シャウは陸戦装備で待機だ。万一さっきのハウリンが出てきたら、その相手をしてもらう。そうして残ったのが、チャンピオンと直接戦う役、というわけだ。

「自分、完全にババ引いた気がしねーッス……」

「控え室でも言ったけど、力押しにするんならさっきのハウリンよりもチャンピオンの方がやりやすい。それにあのチャンピオンはベイビーフェイスだ。万が一負けても、酷いことにはならないよ。第一、チャンピオンのモーシヨンは予習してあるんだろ？ それなら手札の分からないハウリンよりは、ずっとやりやすいだろ」

「ううう……死んだら化けて出てやるッス……」

完全に及び腰のミーシャを、なんとか励ます。実際、空戦装備が使えなくなった時点で決勝をミーシャにスイツチすることは考えていた。ミーシャのスタイルならば、同質の強みを持つもの同士の、主導権の取り合いに持っていける。

「二回戦に出てきたストラーフが相手なのだ？ てつきり決勝は、死天使を倒したエスパディアが来ると思ってたのだ」

相手のマオチャオ、フレイムライガーが回線を聞く。その声から察するに、対戦相手がシャウでないことが不満らしい。

「おめーら、あちしを、嘗めてるのだな……?」

ミーシャをねめつける視線は、早くも獲物を狩る猛獣のそれだ。そ

の目には、怒りさえ灯っている。

「あちしはなあ、嘗められるのは大っ嫌いなのだ……そっちがそのつもりなら、マスターが言うように、本気で地獄を見せてやるのだ！」

「だああああ！ めっちゃ怒ってるッス！ もうやだああああ！ 帰る！ 帰るッスうう！」

戦う前からミーシャは完全に気を飲まれている。だが、無情にも決勝戦開始の合図が鳴り響く。それと同時に突っ込んでくるチャンピオン。

「来るぞ、前に出ろ、ミーシャ！」

「もおお！ こうなりや破れかぶれッス！」

一回戦でミーシャのメイン武装であるジレーザロケットハンマーは壊されている。今回はチーグルサブアームと、サブーカ強化レッグに、胸部装甲のみだ。申し訳程度に一回戦で使ったりボルバー、ヴズイルフがホルスターに収められ、腰にぶら下がっている。相手の装備も鉄耳装に天舞靴、争上衣とヴァイントシユトースを組み合わせた腕部にキャットテイルと、どちらもほぼ素手での勝負になる。試合場の中央で向かい合うと、スタンダードスタイルに構えたチャンピオンから速射砲のような左ジャブが飛んでくる。

「ミーシャ、腕を狙え！」

「ぬりやああああ！」

恐ろしいまでの勢いの連打を、サブアームを巧みに使い、腕を叩いて拳をそらす。全てを当てるつもりはなかったのだろうが、それでもチャンピオンの表情に驚きの色が現れる。

ボクシングで、絶対に全てを避け切るのは不可能と言われるのがジャブだ。圧倒的なスピードでの連射は、人間の反射速度を超えて飛んでくると言われる。しかしそれは、人間同士での話だ。人間より遙かに神姫の反応速度は速い。

「これぐらい！ ならば！ 姉さんの！ 刀の方が！ 怖ええッス！」

必死の形相だが、ミーシャの動きは理に適っている。左から繰り出されるジャブを、右側に回りこむことでうまくかわしながら捌いたの

だ。

「ふーん？ 中々やるのだ」

再度、左のジャブを狙って突進してくる。が、ミーシャの動きは適確だ。両方のサブアームを振るって左拳を捌く。身体の運び方からも、怯えや動揺の色は見えない。

「なるほど、ただの雑魚ってワケじゃねーのだな……？ なら、今度はちよつと本気を出してやるのだ」

三度、突撃。振るわれた左拳を、必死の形相で捌く。前にも増して速度を上げる左拳の連射。その中の一刹那。右のストレートがミーシャの身体を貫いた。

「ミーシャー！」

「ツ……！ 大丈夫ツス、たまたまツスけど、サブアームが庇ってくれたツス」

「ふふん、ジャブを避けることに集中しすぎなのだ。そんな奴を撃ち抜くなんて……たやすいのだー！」

いつの間にか、ミーシャは壁際に追い詰められている。プレッシャーのかけ方は、まるでボクサーのような巧みさだ。自分の右にミーシャが避ける動きを知って、壁際に誘導された。

「さあ、どんどんいくのだ」

セオリー通り、左から攻めてくる。しかし、ミーシャも攻められっぱなしではない。左ジャブの隙間に回し蹴りをねじ込む。が、ファイティングポーズを崩さずチャンピオンはダッキングで蹴り足の下を潜り抜ける。背中を向けた一瞬、ダッキングで屈んだ身体を伸ばしながら、下から拳を突き上げる。準々決勝で見せたパンチだ。しかし拳は大きく空を切る。回し蹴りの勢いをそのままに横に飛んだのだ。

「ツぶねツス！」

「集中しろ、来るぞ」

しつこいくらい、左からの連打。回転数はまだ上がるようだ。しかも、右のストレートも混ぜ込んできている。必死に腕を叩いてブロッキングする。が、突如その動きが止まった。チーグルサブアームを

ヴィントシュトースの巨大な手が掴んでいる。

「せえ、のツ！」

「ぐえツ!」

両手を封じて飛んできたのは、なんと、鉄耳装を使ったヘッドバツトだった。

「それは反則だろ……ツ！」

口をつけて出たが、この試合はボクシングではない。いや、それどころかルールのある試合とも、本来は呼べないものだ。意表を突かれてはいたが、ミーシャは咄嗟に自分の腕でガードを挟んでいた。だが、それさえも布石に過ぎなかった。

「スキル発動、スーパード……ねこパンチなのだ！」

両の拳が輝き、連続で叩きつけられる。チーグルを身体の傍に引き戻し、交差させてガードの姿勢を取るが、関係ないと言わんばかりの勢いだ。

「ぐツ……この……ツ！」

スキルの終了と共に拳の光が消える。それを狙って、下から苦し紛れに蹴り上げる。だが、チャンピオンは余裕の表情でバックステップを踏み、距離を取る。主役の攻勢に、観客達も喜びの声を上げている。

完全にまずい流れだ。一撃強打という強みを見せつけ、相手にそれを押し付けていくのがミーシャの勝ち筋だ。今は逆に、相手の強さを押し付けられてしまっている。

「ミーシャ、ダメージは？」

「ガードの上からだったんで、何とか……でも、ここままだやジリ貧ツス、何とかしないと」

「今は主導権の取り合いだ。こっちも攻めていかないと、相手のいいようにされるばかりだ。前に出ろ」

「了解ツス、こんのおおおツ！」

ゆっくりと距離を詰めようとするチャンピオンに、逆に向かっていく。どの道、前に出られなければすぐに壁際まで追い詰められてしまうのだ。

「そんな玉砕戦法が通るほど、甘くねーのだ！」

ミーシャを迎撃するかのように、左のジャブが弾幕を作る。が、それを無視して突っ込んでいく。ブロックはしてはいるが、完全には間に合っていない。

「そろそろ、さっきの勢いはどこにいったのだ？」

「ふんぐうううう！」

右の拳も同時に振るわれ始める。左のジャブが機関砲なら、右のストレートは大砲だ。ガードもそっちに割り振らざるを得ない。弾幕の中で、更なる大砲に備えて防御を考えねばならないという、絶望的な状況だ。その中でも、ミーシャの眼は死んでいない。何かを、じっと待って耐えている。

その一瞬は不意に訪れた。ストレート気味に打ち込まれる左。伸ばされたその左腕に、サブアーカ強化レッグが絡みつく。

「飛びつき腕ひしぎ十字!？」

場内もざわめく。サブアームが、がっちりとヴィントシュトースの拳を押さえ込み、肘関節を固めていた。そして、ミーシャの素体腕には、いつの間に抜いたのか、ヴズイルフが握られている。そのまま、固められている肘の内側、無防備な関節機構に弾丸を撃ち込む。

「ぬああああッ！」

咄嗟に右拳に炎を纏わせ、振り回す。が、即座に腕ひしぎを解いて、飛び退く。すぐに構えを取りなおすミーシャに対し、チャンピオンは左腕が上がらない。だらりと垂れ下がった左腕の肘からは、火花が散り煙が上がっている。

「ネズミめが……やってくれるのだ……」

「ネズミだって、こんだけ追い詰められれば猫を噛むことだってあるッス！」

「いい気に、なっつてんじゃねーのだ！」

左腕はもう動かないだろう。それでも構えは大きく変えず、身体ごと突っ込んでくる。一方でミーシャの方も、直撃こそ食らっていないが、度重なる攻撃で、サブアームのそこかしこにへこみが作られている。

距離を測る役割のジヤブを捨てて、一撃必殺を狙ってくるチャンピオン。だが、ミーシャも片腕で攻略出来るほど甘くない。逆に、両手が見えるミーシャの方が、打ち合いの手数は多くなっている。それをスウエーバックやダッキングでかわし、チーグルの内側に潜り込んで、一撃。その拳には、お得意の炎が宿っている。

神姫の装甲も、武装と同様大半は強化プラスチックだ。それは軽く、強度も充分だが耐熱性はさほど高くない。幾度もその拳を受け続けているチーグルの装甲板は、歪むだけでなく溶けて落ちてしまった部分もではじめている。この調子だと、じきにサブアームが動かなくなってもおかしくない。

大きく振るわれたフックに、回し蹴りを合わせる。一瞬動きが止まり、弾けあつたように離れる。開いた距離を寸刻待たずに詰め、拳を差しあう。お互い、クリーンヒットこそ無いものの、既に全身は傷だらけだ。しかし、ミーシャのそれとは対照的に、チャンピオンの顔には笑みが浮かんでいた。

「楽しいなあ、ネズミ……！　面白くって、たまんねえのだ！」

「こっちは！　そういうの！　ご免蒙りたいツスけどね！」

纏わりついてくる笑顔を振り払うように回し蹴りを放つ。が、それは不用意すぎた。ダッキングでその下を潜り抜けるチャンピオンが、屈めた身体を伸ばしながらの一撃を見舞う。かわし切れないで、ついに一撃を食らう。炎こそ纏っていなかったが、腹に深々と拳が突き刺さる。

「ぐッ、は……！」

ミーシャの動きが、止まる。その隙を、チャンピオンは見逃さなかった。即座に拳を返し、上段から打ち下ろす。叩きつけられるように、ミーシャはダウンした。

周辺が、にわか騒がしくなってきた。それは一気に騒乱と言うような騒ぎになり、大声や物が壊れる音なども響いてきた。警察が乱入してきたのだらう。周りの観客も、ほとんどが席を立って逃げ出そうとしている。

「シャウ」

「はい」

試合場とは別の方向から、刺すような視線を感じる。シャウが飛び、防ぐ。激しい金属音は、控え室で聞いたそれと同質のものだった。あのハウリンだ。

「……テメー、やつぱり備えてやがったな」

「さあ、どうでしょうね」

周囲の喧騒を尻目に、チャンピオンがゆっくりとこっちに向かってくる。

「逃げなくていいんですか。警察、来てるみたいですけど」

「随分余裕があるじゃねーか……テメーは自分の心配してな」

ハウリンが、再び身を屈める。

「主、征きます」

「任せる」

手に鬼姫を携えて、シャウが跳ぶ。相手のハウリンは、やはり蹴りだ。脚甲・駆狗の、換装された大型の爪を、交差した鬼姫が受け止める。

「メインの武装潰されてんのに、やるじゃねーか」

当然だ。シャウは決して空戦一辺倒の神姫ではない。陸戦装備でも充分に戦えるのだ。今だって訓練では充分に使い込んでいるし、ミーシャの相手をするときはほとんどこの陸戦装備だ。

打点の高い蹴りが繰り出されるのを、切り払う。しかし高く上げられた爪は、そのまま踵落としの要領で振り下ろされる。だが、こちらは二刀だ。しかも陸戦装備で、思う様剣を振り回すことが出来る。斬り下ろしを防ぎながら、もう一刀で反撃。が、膝蹴りでそれを撃ち落

とす。持ち上げた足をそのままに、胴回し回転蹴りからの、二段蹴り。それを防ぐと、上段の足刀。それをかわすと、水面蹴り。二本の足を器用に使い、右から左、上から下へと、次々と多彩な攻撃を繰り出してくる。その速度は、決してシャウの刀に劣らない。

「ブラック、あとが支えてんだ、さっさと片付けろ」

「了解、マスター。スキル、発動、『疾風怒濤』！」

オリジナルのスキルか。両足の脚甲・駆狗が光を帯びる。その瞬間から、ブラックと呼ばれたハウリンの速さが上がる。反撃の隙どころか、息をも吐かせぬほどに、速く、ただ速く繰り出される足技に、シャウも防戦一方だ。が、追いつかない。足払いで体制を崩したシャウが、床に落ちるより速く蹴り飛ばす。試合場の外壁に叩き付けられたところを、跳び蹴りで追撃。それは辛うじて鬼姫で受け止めていたが、そのまま壁に縫い付けるように、連撃。

「……速い、ッ！」

「堅いな、速攻で決着をつけようと思ったのに」

肩の可動式の盾までフルに使って守勢に回る。それを尻目に、軽い動作で一旦距離を取るハウリン。

「マスター、先に逃げてくれ。そう時間はかけない」

「おう、ついでにオレンジの奴も拾ってこい。サツに押さえられたら厄介だ」

ミーシャと戦っているマオチャオのことか。そう言うと、チャンピオンはさつと背を向ける。後を追いたいのが、今はアルに任せるしかない。騒ぎはさらに大きくなり、チャンピオンの姿もあつという間に人波に紛れてしまった。

「さて、そういうわけだ。なるべく早くご退場願おうか」

「そう簡単には行かせるわけにはいきませんよ」

言うが速いか、駆け出すシャウ。だが、その刃は空を切る。

「遅い遅い、それで己を斬るつもりか！」

その言の通り、ブラックは速かった。いや、速すぎた。いかに高い走破性を誇る犬型とはいえ、着込んでいる胸甲・心守は決して軽いものではない。にも拘らず、ブラックの機動力は強化レッグを履いた

シャウよりも高い。

「はっ、その程度でよくも大口を叩いたものだ」

二撃、三撃と、連続で蹴りを入れると、即離脱する。その足は一瞬たりとも止まらない。恐らく、さつき使ったスキルの効果もあるのだろう。未だにブラックの両足には、スキルを発動したときの光が灯り続けている。

「粘られても面倒だ。オレンジの馬鹿めを拾って、マスターを追わねばならぬぞな」

ねめつけてくるその視線は、やはり肉食獣のそれだった。

「ぐぬう……ッ！」

倒れたストラーフが立ち上がる。中々楽しませてくれたが、その足取りは既にふらついている。会場の大騒ぎは、既に試合場の周りまで押し寄せてきている。何かあったのだろうが、この試合場からは分からない。が、傍らにいるはずのマスターも姿が見えない。

「お、まだ楽しませてくれるのだ？ でも、残念、そろそろケリをつけてやるのだ！」

「こっちも、いい加減終わりにしてーッス……もつとも、負けてやるつもりはねーんすけどね！」

まだ軽口を叩く元気は残っているらしい。ふん、それならそれでいい。試合前にマスターは容赦せずにやれと言っていたが、場合が場合だ。さっさと片付けて、マスターのところに帰るに限る。

「それじゃ、望みどおり、終わりにしてやるのだ！ すーぱー、ねこパンチ！」

左手の感覚は既がないが、残る右手には光が灯る。身体ごと突進して距離を詰める。大きく振るわれた拳が、ストラーフの眼前に迫る。

「まだまだッス！ デモリッシュ……クロー！」

拳の動きに、しっかりと合わされた。寸刻押し合い、お互いに距離を開ける。

「なるほど？ 安易にスキルぶっぱしても倒せない程度には余力があ

るのだな？」

「おかげさまで、ツス」

強がり。確かに攻撃スキルは強力だが、発動する技のモーションはどんな神姫が使っても大きく変わらない。そこを合わせるくらいのこととは出来たか。しかし、もう身体はぼろぼろのはずだ。さっきのスキルも、パワー型のストラーフにしては押しが弱々しかった。精々耐えて、もう一撃だろう。そして、スキルが駄目ならば、自分で磨きぬいた技がある。

「それじゃあ、改めて、これで仕舞いにしてやるのだ！」

頭から突っ込んだ。腕は片方しか使えないが、半分死んだストラーフの止めならば、充分すぎる。接近を嫌うように、チーグルサブアームが振るわれる。単調な攻撃だ。ダッキングでそれをかわし、得意の一撃を見舞ってやる。そう思った瞬間、世界が、回った。

二撃、三撃、四撃……次で、一息。

息を吐かせぬような連続攻撃だが、ハウリンの蹴りはどの方向から来るものでも五発で一組のようだ。現状では、守り切れれば勝ちなのだ。確かに速い。が、守勢に徹していれば、守り切れない攻撃ではない。

「……なぜ邪魔をする」

連撃の合間に、ブラックが呟くように言った。

「貴様らのように、日の光の下で戦えるマスターが、ここに堕ちてこざるを得なかった己らを！ 何の故あって邪魔だてする！」

確か、彼女のマスターは八百長の疑惑をかけられて公式の場を追われたと聞いた。それまでは名の通ったマスターではあったらしい。ブラックの声は怨嗟に満ちていた。

「この場にしか！ こんな場にしか救われなかったマスターの邪魔をする権利が！ 貴様らにあるのか！」

その恨みは、私達だけではなく、彼女達を取り巻く全てのものに向けられた恨みだ。吐き出される怨嗟と共に打ち込まれる打撃は、さつきよりも数段重たく感じる。

騒ぎはさらに大きくなってきている。この調子ならば、すぐに警官がこの場にも来てくれるのだろう。しかし、それで彼女達が、彼女達のマスターが、救われるのだろうか……。

「……君のマスターに何があったのか、全部を知っているとは俺には言えない。でも、俺はこの場所で苦しむ神姫をなくしたいと思つてここに来た。君と君のマスターが苦しんでいると言ふのなら……」

主が、ゆっくりと口を開く。

「君も、君のマスターも、俺が救いたい相手の一人だ」

「綺麗事をぬかすなッ！」

飛び掛つてくるブラックを、押さえ込む。

「救えるものか！ 貴様ごときに！」

「救つてみせる！ シャウ！」

主の言葉が、背中を押す。今この場になつて、迷いは不要だ。ならば、私のやるべきことはただひとつ。

「私はただ、裁ち斬るのみ！」

「使われるだけの狗がッ！」

放たれる鋭い蹴りは、もはや重さを伴つた斬撃に等しい。触れれば、即、斬つて落とされそうになる。しかし、引くわけにはいかない。主は、願つたのだ。この方を、そのマスターを、救わんことを。ならば、その道を切り開くのは、私の務めだ。

「マスターの元へは行かせん、スキル、発動！ 『風躡華斬』！」

青く輝く光が、いつそう強く足に灯る。燃え上がるようなその足を振り抜くと、斬撃が、飛んだ。月牙のような輝く爪。飛ぶ斬撃を撃つてくるなんて、こちらの想定には入っていない！

「受け止めろ、シャウ」

咄嗟に鬼姫を交差し、スキル、『無銘・大顎』の構えで迎え撃つ。飛ばされた斬撃を、さらに後ろから斬撃で押す！ が、二重のスキルをひとつにまとめて襲つてくる。しかし大顎とて、ただの切断系スキルならそうそう遅れは取らない。

「せえ、やッ！」

最初から使われていたらもつとここまでの道は困難だったかもし

れない。大顎が、二本、三本と続けて放たれる『風躰華斬』を、全て押さえ込み、飲み込み、砕く！

そのまま突撃し、再度『無銘・大顎』！『疾風怒濤』の効果もまだ残る脚甲・駆狗とその爪めがけて一閃。脚甲・駆狗の要たる足首を切断した。

倒せた。あのチャンピオンを。

最後にチーグルサブアームをかわしたあの動き。ダツキングからのガゼルパンチはチャンピオンのお得意の動きだ。それだけに洗練され、一片の澱みもなく襲い掛かってきたあの動き。

それは、練習で何十回と攻略法を模索した動きと、寸分違わなかった。だから、出来たのだ。屈んだ姿勢にあわせ、飛び越える。そのまま相手の腰を掴んで、一回転し、床に叩きつける。カナディアンデストロイヤーと呼ばれる、大技だ。

「おい、ストラーフ」

チャンピオンが眼を醒ましている!?

まずい。もうこっちは出せる札は出し切っている。これで起き上がられたら、もうなす術がない！

「安心するのだ。もうさつきので動けねえのだ。一個、聞きてーことがあるのだ……」

「……なんスか」

「あちしは……何で負けたのだ……?」

「自分は、ただ練習しただけツス……対策立てて練習出来たから。それしか、言えねツス」

ただ、必死だった。姉さんに置いていかれないように、ただ必死で練習をこなした。勝因があったとすれば、自分にはそれしか思い浮かばない。

「練習、か……それは、強いわけなのだ……」

チャンピオンは仰向けに倒れたまま、そう言った。

事ここに来てようやく、チャンピオンの神姫の身柄の確保が成功し

た。あとは、もう一人、救わなければならない相手がいる。俺は、そう約束した。

会場を一人離れていたアルに回線を開く。

「アル、チャンピオンは、今どこだ？」

「あいあい、こちらアルキオネ！ チャンピオンさんは駐輪場のところでバイクの支度をしたまま動いてないよ。あくまで自分の神姫との合流を待つつもりらしいね」

この状況で保身に走るなら、神姫の回収と逃亡は必須だが、どちらかは諦めねばならない。それでも回収を諦めずにいるということは、存外悪いマスターでもないのだろう。

俺はアルのいる位置へ向かうことにした。

そこは海沿いの急造駐輪場で、大型バイクに跨ったままチャンピオンは待っていた。

「なんだ、テメー……まだ俺になんか用かよ……」

「ええ。むしろ、この話を聞いてもらうために、俺はここまで場を荒すことになったんですから」

「テメー、ブラックに俺を救うとか抜かしてたそうだな……」

「ええ……そのつもりです」

「舐めてんのか、てめえッ！」

チャンピオンの拳が、俺も右頬に刺さる。が、それほど強くない。「情けをかけたつもりかよ……俺はなあ、セカンドリーグの上位まで上り詰めたんだ！ こんなところで、情けなんかかけられる人間じゃねーんだよ！」

体勢を崩した俺に、もう一撃。

「くそがッ！ くそがッ！」

弱々しい拳だが、それは俺に叩きつけられている。怒りの向けどころは、他にないのだ。

「どう救おうってんだよ！ 八百長疑惑なんかで消えていったマスター一人、どう救おうってんだよ！」

「……そこからは、僕が話を変ろうか」

相変わらず、よれたコートで現れたのは、榊刑事だ。まだ会場の方

の喧騒は収まっていないが、先ずは頭狙いでここに来たのだろう。

「君には違法賭博への参加の容疑がかけられている。また、違法武装改造及び密造、MMS倫理規定違反、器物破損に伴うMMS保護法違反、などなど様々な嫌疑も一緒にね……」

「サツかよ……」

「まあそう毛嫌いしないでくれ。君には選択肢をあげようと思っっているのだから」

「選択肢、だと?」

「ああ、そうだ。先ずは何もしないで、犯罪者として裁かれること。これはまあ、お勧めはしないな。ふたつ目は、司法取引をして、君の知っているこの賭けバトルの情報を警察に提供してしまうこと」

「なんだと……?」

「普通に捕まれば、禁固は免れないだろうね。特にMMS保護法は国際MMS保護条約に批准することで出来た罰則規定付きの国際法だ。そうになると、まあ何年かは出て来れないんじゃないかな」

「それで俺に、この情報を吐け、つてか」

「そう言うことだ。特に、賭けの胴元や出資者がいるはずだ。彼らの情報を出してもらえるのなら、君の罪を不問にしてもいい。どちらがいい? 他の警官は後五分もしないうちに来る。それまでに決めて、返事をくれ」

「どっちだって同じじゃねーか……俺はもう、神姫で闘える場を失っちゃったんだ。神姫バトルが出来ねーんじゃないやあ、その生き方はもう俺のじゃねえ」

「うーん、そうだなあ……これは独り言なんだがね? 最近知り合いがeスポーツの訓練学校を立ち上げてね。神姫にも力を入れたがっているんだが、何分優秀なプレイヤーの伝手がなくて困っているところなんだ。興味、ないかね?」

「……取り引きをすりゃあ、そういうことも出来る、つてことかよ……?」

「さて? あくまで独り言だからねえ。過剰に信用してもらっても困るが、まあ出来る範囲で便宜を図ってあげることが出来るよとも。さ

て、それで、だ。君は、どうするね？」

ここまでくれば、あとは榊刑事の仕事だ。人に散々危ない橋を渡らせておいて、と思わなくもないが、榊刑事の立ち居地を考えると、これだけの人員を連れて来てくれたことに感謝するべきだろう。

騒ぎが完全に収まるまで、優に数時間かかったものの、この、長い長い一日は、ようやく終わりを告げてくれた。

開け放した窓から見える空はどんよりと曇っている。もしかしたら、このあと崩れるのかもしれない。せつかくの休みだ、今日もバトルロンドに出ようと思っていたのだが、雨が降ると億劫だ。そんなことを考えていると、窓から珍客の姿が見えた。

「ブラック！ オレンジも！」

窓から見える木の枝に、ちよこんと座っていたのは裏バトルの会場で戦った、ハウリンとマオチャオだった。

「どうしたんだ？ こんなところで」

「何、ウチのマスターがそろそろ外に出られそうなのでな。挨拶に来たのだ」

「その節は、世話になった」

あのあと、裏バトルのチャンピオン、菱木さんはやはり警察に逮捕された。が、その罪状は違法賭博への参加のみが問われた。本来問われるはずだったMMS保護法違反などの幾つかの罪は司法取引によって問われないことになったらしい。それでも取調べが終わるまでの間は帰ることは出来なかったようだが、それも近く、終わるようだ。

「あの榎とか言う刑事のおかげで、マスターが出てきたあとはまた公式試合に復帰出来そうなのだ」

「そうか、そりゃあよかった」

「あの時は、済まなかった。マスターに救いを差し伸べてくれるつもりだったのに、綺麗事などと罵ってしまっただけ」

「いいのさ。その通りだからな」

俺の望んだこととは言え、神姫やそのマスターが悲しまなくていい世界、なんてのはまったくの綺麗事だ。青くさい理想論もいところ、まっとうな大人ならば中々口に来るものではない。それでも、今回のように、俺が手を伸ばせば救える誰かがいて、それを感じられるのはやはり嬉しいのだ。

「二人はもう自由にしていいのか？」

「もう記憶データは全部提出してしまつたからな」

「それに、あの場で何人か、胴元側の人間も一緒に捕まつたから、情報としては割と充分らしいのだ」

まったく榊刑事の手腕は優秀らしい。確かに、胴元側からの情報源がいくつもあるんなら、菱木さん一人が報復を受けるようなことはないだろう。しかし、榊刑事が本来狙っていた大物の話は、ニュースには流れてこない。違法賭博場の壊滅の話はニュースに上がつていたので、何かしらの話が流れてきていてもいいのだが……。

「いらつしやい……ああ、あんたか。アイツなら、もう来てるよ」

洗つたカップを拭きながら、一番奥の席を視線で示す。

「どうも、お待たせしました、榊さん」

「挨拶なんかいいんだよ。俺が確認したいのは、出たか、出なかつたか。それだけさ」

「……榊さんには言い難いんですけどね」

それだけ聞くと、榊には伝わつたようだ。

「……そう、か」

「メモリに特に何か手を加えられた形跡があつたら、修復出来るようにしてはいたんです。でも、それすらなかつた。元から接触がなかつた、と考えるのが自然です」

榊は、表情を変えずにカップに口をつけた。

「子飼いのチャンピオン、とか言う触れ込みに、期待しすぎたかな」

今回のチャンピオンは、榊が追っている大企業が違法賭博に参加している証拠、と目されていた。が、期待していたものは得られなかつたらしい。

「……なんと言つていいか」

「いいさ。長年捜査をしてりや、こんなことは山ほどある。いちいち腐つてなんかいられんよ」

しばし会話が途切れる。

「それにな、菊川くん。俺はもう何年も追つてるんだ。もう何年かかかつたつて、なんとも思わんよ。要は、挙げられりゃいい。違うかい

？」

「……なんとも言えません」

榊は、遠くを眺めるような目をしている。恋人を亡くした事件も、この男の中ではつい昨日のことのように熱を持ち続けているのだから。

「そーいや、例の彼、どうなってる？ 最近も来てるんだろう？」

「ああ、月に一度ですけれどね。いい子ですよ。何より、神姫が好きだ。あんな子をこっちに引きずり込もうってんだから、榊さんも悪者だ」

「そりやそーさ。言い訳はせんよ」

榊は静かにカップの中身を干した。

「そういえばよー、知ってるか？ 最近、エスパディア狩ってる魔女がいるって話」

「なんだな、また唐突な話だな」

夏も本番となり、高校最後の夏休みが近づいてきた頃、花道が唐突にこんな話を切り出してきた。

「大体、エスパディア狩りって、また対象がえらく限定的だな。どこでそんな話になったんだ？」

「Y市の方のゲーセンで。最近話題になってるらしいぜ」

三人の中で唯一進学しない花道は、夏休み中に行われる公式大会に向けて腕を磨いている最中だ。その分、最近の動向にも詳しい。

エスパディアも発売開始からそろそろ一年が経とうとしている。最新機種という肩書きが外れ、だんだんとユーザーの間にも浸透してきた感がある頃で、それは同時に対策がなされてきたということでもある。その意味でもエスパディア・ランサメントの両機種は、不用意に出せば狩られてしまう。そういう意味では確かに狩り頃なのだが。

「リアルバトルを吹っかけられて、壊される寸前までやられるらしいぜ。それで、誰か探してる風なんだとき。『貴女じゃなかった』って、最後に言われるんだと」

「通り魔ってこと？」

「そんな感じらしいぜ、お前もエスパディア使いなんだから、気をつけろよー」

アホらしい。また与太話の類だろう。そう言おうとして、俺の脳裏に一瞬、一人の神姫の顔がよぎった。

——貴女、次に踊るときは翼なんでもがず、先ず首を刈ってあげる。ええ、それがいいわ、そうしましょう。

初夏の頃に参加した、裏バトルで戦った黒いアーンヴァル。ビームサイズを振るう盲目の死天使。あの試合は、内容的には確実に負けていた。奇襲で弱点を突いてようやく帳尻を合わせたものの、対戦した

シャウが破壊されていてもおかしくはなかったのだ。実際、ウイングユニットは全損した。あの神姫は、シャウに拘っていた。それを、急に思い出したのだ。

「どうしたの？ 顔色悪いけど」

「思い当たる節でもあるんじゃないか？」

確かにある。あるにはあるが、裏バトルの参加は基本的には違法行為だ。勿論それは紳刑事に言われたから参加したのだが、どちらの立場を考えてもそれを口にするわけにはいかなかった。

花道も日野も、不思議そうな顔をしている。まあ、そうだろう。こんな反応をされたら、誰だつてそうする。俺だつてそうする。確かにエスパディア狩りの魔女のことは気にならないでもない。が、こちらら受験生、毎週末のバトルロンドも封印して、受験勉強に精を出す日々なのだ。勿論息抜きとして作業をしたり、近場のゲーセンに行ったりはしているが、当面の目標だったセカンドリーグへの昇格も未だに成っていない。時間的な余裕なんてないのだ。しかし……。

「いや、何でもない。嫌な話だな、それ」

「だろ。おかげで最近、エスパディアとは当たらねーんだよな。格闘戦、練習してーのによ」

「去年は強盗で、今年は通り魔か。あのあたりも本当、治安よくないね」

「ホントそれだよなー」

話はそこから、去年の強盗神姫の話になった。俺は適当に相槌を打っていたが、頭の中では通り魔をしているというエスパディアを狩る魔女のことが広がっていった。それは帰路で一人になり、家についても頭から離れることはなかった。

「おかえりなさい……？ どうかなさったのですか？」

出迎えてくれたシャウが、怪訝な顔をする。

「いや、Y駅の方のゲーセンで、エスパディアにリアルバトルを仕掛ける神姫がいるらしいんだ。で、どうも特定のエスパディアを探してるらしくって……どう思う？」

「もしかして、盲目の死天使、ですか……？」

やっぱり、シャウも思い出すのはその神姫だった。Y市周辺のゲーセンって言うのも気にかかる。あの時裏バトルの会場として選ばれたのは、Y市の港湾施設の方だった。あの場に参加したマスターが、公式バトルで活躍している他の参加者を探すとしたら、まずは手近なY駅周辺から探すだろう。

「……もし、盲目の死天使が私を探しているのだとして、どうされるおつもりですか？」

「そのときは、決着をつけないといけないよな……」

もし本当に盲目の死天使だとしたら、あの騒ぎの中を逃げ延びたのだろうか。その場さえ逃げられたのなら、その後の捜査でも単なる参加者の一人ひとりまでは追及出来たとは思えない。そして、死天使はシャウに興味を示していたのは確かだった。

だが、もしも狙いがシャウだとしても、既に無関係なエスパディアが襲われているということに変わりはない。花道がゲーセンで噂として聞くくらいなのだ、被害は一件や二件ではないのだろう。それは一日も早く、止めねばならない。

「シャウ、またあいつと戦わなきゃならないとしたら、どう思う？」

「そうですね、出来ることなら、もう戦いたくない相手ではありませんが……そういうことなら、そうも言っていられないのでしょうかね」

「そのまま戦ったとして、勝てるか？」

「難しいですね……高速域での機動戦なら、相手の方に分があります。前回は本当に奇襲で不意を衝いただけですし、勝負そのものでは負けていました」

「そうだな……何にせよ、そのつもりでいてくれ。まずは戦うにしても、相手の居所がつかめなきゃ話にならない」

こんなとき、頼りになるのはやはりあの人だ。俺は、携帯電話を手にとった。

『もしもし？ 榊ですが』

「榊刑事、今ちよつとよろしいですか。お尋ねしたいことがあるんですけど」

『君からそんなことを言うてくるのは珍しいね。去年の強盗神姫の事

件以来じゃないかな?』

電話口で、榊刑事がのんきそうに答える。確かに、普段俺から連絡を取るようなことはないと言っている。むしろ、この一年、榊刑事の連絡先を迷惑フォルダに設定してしまおうかと思ったこともあるくらいだ。

「実は最近Y駅の周辺で神姫の通り魔が出ているっていう話なんですけど……ご存知ですか?」

『なるほど、エスパディア狩りをしている魔女のことだね?』

やはり知っていた。いや、むしろ榊刑事の管轄で起こっている事件なのだ。知らないと考える方がおかしいのかもしれない。いや、知っているとしたら、逆に疑問が起こる。

「ご存知なんですね」

『まあ、そりゃあね。個人的には、今回は君に関わって欲しくないと思っただけで黙ってたんだが』

「どうしてですか? むしろ、エスパディア相手の通り魔なんて、俺向きじゃないですか」

『なんと言うかね。そう言うと思っただけで黙っていたんだがなあ。恐らく、今回の事件を起こしているのは、君も知ってるだろう、盲目の死天使と呼ばれる神姫だとあたりをつけているんだがね。そうだとすれば、狙っているのは恐らく君、と言うか、君の神姫なんだよ。前回の裏バトルのログも見せてもらったけど、奴は随分君にご執心のようじゃないか』

「でも、だとしたら余計に……」

『だからさ。たとえば警察には犯罪捜査規範という奴があつてね、事件の関係者が身内にいる場合、捜査から外れるっていうような考え方がある。今回の場合、そういうようなことだとは思ってくれないかねえ。こちらとしては、勿論君のような協力が他にいないわけじゃない。なにも、狙われている張本人が矢面に立たなくてもいいじゃないか、と思ってるわけなんだ』

都合のいいときばかり言ってくるくせに。そんな苛立ちが腹の中に湧いてきた。

「そのために、無関係な神姫が襲われているんじゃないんですか？」

『そうは言うけれどね。君、勝てるかね。いや、君が勝てなきゃ僕の協力者なんかでも、誰も勝てないんだが。今回は何も一対一でやらなきゃあならないわけじゃないからね』

一瞬、言葉に詰まる。侮られている、という思いもないわけではないが、実力差としては確かに感じるものがあるのだ。

『見つけさえしてしまえば、アンジェリクスが戦ったっていい。今回は、君の手が絶対に欠かせないというわけじゃあないんだよ。それもあって、声をかけなかったのだからね』

確かにその通りではある。そもそも榊刑事はアンジェリクスと言う自前の戦力を抱えているのだ。前回の裏バトルとは事情も異なるし、榊刑事が出られない理由もない。勿論この様子ならば、既に榊刑事の協力者による調査は行われているのだろう。単に、それが未だ結果に結びついていないだけの話なのだ。

『……その上で、君が手を貸してくれるのならば、確かに心強いことではあるんだがね』

「……そうこないと。で、とりあえずどうしたらいいですかね」

「貴方、エスパディア型の神姫を連れてくるわよね。私ね、あるエスパディアを探しているの……」

唐突に、声をかけられた。その声は、アーンヴアル型のボイスユニットによるものだ。振り返るとそこには、神姫を肩に乗せた男が一人、立っていた。

「見た覚えのある顔だなあ。もしかしたら当たりかも知れねえぞ、レグルス」

「嫌だわ、オーナー。私、人の顔を覚えるの、苦手だっけ知ってるでしょう？ それに第一、普段眼なんて使ってないじゃない」

確かに、男の顔は見たことがある。あの日の裏バトルの会場で、だ。そして、レグルスと呼ばれた、その神姫も。AAU7リアウイングユニットを背負い、ヘッドセンサーアネー口を被る黒い天使。その手には、ビームサイズの柄が握られている。

「でも、それが本当なら嬉しいわ。貴女は、私が探している人かしら……？」

言うが速いか、男の肩の上で光の刃が展開される。ビームの光に照らされた神姫の顔は、やはり目を閉じていた。

「まあ、違っけていてもいいのだけれど。そのときは、八つ当たりのひとつもさせてもらうのだから。そうね、先に御免なさい、とだけは言っておいてあげる」

「エスパディア狩りの魔女……何でこんなことをするんだ？ 勝負がしたいだけなら、バーチャルで幾らでも出来るだろうに」

「ほう、俺らのことを知ってるのか。存外早く有名になったもんだなあ」

「嫌よ、バーチャルなんて。痛みも苦しみも、全部作り物なんですもの。せつかく踊るんだったら、痛くして、痛くされて、ダンスパートナーの全てを感じたいわ。そうでないと踊り甲斐がないじゃない？」

黄金色の光に照らされて、死天使が怪しく笑う。決して軽口の類い

ではない、本気で傷つけあい、殺しあうのを望んでいるのだと分かった。それこそが、彼女の無聊を慰める方法なのだろう。

「さあ、貴方のパートナーは出さないのかしら？　それとも、貴方自身が痛くされるのがお好み？」

ゆつくりと、闇の中に黄金色の尾を引くように、黒い影が飛ぶ。一直線に襲い掛かってくる天使型は、これから始まる喜悦に酔っているのか、既に満面の笑顔だ。

「シャウ、いいぞ。出ろ」

ケースの開封と同時に、青い影が奔り、盲目の死天使を迎え撃つ。高速装備の翼が唸りをあげて、鬼姫が、一閃。ビームサイズを受け止める。

「あ、この感じ……ああ、貴女なのね……？」

「なぜこんな凶行に走るのですか、辻斬りなどと」

不意に、死天使の目が見開かれる。それと共に、押さえ切れないと言わんばかりの笑い声が死天使の口から溢れ出る。

「あはははは、会えた、ようやく、ようやく会えた！　探したわ、ええ、本当に、探したのよ、貴女のこと！　あれほど踊るのが楽しかったの、忘れられないわ！」

喜悦に歪むアーンヴアルには、もはやシャウの言葉は届いていないようにさえ見える。

「さあ、踊りましょう！　あの夜みたい！　熱く、激しく！」
「戯言を！」

ぎりぎりと、押し合う二人の神姫。力比べなら、エスパディアであるシャウの方が有利だ。相手は所詮、非力なアーンヴアルに過ぎないのだから。

「あら、冷たいのね……お相手してくれないんだったら、私、そこいら中の神姫に片端から八つ当たりしてしまうわ。それが嫌なら、ちゃんと相手して頂戴？」

その言葉に、今度はシャウの表情が歪む。だがこちらは、怒りで、だ。押し合う鬼姫に一層の力が込められた。一度打ち合い、離れる。「そう、その顔よ！　貴女の顔、忘れないわ！　ええ、貴女との踊りを、

目を瞑ったままなんて、勿体ない！ 貴女のこと、ちゃんと見せて頂戴！」

より一層、黒い天使は昂ぶって笑顔を見せる。その表情からは喜悅だけでなく狂気さえも滲み出している。

「そう、私ね、貴女のことを忘れられなくて、簡単だけど、真似してみたのよ？ すごいでしょう？」

黒い天使が、鎌を持たない左腕を向ける。一瞬の間をおいて、吐き出される光弾がシャウの翼を掠めて飛ぶ。

「アームビームガンか！」

「知ってらして？ アーンヴァルは元々こういうのが得意なのよ？」

その威力はさほどでもないだろう。弾数も、多いとは思えない。しかし、元々近接格闘戦しか出来なかった相手が遠距離でも切れるカードを持っていると言うのは、やはり脅威だ。単なる見せ札以上の効果がある。今の一射には込められていた。しかも使い手は元々射撃を得意とするアーンヴァル。狙いの正確さはシャウの比ではない。今の一射も、わざと狙いを外したのだろう。

「別にあんなもの積んだってさして違いが出るわけじゃねえんだがな、あんなものでも載つけてやると、やる気が格段に違うモンでなあ」

「あなたは何で、こんなことを自分の神姫にさせるんですか、シャウを探すのだからあなたの意思ではないのでしょうか？」

「それでもねえさ」

男は、不敵な笑いを貼り付けた顔を向けてくる。

「あの日、サツのガサ入れを手引きしてくれただろう？ 俺達はああいう賭博バトルで生計を立ててるんでなあ。それを潰されちまうと、こっちは商売上がったりのよ。おまけに場を開く胴元までまとめて縄をかけてくれやがって。あれじゃしばらくこの辺りでは稼げねえ。その恨みをぶつける相手を探してたのは、本当さ」

「そんな、ことをツ……」

「世間知らずのお坊ちゃんには想像も出来ねえだろうがな。世の中に

はああいう娯楽の場がないと生きていけねえ、駄目な大人ってえのがたくさんいるのさ。それこそ、ローマの昔からな。俺は、そういう連中の代表者として、お前さんに復讐してやろう、って魂胆さ。別にレグルスの奴が望んだってだけじゃねえ」

言葉がない。あの場所で、神姫の殺しあう様を見て熱狂していた連中の、代表だつて？ 俺の中で、確かに火が灯った。

「そうか……ならば、あんたは、俺の敵だ」

「別に仲良しこよしがしたいわけじゃあねえんでな。そう思ってくれるんなら、こつちも後腐れなく出来るってもんだ。レグルス、やつちまいな」

話している間にも、シャウとレグルスは幾度となくぶつかりあっている。姿勢としては、徹底して一撃離脱を崩していない。

「そう、私ね、貴女に見せたいものがあつたのよ。私、この間はスキルを見せないままだったでしょう？ ぜひ貴女に、私のスキルを披露したかつたの」

死天使が怪しく微笑む。すると、周囲の空間に黄金色に輝く細長い球体が三つ、現れる。トークン生成型のスキルか？

「舞い散れ、ブーケット・オブ・リリアーヌ！」

光球が互いに離れるように宙に飛び、互いに離れた球が、先端をシャウに向ける。

「避ける、シャウ！」

「さあ、ここからはタンゴでいきましょう！ 踊れ、リリアーヌ！」

散った光球から光の弾が撃ち出される。咄嗟に鬼姫とジュダイクスで身体を庇うが、三方向から時間差で放たれた光弾は、正確にシャウを捉える。

「くうッ！」

光球は光弾を吐き出しながら、さらにシャウを取り囲むようにして動き続けている。単発の攻撃スキルじゃあないのか？

「しつこいぜえ、リリアーヌのトークンはよお」

「人聞きが悪いわねえ、オーナー。私のユリは、忠実なのよ。さあ、私のお相手も忘れちゃ嫌よ？」

ビームを掻い潜るシャウに、さらにレグルスの鎌が襲い掛かる。しかし、一瞬でも動きを止めれば狙い撃ちにされてしまう。すれ違いうように一撃を受けるのが精一杯で、とても攻めに転じることは出来ない。

とにかくブーケット・オブ・リリアーナというスキルで生成されたトークンが邪魔だ。攻撃力はそれほど高くないようだが、三方向から支援攻撃可能なトークンを生成するスキルなんて、それだけでも強すぎる。その上継続して効果を発揮するなんて。

「約束したの、忘れてないわよねえ……今回は、首をもらおうよね……？」

夜の闇の中に、怪しく照らし出されるビームの光は、死者を導く灯火のようにさえ見えてくる。その灯は、ただ速く、時に弾かれるように、時に絡みつくように、シャウの動きに合わせて飛び回る。さらには三つの小さな灯。それほど連続して撃ってきているわけではないのが唯一の救いだが、これもこちらの動きにあわせてくる。おかげでさつきから、シャウは充分に加速する距離を稼いでいない。狭い闘技場の中でないのはありがたいが、このままでは早晚、速度の差が致命傷となって現れてくる。

「楽しみだわ。刈り取った貴女の首は、私のお部屋に飾ってあげる……飽きるまでだけど」

「何言ってやがる、そうそうジャンクばかり持ち込まれてたまるかい。試合じゃねえんだ、とつととやっちなまえ」

「そうねえ、私としては、もつと、もつと楽しみたいのだけれど……残念だわ、貴女になら、私のことをぜんぶ見せて差し上げてよかったのに……」

その名に違わず、死天使の言動はどこまでも悪趣味だ。しかし、攻め手はどこまでも執拗で、ひとつひとつ可能性の芽を潰していくようにゆっくりと、確実に進んでいる。

このままではいけない。しかし、それを覆す一手を打つには、時間が足りない。

「そうね、私の全てを見せるのは、首だけにしてからでもいいかしら

……少し勿体ないけれど、今宵の舞踏会はお開きにしましょう、シンデレラ」

言うが速いか、シャウの機動にリリアーナが割り込んでくる。避け切れない。咄嗟に身を守るが、シャウが触れると、三機のリリアーナが弾け飛ぶ。あれだけの性能を持っている上に、接触式の爆弾のようにも扱えるなんて、冗談のような性能だ。

煙から飛び出したシャウに追いつくように、レグルスが鎌を薙ぐ。致命の一撃に、足を大きく振って急激に機動を変えてかわす。だが、二閃目は避けられない。

「ぐツ、あぁッ！」

「ああ、思った通り、なんて素敵な声で喘ぐのかしら！ もっと聞きたいわ、貴方の声、もっと聞かせて頂戴？」

斬り落とされたシャウの機械脚が、乾いた音を立ててアスファルトの上に転がった。まずい、これ以上は耐えられない！

「シャウ、戻れ！ ミーシャ、頼む！」

もうひとつのケースを咄嗟に開き、最後の―撃を見舞おうとした死天使とシャウの間に、強引にミーシャを割り込ませる。チーグルサブアームに握られたジレーザロケットハンマーが、何とかビームサイズスの刃を食い止める。

「姉さん、大丈夫ツスカ!？」

「なんなの、貴女……今は私と彼女だけの時間なのに、邪魔しないでくださらない?」

愉悦に酔っていたアーンヴァルの眼が、急激に冷たいものになっていく。

「主、一体、何を……?」

「いいから一旦戻って来い！ ミーシャ、少しでも時間を稼げ！」

「二機目もいたかよ……レグルス、余計な手間掛けてる時間はねえぞ、分かってんな?」

「ええ、ええ、こんな虫に時間を取られてたまるものですか。せつかくいい気分で踊っていたのに……貴女の出るような幕ではなくってよ?」

「ごつちもそうしてたかったんすけどね！　そういうわけにもいかな
いんすよ！」

ハンマーを構えながら着地するミーシャ。黒い天使に対する悪魔
は、震えそうな声で啖呵を切った。

黄金色のビーム光が、夜の闇を切り裂いて煌めく。高速で飛び回るアーンヴァルを目で追うことは出来る。だが、所詮陸戦の自分の装備では、その動きには到底付いていけない。訓練でも、空戦装備の姉さんを捉えることは、未だに出来ていない。

「貴女みたいな虫が、私と彼女との間に入ってくるなんて……せつかくの素敵な気分が台無しだわ。その責任、身体で払って頂戴ね……？」

ひどい言い草だ。最近よく罵られるのは、なんなのだろうか？ 確かに、自分の実力では姉さんには遠く及ばないのは事実なのだが、それにしたつてもう少し言い方というものがあるのではないか？

「それでも、こっちも退けねーッス。少しの間、お相手願うッスよ」

チーグルサブアームで、ジレーザロケットハンマーを正面に構える。いくら裏路地とはいえ、ここでは壁蹴りに使う壁面も少ない。自分の装備では、立体的な動きは大きく制限されている。自然、その姿勢は迎撃に傾く。

「虫が、喋ったりするものではなくてよ。すぐに芋虫にふさわしい体勢に変えてあげる」

急加速して、一直線に向かってくる。正面からの横薙ぎを、ハンマーの柄で受け止め、その間にヴズイルフを構える。が、脚を止めたのはほんの一瞬だ。力比べは徹底的に避ける構えを崩さない。

「野蛮な……腕力自慢なんて、今日日流行らなくてよ？」
「それでも自分には、これしかねーッス！」

このスピードで迫る相手に、フルスイングでの一撃は狙えない。小さく、細かく、速く。姉さんとの訓練で言われたことを思い出しながら、とにかく相手の速度に食らいつくことを考えなければいけない。

開いたケースが地面に置かれ、主の手からその上に移り、身体を横たえる。

「切断されたのが脚部でよかった。これならまだリカバリー出来る」

「主、一体、何をやるつもりですか？」

「新装備、と言うか、追加装備を出す。使い慣れてないのもそうだけど、新しい装備管制ソフトが入るから、少し時間がかかる。その間は、ミーシヤに耐えてもらうしかない」

主は話しながら、手早く両脚部と、右腕部を外し、別なものと換装する。リアユニットにも、新しいパーツが追加される。

「後は、管制用プログラムだ。機動制御まで書き換えてる余裕はないから、悪いけど重量バランスの変更はマニュアルでサポートしてくれ」

「分かりました……しかし、これは……」

追加された武装は私の予想を超えたものだった。私にこれが使いこなせるのだろうか……

上段から振り下ろされる鎌を受け止める。もはやハンマーとして使うより、長柄の部分しか活用出来ない気がする。それほどまでに、高速で飛び回るレグルスに攻め掛かるのは困難だった。一度距離を置いて、再び急降下。速度を乗せた横薙ぎは、防ぐだけならいざ知らず、反撃に転じようとするとその影さえ掴ませてくれない。

「ちよこまかと……もうちよつとこつちに合わせようつてつもりはないんすかね……ッ」

「嫌あよ。私はこれでも天使型なのよ？ 何故虫に合わせないといけないの？」

大分傷つく。自分だつてこれでも一応乙女なのに。

再び加速して、攻撃の構え。大分打ち合うタイミングも慣れてきた。一撃受け止めて、その隙にヴズイルフを撃ち込んでやる。決めてしまえば、意識を切り替えるのは簡単だ。ハンマーを構え直し、受け止める姿勢をとる。

「だから、虫なのよ」

受け止めるつもりで振るったハンマーは、空しく宙を切る。黒い天使は正面から突っ込んでくると見せかけて、足を使って思い切りブレーキを掛けたのだ。

「身体に力が入りすぎて、何か狙ってるのが見え見えだわ。はしたない」

速度こそ乗らないものの、鋭い横薙ぎの二連撃。咄嗟にサブアームで身体を庇うが、左肘の先から寸断される。しかし、それだけで攻勢は終わらない。左腕をまつすぐこちらに向けると、腕の先からビームガンが放たれる。

「う、がッー」

「声まで癪に障るのね。さっきのエスパディアとは、本当に比べるところがないわね」

正確に身体を中心に二発。浅くないダメージに、片膝をつく。

「約束どおり、芋虫にふさわしい身体にしてあげる。精々、無様に転げまわって、私の怒りを慰めて頂戴」

ゆっくりと、死神の鎌が振り上げられる。余裕のつもりなのか。わざとらしく振り上げられたそれが、目の前で黄金色に輝く。振り下ろされた刃を、残った右腕で防ぐ。相手の足は完全に止まっている。あれほど望んだ、力比べだ。右腕が飛ぶまでの、ほんの一瞬。ヴズイルフを突き出して、引き金を引くだけの間があった。狙いも録につけられなかったが、放たれた銃弾はヘッドセンサーのアンテナ部分を撃ち抜いた。せめて一矢報いることは出来た。その思いから、口元が緩む。が、次の瞬間視界が揺れた。

「この、クソ虫が！ この、私に！ よくも、よくも！」

下顎を、思い切り蹴り上げられたのだと分かったときには、仰向けに倒れていた。そのまま、腹を踏みつけるように、何度も蹴られる。「レグルス、遊んでんじゃねえよ。とつとと片付けろって言っただろう？」

「嫌よー。この虫けら、バラバラにしてやる！ いいえ、ただバラバラにするんじゃ飽き足りない、もつともつと、苦しめてから始末してやる！」

蹴り足が止まったかと思うと、突然、サバールカレッグの膝を焼かれた。ビームサイズの刃が、ゆっくりと押し当てられたのだ。

「ぐッ、ああッー！」

腕を飛ばされたときのような、瞬間に断ち切られる痛みではなく、じわじわと焼かれるような痛みが這い上がってくる。やろうと思えば一瞬で両断することも出来るだろうに、わざと時間を掛けているのだ。

「このまま、全身をじつくりと焼き上げてあげる……」

自分の口から漏れる悲鳴が、遠いところから聞こえるような気がした。膝を焼く痛みが遠くなった。が、意識を手放そうとする度、頬に蹴りが飛んでくる。

「何を勝手に気絶しようとしてるのよ。そんな簡単に楽になんてさせないんだから」

そう言うと、今度は反対の足に痛みが走る。今度は足首が焼かれている。

「レグルス、遊んでんじゃねえって言ってるだろ。今日は裏バトルじゃあねえんだ、そういうのは、喜ぶ客の前でやってやれ」

呆れたように、相手のマスターが言っているのが聞こえるが、もうどこから聞こえるのかも分からない。アーンヴアルの嘲笑が、耳にこびりつくようだ。

「さあ、次は腕の番かしら……いよいよ芋虫ねえ……」

眼の端に、鎌を振り上げる死神が見える。しかし、次の一撃はいつまでも降ってくることはなかった。

「なあんだ、お色直しだったのね……?」

意識を失う前に耳に届いた言葉は、溢れんばかりの喜色に満ちていた。

「再起動完了、始動します」

シャウの口から再起動を告げる自動メッセージが流れる。ようやく、武装管制プログラムのインストールが完了したようだ。眼を見開くと、すぐに空へ駆け上がる。今の事態は飲み込んでいるらしい。

「オートバランスサー、調整。ウエイトレシオ、変更。出力調整、良しー」
その右腕と両脚は機械式の強化四肢に換装し、高速飛行リアユニットからは支持アームが伸び、左側から身体を庇うようにシールドユニットが接続されている。腰には前後にウエストアーマーが追加され、リア部分には追加の小型バーニア。さらにリアユニットの後方からもテールノーズバインダーが伸びている。そして、構造的に脆弱なカメラアイを覆うようにアイシールドが展開している。変わらさず取り付けられたサブアームからは鬼姫を展開し、右手にはGNソードVを、左腕には引き続き、アームガードを装備している。

シャウが見開いた視線の先には、死天使の凶行が続いていた。左手を上げると、アームガードのビームガンから光弾を放つ。命中こそしなかったが、鎌を振り上げた黒い天使がシャウの方を振り返る。

「なあんだ、お色直しだったのね……？」

心底嬉しそうな表情だが、その瞳の色は狂気に満ちていた。愉悦と殺意を同時に振り撒きながら、再び死天使が宙を舞う。待ち切れなかったと言わんばかりの勢いで、鎌を振り上げてシャウに迫る。

「新しいボレロもよく似合ってるわ。でも、貴女はきつと首だけになった方がずっとずっと素敵よ？」

新しく追加されたシールドで、それを受ける。が、重量バランスが大きく変わっているせいか、受けると同時に、寸刻、体制が崩れる。それを、反射的にテールノーズバインダーを吹かしてバランスを保つ。

「主っー！」

「分かってるー！」

死天使が離れた隙に、駆け寄ってミーシャを確保する。傷ついてはいるが、目立った外傷は武装パーツ部分だけ。本体部分は無事だ。

「ミーシャ！ 大丈夫か、ミーシャ！」

「うう……これ以上お肉食べれないツス……」

あまりのダメージに、シャットダウンしてスリープモードに入っらしい。夢を見てるようだ。大きく頷いて、シャウにミーシャの無事を伝えると。一瞬安堵に表情を緩ませる。が、すぐにレグルスをねめつける。

「怖い顔、ゾクゾクしちゃう」

しばし無言で視線を交わす二人。だが、浮かべる表情は対照的だ。

「さあ、また踊りましょう？ あんな虫のことを気にしちゃ嫌よ、私だけを見て？」

「邪鬼め……」

「ふふ、怖い怖い。そんな顔していたら、楽しく踊れないじゃない？ もっと楽しく踊りましょう。リリアーナ！」

声と共に、再び三つの光球が現れる。それはゆっくりと、シャウを取り囲むように動き始めた。

「さあ、陽気にステップを踏みましょう！ 舞い散れ、ブーケット・オブ・リリアーナ！」

「そんなものは……」

周囲から撃ち込まれる光弾。だが、新しい武装はただの追加パーツではない。シャウが左手を掲げると、目の前に光の壁が現れる。

「ビームシールド？」

障壁が、トークンから放たれた光弾を阻む。

「それだけで終わりません！ シロ！」

「任せな、嬢ちゃん！ 目標設定だけ、しっかり頼むぜ！」

リアユニットに据えられた、自律思考型。ぶちますいーんず指令ユニット、シロにやんが応える。するとシールドから六機のソードビツトが飛び出す。不意に放たれた六枚の刃が、宙を舞い続けるトークンを次々と切り裂いていく。

「ソードビツトまで……!？」

「もう好きには、させません！」

GNソードを振りかぶり、一息に間合いを詰める。斬撃。弾く。更

に袈裟斬り、次いで逆袈裟と、息も吐かせぬ勢いで攻める。剣が非実
体剣になったためか、攻め足が軽い。非力なアーンヴァルでも充分な
攻撃力を持つのだ。刀剣での近接特化型であるエスパディアが扱う
それが、引けを取ろうはずもない。しかもそのすべてを受け止めるだ
けというわけにはいかないのだ。力比べに持ち込まれれば、その時点
で死天使は不利になる。横薙ぎ。一撃を受けた後、死天使は密着距離
を嫌って、アームビームガンで牽制しつつ後ろに離れる。が、もはや
そこもシャウの間合いだ。長短六本の刃が襲う。

「鬱陶しいつ、リリアーナ！」

「二日戻れ、レグルス！」

不意にマスターに呼び戻され、死天使が反射的に後ろに飛ぶ。が、
それを追うソードビットはそうはいかない。シャウの判断の迷いが、
そのまま機動に表れる。本体を追うべきか、トークンに向けるべき
か、優先順位を瞬時につけられなかったのだ。

「ふらつくな、嬢ちゃん！　しっかり指示してくれねえと、動かせねえ
！」

「ご、ごめんなさい」

補助用のコントロールユニットとしてシロにやんを背負ってはい
るが、その指示はあくまでシャウが下すものだ。結果として、中途半
端にリリアーナとソードビットがにらみ合うような格好になった。

「何よ、オーナー、私はまだまだ踊り足りないのよ。もっと躍らせて頂
戴」

「なに言ってるやがる、時間かけすぎだ。全部見せてやっても構わねえ
んだらう？　だったらお前のスキル、出し惜しむような真似するん
じゃあねえよ」

その言葉に、息を呑む。まだスキルを温存していたのか？　ブー
ケット・オブ・リリアーナだけでも充分すぎるほど強力なスキルだっ
たのに、まだ上があるなんて。シャウもアイシールド越しに驚いてい
るのが伝わってくる。

「はあい……仕方ないわねえ、もつともつと愉しみたかったのに……」

その声は、やはり心底残念そうだ。落とした視線が上げられる。そ

の赤い瞳がまっすぐにシャウを射抜く。

「そうね、たまには本気のジルバを踊るのも、悪くないかもしれないわ。いつもは私の興が乗る前に、お相手が着いてこれなくなってしまうんだもの」

彼女はゆっくりと鎌の柄に指を這わせる。長柄をひとしきり撫でると、眩くように言った。

「バルディッシュユ……起きなさあい、出番よ……」

その声と、ビームサイズの柄に埋め込まれた玉が、輝き始めた。

暗い路地裏を照らすように、バルディツシュ、と呼ばれた大鎌が、金色の光を放った。その光が収まると、鎌はその姿を変えていた。

「ザンバーフォーム。これが私のバルディツシュの、本当の姿よ……」
巨大な光刃を持つ、光の斬馬刀。見るからに大出力のビームで構成されたそれは、重さを感じさせない速さで振るわれた。神姫の身長よりなお大きい刀身が、長柄の先から伸びている。

「さあ、いくわよ。貴女の剣で、受け止め切れるかしら？」

妖艶な笑みを浮かべながら、ふわりと宙に舞い上がる。夜の闇の中、光が尾を引くように長く伸びる。GNソードVも同じ光線剣だが、出力が大きく違う。その一撃を受けるが、質量差も腕力差も越えて、シャウの方が弾き飛ばされる。

「くッー」

「あらあら、せっかくのお誘いなのに、すっかり受け止めてくれなきや嫌よ？」

さらに間合いを詰めて、上段からの切り下ろし。背面のブースターをフルに使ってなんとか受け止める。しかし、それを追いかけるように撃ち込まれるトークンからの光弾を防ぐシールドまで張る余裕はない。

「しっかりしろお、嬢ちゃん！ ソードビットが遊んじまってるぞー！」
「そう……言われても……ッ！」

急に追加された新装備も、扱うシャウに余裕がなければ使いこなすことが出来ない。数発喰らい、バランスの崩れたところを弾き飛ばされる。地面に墜ちるのだけはなんとか避け、追撃のビームにはなんとかシールドを間に合わせる。

「ごめんなさいね、オーナーが急かすものだから、あまり時間はないの。でも、心配しないで。貴女は首だけになっても、変わらず愛してあげるから」

なおも悪意と微笑を振り撒く天使。あの大型のビームザンバーをどうにかする方法は、ひとつある。その使い方も、シャウの中にある

はずだ。問題は、それを実行出来るかどうかだった。

「やっとやる気を出しやがったか」

我が神姫ながら、レグルスの奴には毎度ひやひやさせられる。本気を出せば裏バトルのチャンピオンだったマオチャオ型にも劣ると思わないが、いかんせん斑つ気が過ぎる。すぐに娑婆つ気を出して遊びたがるのだ。本来なら、レグルスの性能としては長く戦闘を続けるのには向いていないというのに。

今も展開している、ブーケット・オブ・リアーナも制限が多いスキルだ。あれのトークンは稼動時間にも攻撃回数にも制限があり、それを超えると消滅してしまう。レグルスはうまく扱って誤魔化しているが、展開している最中の負荷といい消費するエネルギーといい、気軽に何度も使えるものではないのは確かだ。恐らく、今日はもうこれ以上発動出来ないだろう。おまけにバルディッシュのザンバーフォームまで展開してしまった。あれも威力相応にエネルギーを消費する。本人は余裕を見せているが、もうそれほど長い時間は残されていないはずだ。

しかし、あの小僧の表情は気に食わない。バルディッシュのザンバーフォームは文字通り、死天使の刃だ。神姫もマスターも、その威力の前には絶望に頭を垂れる、そういうものでなくてはならない。現にあれを目の当たりにして、無事に済んだ神姫はいないのだ。なのにあの小僧の眼には、未だに希望の光が灯っている。それが気に食わない。あるいは、頭が抜けているのか。

レグルスがバルディッシュを掲げて駆ける。何度かは打ち合っているが、出力の差は明らかだ。力比べは不向きだが、ここまで威力に差があるのなら、相手のビームサーベルに干渉して機能不全を誘発し、サーベルごと叩き斬ることも出来るかもしれない。

レグルスの背後で、リアーナのトークンが展開する。あれもそろそろ、時間切れのはずだ。それを裏付けるように、レグルスを追い越して相手のエスパディアに向けて衝突コースを取っている。

「くッー」

再び展開されるビームシールド。三つの爆炎が寸刻灯る。新しく装備されたパーツに、シールドを展開する出力装置でも組み込んであるのだろう。しかし、あの程度のシールドではトークンの攻撃は防げても、バルディツシユの斬撃は到底防げない。横薙ぎの一閃が、軽々と障壁を引き裂き、エスパディアに迫る。次いで、上段からの打ち下ろし。ビームサーベルが受け止めるが、それはバルディツシユに比べると、いかにも脆弱だ。

「さあ、受け入れて頂戴？ それとも、貴女には少し大きすぎるかしら？」

「シロ！ お願い！」

「任せろ！」

思い出したかのように、ソードビットがレグルスの背後から襲ってくる。片手を振り上げ、ビームガンで牽制しながら、距離を取る。

「そんな小さな刃で私を満足させるつもりかしら？」

軽口を叩きながらビットを避ける。扱いなれていないのか、ビットの動きは単調だ。そんなものではレグルスの動きを捉えることは出来ない。しかしそれでも、交互にしつこく追いつがるビットに、今までより大きく距離を開けさせられた。

「シャウ！ 『セブンスソード』を使い！」

エスパディアのマスターが叫ぶ。スキル名か何かか？ なんにせよ、所詮は苦し紛れの付け焼刃だ。俺のレグルスと、バルディツシユに敵うほどの何かであるわけがない。

直線的な動きで、ソードビットが駆ける。本来ならばビットの動きは、もつと曲線的で読みにくいものであるはずだ。が、今はそうやって扱うのが精一杯。六つの刃を、ほとんど同じ軌道で動かすだけでも、シロにやんのサポートを経た上でなおも頭痛という形で負荷が現れる。習熟すれば自在に扱えるのだろうが、今の単純な動きでは死天使を捉えることは叶わない。ビームガンが牽制で放たれるが、それはこちらの動きを制限するためのもので、命中を狙ったものではなかった。その合間を通るように、ソードビットを走らせる。だが、それこ

そ牽制以上の役は果たせない。

『セブンスソード』。その名は確かに私の中に知識としてある。この追加装備を扱うための基本動作プログラムと共に、私の中に書き込まれていた。確かにそのスキルを使えば、バルディッシュに対抗することが出来るかもしれない。しかし、リスクもあるのだ。扱いを失敗すれば、こちらもただでは済まない。しかも、一度として扱ったことのないスキルでもある。

「嬢ちゃん、どうする？ やるならやるで、決めてくれ！」

私の迷いが伝わったのか、シロが頭の後ろから声を荒げる。セブンスソードを使うためには、シロの協力が欠かせない。しかし自律思考型とはいえ、私の武装のひとつであるシロには、独立して武装を動かす権限はない。あくまで、私の動きを補助することがシロの役割なのだ。

「あら、まだ何か隠してるものがあるのかしら？ 隠し事の多い女って、私、好きだわ」

まるで舌なめずりをするように、こちらに視線を送ってくる。迷っている時間はない。

「シロ、セブンスソードを使います。力を貸してください」

「当然だ、俺は嬢ちゃんの手足だからな！」

「スキル、発動！ セブンスソード！」

散っていたソードビットが、光の尾を引いて駆け戻ってくる。長短六枚の刃が組み合わさり、GNソードVを中心に組みあがっていく。第七番目の剣と名づけられたスキルは、長大なバスターソードを作り出すスキルだった。光で形作られた巨大な刃は、大きさに比して重さを感じない。羽を振るうように軽く振り回すことが出来る。奇しくも私に与えられた新しいスキルは、レグルスのそれと同種のものだった。

「あはははは！ なんて素敵なの！ あなたも私のバルディッシュと同じものを持つたのね？ 素敵じゃない！ 素敵だわ！」

溢れる喜色を隠そうともしないアーンヴァル。その眼差しに宿る狂気の色は、一層濃くなってきている。黄金色に輝くザンバーを振る

い、襲い来る。しかし私の闘志は逆に燃え上がる。私が握っているのは、主が作ってくれさせたもの。ならば、それが私を裏切るはずはない。

「決着をつけましょう！」

私の方からも、前に出る。互いの一撃に、速度を足して、交錯。押し合うことを嫌って、切り払われる。が、それはセブンスソードの圧力がバルディッシュのそれに追いつていることの証左だ。死天使を追って、二閃、三閃と、バスターソードを振るう。それを払い除け、寸刻攻守が入れ替わる。黄金色のザンバーが一閃。受け止め、力で押し込む。それを嫌うのは死天使の方だ。開けた距離を惜しむかのように、互いの左腕から放たれたビームが火花を散らす。

互いの主力は近接戦でしか振るえない。牽制で撃ち込まれるビームガンなどでは、勝敗が動かないことはお互いに分かっている。それでもなお、互いの余裕を少しでも削るかのよう、光の矢が放たれる。その次の瞬間には、高速域まで加速した一撃を交換し合うのだ。

「あはははは、素敵よ、素敵だわ、こんなにも相手のことを感じるダンス、私、初めてよ！ もっと、もっと頂戴！」

昂ぶった声を上げる死天使だが、それほど余裕はないはずだ。ブーケット・オブ・リリアーナの支援もなく、ザンバーと互角の威力を持つバスターソードが私の手に握られた今、優位と言えるものは全て覆されている。にも拘らず、彼女の余裕の態度は崩されていない。勿論、死天使の優位を覆したと言っても、私が今まで劣っていた部分がよくやく追いついた、と言うだけのことだ。私に余裕があるわけではなく、ソードビットを操作するときのような頭痛は今も私を蝕んでいる。

「余裕のない顔ね？ そうやって歪めた顔をしているのも、貴女、美しいわ。でも、その調子じゃあ、さつきみたいにビームシールドを張る余裕、ないんでしょうね？」

その通りだ。この高速域での戦闘で、しかも頭痛を抱えながらシールドにまで振り分けるリソースはない。もっとも、シールドを張ったところでバルディッシュの一撃には耐えられない以上、張る意味はあ

まらないのだ。

「だとしたら、やっぱり貴女の負けだわ。さあ、もう一度咲き、狂いなさい、ブーケット・オブ・リリアヌ！」

死天使の声に応えるように、光球が三つ、現れる。狂い咲いたユリの花が、それぞれに散って私に狙いを定めた。

ずきん、ずきんと頭が痛む。リリアーナを呼び出したときはいつも
そう。でも今は、その痛みさえ心地良い。

こんなにも素敵な夜になるとは思わなかった。

あの晩、踊ったエスパディア。あの娘とならば、きつともっと素敵
な踊りを踊れる。そう思ったそのときから、私の胸の中にいつもあの
娘が居座るようになった。そして、そのことを不快とも思わない。た
だ、その日から日々の無聊が、一層深くなった。

あの娘がいない寂しさと、灰色の日々を埋めるために、オーナーに
辻でリアルバトルをすることを申し出た。オーナーは、思っていたよ
りあっさりとそれを呑んでくれた。オーナーも、あの娘の主人に用が
あるらしい。

——でもオーナー、私、あの娘を壊してしまうわよ？

そう言うと、オーナーは笑った。いいねえ、是非そうしてやってく
れ、と。

その次の日から、私達は夜毎、あの娘を探して回ったのだ。そして
今夜、ようやく見つけた。

ずきん、ずきん。

あの娘の首を刈り取って帰るためのものだと思えば、この痛みさえ
甘いものを感じられてくる。

ずきん、ずきん。

ずきん、ずきん……

頭痛は絶え間なく響き続ける。バッテリーは無理やり三回目の
ブーケット・オブ・リリアーナを発動したことで、もう緑に残量がな
い。それでも、この夜会が終われば、彼女を連れて帰ることが出来る。
そう思えば安いものだ。

実際、彼女の手はもう詰んでいる。リリアーナに対抗する術であつ
たソードビットを、セブンスソードとかいうスキルを発動するために
費やしてしまったのだ。おかげで今、展開されたリリアーナのトーク
ンを処理することが出来ないでいる。しかし、そのためにセブンス

ソードを解除してしまえば今度はバルディッシュのザンバーを受けることが出来なくなる。

「さあ、フィナーレよ、シンデレラ」

そう言う私の口元が、きゆうつと吊り上がるのを、私は押さえ切れなかった。

シャウがサブアームを展開し、空を切る。その動きにバーニアをあわせて、軌道を細かく変える。そうすることで辛うじて、トークンからの攻撃をかわすことは出来た。だが、その代償として攻撃の機会は失われている。

まさかこの段階でもまだブーケット・オブ・リリアーナでトークンを生成出来るとは思わなかった。そもそも、あれだけ強力なスキルだ。その発動にはかなりのエネルギーを食うはず。俺はそう予想したのだが、その予想は見事に裏切られた。

「シャウ！一度セブンスソードを解除して！ビットでトークンを処理するんだ！」

回避に集中したままでは、いずれ保たなくなる。セブンスソードを解除してしまえば、ザンバーを受けるのには不利だが、それ以前にこのままでは押し切られてしまう。どうあっても、まずは相手に取られたアドバンテージを消すところから始めなければならない。

「シロー！」

「おう！」

二人の声と共に、GNソードVが通常の状態に戻り、ソードビットとの連結が解除される。一拍の間を置いて、解き放たれたソードビットがトークンに向かって飛ぶ。

「そう簡単にはいかないわよ？ リリアーナ！」

そう言うと、トークンがより複雑な動きをとり始めた。トークンまでこんな複雑に操作出来るものなのか？ 補助コントロールユニットも介さないでこんな動きが出来るなんて、と素直に感心してしまう。ビットが手間取る隙に、更に斬りかかる死天使。間に張られたバリアシールドは、トークンの攻撃を防ぎはするが死天使本体の攻撃に

は易々と切り裂かれてしまう。

「くっそお！ 嬢ちゃん、もうちつとりソースをこっちにくれ！ これじゃあトークンに当てられねえ！」

「そう、言われても……ッ！」

シャウ自身も、死天使の攻撃を捌きながらシールドを張るので手一杯だ。左肩の物理シールドやサブアームの鬼姫を合わせて何とか帳尻を合わせているが、一刻も早くトークン进行处理出来なければ詰みだ。

「ソードビットを集中しろ！ 一機ずつ、順番に処理するんだ！」

俺のその声に火線が集中する。剣閃を避け切れなかった一機のトークンが、ようやく弾け飛ぶ。だが、バリアの隙間を縫って、トークンの攻撃がシャウを捉える。

「シャウ！」

「……大丈夫、ッ！」

顔を直撃したかと思ったが、追加したアイシールドが守ってくれたようだ。身代わりに砕けたアイシールドの破片がキラキラと散っている。

「あら、御免なさいね。顔を狙うつもりはなかったのだけれど」

返事の代わりに再度ソードビットが襲う。が、狙いを絞っても二機目のトークンは墜とせない。逆にトークンの支援を背に、レグルスが上段から切り下ろしを見舞う。それを受けるシャウの動きはぎりぎりだ。それどころか、トークンの支援によってその場に縫い付けられてしまっている。

「流石に、その剣は堅いわね。普通なら焼き斬れるのだけど。材質は何？ 鋼でも使ってるのかしら？」

正鵠を射ているのだが、その声には侮るような響きも含まれている。まさか本当に鋼で作られているとは思っていないのだろうか。

「まあ、それならそれでやりようはあるのだけれど」

トークンが更に前に出て、火線を集中する。しかし、バリアの展開に気を取られれば、ザンバーからの防御とビットの操作が疎かになる。結果として、バリアでの防御を捨てて、トークンの撃破とザン

バーからの防御を優先するしかない。回避運動を途切れさせたら、たちまち動けなくなってしまう。

「くう……ッ！」

「シャウー！ 突撃！」

トークンが前面に出てきた。今、この瞬間しかない。

主からの指示が出た。それを合図に、火線を防ぎながら強引に突撃を仕掛ける。一言で、主の狙いは伝わった。バリアシールドを目の前に展開しながら、射撃を続ける二機のトークンに身体ごとぶつける。シールドの向こうに、爆炎が広がった。

「なんて強引な……！」

炎の渦を切り裂きながら、ザンバーを抱え上げたレグルスが迫る。障壁はザンバーの一撃には耐えられない。交差した鬼姫で受け止める。

「スキル発動！ 無銘：大顎！」

長大な剣を受け止めたまま、強引にスキルを発動して大顎を形作る。はげしい火花を散らして押し合う、鋏と大剣。

「そんなもので私のバルディッシュを受け止めるつもりなの？ あはははは！ 首刈りだ！ その首もいであげるわ！」

狂気の笑いを溢れさせる死天使。その狂気の籠った一撃を、私は真っ向から受け止める。

「シロ！ 今！」

「任せろおッ！」

シロがそう応えた刹那、レグルスの背後から六つの流星が襲った。

六枚のソードビットが、機械式の翼を背後から切り裂いた。寸刻待たず、レグルスが地に墜ち、そのまま、もがく様子もなく動かなくなる。故障だろうか。いや、もしかするとバッテリーが上がったのかもしれない。ただでさえエネルギーを食いそうなスキルを乱発したのだ。相手のマスターは、眼を閉じて頭を掻いている。

「そろそろよさそうだね。決着はついたかい？」

路地の影から姿を現したのは、榊刑事だ。その傍らには、アンジェリクスと、ロートケーファに乗ったアルもいる。

「榊刑事、いつからいたんですか」

「いや、つい今さ。だろう、アルくん？」

アルには、最も重要な役を担ってもらった。即ち、事が起こったときに俺達のところまで榊刑事を連れてくる、という役目だ。

「サツか。間が悪い、つてえわけじゃなさそうだな」

「そうだね、今回はしつかりと網を張らせてもらったよ。容疑は……まあ分かってるだろう。違法賭博への参加、違法改造武器の製造、器物損壊に伴うMMS保護法違反、MMS倫理規定違反……まだ必要かな？」

「いんや、充分だ。そのくらいで収まってくれりやあ御の字、つてえところだな」

「それで収めてやれるかどうかは、君次第だな。余罪の方もたっぷりありそうだし、ね」

「おいおい、勘弁してくれ」

黒い手帳を見せながら、罪名を挙げる榊刑事を前にしても、この人の態度は変わらなかった。動かなくなったレグルスを優しい手つきで拾うと、砂を払うような仕草をした。

「やれやれ、せっかくレストアしたんだがな。まあリアユニット全損かよ。景気よく壊してくれるぜ、まったく」

「あ……申し訳ありません……」

「……ちっ、毒気抜かれちゃったぜ。本当は俺等の稼ぎを減らしてく

れた分だけ、痛い目を見せてやろうと思ってたんだがなあ」

顔を逸らしながら空いた方の手で頭を搔く。

「あの……まだバトルがしたかったら、私達はK市のゲームセンターにいます。バーチャルでならいつでも受けて立つ。そうお伝えください」

「へっ、冗談じゃねえ。二度もこんなにされて、これ以上やる気になんかなるもんかい」

榊刑事が、それじゃ行こうか、と促している。罪の清算がどれほどになるか分からないが、俺としては、出来ることならもうやりあいたい相手ではない。今回の被害も甚大だ。ミーシヤの装備ばかりではなく、せつかくの新装備まで傷だらけ。これをまた修理しなければならぬかと思うと、気が重い。それでもなお自分と戦う方法を示したシャウは、懐が広いと言うかなんと言うか。

「よっぽど見るべきところがあったのかな?」

「そうですね、高速格闘戦に特化したアーンヴァルなんて滅多に見ませんし、ビットの扱い方も、学べる部分は多くあると思いますよ」

それは確かにそうだ。それ以外にも、アーンヴァルはビーム系装備の扱いにも優れている。GNソードVの使い方や、セブンスソードの扱いも、吸収出来る部分は多いのだろうと思う。が、それとまた戦いたい相手かどうかは別だ。

「でも、それ以上に、あの人を放っておいてはいけないような気がして……いけませんでしたか?」

「いけないわけじゃないけど……まあ、シャウがいいならいい」

なににせよ、今夜の戦いは終わりだ。シャウの武装を解き、片付け始める。

「そういえば、主、今回の武装パーツですけれど、いつの間に準備されていたのですか? 私、まったく知りませんでしたけれど」

「う……あれは、その、なんだ、えーつと……」

「……?」

急な問いかけに、答えに詰まる。シャウは不思議そうな顔を浮かべている。それはそうだろう。答えに窮していると、横からアルが

ひよっこり顔を出す。

「マスター、そういうところマメだからなー。シャウラの起動日にあわせて準備してたんだよねー」

「私の……?」

「んなっ!? アル、何でそれを知ってるんだ!?!」

「ボクは自宅警備員だからねー、PCの購入履歴やら、凶面の製作記録なんかを、ちよいちよいつと……ね?」

……なんということだろうか。今度からは履歴はクリーンにしておかねば。いや、そんなことより今は……。

「この武装……本当なのですか、主?」

「う……その、なんだ。シャウがウチに来て、ちょうど一年になるからと思つて、準備していたんだが……」

「ありがとうございます……! 私、こんなとき、なんて言つたらいいか……それなのに、こんなにぼろぼろにしてしまつて……」

途端に、シャウの表情が曇る。馬鹿だな、そんなこと、気にするよ。うなことじゃないのに。しかし、その思いがうまく言葉にならない。互いに言葉に詰まつてしまう。

「シャウ」

「はい」

思い切つて口を開く。

「無事で良かった。そのために武装が傷ついたのなら、そんなことは気にしなくていい」

「……はい。でも私、主に何も返せません。今の私には、何もないから」

「それこそ、気にしなくていい。俺はもう、返し切れないほどのものをもらつてる」

また、言葉に詰まる。横ではアルが呆れたような顔を向けてくる。だが、それでもいい。それは確かに、俺の本心だった。

「なあ、神姫ポイントっていくつ持つてるか分かるか？」

「なんだよ、急に」

高校最後の夏も終わり、再び学業に追われる日々が始まった。そんなある日、突然花道がそんなことを尋ねてきた。

神姫ポイントというのは、神姫プレイヤーが個別に持っている得点のことで、公式な試合では互いにこのポイントを賭けて試合が行われている。勝てば増え、負ければ減る野が基本で、そのため、強いプレイヤーというのは、このポイントを多く持っているプレイヤーであると言ひ換えることが出来る。つまり、このポイントを比べれば自分と相手の大体の強さが可視化される。それを急に聞いてくるとは、どうしたのだろう。何かあったのだろうか。

「いや、俺がバイトしてる神姫センター、あるだろ。そこで今度、公式の大会を開くんだけだよ、キャンセルが入って人数が足りないんだわ」

「そんなの、一席空白で不戦勝扱いだろ。参加者は得したな」

「ってことにしたくねーから声かけてんじゃねーか。そんなに大きな神姫センターじゃねーし、なるべくならコケさせたくねーんだよ。特に今度のはサードリーグ向けの設定だから、俺が出るわけにいかねーんだわ」

「それじゃあ、俺も参加出来ないね」

俺に先んじて、日野が答える。

現在の神姫競技は、ファーストからサードまでのリーグ制だ。プレイヤーは神姫センターで公式の登録をすると、同時にサードリーグに登録される。それぞれのランクで一定の成績を納めると、次のランクに昇格出来る仕組みだ。最近は受験勉強で参加していないが、日野は花道と同じセカンドリーグの上位にいる。その辺りまで行くと全国的な大会への出場資格にも手が届くし、他県のプレイヤーでも詳しい人間になら知っている、という程度の知名度になる。ちなみにこのリーグ昇格にも先の神姫ポイントを一定以上持っていることが条件

のひとつである。

「で、どのくらい持つてるか、分かるか？ もうセカンドの規定値に
いっちまってるかな」

「残念ながら、そこまでは行ってないよ。ポイント的には、まだサード
のままで」

俺は日野や花道と違い、高校に入っただけで神姫を始めたわけではな
いし、高校生リーグの公式試合にもほとんど出ていない。キャリアと
してはそろそろ一年以上になるものの、戦績のほとんどは公式と
いえポイントの大きく動かない草バトルが中心。対外的な評価とし
てはそれほどでもないのだ。

「ちようどいいじゃねーか。一年もいればサードはもういいだろ。セ
カンドに上がっちゃえよ」

「お前な……」

気軽に言ってくれる。夏休みでさえ受験勉強に囚われていた俺達
と違って、花道は進学をしない。四月からは現在アルバイトをしてい
る神姫でセンターに、そのまま就職予定だ。もつとも、その夏休み中
にきつい思いをした原因の大半は、休み前に壊されたシャウとミー
シャの武装のレストアが立て込んでいたせいでもあるのだが。なに
せシャウがウチに来てから一周年の記念に、と作っていたのをアルの
奴が喋ってしまった、俺はマスターとしての意地にかけても記念日まで
に武装を修復することになったのだから。

「いいだろ、少しくらい。何も、何週間も時間くれて言ってるねーじゃ
んか。頼むよ」

「ちなみに、それっていつ？ 今月末にかかってくると、俺達模試があ
るから」

「大丈夫、今週末だ！」

日野が余計なことを聞いている。自分が出られないからって、気軽
なものだ。その日程では特別なことは何も出来ない。参加する以前
の問題だ。

「いいじゃないか、模試の前の息抜きに。君、確かこの間の結果は良
かったんだし」

「日野まで……」

そんなことを言われると、俺だって出たくないわけではないのだ。受験勉強という重荷を放り出したいという、人並みの欲求はある。

「んじや決まりな。今日バイトだから、代わりに参加登録してやるよ」

勝手なものだ。まあ、そんなことを思いつつも、俺自身既に気持ちは参加したいと思ってしまうのだから、仕方ない。

「ちなみに形式なんだけど、スイスドロローの三回戦な」

「……なんだっけ、スイスドロローって」

「……お前、一年も神姫やってて知らねーのかよ?」

「まあ、俺達と違って、公式大会の出場経験が少ないからね、仕方ないよ」

日野の説明によると、スイスドロローというのは試合の運営方法のひとつだそう。大まかに言うと、勝率の近い者同士がランダムで試合をする形式のことらしい。要は一回戦を勝った者は勝った者同士、負けた者は負けた者同士が試合を組むようになるので、一回戦以外は常に自分に近い強さの相手と試合をすることになるのだそう。ちなみに一回戦も手持ちの神姫ポイントを基準にマッチングされるらしいので、完全にランダムというわけではないらしいのだが。この方式だとトーナメントと違って、負けても試合が組まれるし、成績次第では一回戦負けでも上位に入ることが出来るので公式の大会では割とメジャーな方式らしい。が、あまり公式大会のような大掛かりな舞台とは縁遠い俺には馴染みのない形式だ。

「まあ、要は負けなきゃいいのさ。そう考えりゃ、トーナメントと変わりねーよ」

運営する側としてはどうかと思うが、花道の竹を割ったような回答が頼もしい。どの道今週末に試合などいきなり言われても、碌な調整は出来はしないのだ。ならばいつそのこと、開き直って運がよければセカンドリーグに昇格出来る、というくらいに考えていた方が精神衛生上はいいのかもしれない。

「ん……? 今週末って、明後日じゃないか!?!」

「そうだよ？ だから焦って参加者探してたんじゃねーか」

「まあ頑張れよ。暇があつたら、応援くらいには行つてあげるから」

……もうなるようになれ。今回はこの間までのそれとは違って、純然たる競技、試合だ。負けたら食われるわけじゃなし、腹をくくって飛び込むしかない。とりあえず今日は帰ったら、シャウと武装の調整をしよう。そう心に決めたのだった。

ブライトフェザーがフェザーブレイドを両手に構え、迎え撃つ姿勢を取る。だが、それをサブアームで払い除け、素体腕で抱えたGNソードVを上段から振り下ろす。軽装のブライトフェザーにとって、速度に乗せたその一撃だけでも充分致命傷となりうるものだったが、更に追撃で左手を掲げ、ビームガンを撃ち込んだ。一発、二発。それが決め手となった。

『I P シャウラ WIN』

対戦相手のブライトフェザーがポリゴンの屑になって崩れ、ジャッツCPUが私の勝利を告げた。

結局、ほとんど何の準備も出来ないまま、公式の大会には出場することになった。公式の大会とは言っても、花道のバイト先の神姫センターはそれほど大きな場所ではなく、参加者も十人を切る程度の、慎ましいものではあった。その結果、所有する神姫ポイントの近い者同士が割り当てられたと言う触れ込みが吹いて飛ぶほど、一回戦を軽く勝ち抜いてしまった。

確かにブライトフェザーは発売時期を指して言えばエスパディアよりも新型である。しかし、新型ならば強力というわけではない。

昨今の武装神姫業界では武装の大出力化、大型化が進み、元々高額の嗜好品であった武装神姫は更に高額化。初心者が入門しにくくなるという傾向にあった。そこで開発されたのが、武装をコンパクトにまとめたライトアーマーシリーズである。このシリーズは武装を極力絞ることで価格を抑え、初心者用の入門セットとして各社の売り上げに貢献している。

ブライトフェザーもそのライトアーマーシリーズの一作である。が、その性質はバトルよりも一昔前の生活サポートアンドロイドとしての側面が強く、武装の性能も初心者向けの基本セット的なものであり、バトル重視のユーザーからは敬遠されがちなシリーズでもあった。自然、その少ない武装からその特性を活かすためには明確な思想

に裏打ちされた戦術が不可欠で、それは数としてはごく少数になる。一回戦のブライトフェザーは、そんなごく少数、ではなかったようだ。「お疲れ。手早く済んだね」

「ありがとうございます。ライトアーマーも発売半年ほどですから、まだそう簡単には負けられません」

今回はソードビットのコンテナを兼ねたシールドは、サイドボードに入れてあった。純粋に高速装備で、一瞬でも早く接敵し、斬り捨てることに特化した装備だ。リアユニットのテールノーズバインダーなども追加している分、以前よりも速度は上がっている。

「他の試合が終わるまで、少しは余裕がありそうだね」

「暇してんなら、集計手伝えよ」

そう声をかけてきたのは、店員と同じ格好をした、花道だ。いや、花道は今はこのセンターの店員なのだから、何も間違っではないのだが。

「なんだろう、もう少し客を労わったらどうだ」

「お客様、お手透きでしたら集計作業の方、手伝っていただいてもよろしいでしょうか」

「よろしくないです」

即答する。そもそも俺はこの大会について、前情報を何も持っていないのだ。早く試合が終わったのなら、少しでも周囲の情報を得たい。

「そんなことしてもよー、二回戦の相手が誰になるかは決まってるんだぜ？」

「うん、そういうことじゃない」

対戦中のプレイヤーから見取れることは様々だ。バトルを俯瞰することで、どんな装備や戦術が流行なのか。それに対してどんな対策が取られているのか。プレイヤーのスタイルはどうか。総じて、この神姫センターがどんな場所なのかも、そこに集うプレイヤーがこれ以上なく雄弁に語ってくれる。そういったことを見ているだけでも、時間は飛ぶように過ぎていくのだ。

「まあ、どの道一回戦の終了時点で出来る集計なんて、プレイヤーカー

ドを勝ったか負けたかで分けるくれーなんだけだよ」

「何も手伝うことなんかないじゃないか……」

しかし、やはりこの空気はいい。バトルロンドの真剣なバトルの空気が、ここには溢れている。それは裏バトルの会場の熱気や、リアルバトルの身を切るような空気とはまったく違う。お互いがお互いを尊重して、互いの技を高めあう。それはアスリートが纏う空気に近いものがある。その意味では、ここは神姫センターとしては良い場所なのかもしれない。

そんなことを考えながら他のバトルを観戦していると、あつという間に次の試合の組み合わせが決まる時間になった。スイスドロースでは前の試合の勝率によって対戦相手が決まるため、ぎりぎりまで誰と戦うことになるかが分からないのが難点らしい。

発表された組み合わせによると、次の相手は一回戦で辛勝していたウエスペリオール型だ。互いによりしく願います、と挨拶すると、戦闘準備を整える。

戦闘フィールドは「夜の平原」。最近の忍者型や今度発表された夜戦飛鳥などに合わせたアップデートで追加された新ステージだ。地形的には今までもあった平原ステージと同じで、起伏はあるが障害物になりそうなものがないシンプルなステージ。

しかし、このステージでウエスペリオール型と戦うのは不利だ。ウエスペリオールも比較的最近発売された型ではあるが、それよりもまずいのはそのモチーフが蝙蝠であるところだ。当然、この夜戦フィールドにも対応しているはずだ。

『索敵、始めます』

「頼む。このフィールドは視界が悪い。視覚はあまり頼りにならないから、そのつもりで」

『と言っても、相手はウエスペリオール型ですからね。レーダー対策も標準装備だったはずです』

その通りだ。夜戦が基本になる蝙蝠型は隠密性が高く、レーダーや音響索敵でも発見されにくいという特徴がある。一方でエスパディア型の策敵性能はそれほど高い方ではない。

「かくれんぼではこっちが不利だな」

『いえ、発見しました。ビームシールドの類いを展開していますね』
「ビームシールドを？」

俺は怪訝な顔をした。高い隠密性はウエスペリオアの武器のひとつだ。一方でビームシールドは常時光と熱を放出する、言ってしまうば「目立つ」装備。ウエスペリオアを使う利点を殺しているとは思えない。こちらでもそれを気にして、GNソードVはメイン装備からサイドボードに移している。そんなことに気づかなかったとは思えないのだが……。

『ミサイル、来ます！』

墨を流したような夜空に、白煙を引いてミサイルが飛来する。いや、白煙だけではない。パステルカラーのようなカラフルな煙を引いたミサイルが何発も飛んでくる。

「何だこれは？」

ますます分からない。せつかく夜の闇が姿を隠してくれるのに、わざわざ目立つことをしているとしか思えない。普通のフィールドで使うための眼くらましをそのまま使っているのだろうか？ しかしそれなら通常のミサイルに切り替えれば済むことだ。ここまで手の込んだ準備をしてくる相手が通常弾を用意していないとは思えない。この攻撃にも、何か意図があるはずだ。

『弾速も速くありませんね。これなら余裕をもって避けられます』

「警戒、怠るな。こんな妙な攻撃、聞いたこともない。何を意図してるのか分からないから、注意して」

『承知！』

煙を引いて飛んでくるミサイルは、確かに回避が難しいというような速度ではない。が、突然の爆発がシャウを襲う。

『きゃっ！』

「離脱！」

原因不明のダメージを受けたら、即その場から離れる。訓練でも繰り返し教えた通り、シャウが上空へ離脱する。ミサイルの数発が、それを追いかけてくる。その中には、明らかに速度が違うものが紛れて

いる。

『シールド！』

シャウが左手を上げると、目の前にバリアシールドが展開される。数初の爆炎が、障壁に遮られて半球を描く。

「なるほど、スモークを引くミサイルで注意を引いて、高速の小型ミサイルを紛れさせてきたのか。面白い戦法だ。シャウ、ダメージは？」
『二発目からはシールドが間に合いました。戦闘継続には問題ありませんが、ダメージはもらいましたね』

ダメージだけで済んだのなら、まだいい方だ。奇襲で勝負を決める気なら、相手がカードを切ったときには勝負が付いていることだって充分ありえる。この奇襲一発で勝負を決められなかったのは幸運だ。

「シャウ、相手の位置は見失ってないな？」

『はい、このまま征きます！』

シャウが一気に加速する。ビームの光がゆらゆらと、誘導灯のように揺れている。そこに向かって一直線に。鬼姫を振りかぶり、突撃。だが……。

『えっ？』

消えた。数瞬前まで捉えていたはずの相手の影が、ビームの光が消えると共に掻き消えた。その直後に、背後から再びミサイルの雨が襲い掛かる。

『後ろ！』

「馬鹿な、もうあんな距離に？」

カラフルな煙の隙間から、ビームの光が垣間見える。それから察するに、今の位置からはかなりの距離を移動したことになる。ウエスペリオーは確かに飛行型だが、その特性は速度より機動力と隠密飛行寄りだったと記憶しているのだが、こんな短時間にそこまでの移動が出来るものだったか？

再び、バリアシールドを展開。私の目の前で数発の直撃弾が障壁に阻まれ、炎を上げる。

「いつの間にあんな距離に？」

『ウエスペリオーはそこまで速度が出る機種じゃない。なにか仕掛けがあるな』

主は冷静な声でそう告げる。しかし、例え仕掛けがあっても接敵しなければ始まらない。もう一度上空へ駆け上がり、加速して突撃する。カラフルなスモークの向こう側に、確かに揺らめくビームの光を視認する。しかし、ミサイルの雨を振り切って向かった先では、捉えられると思つた瞬間にウエスペリオーの影は掻き消えた。

「また!?!」

訳が分からない。確かに私は、ここに敵の影を確認していたのに。それとも何かのジャミングを受けているのだろうか。しかし、ジャミングであつたとしても瞬間移動のようにして短くない距離を移動していることには説明がつかないのだ。

『……シャウ、落ち着け。多少乱暴な方法だけど、策はある。先ずは相手の仕掛けた謎を解くところから始めよう』

主の声は、落ち着いている。この声があるから、私は平静を取り戻せる。もし私一人だつたら、この訳の分からない状況に混乱し、自滅していたかもしれない。私は主の望むものを裁つ刃。それだけに徹すればいい。それで私は安心出来る。

突然、相手のエスパディアがこちらに背を向けて逃げ始めた。

『ご主人様、あいつ、逃げ始めたよ』

『何か距離を取って有利に働くものがあつたか？ サイドボードかな?』

「とりあえずミサイルで追撃しとくよ」

パステルカラーのスモークを引くミサイルに紛れて、肩のニンブスからもマイクロミサイルを追加でばら撒く。とはいえ、スモークミサイルは弾速や威力よりも大量の煙を出すことを目的とした装備だし、マイクロミサイルは一撃一撃の威力はそれほど高くない。

「今ならまだポイント勝ってるよね?」

『一撃入ってるからな』

時間切れになれば、ダメージが入っている方が判定負けになる。こ

の試合ではエスパディアが何か仕掛けてこなければ、あたい達の勝ちだ。

「このままだと、射程の外まで出るね」

『時間切れを狙ってもいいんだけど、とりあえず追うか。出来たらポイント稼ぎたいし』

同じ勝利でも、判定勝ちだともらえる神姫ポイントは目減りする。この相手は格闘戦主体の装備っぽいし、今のところご主人様の作戦に見事にハマっている。これなら気づかれるまでもう一発二発狙えるだろう。

「あれ、止まった？」

相手を追いはじめてすぐ、エスパディア型が急に脚を止めた。特に回避運動を取っている様子もない。狙い時だ。ぎりぎり射程に入ったマイクロミサイルを放つ。スモークの方は間に合わないが、問題ないだろう。が、その直後、放ったミサイルの全てが一撃で撃ち落とされた。

「この辺でいいだろう、反転して」

『スキル発動、シロ、お願い！』

『よっしゃあ、行くぜ！ 『セブンスソード』、第二段階！』

サイドボードから転送されたGNソードVを中心に、六枚のソードビットが結合し、長大なバスターソードを形作る。これが、スキル『セブンスソード』の第一段階だ。このスキルには、次がある。

『準備出来たぜ、嬢ちゃん！』

「勝負は一瞬だからね、位置の把握をしっかりとよろしく」

『了解です、『セブンスソード』、第二段階！ バスターライフル！ 発射！』

グリップが倒れ、バスターソードの先端が開く。そしてそこから、バスターソードの刀身を銃身として、エネルギーの奔流が解放される。これがセブンスソードのもうひとつの能力だ。バスターソードを形作るのに使われる膨大なエネルギーを、バスターライフルとして放出する。勿論シャウの火器管制能力は低い。この能力を最大限に

活かすには足りないだろう。しかし、今はそれでも充分だ。

攻撃目標は、さつきまでいた辺り一帯を適当に。そんな大雑把なもので構わない。狙って当てるつもりなど、端からないのだ。

『見えたー!』

「やつぱり、あのビームシールドみたいなのはダミーだったか」

奔る光が幾つものミサイルを巻き込んで、夜の闇を白く切り開く。そこにはウエスペリオー本体の他に、ふたつの小さな影。ビームシールドとミサイルコンテナを積んだ、中型のビットだ。あれがスモークミサイルを吐き出すと共に、暗闇の中での目印として、こちらの目を欺いていたのだ。しかし、手品の種が割ればなんてことはない。

通常の形に戻ったGNソードVが、バスターライフルの軌跡を追うように闇を切る。それはさつきまでの光と比べればはるかに頼りない。だが、それでも充分だ。

『なんて真似をしてくれるんですかあッ!』

咄嗟にダミーのビットが間に割り込んでくる。が、既にそこにはソードビットが展開している。剣閃が煌めき、ダミービットが爆散する。その明りが、煌々と二人の影を照らし出した。GNソードVで、一撃。しかしそれだけでは終わらせない。

『スキル発動、ディアホーンストラッシュ!』

サブアームで展開した鬼姫を十字に振るい、追撃。咄嗟に翼を閉じて、剣戟を防ぐウエスペリオーだが、それでもまだシャウの攻め手は緩まない。更に左腕のアームガードから、ビームガンを乱射。先の盲目の死天使が使ってきた、ビームガンを追撃に使うという使い方を、シャウは完全にものにしている。寸刻の間をおいて、シャウの名前がファンファーレと共にバーチャルの空に浮かび上がった。

「やあ、どうだい？勝ってるかい？」

「二回戦の終わった俺に、そう声をかけてきたのは日野だ。」

「本当に応援に来てくれたのか、律儀だな」

「口実だよ。大会が終わったって全員がすぐ解散するわけじゃないでしょ。多少は息抜きもしないと」

「ああ、なんだかんだ言っつて、日野も遊びに来たのだな。とは言っても、今日の大会には日野からしたら格下の相手しか参加していないのだが、それはいいのだろうか。」

「それに、ここひと月くらいはまったくバトルに参加してないし、勝手を忘れてるところもあるからね、リハビリだよ。な、リリイ」

「またそんなことを言っつて。ただ弱い相手を狩るだけなら、私、やりたくありませんわ」

「はは、これは手厳しいね」

日野はそう言っつて苦笑いを浮かべる。なるほど、イーダ型は気位の高さが有名だが、こういうことになるのか。その辺り、神姫の性格は本当に様々だ。こういうところはプレイヤー自身が操作するタイプのフィギュアバトルゲームにはない感覚だな、と感心する。

「えー、それでは参加者の皆様、三回戦の組み合わせを発表いたしますので、お集まりくださいーい」

「お、花道だ。真面目に店員やってるんだな」

「真面目かどうかは置いて、やってるよ。それじゃ、後でな」

そう言っつて、参加者を集めている花道の方に向かう。花道からプレイヤーカードを受け取ると、対戦相手に挨拶をする。その肩にはミズキ型が乗っている。なんだか、今日は割と最近発売した型とばかり当たってる気がするが、サードリーグは一年くらい真面目にバトルロンドに参加していれば、セカンドに昇格出来るという話も聞いたことがある。そういう意味では、サードリーグ所属で熟練のプレイヤーというのは極少数なのだろう。

俺は筐体に入ると、早速武装の設定を始める。バトルフィールドは

「夜の室内」……。これは参った。室内のマップはシャウにとっては一番苦手なステージだ。と言うのも、室内はそれほど広い空間が確保されていないので、飛行装備との相性は最悪なのだ。逆に陸戦装備でも高機動装備や大火力装備では戦いにくく、あまり人気の高いステージではない。

「どうしようか、とりあえず機動力優先のデフォルト装備で行くか？」

「そうですね、あの狭い室内で高速装備だと自滅しかねません」

「じゃあ、とりあえずデフォルト装備にスカートアーマーを追加して、ソードビットはサイドボードにしておこうか」

「それならメイン武装は鬼姫とジユダイクスでお願いします」

プレイヤーと神姫には、こうしてそのバトルフィールドごとに装備を整える時間が五分ほど与えられる。ランダムフィールドでバトルが進行する限り、いつでも自分の装備と最高の相性で戦うことが出来るわけではないのだ。こうしてそのときの手持ち武装の中から、足し算や引き算をして、あるいはサイドボードを駆使して適した形を選ぶ。戦いは既に、武装構築の段階から始まっているのだ。

室内マップは幾つかの部屋に区切られている。ただでさえ色々な障害物が詰め込まれたステージだ。それが夜になると、障害物の陰がより多く、深くなる。先ずは索敵をしなければ始まらないのは確かだが、この暗い室内で、そのモチーフが忍者であるミズキ型と戦うのは、正直不利だ。相手がどこに隠れているのかが分からない。そして、気づいたときには、私のすぐ傍にいるかも知れないのだ。

しかし、そんな不安はすぐに晴れることになる。大広間に入ると、そこには煌々と照る満月を背に、ミズキ型が腕を組んで待ち構えている。忍襟布、陽炎が風にはためいている。

「ずいぶん遅い到着じゃのう、待ちくたびれたぞ」

月明かりに照らされて、白い忍び装束が輝いているようにも見える。

『忍者型にしては堂々とした登場だな。てっきり物陰に隠れて攻撃してくるものだと思っていたが』

「期待に添えられず残念じゃが、妾はそういうのは、不向きでう。どうせなら真正面からやりたいものよ」

「それはこちらも望むところですよー」

大広間は私が飛び回るのに充分とは言えないが、それでも他の部屋に比べれば大分ましだ。サブアームを展開し、四刀を構える。それを待っていたかのように、赤い飾り布がつけられた飛び苦無が投げつけられる。まっすぐに飛んでくるそれを、咄嗟に剣を盾にして払い除ける。

「尋常に勝負、と言いたいところじゃが、お主と斬りあうのは大分骨が折れそうなのでな。こちらの得意な距離でやらせてもらおうぞ」

そう言うのと、立て続けに苦無を投げってくる。飾り布をはためかせた苦無を、苦もなく私は払う。何の仕掛けもなく、ただ飛んでくるだけのそれを打ち落とすことなど、造作もない。私は剣を横に構えたまま、前に進もうと足を出す。

『油断するな、正面！』

主の声に、一歩後ろに跳び退る。一瞬遅れて、そこには苦無が突き刺さった。注意を怠ったつもりはなかったが、いつ投げられたか、気づかなかった。

『二回戦のときと同じで、飾り布は目くらまし……本命はその、飾り布のない苦無ってわけだ』

「ほう、仕掛け苦無に気づきおったか。お主の主人は中々優秀なようじゃの。しかしの、気づいておれば避けられるというものでもあるまいぞ？」

『まだ何か仕掛けてくるかもしれない、距離を詰めるにしても、注意しながらだ』

「承知！」

連続して飛んでくる苦無を、時に避け、時に剣で受けながら進む。目くらましだと分かっていたら、それに気を取られることもない。いかに間断なく飛んでくると言っても、サブマシンガンやガトリングの作る弾幕とは比べるべくもない。一歩、また一歩と間合いを詰める。

「……それが甘いと言うのじゃ」

突然、身体の横が弾けた。何があつたのか分からぬまま、身体は反射的にダメージを庇い、次いで詰めた距離を手放すように後ろに飛ぶ。が、何かに足を取られ転倒する。

「お主、罠があると気づいておれば罠にはかからぬと思っておろう？」
それを機とばかりに、無数の苦無が飛来する。

「本物の罠というのは、そこに罠があると分かっておつても、かかってしまうものなのじゃ！」

倒れた状態で避けられるものは避け、落とせるものは叩き落とす。が、いくつもの苦無が身体を直撃する。その苦無の内の幾つかには、火花を上げる筒のようなものがくくりつけられている。

「これぞ忍法、飛雷火の術」

筒が爆ぜる。身体を床に叩きつけられながらも、最初に爆ぜたのはこれだったのか、と頭のどこかで納得した。

『シャウ！ シャウ！ しっかりしろ！』

主の声で、手放しかかった意識を繋ぎとめる。体勢を立て直し、ダメージチェック。各部とも、動かなくなつた箇所はない。まだいる。

『大丈夫か、シャウ』

「はい、まだやれます」

主の声に、短く答える。次いで、広間の入り口辺りを確認する。そこには苦無に繋がれた、ワイヤーのようなものが張つてあつた。さつきはあれに足を取られたのか。よく見ると、幾筋かのワイヤーが張られている。

「尋常に勝負するのではなかつたのですか？」

「何を言うておる。妾は忍び、使えるものは全て使うのが忍びの常道よ」

再度構えを取るその手には、大手裏剣『白詰草』が握られている。大きく振りかぶるその一瞬、左腕を掲げてビームガンのトリガーを引く。牽制に放たれた光弾は、うまいことミズキの胸に吸い込まれている。当たった！

「甘い、と言うておろうに」

声と共にミズキの姿が煙に包まれて消える。

「忍法、変わり身の術よ」

あらぬところから白詰草が飛んでくるのを、視界の隅で捉える。

「くっ、厄介な……！」

「ほめ言葉として受け取っておこうかの。さ、次々にゆくぞ、どこまで耐えられる？」

とにかく距離を詰めなければ。途切れることなく投げられる苦無の雨に、バリアシールドを展開して突き進む。苦無くらいのものであれば、はね飛ばせる。

「ほう、二回戦で見せたシールドか。厄介じやの」

後ろに跳び退りながら、苦無に紛れて白詰草を投げる。幾つかの苦無が、シールドに触れると同時に爆炎をあげる。炎に紛れさせるつもりだろうが、白詰草は見失っていない。それを避けて、更に追いつがる。

『後ろ、防げ』

咄嗟に反転して鬼姫を振るう。そこには避けたはずの大手裏剣。ワイヤーでヨーヨーのように戻ってくるよう仕掛けられたものらしい。それを打ち落とし、意識をミズキの方に戻す。しかし、目を離した際に、ミズキは逆にこちらの間合いにいた。手には忍者刀『風花』が握られている。サブアームでその一撃を防ぐが、一瞬でも意識を他に向けると次の瞬間には思いもかけない動きをしてるのが厄介だ。「さて、そろそろ頃合かのう。お主に今から、ぞつとするものを見せてやろう」

そう言うミズキは、懐から巻物を取り出して口に咥える。

「先ずは「の手……スキル発動、『神力解放』！」

言葉と共に、ミズキの身体が輝きを帯び始める。神力解放はミズキの使う、「SPを固定する」スキルだ。条件が整えば、スキルを無尽蔵に使うことが出来るようになる。ぞつとすることとはこのことだろうか。しかしこれだけなら、厄介であることは確かだが、ミズキ型の手としては特筆することとは感じない。

「次いで「の手……スキル発動『二重影分身』！」

淡い光を放ちながら、ミズキの身体がふたつに分裂する。

「どうじゃ、斯様な技は上位のリーグでも見たことはあるまい。さて、尋常に勝負と参ろうかの？」

「なんとというスキルを……」

二人のミズキは、互いに違う動きをとっている。ということは、単純なコピーではなく、自分の姿そっくりのトークンを作り出すスキルということか。

『シャウ、シールドを送る。連携までとられたら面倒だ、分断するぞ』『承知』

左肩にポリゴンが集まり、ビットコンテナを兼ねたシールドが転送されてくる。頭の中で片方のミズキに狙いを定めると、シロがそれを読み取って即座にソードビットを飛ばす。長短六枚の刃が光の尾を引いてミズキの片割れに襲い掛かる。所狭しと駆け回るビットに、風花を振るって対するミズキ。一方もう一人の片割れは手に忍刃鎌『散梅』を構え、こちらに向かってくる。

「今度こそ、文字通りに、いざ尋常に勝負じゃ！スキル解放、『真・蕾散らし』！」

輝きを纏ったまま、大振りの鎌が投げつけられる。左肩の物理シールドで受けるが、刃が突き立った瞬間に込められたエネルギーが爆ぜる。

「まだまだゆくぞ！スキル発動、『散蓮華』！」

ビットの攻撃に晒されていたもう一人のミズキも追いかけるようにスキルを発動する。投げ放たれた苦無と手裏剣が分裂を繰り返しながら迫ってくる。バリアシールドを張るが、スキルで強化された刃は光の障壁を貫いて飛来する。咄嗟にサブアームで身体を庇うが、ダメージは避けられない。

一撃、そう、一撃でいいのだ。ミズキはそのモチーフ通り身軽さと回避力が身上。その分装甲は極めて薄い。一撃をまともに入れば、切り伏せてしまえる。飛んでくる苦無や手裏剣を寸刻無視し、突撃。半ば無理やりに接敵して小さい挙動で突く。ミズキの胸に、鬼姫が突き立つ。

「よい動きだの、しかし、攻め手が正直すぎるのが難よな」

言葉と共に、ミズキの姿が煙を残して掻き消える。

「変わり身の術……二度同じ手にかかるのは、忍びとしては二流よ」
後ろから飛んできた苦無を、バリアシールドを張って防ぐ。しかし、どうする。強引な攻めも、遠隔からのビットも、決定打とはなりえない。ずきん、と頭の芯が痛むのは、ビットとバリアを同時に使っている負荷からだ。走る思考の足枷となって、確実に主張をしてくる。

『シャウ、サイドボードを送る。こつちもスキルで対抗だ』

「しかし、この状態では、そもそも命巾が見込めません！」

『大丈夫、俺を信じろ』

操作に負荷がかかる上、武装をパージしてしまう『ブラウヒルシユスラスト』は論外。ランサメントの武装まで必要な『モードヘラクレス』も、これまた論外。『ディアホーンスラッシュ』や『無銘・大顎』を使うための武装は既に揃っている。となると、残るのは……

「スキル発動、『パッシング・シェイブ』！」

主が転送してきたリノケロスを芯に、二本のジユダイクスを合わせる。組み上げられたのは両刃の大剣、ギラファブレイド。モードヘラクレスでも使われる、重量剣だ。頭上でギラファブレイドを旋回させる。すると、広間の中に空気の渦が形成される！

『バーチャルでは追加効果があるスキルもある……パッシング・シェイブのもうひとつの効果は、敵を自分の至近距離に引き寄せることだ！』

「これは……！ 風が、妾の邪魔を……！」

空気の渦は私を中心に所狭しと周囲のオブジェクトを運んでくる。それと共に、いまだ神力解放の光を失わない二体のミズキも！ 渦巻く風に運ばれてきたミズキに、横薙ぎの一閃、次いで天井まで飛び上がり、重量を加えた一撃をもう一閃。二体のミズキ、いずれが本物なのか分からないのなら、両方まとめて斬ればいい！

片方のミズキはパッシング・シェイブの重撃を食らって、光の中に溶け出した。ということは、もう片方のミズキが本物ということ！

ここぞとばかりに、私に残されたカードを立て続けに切る！

「もうひとつ、スキル発動！ 『ディアホーンスラッシュ』！」

ディアホーンスラッシュは出が速く、追撃に用いられることが多い。今この場面で追い討つのにこれほど適したスキルはない。展開したサブアームが鬼姫を振るい、十字に斬りつける。これで、勝負ありだ！ ミズキの身体から、スキルの輝きが消えていく。が……

「言っておろう、攻め手が正直すぎる。相手の裏をかかねば、忍を捉えることなぞ出来んぞよ？」

煙と共に掻き消えたミズキが、広間の窓辺に立っている。満月を背にして、腕を組んで。しかし、忍び装束はどこも傷だらけで、確かにダメージは負っているのが分かる。

「また変わり身ですか……？」

「わんぱたあん、か？ 安心せい、もうこれ以上の仕込みはないわ。一度の戦いで三度もこの術を使わされることなど、ついぞなかったことじゃからのう」

「しかも、神力解放。時間切れのようですね？」

「おお、その通りよ。まさかお主達がここまでやるとは思っていなかったものでな。ここからは、普通に戦うより他に方法はのうなったわ」

ミズキが笑いながら言う。それでも、まだ安心出来ない。そう思うのは穿った見方だろうか？

「そうじゃろうと思つて、の」

身体のどこにこれだけ隠していたのか、手裏剣や苦無、巻き物の類を全て放り出す。

「真・白神流忍術の名に懸けて、推して参る！」

最後に刀を構えた瞳は、真剣そのものだ。私もその心意気に打たれた。リアユニットを丸々パージして、両手に持っている双剣を構え直す。

「我が主の名に懸けて、いざ尋常に勝負！」

ミズキには右手に忍者刀『風花』が、私には両手に鬼姫が、それぞれ握られている。さつきまでの入り乱れての戦いが嘘のように静か

に、ゆっくりと、互いの間合いを意識しながら向かい合っている。
「参る！」

ミズキが一步、間合いを割った。それを合図に私が受ける。その流れはいっしか見た、二振りの片刃剣を使った演舞だ。剣で払い、対の動きで斬りつける。打点を上げた次は蹴りを挟んで低く攻める。回転を基本にし、一撃一撃に遠心力を加算する。それだけで受け続けるミズキには、やりにくさが付きまとうはずだ。さっきまでの正面からの動きではない。曲線的に舞うような演舞の動き。

「こんな動きまで隠しておったのか、さても面白き奴よ……しかし、これが受けられるかの？」

一步後退ると、刀を構え直し……。

「スキル発動『真・白拍子』！」

満月を背景に、舞のように刀を振るうミズキ。縦に振るわれる斬撃中心の技を、横に払う曲線の動きで相對する。飛び回る白い影を着実に迎え撃つ。二閃、三閃……。凄いだ！

『今！』

「ふっ！」

着地の隙を狙った蹴りは、ミズキの体勢を崩させ、ダウンさせるのには充分だった。白拍子というスキル自体は、バトルロンドでは初期から使われている、言うなればモーシオンを研究し尽くされた技だ。そのスキルの終わり際にある隙を、見逃がすわけにはいかない。

「おおおおっ！」

魂魄一閃、交差した鬼姫が、ミズキの身体を床に縫い付ける。

「サレンダー、されますか？」

「……やれやれ、事ここに至っては、もはや討てる物など残るべきやと……」

『あー、つまりサレンダーでお願いします』

「主殿……せめて時世の句を詠むまで待つて欲しかった……」

短いような長いようなバトルだったが、何とか決着はついたらしい。

『IP シャウラ WIN』

夜の空に私の名前が表示された。

「それでは、今回の順位の方を發表させて頂きます」

結局、全勝で俺とシャウが優勝した。対戦と、大会優勝でもらった神姫ポイントは、普段のゲームセンターでプレイするバトルロンドに比べると、かなりの量だった。参加するだけでも一定量のポイントは付与されるそうで、これを一年も真面目に続ければセカンドリーグの参加資格には届くのだろう。

「これでセカンドに出れるようになるのか？」

「一応、センターで登録したら、な。どうせすぐセカンドに上がるんだろ？ だったら、今一緒に手続きしてやろうか」

「ああ、それじゃお願いしようかな。いいだろ、シャウ？」

「そうですね、お願い出来ますか」

受け取ったばかりのプレイヤーカードを、花道に渡す。それを持って受付カウンターの中に入り、コンソールで操作をしている。

「あと、公式大会での優勝ってことになるから、今期の上位大会への出場も出来るようになったね。まあ、そんな暇があればだけど」

「何の嫌味だよ、日野……」

上位大会というのは、公式で行われている大会の一種で、出場に資格や条件のいるものを総称して言う。単に出場機種や装備を限定したもののや、公式大会の優勝経験などの実績が必要なものなど、条件は様々だ。その中でも実績を必要とする上位大会は種類も資格も複雑だ。確か、ファーストリーグに参加するためには神姫ポイントの規定を満たすだけでなく、そういう実績面でも資格が必要だったはずで、プロの神姫プレイヤーを目指すためにはそういうことを把握しておくのも必要だと聞いたことがある。何でもトッププレイヤーを目指すのは大変なのだ、と思ったものだ。

「ほらよ、登録、終わったぜ。これでセカンドリーグの試合にも出られるようになってる。手続き的には普通にやれば出来ると思うけど、まあ、分かんなくなったらここで参加すりゃあその辺はやってやるよ」
「おう、ありがとう」

「それでよ、これで三人ともセカンドの試合に出られるようになったら。卒業するまでに、三人でおんなじ大会に出られるんだよな」

「なんだよ、急に」

俺は受け取ったプレイヤーカードをしまいながら答える。

「ああ、それは俺も思った」

「だろ？ どっかで日程合わせてよ、一緒に出てみねーか？ 例えば、来年の鳳凰杯の春の陣なんかだと、ちようど三月で試験やなんかも終わってるだろ？」

鳳凰杯というのは、四年ぐらい前から始まった、鳳条院グループが主催する大会で、毎年春と秋に大々的に行われている。神姫関連企業の出展ブースなどもあり、TV中継も入る、かなり大掛かりなイベントだ。そういえば高校に入った年の秋にも、この二人に連れられて見に行ったことがあったつけ。確か二人は、鳳凰杯を見に行つて本格的に神姫の道にのめり込み始め、バイト代をはたいて当時最新型だったアーク型とイーダ型を買ったんだった。

「懐かしいな、お前達と鳳凰杯を見に行つたのも、もう二年も前か……」

「去年の春には、俺と花道は参加したんだよ。どっちも本戦までは残ったんだけど、一回戦で負けちゃったんだよね」

「鳳凰杯はファーストリーガーまで無制限で参加出来るからなー。秋は高校全国大会の準備で、日程的に参加出来なかったしよ」

「……そんなこともあったのか」

日野と花道は高校全国大会にも参加するレベルだ。それに対して、競技人口百万人と言われる武装神姫競技の中でも数百人しかいないと言われているファーストリーガーはやはり強いらしい。

「確かに、俺も参加したいな。リベンジってわけじゃないけど、今の俺がああな舞台上で、ファーストリーガーと当たったら、どこまで通じるのか。それは試したい気がする」

「だろ？ 記念ってわけじゃねーけど、そういうの、一回くれーあつてもいいと思わねーか？ どうよ」

「そうだね、それに確か、鳳凰杯は全試合バーチャルだったはずだ。そ

れだったら気兼ねなく参加出来るんじゃない？」

日野は花道の提案に乗り気のように。二人は揃って俺の顔を見る。

「シャウ。シャウはどうしたい？」

「えっ、私ですか？」

突然話を振られたシャウが、驚いたような顔を向ける。

「うん。実際に戦うのはシャウだし、ファーストリーガーってのは、今聞いた限りでも大分強そう。それでも、やってみたい？」

「はい、もし機会を頂けるのなら、今の自分がどれほどの場所にいるのか、確かめたく思います」

シャウも強い相手との戦う機会を求めている。なんともまあ、勤勉なことだ。こういうところは我が神姫ながら、まったく感心してしまう。

「んじやー決まりだ。申し込みが始まったら、三人分手続きしちまつて構わねーよな」

「悪いね、よろしく頼むよ。それじゃ俺も、それに向けてリハビリくらいはしておかないとね」

「それなら目の前にちょうどいい相手がいるじゃねーか」

「俺か？」

「そうだね。俺はエスパディアと当たったことがないから、どんな程度のものか、楽しみだ」

「……しばらく神姫から離れてたのに、勝てる気でののか、日野？」

「あら、聞き捨てなりませんわね。私が起動して一年程度の神姫に負けるとでも仰りたいのですか？」

「それはこちらでも聞き流せませんよ、リリイ。やってみなければ分からないではないですか」

花道の提案は、ついには互いの神姫まで巻き込んで、やる気に火をつけたようだ。リリイとシャウも、静かな火花を散らしている。

「ほれほれ、もうちょいしたら俺も上がりだからよー、それまでに決着つけといてくれよな。俺も混ざりてーからよ」

「セカンドリーグがどれほどのものか、見せてやるよ、新米」

「面白い、ブランク明けでどこまで動けるのか、見せてもらおうか」

そう言うと、互いに筐体に向かった。後ろでは花道が笑顔を送っている。

「シャウ、欲しいものはある?」

ある日、唐突に主はそう切り出した。

「どうなさったのですか、急に?」

「いや、誕生日……というか、起動した日のプレゼントに、と思ったんだけど。俺、よく考えたらシャウが欲しいものって、知らなかったんだよね。だから、もういつそ直接聞いてみようと思って」

そんなことを言われても、そもそも主は私の起動日にあわせて、新装備を作ってくださいました。ソードビットとバリアシールド。このふたつは中距離以遠を苦手としていて、物理防御では速度が落ちることを考慮に入れた、私専用の装備だ。武装神姫に対する贈り物としては、これ以上望むべくはない。

「まーすたー、ボクにはそういうこと聞いてくれないのー?」

「アルも起動日近いからな、何かひとつ教えてよ。一緒に用意するか」

「一緒というのは気に食わないけど、そういうことなら遠慮なく。ボクはねー、Vバックルが欲しいなー、勿論、デツキは緑のやつで」

アルキオネが話に絡んでくる。この子には遠慮とか慎みとかいうものがないのだろうか。そもそもあまりバトルをしないとは言え、アルキオネの主武装は実弾を使うアサルトライフルだ。そういう消耗武装を使っているがらにして、要求だけは人一倍なのだから始末に負えない。

「で、シャウは何が欲しいのかな。何か思いつく?」

「でも主、私は既に専用の武装を作っていたと思いますし、その修理費用もかかっているでしょう? その上何か頂いてしまうなんて、なんだか悪いような……」

「それはそれ、ってやつでさ。第一、武装の方は俺が好きで、そうしたいって思ってたことだし」

そう言われると、揺らいでしまう。欲しい、と思うものが、ないではないのだ。

「そういうもの、ですか……？　それなら、ひとつ、買っていただきたいものがあるのですが……」

「いいよ。ただ、あんまり手に入れるのが難しそうなものはちよつと困るけど」

「あの……刀が、一振り欲しいです……」

消え入りそうな声だったが、それで精一杯だ。私が以前から欲しかったもの。あの日の秋祭りで見た、刀を用いた演舞。そのときから、私はいつか自分の刀が一振り欲しい。そう思っていた。

「刀か……そうだな、刀か……」

主は何か、難しい顔をしている。私、何か大変なものをお願いしてしまつたのだろうか。

それとも、自分から欲しいものをねだるなんて、やつぱりいけなかつたのだろうか……。

「まあ、まだ日はあるし。何とかしてみようか」

それから一週間ほどが過ぎた。

「シャウ、買い物に行こう」

「はい、身支度が必要ですか？」

主の格好を見て、つい尋ねる。ご近所に買い物に行くにしては、格好がしつかりしていて、遠出するように見えたのだ。

「まあ、普段どおりでいいよ。でも電車を使うから、ケースで頼む」

「はい」

そう答えると、簡単に外出の支度をして、ケースに収まる。近場ならともかく、遠出をするときには移動用ケースは半ば必須だ。人混みの中では落下することもありうるし、万が一人間に踏まれるようなことがあつたら破損は免れない。そんな危険を回避するためにも、我が家ではケースを使うことが多い。

数十分ほど電車で揺られ、着いた先はY駅にある専門ショップの特設展示コーナーだった。主に言われてケースから出ると、そこにはショーケースの中に幾振りもの刀が展示されていた。それも、神姫サイズの……。

「主、これは……?」

「いや、せっかく買うんだつたら、為虎添翼みたいな量産品じゃなくて、ちゃんとしたのを、と思つてさ。ここで扱つてるのは流石に予算オーバーだけど、まずはどんな刀がいいのかなあ、と思つて。ここなら長刀から脇差まで、いろいろなサイズもあるし、比較して見るにはちょうどいいかと思つて」

「はあ」

どうしよう、主の発想は私の想像のはるか上を飛んで行つてしまつた。ここにあるのはどれもこれも神姫の武装として最高の逸品と言われるものばかりだ。その分価格も生半可な神姫用武装の比ではない。

「まあ、見るだけなら只だし、まずは気楽に見て回ろうよ」

「……はあ」

まあ、そういうことならいいのだろうか。ウインドーショッピングのようなものと思えば気楽でいいのかもしれない。でも、本当にそうか? 若干、本当に若干だが、我が主ながら、「これは駄目なのは」という不安が頭の片隅から湧いてくるのは、気のせいだろうか……。

「まずは長さなだけどき、どんなのがいい? 実用ならやつぱり太刀くらの大きさが欲しいけど、普段持ち歩くんなら懐刀みたいのもいいのかな、つて思うんだけど……」

「……もしかして、主、刀、好きですか……?」

「大好きです!」

……そのときの主の表情は、今まで見たこともないような、満面の笑顔だった。

「あつ……」

シャウの目が、一振りの刀の前で止まった。刀の銘は、『和泉守兼定』。幕末に活躍した新撰組副長、土方歳三の所有した刀として有名だ。勿論これは模造ではあるが、新進気鋭の刀鍛冶が精魂を込めて作つた逸品らしい。

「この刀が気になる?」

「……えっと」

「ここで言葉を濁すなんて、よっぽど気になってるんだな。」

「いいんだよ、ウインドーショットピングなんだから、気になるものがあったら、気になるって教えてくれれば。で、どう？」

「はい、気になります……」

たつぷり間を置いて、ようやく出てきた言葉はほとんど小さくなって、消えてしまうような声だった。まあ、この展示方法だと、横に置いてある正札もいやでも目に入ってしまう。このお値段だと、流石に気軽に気になるとは言えないのも分かる気はする。

「じゃあ、手に取って見られるか聞いてみようか」

「えっ、いえ、流石に、そこまで、厚かましくしては……だって、結局は、買いませんし……」

「だから、そういうのは気にしなくってもいいんだよ。いざとなったら、本当に買っちゃえばいいんだし」

そうは言ったものの、本当に買うとなったら、このお値段は高校生ならずとも、相当な気合が必要だ。それでも今この場で引いたら負けない気がする。意を決して、係の人を呼んで手に取って見てもいいか尋ねてみると、あっさりとは許可が出た。シャウをショーケースの上に立たせると、係の人から刀が手渡される。柄を握り、刃紋を眺め、矯めつ眇めつしながら、たつぷりと時間をかけて眺めている。

「どう、気に入った？」

「はい……」

さつきまでの反応から、この素直さ。どうやら、本当に気に入った様子だ。その目は、どこかうっとりとしたような色さえ漂わせている。うん、その感覚は、本当に分かる。

「……ありがとうございます」

たつぷり二十分は眺めていただろうか。シャウが、思い切った様子で刀を返す。

「どうだった？」

「言葉が出ませんね……あのような品を手にとることが出来ただけでも、充分です」

そこまで惚れ込める品を見つけることが出来たのなら幸せだ。俺が口を開くより早く、シャウはそそくさとケースに戻って、帰り支度をしている。ふむ……。

——そのあと、どうなったか、ですって？

ええ、一時間ほど主に小言を言わせていただきました。いかに神姫の身とは言え、家計を案ずる気持ちがあるのを、主には一度分かってもらわねば、と心底思いましたから。

——今ですか？

毎日の日課を終わらせてやってくる素振りの時間が、幸せなものになりましたよ。

この刀は多分、私の一生の宝物になりますから。

「そういえば、主、本棚に飾ってある模型なんですけれど、あれ、なんなんですか?」

「なんなんですか、とは?」

師走の風も感じられる頃。シャウの急な質問に、俺は答えに詰まる。え? 部屋に模型とかあったら駄目とか、そういうことだろうか。でも今更? もう一年以上飾りっぱなしなんだけど?

「いえ、その模型、ずっと飾ってあるじゃないですか。だから、何か思い入れのある作品なのだろうと思ひまして。どんな作品なのか、知りたくなったのですが……何か、お気に触りましたか……?」

なんだ、そういうことか、驚いた。

「これは三十年くらい前の特撮作品の主人公でね。俺の大好きな作品を、ある人が俺のために造ってくれたんだ。多分アルに言えば出してくれるんじゃないかな。あいつは最近、俺より俺のコレクションに詳しくなってるから」

「真ん中から色が分かれてると、黒一色のと、何か違うんですか?」
うん、一年以上飾ってあったとはいえ、中々いいところに眼を着けるな。

「興味が湧いたんなら、それこそ原典に触れるのがいいと思うよ。作品としても、素晴らしい出来なのは保障するから。訓練の合間に、三十分ずつでも、見てごらん」

ほとんど何も解説らしき解説をしなかったのだが、それも仕方なし。こういうものは他人の口から聞くよりも、まずは自分の目で見るのが一番だ。

それからしばらく、学校から家に帰る頃にはその特撮が流れていることが多くなった。それに俺の作業BGMにアルが選んでくれるのも、その特撮であることが増えた気がする。それをなんとなく見聞きしている、ちゃんと一話から順を追って見ている様だ。いつもはアクション中心で見飛ばしてしまうシャウにしては、かなり珍らしい。

それが二週間ほど続いた頃。

「さて、三人ともクリスマス仕度は出来てるか？ちゃんと何が欲しいか伝えられない奴にはプレゼントは来ないぞ」

「うっす！ 自分は、筋トレ器具が欲しいっす！ 出来たら腹筋ローラー的な……グツと来る奴がいいっす！」

うむ。俺も神姫関連用品のカタログはよく見ているけれど、神姫用の筋トレ器具なんてものは見たことがない。これは自作することになりそうだが、まあ作りはそんなに難しいものじゃない。何とかなるだろう。

「ボクはねー、変身ベルトが欲しいなー。Vバツクルはこの間ももらったから、まだ持ってない奴で」

うむ。これは比較的簡単だ。本格的な武装展開システムを組み込んだ奴とかもあるにはあるが、アルが求めているのは、あくまでなりきり玩具としての変身ベルトだということがこの間のプレゼントで分かっている。これも何とかなるだろう。

「私は……その……」

うむ。何故シャウはいつも自分の欲求を出すときに口ごもるのだ。頬を赤く染め、もじもじしながらこつちを見てくるその姿がかわいいのは確かだが、話はまったく進まない。

「シャウ、前にも言ったけど、とりあえず希望なんだから、伝えてくれないと分からないだろ。その様子だと思いついてはいるみたいだし。何が欲しいのか教えてよ」

「その……帽子を……」

あの作品を見て、帽子を欲しがる……どうやらシャウは、しっかりと作品世界にのめり込んでくれているらしい。それ自体は嬉しいことだ。そして、あの作品の象徴的な帽子と言えば、フェルト帽だ。そこまではすぐに思いつく。が……。

「あ……もしかして、私、また何か難しいことを言ってしまった……？」

まあ、正直なところ、難しい。

神姫の服飾も昨今では大分充実していて、神姫ショップなどでも様々なサイズのものを取り扱うようになってる。だが、服飾小物に

おいては、まだまだ充分なフォローが入っていないのが現状だ。特に帽子は、必要サイズが神姫のデザインによって大きく異なるため、武装神姫にとっては鬼門である。特にエスパディアは武装神姫の中でも、一、二を争うほど小顔なデザインだ。頭も小さく、帽子のサイズ選びが非常に難しい神姫として一部では有名なのだ。市販の量産品では、まず間違いなくシャウにとっては大きすぎるものばかりだろう。

まあ、それでも心当たりはあるし、何とか出来なくはないだろう……。

「おや、久しぶりですね、先生。すっかりご無沙汰なんで、もう忘れられたかと思ってきましたよ」

「その先生っていうの、やめてくださいって言ってるじゃないですか。もう」

「何を言ってるんですか、先生は先生なんだから」

その日俺が学校の帰りに訪ねたのは、個人でミニチュアの服から武装から、果てはカスタムパーツまで製作している、言わばフィギュアロボットの何でも屋だ。以前から親交があって、一般に流通しないようなものを手に入れる際にはお世話になっている。

「まあ、呼び方のことは置いておいて、用立てて欲しいものがあるんですけど」

「はいはい、今回は何がご入用ですか？」

「以前作ってもらった、帽子をひとつお願いしたいんですよ」

「また帽子ですか？ 以前の奴は壊れちゃったのかな」

「いや、今回はウチの神姫にプレゼントする用で。前のやつはちゃんと大事にとってありますよ。第一、そうそう壊すような機会もないですし」

俺は苦笑いする。ここで作ってくれる帽子は、人間サイズの帽子を作るのと同様、型を作ってフェルトを圧着させて作っている。その出来は、まさに職人技だ。

「おや、先生、神姫も始められたんですか」

「ええ、一年ほど前になるかな」

俺は出された紙に頭のサイズや帽子の色など、必要なことを書き込んでいく。次いで今の住所なども書き込み、完成したら送ってもらえるようにしておく。サイズ的には以前作った型がそのまま使えるそう、一週間ほどで出来上がるそう。時期としてもちようどいい。その後も二時間ほど、最近の話をしてから俺は店を出た。既に日は暮れてしまったが、まだ他のプレゼントの手配もあるし、もう少し寄るところがあるんだよな……少し遅くなってしまうが、何とか今日のうちに片付けたい。俺は携帯を取り出すと、帰りが遅くなる旨のメールを送った。

そしてクリスマスの夜。その日も私達は、いつものようにバトルロンドに出て、いつものように反省会を済ませ、家に戻ってきた。帰り道で買ったケーキとチキンを簡単に用意して、夕食。この家に、人間は主一人だ。それだけに、クリスマスと言っても大きなツリーや飾り付けがあるということはない。それでも、私達のサイズの小さなツリーが用意されている。それだけで、私には充分だった。

「さて、それじゃあお待ちかねのプレゼントといこうか」
そう言つて、主は小さな包みをみつつ取り出した。それぞれに、しっかりとラッピングまでされている。

「シャウ、開けてみてよ」
「はい」

包みを開けると、そこから出てきたのは、黒いフェルトの帽子。白いリボンが巻かれ、そこには『WIND SCALE』という作中メーカーのロゴまで入っている。

「これは……！主！」

「気に入ってもらえたかな？」

「勿論です！主、ありがとうございます！」

帽子を胸に掻き抱き精一杯のお礼を告げる。この感動は、一体どうやって伝えればいいだろう。まるで作中で主人公が被っているものを、そのまま取り出してきてくれたようだ。

「おおっ、これは！ まごうことなき腹筋ローラー！ ご主人、よくこんなものを見つけてくれたツスね！」

「いや、流石に神姫用の筋トレ器具なんて売ってなかったから、それは市販のローラーとグリップを組み合わせて作った自作品だよ。簡単な作りだから、もし壊しても同じ物が作れるからね」

「壊さねツスよ！ 大事に使うツス！」

後ろでは、メサルティムも自分の贈り物を見て感動の声を上げている。

「おおー！ ボクのはWドライバーだね！ さすがマスター、分かってらっしゃる」

「ちゃんとガイアメモリも外れるし、ドライバー自体も動くやつだよ」

あつ……作中で、主人公が使う変身アイテム……。いえ、贈り物は一人ひとつずつですから……。羨ましくなんかは……。

「シャウラ、羨ましいだろー。どうだー？」

「べっ、別に、羨ましくなんかっ……！」

「姉さん、涙目になってるツス……」

「別に！ 涙目になんか！ なってません！」

「えーと……シャウ？」

「何でも！ ないです！」

……後日、ベルトを借りてめっちゃ嬉しそうにしているシャウの姿を目にすることになるのだが、それはまた別のお話。

年が明けた。

明けたは明けたが、俺の日常に何か変わりがあるわけではない。新年をめりたいと思わないことはないが、こちらは受験を控えた身。めでたいからと言って、何かがあるわけではないのだ。

とは言え、大晦日と元日くらい気を抜いても許されるだろう。既に紅白歌合戦は終わり、行く年来る年も終わろうとしている。

「三人とも、着替えは終わったか？ そろそろ出かけるぞ？」

二年参りには少し間に合わなかったが、これから初詣に行く予定だ。今年はこの日のために、ちゃんと三人分の晴れ着を用意している。もつとも、着付けは例によって説明書を手渡して本人達に任せている。流石に、俺が自分の手で着替えさせるわけにもいくまい。

「はい、出来ています」

「どうツスカ、ご主人？ 変なところとか、ないツスカね？」

「前にも言った気もするんだけど、変なところがあってもマスターじゃ分からないんじゃないのー？」

うむ。その通りだ。俺に分かることなんて、精々が晴れ着についてきた取扱説明書と実物を見比べることぐらいだ。

「うん、三人とも、よく似合ってる」

例によって、気の利いた言葉なんて思いつかない。足りない語彙力をフルに絞って、出来る限りの賛辞を送る。三人を肩に乗せると、以前秋祭りで行った神社に向かう。深々とした空気が上着越しにも感じられて、自分の身が引き締まるような思いだ。

初詣、というのは知識としてはプリセットされているが、自分で行くのは初めての経験だ。去年はメサルティムの一件があつて、年末年始は慌しく過ぎてしまった。それもあつて私の胸は高鳴っていた。

深夜の時間帯ではあるが、神社には大勢の人がいた。松明も焚かれ、秋祭りのあの日のようだ。

既に出ていた、長い長い行列に並ぶ。このすべてがああ神社にお

参りにいく人なのだろうか。にわかには信じられない気がする。

「ご主人、ご主人、初詣くらい一緒に行く人はいないんスか？」

「それいじょうはいけない」

反対の肩の上では、メサルティムとアルキオネが触れてはいけない話題に踏み込もうとしていた。確かに、主の交遊範囲はお世辞にも広いとは言いがたい。私が名前を知っているご友人は、メサルティムの事件のときに関わった花道様と日野様の二人だけ。その他に、ホームグラウンドとして通いつめているゲームセンターには顔の分かる方は幾人かいるが、名前までは分からない。主の人間関係からバトルロンドに関わるものを引いたら、それはそれはずいぶんと寂しいものになるのではないだろうか、心配になる。

「……それじゃ、自分が神様にお願ひするツス！ 大丈夫、今からでも！ 目指せ、友達百人ツス！」

「やめてさしあげろ」

反対の肩はにぎやかだ。内容そのものは置いておくとして。

「それにしても主、よろしかったのですか？ この時期に晴れ着を着ても買われて」

「この時期って？」

「……もう結構です、忘れてください」

主は年末から、私達にお金を使い過ぎだと思う。が、本人はまったく意に介していない。確かにご自身の言うとおり、今は他に使う余裕もないのだろうし、他に使う当てがないというのも本当だろう。が、それはそれで心配になる。話が逸れた。とにかく私は、主の金銭感覚が乱れていくのではないかと心配なのだ。

武装神姫は、ホビーの中でも最もお金がかかる部類だ。そのため、バトルロンドでもファーストリーグやセカンドリーグの上位一握りのプレイヤーには、メーカーや協賛企業がスポンサーとして資金や技術を援助している例もあるのだとか。しかし主はただの高校生で、そうした企業の協力があるわけでもない。にも拘らず先日だってあんな高価な刀を惜しげもなく買ってしまっ……いや、それは確かに嬉しかったのだけど、神姫にだって、分相応というものがあるはず。私

なんかがあんな一級品を持つことになって、本当によかったのかという思いもないではなく……。

「どうしたの、シャウ。なんか変な顔してるけど？」

「何でもありません！」

主のその一言があまりにも無神経に感じられて、つい語気が荒くなる。まったく、どうしてこうなのか。

「まあいいけど、そろそろ順番だよ。何を願うか決めてある？」
「……そうですね、この神社は確か、御神体に刀を奉納していましたよね。それならば、私が願うことは只ひとつ。『格闘戦最強』です」

『格闘戦最強』。口に出すのは随分久しぶりの気がする。しかし、私の、いえ、私達の目指すところはそこだ。既にエスパディアが新鋭機とは言えなくなってきたが、そんなことは関係ない。要は、私自身はどこまで高みに登れるかだ。

「そうだね。シャウ」

「はい」

「今年もよろしく」

「こちらこそ、よろしくお願いします、主」

主が柔らかな笑顔を向ける。この笑顔があるからこそ、私は果てしないとも思える目標に向かっていける。主の神姫でよかった。そう心から思える。

「それじゃ、行ってきます」

主がいつものように学校に出かける。それはいつもの朝の、いつもの習慣。私達は留守番だ。それも、いつも通りのこと。主が学校に行っている間は、それぞれが修練をしたり、身体を動かしたりと好きに過ごす。

が、今日この日だけは別だ。今日だけは、私達にはやるべきことがあった。そう、今日は、バレンタインデー……。

シャウラの場合。

バレンタインデーと言えばチョコレート。バレンタインのチョコには日ごろの感謝や、好意など、様々な意味があるものだと言われている。主への気持ちを表わすのに、生半可なものを持って行っては逆に失礼に当たる。しかし、私は去年のバレンタインを経験している。そのため、チョコを手に入れる方法も既に考えてあるのだ。

私はまず、武装をしまつてあるケースに向かう。これを直接持ち出すのは無理があるが、ケースのロックを開封することぐらいなら出来る。蓋を開けるのは……これはもう力づくで開けるしかない。全身のばねを使って、何とか蓋をこじ開ける。中に入ってしまったらこつちのものだ。そこにしまつてあるのは、クワガタ型の基本武装。それをその場で組み替える。普段は自分の手で組み立てることなどないのに、少し時間がかかるが、幸い時間は充分にある。自分の頭ほどもあるパーツのひとつひとつを丁寧に組んでいく。

出来た。ブラウヒルシュ。私の使役する、サポート武装だ。これを扱うのはあまり得意ではないが、今日は戦闘をするわけではない。複雑な起動も、他にやる必要があるわけでもないのだ。動かすだけなら、なんとでもなる。

「アルキオネ、メサルティム、少し出かけてきます」

「珍しいね、シャウラが一人で出かけるなんて」

「貴女の言葉を借りれば、そういう風向きの日もある、のですよ」

「行つてらっしゃいッス！」

窓を開けてブラウヒルシュに座ると、ふわりと宙を駆け始める。向かう先はアパートから一番近いコンビニだ。まだ冷たい朝の風を切つて飛んでいく。

我が家から最寄りのコンビニまで、ブラウヒルシュに乗つて悠に十五分ほど。いかに近いとはいえ、神姫とその武装だけでの道のりではゆっくりとしたものだ。まあ、特に急ぐ道でもないのだけど。第一、神姫の身ではコンビニの自動ドアでさえ自分だけでは開けられないのだから、急いだところで仕方がない。入り口の辺りでしばらく待つと、人間のお客さんがドアを開けてくれる。それと一緒に店内に滑り込むと、レジ前の季節もののコーナーを目指す。去年は買うことはなかったが、ここで取り扱っていると知ることが出来たのは大きなアドバンテージだ。

あつた。主が普段買われるお菓子より、いくらか高級な箱入りのチョコレート。この小さな体では、あまり大きなものは買えない。せめて、持てる範囲で一番高価なものを選んでレジまで持つていく。主は、喜んでくれるだろうか……。

会計は電子マネーだ。主が何かあつたときのためにと、私達それぞれに、少額ではあるが持たせてくれている。普段なら主のいないところでお金を使うなど考えられないが、今日だけは特別だ。レジで読み取り機に手をかざして、会計終了。

帰りもドアが開くまで待つつもりだったが、親切な店員さんがレジから出てきてドアを開けてくれた。丁寧に謝意を伝えて、家まではひとつ飛びだ。風にあおられて少しよろめきながら。

主が帰ってきたら、一番にお渡ししよう。主は喜んでくれるだろうか。私に笑顔を向けてくれたら嬉しいのだけど。そんなことを考えながら、ブラウヒルシュは我が家への道を辿っていた。

メサルタイムの場合。

姉さんが出かけたのは、自分にとつてもチャンスだ。アルキオネさんは、リビングで特撮を見始めた。ああなったら、たつぷり一時間は

てこでも動かない。その際に今日の一番のミッションを片付けなければならぬ。

そうと決まったら急がねば。自分に残された時間は、それほど多くはない。まずは出しっぱなしになっている、自分の装備が必要だ。昨日ご主人に片付けろと言われたのを、このためにわざと放っておいたのだ。レッグパーツをサバーカに換え、チーグルサブアームを背負う。これで準備完了だ。

次は、材料の確保。これもこの日のために、ご主人に買っておいでもらった。勿論、目的はご主人には伝えない。あくまでも自分達のおやつとして買ってもらったのだ。台所に向かうと……あった。早速パツケージをはがし、中身を取り出す。

次は、調理器具の用意だ。乾燥台に置いてあるお鍋を取ると、コンロに運ぶ。中にはさっきのチョコレート。これで準備完了だ。おつと、忘れるところだった。溶かしたチョコレートを冷ますための器が必要だ。冷蔵庫の横にかかっているアルミホイルを引っ張り出して、器状に形を整える。今度こそ、準備完了。後は火にかけて、チョコが溶けるのを待つだけだ。

ご主人が帰ってきたら、どんな顔をするだろう。きっと、自分だつて女子力というやつがあるのだと、見直してくれるに違いない。でも、そこまでは望まない。ただ、喜んでくれるといいな。

少し口元が緩むのを感じながら、コンロに火を点した。

アルキオネの場合。

今日はバレンタイン。マスター、早く帰ってこないかなー。とりあえずボクはマスターの神姫なんだから、マスターのチョコはボクのもの。そう言っても差し支えあるまい。

あー、でもマスターぼつちだからなー。もしかしたら義理チョコのひとつくらいしかもらえないかもしれない。まあ、そうだったらそうだったで、残念だけど、マスターに分けるのは諦めよう。

何かおかしいって？ そんなことはない。ボクのはボクのもの。マスターのものはボクのもの。昔の人は良いことを言ったもん

だね、本当に。

さあ、受けとる準備はいつでもいいぞ、早く帰ってこないかなー、
チヨコ。

朝の光が差す駅前で、俺達は人を待っていた。

「遅せーな、あいつ、時計見てねーんじゃねーの？」

花道は時計を見ながらいらしているが、実際は俺達が早過ぎるのだ。日野は時間には遅れない。が、本当に遅れないだけだ。一方花道は意外と時間にはうるさく、待ち合わせよりも早く来ることを身の上にしている。

「いつものことだろ、花道。第一、まだ待ち合わせには十分もある」

「社会人になったらよー、十分前行動は当たり前だろうがよー」

「残念だったな、俺と日野は四月からも当分学生だよ……ほら、来た」

こちらの姿を認めても、別に急ぐ風もなく日野が歩いて来る。その様子に花道がいらつくのも、俺達三人にはいつものこと、だ。

「や、お待たせ」

「遅せーよ、何分待たすんだよ」

「そう思うなら、今度からはもう少しゆつくる来るんだな、花道。日野は待ち合わせとしちゃ、普通に着いてる」

「花道、また早く来てたの？ 今日は何分前に来たのさ」

「うるせーな、三十分前には着いてたよ」

それは流石に早過ぎだろ。俺がそう思うのと、日野が遠足前の小学生か、と笑い声を上げるのは同時だった。

陽ざしも暖かく、風も春の匂いが強くなってきた。

今日は、鳳凰杯初日である。俺達は三人連れ立って、東京にある鳳条院グループ本社ビルの近くにあるスタジアムまで電車で向かった。高校では仲の良かった三人だが、同じ舞台に立つのは初めてだ。まあ、それは俺がフィギュアロボットによるバトルゲームを頑なに触らなかつたからなのだが。それでも、最初で最後とはいえ、この二人と同じ大会に出られると言うのが、嬉しくないわけではない。それはきつと、花道と日野の二人も同じだろう。

会場までの道程は、思い出話に花を咲かせていたらあつという間に過ぎてしまった。入学当時のことも話したが、俺が神姫に触れてから

の一年半ほどの話が大半だった。それだけ、俺達の中には武装神姫というものが根を張っているということだろう。

「着いたぜ、ここが今日の会場だ」

「花道、本当に楽しそうだな。完全に遠足気分かよ」

「いいじゃない、別に。花道は、俺達三人でこういう大会に出るの、夢だったんだってさ」

何だそれは。初耳だ。というか、何でそんなことを？

「日野、お前、そういうこと本人の前で言うか!？」

「花道はさ、結構君のこと、気にしてたんだよ。勿論変な意味じゃなくてね。だから、君が神姫始めたとき、結構喜んでてさ。同じ土俵で競い合えるって。それで今日も、早く着いちゃったんだろ」

「……ちっ、そうだよ、悪いかよ、畜生」

いや、別に悪くないだろ。と言うか、そんな風に思っていてくれたなんて、まったく知らなかったぞ。俺の中に、少しだけ、ずきん、とするものがあつた……。

「変な空気にしてんじやねーよ。今日はせっかくの祭りなんだからよ、楽しく暴れりやそれでいーんだよ、まったく」

そう言うのと花道は一人ですかずかと入り口に入っていく。日野はやれやれ、といった風な顔を浮かべ、花道を追いかける。俺も二人の後を追って、入り口を潜った。

十時になり、予選の開会時刻を迎えた。鳳条院グループ社長による開会宣言のみの簡単な開会式を終え、早速会場内ではグループごとに移動が始まっている。俺は予選Dグループ。花道と日野はそれぞれEとIで、綺麗にばらばらになった。

「さて、次に会うときは決勝トーナメントに参加することになってるわけだがよー」

「やれやれ、まだ気が早過ぎるでしょ、花道」

「いいじゃないか、日野。それぐらいの気持ちで臨んだって。そもそも、二人は本戦まで残ったことがあるんだろ」

「まあ、あの時はファーストリーガーとは当たらなかったからね」

それでもセカンド上位の実績は伊達ではないのだ。予選でもエン

ジヨイ勢のサードリーガー辺りなら、歯牙にもかけないだろう。

「とりあえず、今日はもう祝勝会の場所、取っつまってるからな。負けんじゃねーぞ?」

「……花道、それは流石に気が早すぎるでしょ」

「俺もそう思う……」

「ぼっ……! なんだよ、いーだろ別に! 誰か負けちまったらお前から二人の合格祝い! 全員負けちまったら残念会だ! 別に無駄にはなんねーだろ!」

日野がぼそつと、三人で大会に出るのがよっぽど嬉しかったんだな、と呟いた。俺は苦笑いしながら花道の背中を叩く。

「そんなこと言っついて、一番に負けるんじゃないか? 味噌をつけてくれるなよ?」

「誰に向かって言っつてんだよ、これでも全国大会経験者だぜ?」

「負けるつもりは、俺もないけどね」

三人が、誰が言うともなく拳を合わせる。

「決勝で」

「おう」

「じゃ、決勝で」

三人が、それぞれのグループに向かう。

決勝で会おう。俺は二人の友人に、もう一度、心の中で呟いた。

Dグループには、既に選手が集まっていた。リストを見ると、知っている名前はない。もつとも、俺が知っているような超一流のプレイヤーはこういうイベント的な大会には出ないのかもしれないが……いや、いた。ただ、その名前は純粹に神姫プレイヤーとして有名、というわけではない。

鶴畑和美。

国内では神姫に関連した事業で有名な、鶴畑グループの長女で、上二人の兄も神姫プレイヤーだ。確か、和美だけでなく、長男の興紀と次男の大紀もファーストリージャーだったはずだ。次男と長女は性格に難があると言うか、あまりほめられた人間ではないらしく、よくない話の方で有名なのだが……。

まあ、偏見かもしれないが、この手のゲームである程度以上の強さを持つている人間なんて、大なり小なり何かを抱えているのだろうとも思うが、噂は噂。実際の人間性なんて、分かるものではない。それこそ一度バトルロンドで向き合ってみれば、真偽も分かるだろうというものだ。

渡された対戦表から顔を上げ、対戦筐体に向かう。予選のリーグは、四人で一グループのリーグ戦。それが十六のブロックに分かれて進められる。その各グループの中で、勝ち点の多い一名が二日目の決勝トーナメントに進めるという仕組みだ。それこそ花道ではないが、「要は三回戦って、負けなきやいい」のだ。

一回戦の相手は、紅緒だ。紅緒はサイフォス同様、甲冑による高い防御性能と刀剣による格闘能力を誇る。特にその戦闘の中心は為虎添翼と怨徹骨髓という大小の刀だ。刀を使うことを学び始めたシャウにとっては、思うところのある相手だろう。

「シャウ、兼定も持って来てるけど、入れるか？」

「いいのですか？」

「シャウが使いたい、と言うのなら」

「是非お願いします。紅緒型と刀で戦うのは、ひとつの目標でもありませんから」

それじゃあ、とサイドボードの設定に、シャウの愛刀『和泉守兼定』を入れる。これは神姫の武装としても最高の逸品で、手に入れて以来シャウが欠かさず鍛錬に用いてきた刀だ。実戦で使わせるのは初めてだが、それでも珍しく、シャウの表情には自信のようなものが見て取れた。

バトルフィールドは「闘技場」。円形のコロシアムのような建築物の中で、隠れるところはあまりない。観客席なども無人で、入ることは出来るが大半はリングで構成されたステージだ。

対戦相手の紅緒は、軽装備。茜之胸当てと蘇芳之肩当てを左側だけ着け、後は朱雀之臍当てを着けているのみだ。腰の刀もよく見れば一振りだけ。

『来たでござるな、いざ尋常に勝負でござるー!』

鞘を払って、白刃がひらめく。その姿は、まるで風車に対する騎士のような滑稽さがあった。相手を侮るわけではないが、フル装備の神姫に対して、ライトアーマーと同程度の装備で挑むには、並々ならぬ戦術や経験が要求される。神姫の強さは装備の強さであると言うのも、決して間違いではない。神姫に出来ることというのは、装備によるところが大きいのだ。攻撃を防ぎたければ装甲を、遠距離を攻撃したければ銃を装備させればいい。それが少なくなるということは、取り得る選択肢が少なくなるということだ。勿論、選択肢が多ければよいというものでもないし、いかに強力な武装と言えど、神姫自身が使いこなせなければそれはないのと同じだ。しかし、敢えてその選択肢を極端に少なくしているとすれば、導き出される答えはふたつしかない。即ち……。

「極端に弱いのか、逆に極端に強いか……だな」

極端に出来ることが少ない、弱い神姫か。逆に一芸に特化し、何者にも劣らない技を持った強い神姫か。どちらにせよ、その風貌だけを見て侮ることは出来ない。そこから先は、実際に刃を交えてみなければ分からないのだ。

『主……お願いがあるのですが』

「まあ、大体分かるよ。好きにやってごらん。サイドボードの兼定を送るから」

『ありがとうございます……主』

「ん？」

『必ず、勝利を持って帰ります』

両脚が、しつかり大地を踏みしめたことを確認して、リアパーツを除装、ポリゴンの屑に分解される。それと同時に、私の右手には愛刀、和泉守兼定が握られる。

「むむ、装備を外して、どうするつもりでござるか」

「尋常に勝負、と言うならば、対等でなければそうは言えますまい。貴女とは、この剣で勝負がしてみたい、そう思ったので」

怪訝な顔をした紅緒の表情が、一気に晴れる。

「ほほう、中々に見上げた心意気、かたじけのうござる。しかし、剣における勝負とあれば、話は別であるが故……」

「ええ、勝負は勝負、ですから……」

私も、兼定の鞘を払う。

「では改めて……」

「いざ、尋常に……」

「勝負！」

声を上げると共に地を駆ける。振るわれた刃が、火花を散らす。闘技場の中央で鏢迫り合い。力でも、紅緒は決してこちらに劣らない。力を何とか横に流し、お互いが距離を取る。しかしその間を惜しむように、刃が振るわれる。正面からの突き。横から払われる。返す刀で横薙ぎ。それを受け止め、再び鏢迫り合い。

「なるほど、中々の手練れ……強うござるな……」

「恐悦、至極……」

その刹那、見舞われた膝蹴りを、同じく膝を上げて防ぐ。次いで後ろに距離を取る。

「中々のお手前。感服仕つてござる。お主ほどの腕前ならば、こちら

も奥の手を使わざるを得ないでござるな……」

『シャウ、スキルを仕掛けてくるかもしれない。注意して』

「承知、しかし……」

紅緒が握っている刀は為虎添翼。紅緒型のデフォルト武装だ。そのスキルは『蒼天斬月』。出が早く、カウンターとして使われることの多いスキルで、その斬撃は強力。だが、それは居合い抜きの手技であつたはず。鞘を払った抜き身の状態では使うことの出来ないスキルだ。それをこのタイミングで放つて、効果的とも思えない。

「天見よ、地見よ、人よ見よ！ これぞ我がスキル！ 『国土無双』！
発動！」

国土無双。確かに紅緒はそう言った。オリジナルのスキルだろうが、外見にも、何か変化があつたところはない。そう、何も起こらなかつたのだ。だが、そんなはずはない。何も起こらないスキルなど、ないはずなのだ。

それに、紅緒が使う『国土無双』、というのが、記憶のどこかに引つかかる。どこかでそんな話題を聞いた覚えがある。しかし、有名なスキルや強力なスキルなら、忘れるはずがないのだが……。

画面の中では、紅緒が為虎添翼を振るっている。それを刃で受け損ねたシャウが、左腕のアームガードを使って咄嗟に受ける。その刹那、紅緒の背後に大きく「国」という文字が表示される。

「何だ？ あれがスキルの効果なのか？」

思わず声を上げるが、それで特に何かが変わったわけでもない。「国」というエフェクトにも当たり判定があるわけではないし、トークンのような自律行動をするわけでもなかつた。ただ、文字が表示されただけなのだ。

「国土無双……紅緒の使う、国土無双……どこかで聞いた覚えが……」
口の中で、言葉を転がして考える。その間にも、攻防は続いている。シャウが突く。しかし、体勢が悪く、浅い。その隙を、紅緒は見逃さない。突くために伸ばした手を、為虎添翼が鋭く打つ。それを構えを崩し、アームガードでいなす。すると、刃が触れた瞬間に、今度は「土」

の文字が表示される。思い出した！『国士無双』！

「シャウ、いったん距離を取れ。その剣、触れては駄目だ！」

『主？ つ、承知！』

俺の声に、シャウが後ろに跳び退る。その反応を見て、紅緒がにやりと口の端を持ち上げる。

『ほう、このスキルの正体を、気づいてござったか……存外に有名になったものでござるな？』

『主、何か分かったのですか？』

「ああ、あのスキルは……」

曰く、ロマン砲。

曰く、使い勝手最悪のスキル。

曰く、使う前に終わるスキル。

曰く、むしろ、終わらせないと駄目なスキル。

スキル『国士無双』……それは、自分の攻撃を四回相手に当てることで発動する、ステータスアップスキルだ。しかし、実践の最中に、わざわざ隙を作つてスキルを使い、その上で四回攻撃を当て、ようやくと発動してその効果がステータスを上げるだけ。確かにその上昇率は少なからぬものではあるのだろうが、それにしただって割に合わないスキルだ。以前花道達との話で拳がった、一部では有名な駄目スキルだった。

『その通りでござる。某のスキル、『国士無双』……これは我が主が考案された、フラグを蓄積することで効果を発揮するスキルでござる。後二回攻撃を当てることで、文字通り国士無双の能力を得ることが出来るのでござるよ』

誇らしげに語る紅緒。その言葉には、自分のスキルを卑下するようなところは微塵もない。自らのスキルに、絶対的な自信を持っているかのようだ。

『後二回、それがお主に残された猶予でござるよ……』

『そんなもの、食らわなければ！』

そうなのだ。四回も攻撃を当てる事が出来るのなら、そのときは既に勝負を決するほどのダメージが与えられているはずだし、そうあ

らねばならない。四回も攻撃を当てて、そこから勝負を動かし始めよう、などと言うのは悠長に過ぎるのだ。

『それは、どうでござるかな!』

再び闘技場の中央で、激しく剣戟がやり取りされる。小さく振られた刃が、シャウの右頬を掠める。代わりに紅緒にも浅傷が入っているが、紅緒はそれを気にする様子はない。それどころか、背後に刻印された「無」の文字に、誇らしげな様子さえ見せる。

……これはもしかして、恐しいスキルなのではないだろうか。いかにシャウほどの腕を持つても、相手をまったくの無傷で倒すのは難しい。しかも一撃入ってしまえば、次を受けるわけにはいかないという心理的な重圧がのしかかる。そしてそれは、攻撃を受けるたびに重圧を増し続けるのだ。

シャウの刃が、紅緒の頬を切る。しかし、紅緒は自分のダメージをまったく意に介さない。受けている傷の数では、紅緒の方が遥かに多いのに、だ。残されたLPの上でも、当然紅緒の方が下回っている。それでもなお、紅緒は前に出てくることを止めないし、そこにはためらいも微塵も感じられない。スキルが決まったら勝てるという保障もない。しかし紅緒は、スキル『国士無双』の成功が自らの勝利であると言わんばかりの勢いで、前に、ただ前に出てくる。そして……。

『っ……………!』

『我が事、成れり!』

シャウの一撃が、入った。しかし、それと同時に、浅いが一撃。紅緒の刃が、シャウに入った。「双」の文字が寸刻表れ、次いで「国」「士」「無」「双」の字が立て続けに表れる。それを背負ったまま、紅緒の全身からスキルを発動したときの光が吹き上がる。

『これぞ、『国士無双』、第二段階。某の力を、極限まで高めてくれるスキルの本領発揮でござるよ』

『くっ……………!』

「落ち着け、シャウ。あの状態になったからって、それで勝負が決まるわけじゃない。ダメージジレースでは勝ってる。セオリー通り押し切るんだ」

『それは、どうでござるかな！』

大上段からの打ち下ろしが迫る。が、剣の速さが変わったようには見えない。兼定を横に構え、左腕を添えて防御の姿勢でそれを受け。が……。

『なっ!?』

攻撃を受け止めたシャウの体を通り越し、足元のリングに、ひびが入る。闘技場ステージでは破壊可能なオブジェクトは少ないが、リングは破壊可能オブジェクトに含まれている。しかし、単純な一撃でそれを破壊するなんて！

『そらそら、次々と参るぞー!』

やはり動きが速くなったわけではない。しかし、そこに上乘せされている力は規格外だ。後ろに跳び退り、かわす。勢いのままに地に叩き付けられた一撃は、石版のリングに大きな太刀傷を穿った。

『なんとという威力……』

『どうでござるか、我がスキルの威力は』

紅緒が破顔する。まるで、その力を振るうことが嬉しいみたいだ。

『某のために、我が主が組んでくださった、専用のプログラムでござるよ。この技をもつてして、某に敗北は許されておらぬ!』

『……それは私とて同じこと! 主に勝利を捧げると、私は誓ってここに来た! ただ負けるわけにはいかない!』

今度はシャウの方から仕掛ける。駆ける勢いをそのまま刀に乗せて、上段から兼定を振り下ろす。が、紅緒はそれを片手で凌ぐ。開いた左手が拳を作り、無防備なシャウの腹に一撃が突き刺さる。

『ぐっ、ううっ……!』

大きく吹き飛ばされるが、姿勢を崩しながらも何とかこらえる。そこに、追撃の打ち下ろし。国士無双の第二段階を発動させてからは、紅緒の攻撃は全てが全力だ。受け止めるには体勢が悪い。咄嗟に横に飛んで避ける。寸刻前にいた場所が、温めたバターのように軽く斬られる。

『なるほど、某もお主も、負けられぬ者同士。しかし勝負の場にあつて、いずれかは敗北するのが必定でござる!』

『いかにも……それでも私は負けません!』

『戯けがッ!』

全身の力を込めた紅緒の一撃を、シャウも全霊で受け止める。しかし、双方の力関係は完全に覆された。罅迫り合いには持ち込めない。しかし、シャウは力では劣ることの方が多かった。訓練でさえ、ストラーフであるミーシャには純粋な力では劣るのだ。それを繰り返したシャウは、力に勝る相手をその技で切り返すことを学び続けた。今も、わずかな力をかけて一度は受け止めた紅緒の剣を逸らす。勢い余って、リングを切り裂く為虎添翼。そして、大きく体勢を崩した紅緒。

『てええええいッ!』

胴に一撃。確かに兼定の刃が、紅緒を捉える。だが、紅緒は倒れない。

『悔るな、この国士無双、単に攻撃力のみを上げるスキルだと思ってござるか!』

「ハイパーアーマーか!」

ハイパーアーマーとは、バーチャルでスキルを使ったときの追加効果のひとつで、ダメージを軽減しつつ、そのダメージでの衝撃を緩和する。要するに、よろけたりふらついたりしにくくなるという状態だ。『国士無双』の効果でも、それが付与されているらしい。

『ハイパーアーマーとて、ダメージがなくなるわけでは!』

『然り。然れどもそれは、当てられる者の台詞でござろう!』

振り向き様の一撃に、当然のごとく合わせてくる。二閃、三閃、足を止めて打ち合う。かと思えば、どちらともなく、飛び退り距離を取る。

『嬉しく思うでござる。ここまで打ち合えるとは』

『何を……?』

『我が主のスキルの力、遺憾なく振るえる相手と出会えた。そのことに、感謝するでござる。名を、未だ聞いていなかったでござるな……何といっ?』

『……シャウラ』

『シャウラ殿。その名、某の記憶に留めておくでござる。それでは改めて、参るぞ、シャウラ殿！』

『応！』

こまかい技など必要ない。そう言わんばかりの一撃が、頭上から打ち下ろされる。かわす。半身にずらして、必殺の一撃がシャウの身体の真横を通り過ぎる。が、それでもまだ紅緒の攻撃は終わらない。もう一撃。下から切り上げてくる。Vの字に振るわれる為虎添翼を、真上からの切り下ろしで迎え撃つ。渾身の一撃に、どちらの神姫も、吼えた。

決着の瞬間だった。

『なんとつ……………！』

『これは……………！』

その幕引きは、戦っていた二人にも意外なことであつたらしい。

甲高い音を立てて、為虎添翼が、折れた。寸刻宙を舞った刃先が、闘技場のリングの上に突き立つ。

しばし、二人の間に沈黙が流れる。まるで、その数秒だけ時を止めたような静寂が支配する。そして、シャウが紅緒を見据えたまま、一歩、引く。

『替えの刀を出してください。それだけの軽量装備なら、サイドボードに用意くらいあるでしょう』

その言葉に、意外そうな表情を向ける紅緒。

『ふっ……………はははははは！ 参った、よもや、そんな言葉を聞こうとは！』

唐突に、笑う。

『ふ……………負けよ負け、某の、負けにござる。確かに、予備の刀の用意はある。しかして、今の攻防には某の魂さえ賭けた。それを砕かれて、負けを認められぬほど、某は醜くなりたくはないでござるよ』

折れた為虎添翼を、リングの上に放り出す。

『何より、お主がその気なら、某は今、返す刀で斬られていて、おかしくなかった。御見事にござる』

『……………刀に、救われました。それだけが、勝負を分けた。もし、佩いて

いる刀が逆であつたら、私が負けていたでしょう』

『良き刀をお持ちでござるな。いずれ名高き逸品に違いない。大事にされよ』

どつかりと、シャウに向かったまま胡坐をかく。その顔には、清々しい笑みが満ちている。

『さて、介錯を願おうか。某、敗北を認めたりとは言え、刃にかからず、引く道は残しておらぬ故。出来れば、その名刀にて』

『……名を、まだ聞いていませんでした』

『小十郎、と申す』

そう言うと、小十郎は背を向ける。最後は認めた相手の手によって幕を引きたい。そういう思いもあるのだろうか。シャウが、無言で兼定を振るつた。

Dグループのもう一方の試合が終わり、若干のインターバルを挟んですぐに第二試合が始まる。試合が終わろうが終わるまいが規定の時間を待ってくれた、この間の公式大会とはそこが大きな違いだ。

予選リーグ二回戦の相手は、イーアネイラだった。

イーアネイラ。その神姫は自分に与えられた特性に、特化すれば特化するほど、ホームグラウンドでは強力な神姫に育つ。しかし逆に、どんなにホーム以外で勝とうとセツティングしても、中々高い評価は得られない神姫だった。

と言うのも、イーアネイラは人魚型である。水中・水上であれば、大半の他の神姫には追従も許さないだろう。が、現在のバトルフィールドの環境で、それを生かせるステージはほとんどない。つまりイーアネイラのバトルロンドでの評価は、水中ステージ以外では、眠れる獅子なのだ。

ホーム以外では評価の低いイーアネイラ。それであえてこのランダムステージの鳳凰杯に挑んでくると言うのが逆に不気味ではある。「まあ、最高に運が悪くても、イーアネイラの水中装備と水中ステージが両方揃うなんてことはないと思うけどね。それを狙つてるとしたら、賭けの要素が強すぎる」

「ですね。しかしそうなると、逆に相手が何を狙っているのか、疑問が尽きません」

「……と言うことはイーアネイラの特性を活かすのを諦めて、陸戦か空戦の装備をしている、って予想が一番しっくり来るんだけど……何かが、足りない気がするんだよな」

「とりあえず、スピード重視のカスタムをお願いします。後は現地で帳尻を合わせますから」

そうこうしている内に時間切れだ。今回は速度重視の設定に、各種刀剣類をサイドボードへ。メインには鬼姫とジュダイクスの四刀だ。

今回のステージは「廃墟のビル街」。幾つものビルが林立する、地上戦では戦術的な動きの出来るステージだ。上空まで突き立つビル群

もあり、市街地同様空戦でも障害物として使える。

「そういえば、ここ、アルが壁走りを見せてくれたステージだったな」
『ええ、覚えていますよ。あの技は私には真似が出来そうにありませんから』

話しながら、いつものように上空を飛びつつ索敵。が、ビルの群れに近づくと、突然、レーザーとミサイルの攻撃を受ける。

「もう発見されたのか?」

『違います、これは……!』

シャウの言葉通り、攻撃は全て明後日の方向と言うか、適当な狙いでとりあえず撃たれているようだ。幾つもの攻撃が、破壊可能オブジェクトのビルを壊している。とりあえず破壊された場所を狙えそうなどころを計算し、距離と位置を割り出す。この辺りはマスターである俺の役目だ。それによると、ビル群の真ん中辺りだ。

ビルを見渡せる上空へ。高所から見おろすと、結構ビルの上階部分は壊されている。が、それを辿れば……。

「いた! 正面のビルのまん前に陣取って砲撃姿勢!」

パワーダイブ気味に駆ければ、すぐ手が届く位置。まだこちらを発見していないらしく、適当にスキュラのミサイルや、サーペント・ランチャーを撃っている。

『征きます!』

相手を見定めたシャウが、腹を括る。たまたま飛んでくるミサイルをバリアシールドで防ぎつつ、一瞬で攻撃態勢に入る。相手もこちらを視認したらしく、足のヒレを優雅に振って迎撃の姿勢だ。

ん……? 陸戦なのに、テティス・テイルパーツを装備しっぱなしなのか……? しかもここまでの行動が無秩序なオブジェクトの破壊……。

「シャウ、上空に上がれ、急げ!」

『急上昇、かけます』

シャウが急制動をかけ、無理やり上空へ退避する。ある程度の高度を取り、イーアネイラの方を振り向く。

『あらあら、もう少しゆっくりしていかれたらよろしかったのに』

ゆったりとした人魚が、身体にスキルの光を灯した。

『ビルを充分壊してSPも溜まりましたし、それじゃあお見せしますわね?』

人魚の声は、本当にここがバトルフィールドなのかと疑いたくなるほど穏やかだ。だが、それに惑わされてはいけない。

『スキル、発動。『レイジ・オブ・オケアノス』!』

やはり来た!

『何ですか、これ! フィールドが揺れるなんて!』

「イーアネイラのスキルの効果だ。これは単純だが強力なスキルで……バトルフィールドに海を召喚する!」

『そんなスキルが……!』

見る間に、ビルの林は水に飲み込まれてゆき、あっという間に海面からビルの頭だけが出ている、そんなステージに変えられてしまった。

スキル『レイジ・オブ・オケアノス』は使いどころのないスキルだ、と言われている。その発動には、イーアネイラ型の装備をほとんど全て身に付ける必要がある、装備の自由度が大きく下げられてしまう。しかもその効果は直接的な攻撃ではないため、当たり判定もない。そして決定的なのが、そこまでしてもフィールドの全てが水中になるわけではない、という点だ。今回もステージの大半を飲み込んだ水だが、精々ビルの半分が水没しただけで、シャウのような飛行型には空というもうひとつのフィールドがある。つまり、大掛かりな準備が必要な割には、勝負を決める決定打とはなり得ない。それがこのスキルの世間的な評価だ。

しかし、イーアネイラ型の武装をフルに使いこなすなら、フィールドに水を呼ぶという効果だけでも充分以上に強力だ。少なくとも水中にいるだけで、こちらからの攻撃はまともに機能しなくなる。特にシャウのような格闘特化の機体では、水中でまともに機能する攻撃というのは極端に限られる。つまり、少なくとも負けの目を大きく減らすスキルではあるのだ。そして……。

『ミサイル、来ます!』

「回避して、敵の位置を割り出す」

とは言ったものの、相手は水中を高速で移動しながら撃ってきている。今の居場所を特定出来たとしても、寸刻後にはもう移動してしまっているのだ。

さあ、どうする……今はまだ回避も間に合うし、散発的な攻撃にはバリアシールドを展開することも出来る。だが、ただ水を呼んで穴熊よろしく巢に籠るだけでは芸がない。恐らくここから、何かしらの追加の一手があるはずだ。

「発射位置がどんどん近づいてきてる。何か仕掛けてくるぞ、注意して」

『主、ソードビットをください、せめて事が起こる前に展開します』
すぐにビットコンテナを兼ねたシールドを送る。が、ソードビットも水中で十分に機能する装備ではない。相手が水の中にいる以上、こちらの武器はすべて枷をつけられたも同じなのだ。

ざざ、ざざ、と水がざざめく。一瞬、背筋を撫ぜる違和感に、身が震える。静か過ぎる！

「シャウ、来るぞ！ 構えろ！」

『ッ！』

『スキル発動！ 『ウエパル・アサルト』！』

突然姿を現したイーアネイラ。その場所は、真下。水中から猛烈な勢いで飛び出してくる、その手には、三叉の槍『トリアイナ』。瞬間、反応し、六枚のビットが迎撃に向かう。確かに入った。が……。

「またハイパーアーマーか！」

勢いはまったく衰えず、その槍の一撃がシャウを襲う。迎撃に意識を向けたためか、防御は間に合わない。

『うあ、っ！』

「シャウ！」

一撃加え、静かに着水すると影を捉える間もなく水の中に消える。寸刻間をおいて、再びスキュラのミサイルが飛んでくる。

『くっ……シールド！』

「ダメージの診断は？」

『かなり削られました。動作不良箇所、ありません。まだ征けます！』

今のスキル、『ウエパル・アサルト』。これも使いどころが難しく、敬遠されがちなスキルだ。ハイパーアーマーを付与し、水中から飛び出し様の一撃を加えるスキル。その動きは捉えにくく、攻撃力も高い部類に入る。その唯一の弱点は、水中フィールドでないとそもそも使うことが出来ないというその一点に尽きる。『レイジ・オブ・オケアノス』同様、メインのスキルに据えられた『ウエパル・アサルト』でさえ癖が強すぎて、水中以外では性能を発揮出来ないとあって、イーアネイラがバトルではあまり見られない理由のひとつになっている。そのふたつのスキルがコンボを組むことで、これほど強力になろうとは。

どうする……散発的な射撃でダメージを食らうことはないが、このままではジリ貧だ。『ウエパル・アサルト』は迎撃出来ない。しかし、私の方から水中に入ったところで水中特化型のイーアネイラの前では手玉に取られるのが落ちだ。相手は再度、スキュラとサーペントの射撃に切り替えてきている。が、それもSPが溜まるまでの繋ぎだろう。準備さえ整えば、また『ウエパル・アサルト』が来るはずだ。

回避のために、私は高度を取り、高速で飛んでいる。イーアネイラはそれに追いつくことは出来ないが、射撃だけはこちらを捉えて離さない。射撃位置は相変わらず、こちらを追い続けている。それに対して、今の私を取りうる手段は、ただ逃げるだけ。このままではいけない。どこかで、反撃に転じなければ、勝ちの目はないのだ。

『シャウ、今から指示するポイントに移動だ。そこで勝負に出るぞ』
「反撃の策があるのですか？」

『俺も試したことがないから、うまく行けば、だけどね。まあ、多分、いけるんじゃないかな』

主にしては珍しく、歯切れが悪いお返事。それも仕方ないのかもしれない。何しろ、水中に籠る相手と戦うことなど、初めてなのだから。それでも、主の見つけた勝ち筋があるのなら、それにすべてを賭ける

のに、何をためらうことはない。私は、主の望むものを裁つ刃になる。ただ、それだけでいい。

主が指示した位置は、水没したビル群のはずれ。破壊されたビルの立ち並ぶ場所を、細かく指定する。

『そこだ、高度、下げ』

高度を下げる。その指示に一瞬、違和感を覚える。高度があるからこそ、水中から飛んでくるミサイルやランチャーを余裕をもって避けられるのだ。言わば、その距離が私のかざす盾なのに、それを手放せ、という指示。しかし、すぐにそれを飲み込み、高度を下げる。ビルに囲まれた辺りを、水面ぎりぎりまで下がる。正面から、ミサイル。避けるだけの広さはなく、シールドを張って身を守る。

『シャウ、ちよつとの間でいい。潜れるか』

なんとという指示だろう。空戦装備の私に、水中特化型を相手取って相手の土俵に飛び込めと言う。しかし、それが主の見定めた筋道ならば、私にためらうことはない！

「ええ、主が望むのならば」

『よし、水中ですぐにスキルだ。サイドボードを送る』

サイドボード。これで私にも主の考えが伝わった。

『相手は正面。頼むぞ』

「はい、征きますー！」

水の壁に、私は自らぶつかって行く。水の揺らめきに合わせて、視界が揺れる。そういえば起動してから一年半ほどになるが、バーチャルとは言えこうして頭の先まで水の中に入ったことなど、ついぞなかった。そんなことを思った刹那、手にしていた鬼姫に変わり、リノケロスが送られてくる。思った通り。ここで、主が望まれているスキルは……。

「スキル発動！ 『パッシング・シェイブ』！」

合体剣、ギラファブレードを、思い切り振りまわす。重い。水の中で剣を振るうのがこんなにも大変だなんて！ それでも、パッシング・シェイブの追加効果は、確かに発動している。水が渦を巻き、周囲の瓦礫を舞い上げる。その中に、いた。確かに正面から、イーアネ

イラが渦に飲まれて、引き寄せられてくる。が、相手もただ引き寄せられてくるだけではない。水の流れに乗せて、スキュラのミサイルをありったけ放ってくる。だからと言って、止められるものか！

「おおおおお！」

着弾。爆発のダメージが、私の身体に刻まれる。それでも。逸れたミサイルも、爆発が水圧となって牙を剥く。それでも！ここで負けるわけにはいかない！

密着。待ち望んだ瞬間だ。ギラファブレイドを、水平に一閃。水の重さとは違う、手ごたえが確かにあった。次いで、急上昇。再び空中へと駆け上がり、すぐさまパワーダイブ！

「いっけえええええ！」

水面近くの魚影めがけて、自らの身体を杭として打ち込む。私を中心に、激しい水柱が上がる。そのまま、流れるように剣の連結を解除。もうひとつのスキル、『ディアホーンスラッシュ』へのコンボを繋ぐ。何百回と訓練した、私の決め技だ。二本の刃が、イーアネイラの身体を十字に切り裂いた。

「ん、お疲れ。よくやったな」

「はー」

いつものバトル後の、いつもの労いの言葉。そっと近づけられる人差し指に、拳を合わせる。

「主、よく水中でイーアネイラが来る方向を絞れましたね。あれがなければ、パッシング・シェイブでも決められなかったかもしれない」
「ああ、あれ？ あの場所、覚えがなかったかな。あそこ、アルが壁を走った場所だよ。三方向が壁で、あそこの路地に入れる道は一箇所しかない。いくら水浸しにされてるとは言え、入り口が一箇所しかなければ来る場所は同じさ」

なるほど。あの場所だったのか。私が羨んだ、あの技を見せた路地。そう言えば、様変わりしてしまっていたが今回のバトルフィードは、アルキオネとの才能の差を思い知らされたバトルと、同じフィールドだった。

主の知識は一体、どこまで及んでいるのだろう。フィールドの知識もそうだが、スキルにしても、バトルの方法にしても、私以上に詳しく、正確だ。何より、対戦中の作戦の組み立ての速さと緻密さには、舌を巻く。それを感じるたびに私は、主と共に道を歩んでいる気がして、嬉しくなる。『格闘戦最強』という謳い文句を現実のものにするために、主も共に進んでくれるのだ。そう思えるから。

「さて、とりあえず今日はもう一戦、頑張ってもらわないといけないんだけど。いけるか？」

「ええ、主が望むのならば、いつでも」

後一戦。それを勝ち抜けば、決勝トーナメントの出場が叶う。勝ちたい。私のために。そして何より、主のために。その気持ちを胸に、私達は次の試合に向かった。

Dグループの最終試合。いよいよ、この一戦で予選は終了だ。俺が対戦筐体の方に移動すると、対戦相手は既に待っていた。少し急いで筐体に駆け寄る。

「貴方が予選リーグの最後の対戦者ですの?」

「ええ、よろしく、鶴畑和美さん」

「あら、ワタクシのことをご存知でしたの? まあ当然ね、ワタクシはかの鶴畑三兄弟の末妹。ファーストリーグ148位のリアルリリーガーなのですから」

リアルリーグとは、ファーストリーグの別称だ。ファーストリーグではセカンドまでのリーグと違い、基本的に試合がリアルバトルで行われるため、こう呼ばれることがある。

その中でも、武装神姫草創期からファーストリーグに君臨し続けるのが、鶴畑三兄弟と呼ばれる、鶴畑コンツェルンの御曹司達だ。特に長男の興紀は最初期から最強の神姫マスターの一角として君臨し続けている。その弟の大紀はファーストの中でも下位ではあるものの、やはり初期からファーストリーグに在籍している。が、八百長試合などの黒い噂が絶えない人物であり、金に飽かせた装備を積むことでも有名で、性格的にも下位のプレイヤーを必要以上にいたぶるなど、あまりお近づきになりたくないプレイヤーの一人だ。

鶴畑和美も若干十二歳でデビューを飾った新星として一時期もてはやされていた。が、大紀同様あまりいい噂は聞かない。まあ、噂がどうあれ、バトルには関係がない。むしろ、実際に手を合わせれば、噂の真偽が確かめられるだろう。何より、下位とは言え彼女がファーストリーグに在籍するプレイヤーだと言うのは事実だ。実際、俺達が苦戦した紅緒の小十郎やイーアネイラも下している。

「どうしましたの、ぼんやりとして。ははあん、貴方、ワタクシの美貌に見とれてらしたのね。でもお生憎様、ワタクシ、貴方のような雑草には興味がありませんの。精々、ワタクシとジャンヌの踏み台として、振舞ってくださいましね」

……前言撤回だ、少なくとも近寄りがたい人物であるのは確からしい。無論悪い意味で。

「さて、武装はどうしようかね……あの、シャウ……？」

シャウは無然とした顔でねめつけてくる。一体どうしたと言うのか。

「どうしたの……？」

「あの娘……主を……雑草などと……」

「シャウ……？」

「主、お任せください、あんな娘の神姫、私が叩き斬ってご覧に入れま
す」

……そんなことで腹を立てていたのか。俺は嘆息をひとつ吐くと、
シャウの頭の上に指を置く。

「そんなことで心を乱すな」

「そんなことなどと……！ 私にとっては重要なことです！」

「分かってないな、試合前の挑発に乱されるな。あんなのは試合前の
マイクパフォーマンスみたいなもんだろ。それで有利になるんだっ
たら、俺だつて挑発のひとつやふたつはやるさ。そうしないのは何で
か、分かるか」

シャウの視線が寸刻緩む。

「分からないか。俺達の求めているものは、そんなものじゃないだろ。
だからやらないのさ。勝つことは二の次だ。だからお前も、小十郎と
兼定一本で斬り合ったんだろ」

「あ……」

腑に落ちたらしい。眉間から険が取れる。

「勿論、花道達との約束もあるからな。負けたくはない。だが、それは
それだ。俺達の敵はいつも自分達だ。違うか」

「申し訳ありません、主……」

シャウが、しゅんとうなだれる。わずかな沈黙が流れるが、続けて
口を開く。

「とりあえず、武装だ。確か鶴畑和美のジャンヌは重装のサイフォス

だったはずだ。いつもどおり、高速で迫って斬り捨てるのがいいと思うが」

「主……」

「大丈夫、ファーストリージャーに、見せてやろう。俺達の強さを」

「はい……」

シャウの顔から、憑き物が落ちた。まったく、試合前にとんだ小技を仕掛けてくる。だが、ファーストリージャーにしては手が安い、というものだ。見せてやろうじゃないか、俺達の強さを。

バトルフィールドは、再び「闘技場」ステージ。正直、このステージで鶴畑和美の重装型サイフォス、ジャンヌとやりあうのは不利だ。身を隠せるようなオブジェクトはないし、どこへ逃げても相手からは丸見え。おまけに射程の外には逃げられないときてる。こう言っちゃあなんだが、これも仕込みのような気がしてならない。

が、そんなことはどうでもいいのだ。俺達は俺達のやれることをやる。そのために……。

「感じるな、考えろ……勝利への道筋を……」

俺はあえて口に出す。この言葉は、ある人が俺に教えてくれた言葉だ。

『何か言いましたか、主？』

「いや、なんでもない。始まるぞ、集中してかかれ」

『はい』

『Lead y... Fight!』

電子音声か、試合の開始を告げる。

『おーっほっほっほ！ さああ！ やっておしまいなさい、ジャンヌ！』

『イエス、マスター』

っ！ インカムを通じて、馬鹿でかい高笑いが耳をつんざく。あの女、わざわざこっちにまで回線開いてやがる。てつきり安い挑発でシャウの平常心を乱してくる策かと思ったが、ここまで来ると天然であれをやってるのかと疑いたくなってくる。

画面の方ではミサイル、3.5m砲、ガトリングにランチャーと、大型火器をハリネズミのように背負ったサイフォスが、その砲口を一斉にシャウに向けているところだ。

「シャウ、まずは広く動ける空で、機動力を活かせ」

『はい、征きます！』

シャウが闘技場の上空へと退避。それを追って、様々な弾薬が雨霰のように撃ち出される。砲口が白煙と爆音とを撒き散らし辺りはもうもうとしている。だが、それでもまだ射撃を止めない。弾薬の予備は山ほどあると言いたげだ。

『ジャンヌ！ あんなもの、花火と同じだわ！ 撃ち落して咲かせてあげなさい！』

『イエス、マスター』

火線が集中する。お世辞にも正確な狙いとはいいがたいが、なんとかやらも数撃ちや当たる。数発の直撃コースの弾はシールドで防ぐ。爆発だけがやたらと派手に青い空に咲く。

『ほーっほっほっほ！ やはりセカンドの雑草など、私の勝利を彩る華にもなりませんわね！ ジャンヌ、どんどん撃ち込んで、ミンチにしておやりなさい！』

『イエス、マスター』

相手は回線を開きっぱなしで、指示まで全部筒抜けだ。もつとも、大雑把過ぎて作戦も何もあつたものじゃないが。

「シャウ、回避機動を混ぜつつ接敵。盾は目眩ましにもなる。有効に使え」

『承知！』

手足やサブアームを振り、それに合わせてバーニアを吹かす。AMABCと呼ばれる姿勢制御方法だ。高速機動と質量武器を兼ね備えたエスパディア型は、本来こうした独特な機動で飛び回ることを得意としている。慣れればそれによってジグザグに飛んだり、飛びながら真横にずれたり、といった動きも可能だ。本来の機動力より加速力を取った高速飛行セッティングにしても、その動きの本質は変わらない。

避けられないものだけを防ぐために、シールドを張りながら、一気に相互の距離を詰める。元々機動性の低いサイフォスがあれだけの武装を積んでいるのだ。もはや神姫と言うより固定砲台。距離を詰められたから逃げる、なんて動きは到底出来ない。

『きいいーっ！ ジャンヌー！ スキルを使いなさい！ そのちよこまかうるさい羽虫を、叩き落とすのよ！』

『イエス、マスター』

……俺は雑草で、シャウは羽虫ときたか。面白い。ならば羽虫も刺すつてことを教えてやろう。

「シャウ、大きいのが来る。セブンスソードを盾に」

『了解です！』

スキルの光が両者に灯る。一層勢いよく吐き出される弾丸の嵐。だが、見た目は派手だが狙いがなっていない。これじゃ無駄遣いもいところだ。確かに威力も上がっているらしく、バヂイツ、バヂイツ、と展開したバリアシールドが引き裂かれる音がする。が、更にその内側に張られた大盾。バスターソードも、用途を変えればビームシールドとして扱えるのだ。結局それを貫くことなく、ジャンヌのスキルは終わりを告げる。それなら今度は……。

「バスターライフルだ。一気に密着するぞ」

『はい！』

即座に第二段階を発動。さつきまで盾として使っていたエネルギーを、前方に撃ち出す。もっとも、狙いはジャンヌ以上に適当だ。だが、それで充分。

『こんなもの！ 所詮目眩ましでしてよ、ジャンヌー！』

さすがファーストリーガー、分かかってらっしやる。だが、そう思うなら指示のひとつも投げてやるべきだったな。接敵して、一気に斬りかかる。3.5mm砲とランチャーが、GNソードVの一閃で竹筒のように斬られて落ちる。しかし次の瞬間、ボン、という音と共に大量の煙が視界を遮る。その突然の出来事にシャウも後ろに跳び退る。

『大火力相手には接近戦。そんな凡百の策で、ワタクシのジャンヌが攻略出来ると、本気で思ってたらして!?!』

しまった、あれはスモークを焚いたのか。みすみす敵に換装する時間を与えてしまった。煙が晴れると、そこには正当な騎士型がいた。が、手にしているのは両刃剣『コルヌ』ではなく、大振りなレーザーブレードだ。反対の手には、大盾を握っている。

『お生憎様、ワタクシのジャンヌは接近戦でも強いのですわ！ さあ、ジャンヌ！ 下郎を打ち払いなさい！』

まあいい、そうなってしまったことは仕方がない。それならそれで、いつもの通りにやるだけだ。対するシャウの装備は三刀。GNソードVと、鬼姫だ。

「さあ、こうなればこっちの土俵だ。思う通りにいってこい」
『はい、征きますー！』

相手の意図にはまったのは確かだが、状況を変換してシャウに伝える。これだけでもシャウの動きは格段によくなる。サブアームを展開し、鬼姫で猛然と斬りかかる。ジャンヌの方は盾で受けて、カウンターを取る構えだ。搦め手など差し挟む隙もないくらい、真っ向からの打ち合い。横薙ぎ。盾が受ける。それにも構わず、更に盾の上から、二撃、三撃。強化プラスチック製の盾に、見る間に大きな傷が刻まれていく。隙を突いて、大振りな光剣で反撃に出る。GNソードVで受け止めるが、出力差は明らかだ。このまま受け続ければ、機能不全を起しかねない。

「シャウ、相手のブレードは出力が高い。鬼姫を防御に回して」
「はい、主ー」

即座に攻撃と防御を切り替える。鬼姫の材質は、カスタムナイフを作るのにも使われる鋼だ。ホビーバトルで使われる程度の出力ならば、多少規格外でも溶断されるようなことはない。二合、三合と打ち合う。流石はサイフォス、地力が違う。が、力では優位を取られても、技はこちらの方が巧みだ。そして、シャウは自分よりも力で勝る相手と剣を交えることの方が多かった。力に劣る場面を逆転することなど、造作もない！ ましてや、装備そのままの力の差なんて、いくらでも押し返せる！

シャウが、あえてGNソードVでレーザーブレードを受ける。その

まま、力を逸らし、受け流す。ジャンヌの体勢が崩れ、よろける。そこだ！

『スキル、発動！』『無銘：大顎』！』

俺が組んだ、シャウだけのスキル。巨大な鋏となった鬼姫が、サブアームに支えられてジャンヌの身体を挟み込む！

『そんな鋏ごときで、ジャンヌの装甲を抜けると思ってますの!? 斬り払っておしまいなさい、ジャンヌ！』

『イエ……マス……タ……』

『ジャンヌ！ どうしたの！ ジャンヌ！』

青い鋏が、サイフォスの鎧ごと、鋏み斬る。これこそが、シャウの本領だ。

数瞬の間を空けて、シャウの名前が勝者として表示される。

俺の武装神姫、シャウラ。その名は、俺が誇らしく感じるほどに輝いて見えた。

「お疲れ様。よくやってくれたな」

「はい」

勝てた。ファーストリーグのプレイヤーに。その神姫に。

「シャウ、まださつきのこと、気にしてる?」

主が柔らかく、問われる。確かに、試合前の、試合中の、主を侮るあの暴言、許せたわけではない。でも……。

「もういいのです。主が、本当に侮られるような人かどうか、私は試合で示すことが出来たと思いますから」

そう言うと、私は微笑む。

「きいいーっ！ 何ですのこの試合は！ ワタクシは鶴畑三兄弟の末妹、鶴畑和美ですよ！ ありえない、こんな敗北！ あってはならないことですわ！」

柔らかい空気が主との間に流れた刹那、甲高い少女の叫びが聞こえてきた。その恰幅のいい身体を震わせながら、黒服の男達に当り散らしている。

「こんな試合、無効ですわ！ そうよ、ファーストリーガーたるこのワ

タクシが、こんな、予選なんかで負けるはずがありませんわ！ きつと、何らかの不正があったのに違いありませんわ！」

私の視線が、みるみる冷え込んでいくのが、私にも分かった。主が私を肩に乗せて、筐体の外に出る。怒気を含んだ視線が突き刺さってくるようだ。

「貴方！ やり直しよ！ 筐体に入りなさいな！ 再試合ですわ！」

「何を言ってるんですか。さっきの試合に異論があるんなら、実行委員会の方に申し立ててください」

「貴方こそ何を言ってるんですの、盗人猛々しい！ ファーストリーガーの私が格下の貴方に負けるなんて、ありえないですわ！ 何か、不正を行ったのでしょ！」

早口にまくし立てる。私の我慢が、ついに限界を迎えそうになったそのとき。

「何を騒いでいるんですか、和美」

「あつ、お兄様……いえ、これは……」

そこにはスーツに身を包んだ青年が立っていた。鶴畑和美が、さっきまでの威勢が嘘のように萎縮したのが分かる。

「試合、見せてもらいましたよ。情けない。自らの不明を棚に上げて、対戦相手の不正を疑うなどと」

「いえ、それは、違うんですお兄様、あの、それは……」

「言い訳は聞きたくありません。戻りなさい。試合は和美、貴女の負けです」

鶴畑和美の顔色が、さあつと青ざめる。それは、彼女にとって死刑宣告に等しかったのかもしれない。明らかに肩を落とし、とぼとぼと立ち去っていく。

「助かりました。貴方は、間違ってたら申し訳ない、鶴畑興紀さん、ですよね？」

「ええ。ご存知とは嬉しい限りですね。愚妹が馬鹿なことを申し上げて、大変失礼をいたしました」

折り目正しい好青年だ。さっきの少女と兄弟とは、にわかには信じられなかった。

「いえ、いいんです。むしろ事を収めていただいて、ありがとうございます」

「とんでもない。先ほどの試合も見させていただきました。いい試合運びだった。本戦で当たるのが楽しみです」

「と言うと、既に？」

「ええ、先ほど、本戦出場が決まりました。貴方とはブロックは反対ですが、そのときはよろしくお願いします」

「そう言うと、さわやかに握手を求めてくる。主もそれに応じるが、その後はそそくさとその場を後にした。」

「……仮面だな。あれは」

「え？」

「多分だけど、妹よりも厄介なタイプだ。別の意味で、お近づきになりたくないな……」

寸刻、主の表情が硬いものになった。私には、そんなことは感じられなかったけれど……。

「まあ、いいさ。とりあえず、決勝トーナメント進出決定だ」

「そう、他の方はどうなったんでしょうか」

「直接会ってみれば分かるさ。もしかすると、決勝に進めたのは俺達だけかもな」

そんなこと、本心では思ってもいない癖に。と、これは口には出さないでおく。主の足は、事前に決めてあった待ち合わせの場所に向かう。そこには、見慣れたお二人の顔があった。

「えー、それじゃあよー、まずは、三人全員での決勝トーナメント進出を祝って、僭越ながら……」

「はいかんぱーい」

「乾杯」

「聞けよ！ お前ら！ 人が喋ってんのをよー！」

花道が一人で切れている。俺と日野はジュースの入ったグラスをぶつけると、早速口をつける。

「ごめんごめん。いやでもさ、花道の話って長いんだもの」

「もうちよつと話を短く簡潔に、つてのは、社会で教えてもらわないのか社会人」

鳳凰杯一日目の結果は、三人とも無事に決勝トーナメントに残れることになった。その中でもファーストリガーと当たったのは俺だけだったが、鶴畑の末妹と当たったことを話したら、それだけで哀れまれた辺り鶴畑和美の人望というやつが垣間見える。

「それにしても、ファーストリガーが意外といないんだな。俺はてつきり、もつと予選からファースト同士がぶつかるんだと思ってたんだが」

「まあ、鳳凰杯はどつちかって言うとお祭りだからね。半公式みたいなものだから、神姫ポイントの移動もそこまでシビアじゃないし」

「お前も一度、見に行つてんじゃねーか。覚えてねーのかよ」

「いや、俺は覚えてるつて言つてもそのときに神姫にあんまり関心があったわけじゃないから……今にして思えば、強いストラフがいたな、つてくらいで」

花道が予約を取ってくれたファミリールストランは、リーズナブルなことでも有名で学生にも優しいイタリアンだ。今はピザをつつきながら、他愛もない話をしている。

「それにしても見事に三人ばらけたなー」

「俺と花道が両方勝ち上がれば、準決勝。日野とは決勝まで当たらないからな」

「でも、花道は一回戦ファーストのレッド・ホット・クリスマスと対戦でしょ。勝ち上がれるの?」

「う……そりゃ、まあ、負けるつもりはねーけどよ……」

そう。花道は公式の全国大会にも出場経験のあるツガル型と一回戦で当たる。レッド・ホット・クリスマスと言うのは、有名な神姫やプレイヤーのことを誰からともなく呼び始めた、二つ名というやつだ。それがあるということは、その試合が注目を浴びているということでもあり、とりもなおさず強力なプレイヤーであることの証明でも……。

「それでも、俺だって二つ名ぐれー持ってるし、そういう意味でも負けてねーぞ」

「……そうなのか?」

「うん、花道は『天雷』って呼ばれてる。元々飛鳥の追撃スキルのことなんだけど、花道は一度攻勢に回ったら強くてね。このスキルの使いどころが絶妙なんだ」

「お前だって二つ名あるじゃねーかよ、『ハイウェイ・スター』の日野くんよー」

「『ハイウェイ・スター』?」

「そーだよ、日野はハイウェイみてーに舗装道があるステージが強えーんだよ。もともとリリイはイーダだから、そういう場所に強えーのは当然なんだけどよ、陸戦の高機動戦ならちよつとしたもんだぜ」

そういえば、日野とはそういうステージでやったことがないな……それに花道とやったときも、G&Sのついでで来ていたときだったし、あれが本気だったとも思えない。

「なんだ、二つ名が羨ましくなってきたか?」

「でも鳳凰杯の本戦に残ったんだから、明日の選手紹介で何かつけられるかもね。花道の『天雷』だって、俺が覚えてる限り、去年の鳳凰杯からだったと思うよ」

「マジか。よく覚えてんなー」

「そりゃあ、花道は俺にとってが一番身近なライバルだからね。動向くらいはきちんとチェックするさ」

細けーやつ、とこぼしているが、花道もまんざらではなさそうだ。日野も、臆面もなくよくそういうことを言える。まあ、俺達の関係性だから言えることなのかもしれないが。

「そういえば日野は一回戦、誰と当たるんだ？」

「ああ、俺の相手はサードリーグだね。あんまり大会には出てないけど、有名人だよ。『ガトリングストーム』っていう二つ名の」

「ゲーツ、あいつと当たんのかよ！」

「花道は彼のこと、きつと苦手だよ。彼、対空砲山ほど積んでるか」

なるほど、サードリーグ所属でも、高校全国レベルから、それ以上のプレイヤーが残るべくして残っている、と言うことなのだろう。

「まあ、日野のブロックには鶴畑の次男もいるし、勝ち上がるのは難しそうか？」

「そうだね。と言っても、俺も素直に譲るつもりはないけど」

それはそうだ。俺だって鶴畑の末妹には勝っているのだ。だってら日野や花道が勝てない道理はない。

「そういうお前は、誰と当たるんだ？ 聞いても分かんねーか」

「ああ、俺は知らない選手だったけど、有名なんじゃないか？ Front Lineの登録選手らしいんだけど」

「ああ、先行で次世代機使ってる奴か」

『ディオネコーポレーション』からも、そういう選手が出てたね。やっぱり、メーカー的にはこういう場はアピールになるから」

そう。ここしばらく既製品のリメイクが多かった武装神姫業界は、今、次世代機の話で持ちきりだ。片や新進気鋭の新参入メーカー、ディオネコーポレーションが送り出す、最強を謳う神姫『アルトレーネ』。片や武装神姫最初期から神姫事業に力を入れていた古参島田重工の子会社、Front Lineが送り出す、最新型『アーンヴァルMk2』と『ストラーフMk2』。この三機種は早くも今年の神姫業界の目玉と言われており、メーカーのモニター応募には定員の百倍とも二百倍とも言われる数の応募があったとか。

「しかし、一回戦でいきなり次世代機と当たるなんて、ついてねーな」

「一回戦でファーストに当たるやつに言われたくない」

「まあ、そういう意味では一番恵まれたのは俺かもね。彼の戦い方は見たまんまだし」

そうかもしれない。日野としては戦力的にも性格的にも把握出来ている相手と闘うことになるのだ。一方俺は性格どころか、機体性能からして既に未知数の相手と戦わなければならない。使ってるのはアーンヴァルの方だから、やはり高機動でランチャーなんかを主兵装にするんだろうけれど……。

「あ、そうだ。オーナーカード、用意しといた方がいいよ。本当は昨日伝えようと思ってたんだけど、忘れてた」

「オーナーカード？」

「あー、名刺みてーなもんだよ。自分のハンドルネームと、交換用の連絡先載せたやつ。そうやっておけば、大会終わった後も連絡が取り合えるから、気になる戦い方してるやつと交換すると、いろいろ便利だな」

なるほど、武装神姫の界限ではそういう呼び方をするのか。確かにそうやって横のつながりが出来れば、戦術研究や練習にいいのだろう。普段そういう相手はゲームセンターや神姫センターでの草バトルで賄っているが、特定の戦術を試すときなんかは気心や戦術の知れた相手がほしいと思ったことはある。今までは特に声をかけたりすることもなかったが、また作ってみようか。

「カード作ると楽でいいよ。SNSなんかで使ってる名前をそのまま使えるしね」

「俺達は全国大会の登録そのまま使ってるけど、鳳凰杯は本名必須じゃねーから、そっちの方が違和感ねー相手もいるしな」

そうか、それで二人は本名で登録していたのか。なんでわざわざ、と疑問だったのだが、ようやく納得する。プレイヤーの大半は俺のよう、プレイヤーネームを持つのが普通だと思っていたから、二人が本名で参加しているのを見たときはちよっと驚いたものだ。

「そう、明日の目標としては、アルトレーネを使ってた子とオーナーカードを交換することだからな、俺あ」

「カードの交換はともかく、そういう下心丸出しだからいつも失敗するんじゃないの、花道」

「うるせー、年齢相応の男子として、かわいい女のオーナーがいたら声をかけたくなるのは正常なことだろーが」

「無駄だ、日野。花道にはそういうオブラートみたいなもの、ないから。それに気づいてないから直らないんじゃないか」

「ははは、確かに」

「お前ら、俺を馬鹿にしてんのか!？」

また始まった。こういうところは花道の欠点であり、それを次々乗り越えていく強さは美点でもある。まあ、傍から見て、かわいい女の子と見ると声をかけないではいられない上、綺麗に毎回爆死しているというのが、長所と写るか短所と写るかは、その、なんだ。意見の分かれるところだろう。

そんなこんなでも、楽しい時間は、あっという間に過ぎていく。時間としてはそれほど遅い時間ではないが、俺達にとっては明日の試合が本番だ。後ろ髪引かれる思いはあるが、お開きにすることにした。「まあなんにせよ、とりあえず残りは明日だな！ 次の目標は優勝か？」

「また、大きく出たね」

「そんなこと言っておいて、一回戦で消えるなよっ。」

「うるせえ、お前らこそ、一回は勝てよな」

店を出るその瞬間まで、この雰囲気は続いていた。

そして、決勝トーナメントの朝が来た……。

さあ、今年もやってまいりました、鳳凰杯、春の陣2040！
まずは激戦を勝ち抜いてきた十六人の精鋭の紹介から参りましょ
う！

Aブロック代表、鋼月十貴子選手！

武装神姫草創期から今に至るまで、バトルロンド強豪の一角に立ち
続ける、そのかわいらしい顔と、高校生という年齢とは似ても似つか
ない戦績を持つ、古強者です！

その神姫、『鋼帝』ジル！

これまたストラーフタイプのかわいらしい顔に似合わず、建機型も
顔負けのごつい装備を振りまわすパワーファイターだ！ 前回の高
校生全国大会でも素晴らしい戦績を残してくれた鋼月選手とジル、果
たして今回はどんな素晴らしいファイトを見せてくれるのでしょうか！

Bブロック代表、高村優斗選手！

昨年彗星のように秋葉原大会を制したセカンドリーガー！ しか
してその実力はファーストリーガーに勝るとも劣らない、期待の新星
です！

そしてその神姫、『女王』雪華！

先日のバトルロンド・ダイジェスト紙でその風貌を知ったファンの
方も多いのではないでしょうか！ しかしその戦い方はまさに女王
の貫禄！ 全国大会を制する前に、鳳凰を従えることが出来るのか！
注目されます！

Cブロック代表、Mk. A選手！

この鳳凰杯のために、北日本から参加してくれました！ 北日本ブ
ロックのバトルロンドでは台風の目となるMk. A選手ですが、本遠
征でもその豪腕が炸裂するのか！

その神姫は『白光』渚！

先行入手された最新鋭機、アーンヴァルMk2ですが、その戦い方
はまさに豪快！ ストラーフのお株を奪うパワースタイルです！

個人的にはプロフィールの写真、武装状態の選手が多い中でかわいらしくイチゴをかじっているのが高ポイントですね！

Dブロック代表は深波月夜選手！

無名のセカンドリーガーかと思いきや、予選ではファーストリーガー鶴畑和美選手を下すという大金星を飾り、決勝トーナメントに進出です！

その相棒たる神姫は『青裁ち鋏』シャウラ！

元々刀剣の得意なエスパディアですが、予選ではなんと、サイフォスの鎧を両断するという豪快な技を見せ付けてくれました！ その技の冴えでトーナメントをどこまで進むことが出来るのか、期待です！

Eブロック代表は花道賢人選手！

高校生全国大会にも出場する強豪が、鳳凰杯に一年ぶりに帰ってきた！ 秋の陣では惜しくも高校全国大会と日程が重なってしまい出場は叶いませんでしたが、堂々の復帰です！

その神姫『天雷』白雪！

その容赦のない苛烈な攻めは、繊細な動きを身上とする飛鳥の型を打ち破るスタイルであると言えます！ 得意の追撃スキル、天雷は鳳凰の舞う空にも炸裂するのでしょうか！

Fブロック代表、たつひと選手！

全国のファンの皆様、お待たせしました！ 全国大会で自分の神姫に堂々の愛の告白をした神姫馬鹿一代！ 満を持して鳳凰杯に挑戦だ！

その神姫は恋人でもある『レッド・ホット・クリスマス』シルビア！

ツガル武装という一見扱いにくいその装備を十全に使いこなし、オーナーであり恋人でもあるたつひと選手のために戦う、まさに愛の戦士です！ その愛の炎は果たして、鳳凰さえも焦がすのか！

Gブロックの代表は藤丘遼平選手！

説明不要！ わずか三ヶ月でファーストリーグにまで駆け上がった、言わば生きる伝説！ その強さはファーストリーグにおいて、現

在でも遺憾なく発揮されております！

そのパートナーは『隻脚の悪魔』ルーシー！

ストラーフのパワーレッグ『サバーカ』を片足だけ装備するという特殊な戦闘スタイルは、今に至るまで他に類を見ない独特のもの！

その強靱な足は、鳳凰杯にも足跡を残すことが出来るのでしょうか！

Hブロックはイギリスからやってきた刺客、リーナ・ベルウッド選手！

遙か海を渡ったイギリスで打ち立てた、若干十一歳にして春夏冬の三冠制覇記録は、未だに破る者のない大記録として屹立しています！

その神姫は『神速の翼』レライナ！

予選では最短試合記録48秒を叩き出してくれました！ その剣はまさに神速！ 決勝トーナメントでも、速さに愛された騎士は遺憾なく剣を振るってくれるでしょう！ その剣技に期待です！

Iブロックからはファーストリーガー、鶴畑大紀選手がエントリー！

鶴畑三兄弟と言えば、知らない者はないでしょう！ その次男である大紀選手、予選でも遺憾なくその強さを発揮してくれました！

神姫はご存知、『百眼の大天使』アラエル！

その威風堂々たる風貌はまさに天使の中の天使、大天使としての貫禄充分です！ 空を制する大天使は、決勝トーナメントの空をどのように舞うのでしょうか！

Jブロック代表、最上統護選手！

鶴畑コンツェルン、鳳条院財閥と並ぶ最上財閥の当主代行！ 神姫事業だけでなく、ついにバトルロンドにも参戦です！

その神姫は『大太刀』マシロ！

本来なら銃を得意とするウエルクストラでありながら、予選はすべて大太刀一振りで突破してきました！ 果たして決勝トーナメントでもその冴え渡る剣技が通用するのでしょうか！ その辺りも注目です！

Kブロックは奇しくも同名、K選手！

本大会一番の暴れん坊オーナーが、決勝トーナメントにも殴り込み

だ！

そのパートナー『ガトリングストーム』ミル！

その二つ名の通り、積載制限ぎりぎりまで積まれたガトリングは、まさに大嵐！ そのバトルで間断なく響く銃声は、まさに霹靂！ この鳳凰杯の空の元でも、果たして嵐を巻き起こすことが出来るのか！ Lブロックの代表は、日野司選手！

同じく高校生全国大会でも戦績を残す選手です！ その戦い方はまさにクレバー！ 冷静な戦い方にはファンも多いとのことですよ！

その神姫は『ハイウェイ・スター』リライ！

道路のあるステージでは無類の強さを発揮する、まさに高速の流れ星！ 優勝までの一本道を、どこまで駆け抜けることが出来るのか注目されます！

Mブロック代表、公式武装主義者選手！

こちらにも武装神姫最初期からその武名を響かせる古豪の一人です！ 特にそのスタイルは、公式に発売された武装のみを使って戦う公式武装主義！

その神姫「ノーマリズムマー」マイティ！

ノーマリズムを提唱するオーナーの元、公式武装で戦うことに拘ったスペシャリスト！ 一説には、発売されたすべての武装を使いこなすと言われていました！ 公式武装主義はこの鳳凰杯で、どこまで通用するのでしょいか！

Nブロック代表はディオオーネコーポレーション所属、星野スマイレ選手！

モニター申し込み抽選倍率五百倍とも言われる最新鋭機、アルトレーネを引っさげて、ディオオーネ広報室のアイドルが鳳凰杯に挑戦だ！

その神姫は『最強の最新鋭機』アルトレーネのヴィオレッタ！

本当に恐るべきはそのポテンシャル！ デイオーネの公表データでは、既存のすべての神姫に劣るところなしという、まさに神姫の頂点！ この決勝トーナメントでも、頂点を取ることが出来るのか！

Oブロックからは、こちらにもご存知鶴畑三兄弟の長兄、鶴畑興紀選

手！

高名な鶴畑三兄弟の中でも、更に頭ひとつ飛びぬけた成績を残す興紀選手！ 予選を最も早く終えて、決勝トーナメントに一番乗りを果たしました！

その神姫は古豪、『摩天楼の明星』ルシフェル！

天から堕ちたと言われる悪魔の名を冠する神姫ですが、その武勇はまさに天にも届く勢いです！ 天を追われた悪魔は、果たして天を制することが出来るのでしょうか！

Pブロックの代表は、菱木甲二選手！

かつてセカンドリーグにその人ありと言われた名プレイヤーでしたが、一時はその姿を見ることが出来ませんでした！ しかし、まさに、鳳凰のように復帰を果たした往年の古豪の一人です！

その相棒は『復活の剛拳』オレンジ！

そのスタイルは熟練のボクサーのようなインファイタースタイルで、まさにいぶし銀！ まさに剛拳！ オーナーと共に甦ってきたマオチャオは、鳳凰杯をその手に取ることが出来るのか！

さあ、駆け足でご紹介いたしました、今年の鳳凰杯春の陣を戦い抜く、十六人の選手と、神姫です！ 果たしていずれの選手が、この大会を制するのでしょうか！ この後も四時間半の長丁場、お付き合いを願います！ それでは一度スタジオにお返しします！ 実況席でした！

さあ鳳凰杯二日目、決勝トーナメント第二試合は、Cブロック代表 Mk・A選手対Dブロック代表深波月夜選手！

Mk・A選手とそのパートナー渚選手、その戦い方はまさに豪快の一言！ 武装はオーナーであるMk・A選手が作り上げた強化外骨格、『ビアンキ』！ 柔軟な動きと高い格闘性能を誇っています！ 予選でもストラーフを格闘戦で圧倒するパワーファイターぶりを見せてくれました！ 決め技であるスキル『神雷』による飛び蹴りは圧巻で、閃光をまといながら対戦相手を撃ち抜くその様は、まさに『白光』の名にふさわしい一撃でした！

一方で深波選手とそのパートナーシャウラ選手、その技の冴えは見事なものでした！ 予選では、様々な刀剣類を扱い、相手の土俵で怯まず正々堂々とした戦いを見せてくれました！ 特筆すべきはそのオリジナルスキル『無名：大顎』！ その一撃は防御で名を馳せるサイフォスの鎧を両断するほどの威力！ 要警戒です！

バーチャルバトルだと言うのに、流石鳳凰杯の決勝トーナメントということだろうか。観客席には人が溢れている。私の緊張感とは裏腹に、主は平然とされている。まるで普段の対戦前と変わらない。

「主は緊張なさらないのですか？ これだけの観衆が見ているのに……」

「まあ、客が何人いても、出来ることが変わるわけじゃないからな。ゲームセンターだって、最近は何人か見てる人もいるだろ、それと同じさ」

そういうものですか、と私は次の言葉を飲み込んだ。昨夜主と調べた限りでは、相手の神姫の戦い方は、ガチガチの格闘戦のようで、その一撃の破壊力は軽量装甲しか載せていない私には、確かに脅威だ。ならこちららも、相応の戦い方をするしかあるまい。

「装備はデフォルトで、機動力重視でいこう。あの一発は食らうとま
ずい」

「そうですね、遠距離武装を積んでいないように見えますし、ソードビットで攪乱するのも有効かもしれません。それも積んでもらえますか」

私の言葉を受けて、デフォルトのリアパーツにソードビットコンテナが追加される。一撃必倒のパワータイプだけに、機動力はそれほど高い方ではない。回避重視の機動力でかき回し、一撃離脱を狙うのが今回の作戦だ。

装備を整え終わると、私の意識がバーチャル空間に移る。今回のステージは「火山」。ランダムなタイミングで火口から火の玉が吹き上がる、テクニカルなステージだ。

「あたしは、渚。あなた、名前はなんていうの？」

試合開始に向けて意識を切り替えようとしていた私に、対戦相手のアーンヴァルMk2が声をかけてくる。こんなことは初めてで、私は一瞬面食らってしまった。

「え……私は、シャウラ、と申します」

「シャウラさん。いい名前だね、よろしく。楽しいバトルにしようね！」

「……よろしく、渚、さん……」

楽しいバトル……バトルロンドが楽しい、ということだろうか。そんな風に思えることを、私は心底羨ましく思った。気楽なのだ。アルキオネと同じ。私は強くなければいけない。『格闘戦最強』。そうあらねばならない。そうでなければ、私はいけないのだ。それが不良品である私の存在理由なのだから。私の中に、黒い感情が沸き上がる。負けたくない。バトルを楽しみたい、なんて言う神姫には。黒い感情はそのまま、私の闘志を燃え上がらせた。

『Lead y.:. Fight!』

電子音が試合の開始を告げる。私は空へ駆け上がり、一足飛びに間合いを詰めて、先制の一撃を狙う。

「征きますー！」

先行して、ソードビットを展開する。シロが私の思考を読み取り、渚さんの周囲から一撃を狙って駆け回らせる。しかし……。

「ふっ！」

気合いの呼気と共に強化外骨格『ビアンキ』の拳が唸る。鋭い一撃が空を裂き、ビットを叩き落とす。

『素手でビットを叩き落とすか……さすがに決勝トーナメントまで来ると、一筋縄ではいきそうにないな』

今のも、決して楽な一撃ではなかったはず。それでも正面からただ一撃を放つだけでは届かない。そういう相手らしい。墜とされたビットは二機。初手から『セブンスソード』を使えなくなる、その結果から見れば悪手だった。しかし、それならそれで構わない。もとより『セブンスソード』を必要とする性質の相手ではないのだ。複合フレームで組み上げられた『ビアンキ』は防御力に優れた構造ではない。通常の攻撃でも、ダメージは十分に通るはずだ。

「こつちからも、行くよッ！それッ！」

『ビアンキ』が地を蹴り、その巨体が宙を舞う。「はあッ！」

空気を裂く音が、私の耳にまで届く。サブアームの動きにバーニアをあわせ、緊急回避。繰り出された飛び蹴りが私の体を掠めるように過ぎていく。が、その一撃を警戒するには充分だった。

渚さんが地に降り立った瞬間を狙って、すれ違いざまにGNソードVを振るう。浅くだが、手ごたえがある。追いかけてこようとした渚さんの進路を、ソードビットでふさぐ。

「くっ……」

渚さんが咄嗟に前ではなく、後ろに飛んで距離を取る。その挙動は、大型の外骨格からは考えられないほどの速度だ。が、それが想定を外れるほどではない。そして、距離が開いてしまえば渚さんに攻撃する手段はないのだ。飛び回る蜂のように、ソードビットが渚さんの周囲を牽制してまわる。実際に突っ込ませてしまえば一瞬で墜とされてしまうかもしれない。だが、それは渚さんが万全の警戒態勢を敷いていればこそだ。動きの前後を狙えば、ソードビットでも十分に一撃を狙える。

再び向きを変えて、攻撃の構えを取る。加速。フェイントをかけながら、突き進む。渚さんは迎え撃つ構えだ。

「はあッ！」

だが、その拳は空を切る。その隙に、浅いが、一撃。これでいい。砂の山を削り取るように、少しずつ一撃を重ねる。機動力に劣る渚さんは、追い足で私を追い詰めることなど出来ない。警戒すべきはその強打だが、今の一撃ならば、深追いをしなれば、避けきることは出来る。

「なかなかやるね、シャウラさん！ 予習してた動きよりも、よっぽど速いし、鋭いよ！」

予習されていた、というのは予想外だったが、それも当然かもしれない。私達だって、出来る範囲の予習はしてきているのだ。

『シャウ、そろそろ例のが来るかもしれない。警戒して』

「承知！」

そうであっても、私に出来ることは変わらない。ソードビットで牽制しつつ、突撃。前にもまして加速をつける。

「そうそう好きにはやらせないよ！ ブースト、ナツクル！」

『『ビアンキ』の肘から延びるバーニアが火を噴く。瞬間的な加速を得て、渚さんの拳が一気に伸びてくる！ 今まで相對したこともないような勢いで、新型ストラップの拳が迫る！』

「くうっ！」

すれ違いざまに一撃を入れることさえも忘れて、逃げる。この一撃は予習していた。それでも避けるだけで精一杯、いや、あらかじめ知っていなければ、避けることもかなわなかっただろう。

『へえ、渚さんのブーストナツクルを、初見で避けるか。なかなかやるもんだな』

「感心してる場合じゃないよ、オーナー！」

『まあまあ、渚さん。相手は軽量装甲で一撃離脱だ。それなら、一発当てれば風向きも変わるさ。いろいろ試して、揺さぶってやろう』

「それもそうだね、まだ試合は始まったばかりだし、もっと盛り上げていかなくちや！」

相手のマスターとの会話が、オープンチャンネルで入ってくる。どうやら、特に専用回線設定をされていないらしい。その場合、対戦相

手にも神姫との会話が開示される。

盛り上げるつもりなら、盛り上げてもらおう。ただし、それにつきあうつもりはさらさらない。

私は私の戦いをする。それだけのことだ。

思った通りのタイミングで、ブーストナックルが飛んできたのは、俺達にとっては幸運だった。予想外のタイミングで放たれていたら、あれを回避するのは難しかったろう。

「シャウ、相手もまだまだ隠し玉があるかもしれないぞ、気を抜くな」
『はい、このまま、もう一撃征きます！』

そう、ここで警戒しているのは、まだ見たことのない一撃だ。今の状況は、決してこちらの優位ではないと、俺は見ている。なにしろ、一夜漬けで相手のすべてを閲覧出来たとは思えない。出してくるとしたら、おそらくカウンターか。さっきのブーストナックル同様、こちらの意表をついた出し方で出てくるはずだ。だが、その思考が既に相手の術中だった。

『渚さん、今だ！』

『スキルいくよ！』『インパルストライブ』！ シュートツ！』

大きく振りかぶった『ビアンキ』の脚部から、エネルギー弾が吐き出される。

「シールド！」

果たして、俺の言葉は間に合った。スキルの威力自体も、シールドを貫通するほどではなかった。だが、安堵したその瞬間、もう一撃がシールドを貫く。

『きやあッ！』

「あのスキル、連打出来るのか!?!」

そう、左右の足で一発ずつ、あの飛び道具を撃ち出したのだ。こちらがシールドで受けるのも、一発でシールドを抜けないのも、計算に入れて……。

「被害は、シャウ?」

『大したことはありません、シールドが抜かれたので驚きましたが、ダ

メージ自体は軽微です』

「遠距離でも気を抜くなつてメッセージかな？　面白くなつてきたな」

一瞬、シャウが怪訝な表情をしたが、すぐに次の指示を出す。

「次にあのスキルが来たら、シールドを斜めに張って受け流すんだ。馬鹿正直に受けるだけが能じゃないつてところを見せてやれ」

『了解です』

体勢を立て直し、もう一撃を狙うシャウ。

『さあ渚さん、『インパルスドライブ』も見せたことだし、相手はいよいよ隙がなくなってきたぞ』

『そうだね、オーナー。でもあたし達だって、まだまだ上があるんだから、負けてられないよ！』

『それは当然だ、どんどんいくぞ』

相手のマスター、Mk. Aといったか……心底楽しそうな声で指示を出している。バトルロンドが、神姫が、心底好きなのだろう。だが、その気持ちでなら俺だって負けていない。相手がまだ上を見せてくれるというのなら、こっちはさらにその上を見せてやる。

シャウが刃を構えて駆ける。その一撃が、上段蹴りを潜り抜けるようにして相手を捉える。岩肌を蹴って、急上昇。一気に距離を取る。しかし……。

『そうそう逃がしてばっかりじゃないよ！』

シャウを追って、『ビアンキ』の巨体が飛ぶ。背面に備えたバーニアをフルに使っているようで、存外に瞬発力はあるようだ。

『迂闊な！　空中に出てくるなどと！』

シャウが急激に軌道を変える。迎え撃つ体勢で、振り向く。が、そこにはすでに、バーニアで加速をつけた飛び蹴りが迫っていた。

『なっ！』

咄嗟にサブアームで展開した鬼姫で、体を庇う。掠めるように当たっただけだが、危うかった。今のを直撃で食らっていたら、そのまま地面に叩きつけられていてもおかしくない。

『大丈夫か、嬢ちゃん！』

『防御は間に合っています……しかし、厄介ですね。正当なスタイルなのに、ことごとく意表をつく動きをしてくる』

「起動してからそう間があったわけじゃないだろうに、ずいぶん堂に入った動きをしてくるんだな。よほどあのマスターの指導がいいんだらう」

『感心しているわけではありません、主、指示を』

「そうだな、向こうが距離を開けても攻めてくるんなら、こっちも息を抜く暇を与えないことだ。ビット、いけるか、シロ」

『任せな、と言つても深く狙うんだつたら使い切りだな。ダメージの方は期待するんじゃないやねえぞ』

『決まりですね、征きますー！』

展開されたままになっていたソードビットが、再び勢いよく駆け始める。扱いにはだいぶ慣れてきているのだが、意識が外れるとすぐにビットが遊んでしまうのは、今後の課題だな。しかし、それは相手の力量が尋常ではないことの証左だ。

四機のソードビットが交互に目標に襲い掛かる。が、それとて単発で迂闊に踏み込めば墜とされてしまう。あくまであれは相手を動き回らせるための呼び水だ。動かない相手の隙を見つけるのは難しい。ならば、まず動かすことだ。その中から、隙を見つける。

今、相手は動き回っている。その意味では狙いどころだ。しかし、それは相手の誘いでもある。機動力に劣る相手の狙いは、カウンターだ。こちらが動けばそれを機と見て、逆に攻めてくるだろう。だが、カウンターを警戒する限り、浅傷を負わせるだけで終わってしまう。どこかで一步、踏み込まねばならない。

ソードビットが周りをぶんぶん飛び回り、煩わしい。しかし、相手の狙いはこちらに揺さぶりをかけることだ。それを墜とそうとして踏み込めば、逆に手痛い反撃を食らうだろう。ソードビットが装甲の表面をひっかく。今は、それを耐えてもらう。この局面は、我慢比べだ。

「渚さん、もうちよつと耐えてくれな。なあに、すぐに息が詰まって、

相手から手を出しに来る」

『そこを叩く、つて寸法だね』

「流石渚さん、よく分かっている」

そう言うのと、構えだけはビットに向ける。ビットだって無限ではない。そうしている限りは撃墜を避けるために、無理押しはしてこないはずだ。無論何かを狙ってビットと引き換えに攻め込んでくることも考えられないではない。だが、それは一発限りだ。狙ってくるとしたら、この局面ではない。

それにしても、最初は単純な武装で出てきたと思ったが、これが中々どうしてやるものだ。一回戦からこのレベルなら、地方からわざわざこのために出てきた甲斐もある。

「こつちが苦しい時は相手も苦しいって言うけど……楽しいときもそうなのかね」

『どうしたの、オーナー、急に?』

「なに、なんとなくさ。相手のマスターの顔、見てみたくなかった」

きつと今は、自分と同じような顔をしているに違いない。苦しいと思っているのに、顔には薄く笑みが乗っていることだろう。そう予想する。もし本当に思う通りの表情をしていたら、きつと、バトルロンドの楽しみに取り憑かれているのだろう。自分と、渚さんがそうであるように。

再びソードビットの攻撃が装甲の表面を削っていく。これだけなら大したダメージにはならないが、塵も積もれば、というやつだ。放っておいて、気がついたらLPがこつそり減っていた、という事態には気をつけなければならぬ。

『ああ、もう、厄介だな!』

ソードビットが中心の動きに切り替わっているが、本体も警戒を引き付ける動きを取るのを忘れていない。それさえなければ、渚さんの技量だ。最初の一撃のように、瞬時に叩き落とすことだって決して不可能ではないのだ。

いつそ、こつちから大きく動いて誘ってみるか。そう考えなくもない。しかし、それこそが相手の狙いであるのは間違いないのだ。そう

考えること自体が、自分が焦れてきている証拠だ。

その刹那、渚さんの足元が揺れる。火口から火球が吐き出され、飛んでくる。ビットの動きが止まった。相手も、火球に対応するように動いている。意識が逸れた。

「今だ！」

『よおし！ 行くよ、オーナー！ でやあつ！』

『ビアンキ』が地を蹴り、バーニアを吹かす。何の躊躇もなく、炎が降り注ぐ中に突っ込んでいく。活路は前にあり。渚さんの座右の銘だ。

火の玉が体を掠めても、渚さんはまったく怯む様子を見せない。それどころか、さらに加速する。ようやく巡ってきたチャンスなのだ。今までに溜めた鬱憤を晴らすかのように、速く、ただ速く。二つ名が示す通りの、白い閃光、『白光』のように。炎から身を守るためか、バリアシールドを背負った相手に迫る。これなら逃げられまい。

『ダイナミック・ライトニング！ いっけえええ！』

空中で一回転し、足を突き出した飛び蹴りの構え。背面のバーニアもフルに使い、地から湧きあがる雷光のように、相手に迫る。

『つく、シールド！ 全開！』

「ほう、二枚目のシールドも張れたのか」

おそらく自作の出力装置だろうに、二枚も独立展開するシールドが張れるなんて、それだけでも大したものだ。しかし、その出力は明らかに一枚目よりも弱く、展開している面積も狭い。渚さんも一瞬はその障壁に阻まれたが、それもほんの一瞬だ。派手にシールドを切り裂き、渚さんのダイナミック・ライトニングが突き刺さる。

『これぞ、ダイナミック・ライトニング！ どうだ！』

派手な名前は付いているが、スキルでも何でもないただの飛び蹴りにバーニアを吹かして加速をつけた、単純な技だ。それでも渚さんは、名前を叫ぶだけでも威力が上がると信じてやまない。

『まだ、まだあー！』

サブアームで展開した剣を横薙ぎに振り払って渚さんを追い落とす。あの一瞬にサブアームを使って体を庇ったのか。それだけなめ

らかに本来の体でない武装を使えるということは、相当に使い込んでいるのだろう。

「本当に、楽しいな、渚さん。バトルロンドってやつは」

『オーナー、何のんきなことばかり言ってるのさ！』

必倒の一撃を阻まれたにもかかわらず、自分の口から出てきたのは、そんな言葉だった。

「シャウ、ダメージは？」

『かなり持つていかれましたが、まだ大丈夫です』

とは言っても、今の一撃は完全に不意を衝かれた。狙う側からすれば確かに絶好の機会だったのは確かだ。だが、果たして降りかかる炎の中に突っ込んでいけるだけの度胸をもった神姫が一体どれほどいるのか……。

「流石、決勝トーナメントってだけのことはある」

俺は自分の口の端が持ち上がるのを感じた。この大舞台で、こんなにもいい勝負を演じられることが、楽しい。俺は確かにそう感じている。

「無理を言うかもしれないけど、もう少し耐えてくれ。勝ち筋はまだある」

『はい、主の心のままに』

シャウの闘志はまだ燃え尽きていない。そう、本番はここからだ。

火口から、また炎が吹き出される。火山の下の方からは、徐々に溶岩が広がってきている。このステージはタイムアップと同時に炎に包まれ、試合終了になるのでも有名だ。徐々に足場に出来る岩場は少なくなっていく。すべてが炎に呑まれる前に、勝負をつけなければならぬ。試合の残り時間は、三分の一を過ぎていた。

「また炎がつ……！ 本当に厄介な……！」

エスパディアの熱に対する耐性は、神姫の中でも低い方だ。アーンヴァルも耐性が高い方ではないが、それでもエスパディアに比べれば大分いい。上位機種であるMk2型が、それより低いとは思えない。その意味でも、このステージで長く戦うのは不利だ。

『そろそろ決着を急いだ方がいいな。LPの残り具合から考えると、判定がどつちに転ぶか分からない』

炎が吹き出される間隔も短くなってきている。それによる熱ダメージを考えると、判定まで持ち込むのは私の不利だ。

「シロ、ビットを！」

「おうよ、気張るぜえ！」

主に対する返事の代わりに、シロを通じてビットを走らせる。飛んでくる火球を撃ち墜とすためには、残ったビットの半分は回さなければならぬ。それでも。

「シロ、残された時間は長くはありません。ビットを全機回します。深いのを狙ってください」

「一回こっきりだぜえ？ それでもよけりやあ、行ってやらあ！」

残っているソードビット四機、すべてを攻撃に回す。背後から迫る炎をそのままに、渚さんに向かって駆ける。火球とソードビットに対して拳を振るっているところに、横槍を入れる形で一撃を狙う。

「今だ、嬢ちゃん！ 狙うぜえ！」

炎の合間を縫って、これ見よがしに懐深くを狙ってビットが走る。流石にそれを見逃す渚さんではない。裏拳気味に鋭い一撃を見舞い、ビットを墜とす。

「そこだ！ スキル発動！ 『無銘：大顎』！」

伸ばされた腕を狙って大剣を展開する。一撃で、『ビアンキ』の腕を
裁ち落した。

「何のおつ！ 『インパルスドライブ』！」

腕を失ったことにも逡巡せず、渚さんはスキルで応戦する。背中越しに吐き出されるエネルギーの塊を、先の主の指示に従って、斜めに構えたシールドで受ける。受けた瞬間に、内側から外に向かって力を加え、受け流す。弾かれたエネルギー弾は、明後日の方向に向けて飛んで行った。

『おいおい、『インパルスドライブ』を使うのはまだ二回目だぞ……もう対応してきたってのか？』

「流石だね、シャウラさん……燃えてきた！」

この不利な状況に置かれてなお、渚さんの顔からは笑顔が消えない。制限時間が迫ると共に暗雲に覆われ始めたフィールドで、その笑顔は太陽のように眩しい。

『渚さん、そろそろ残り時間が心もとないぞ。今の一撃で、判定では完全に負け確定だ』

「分かってるよオーナー、つまり、本気を出せってことだね？」

『自分としては、あんまりあの技を使うのに慣れてほしくはないんだが、この際だ。仕方あるまい』

「シャウラさん、この技があたしの切り札。この技を食らってまだ立っていられば、あなたの勝ち。でも、この技が決まれば、あたしの勝ちだよ……！」

「面白い、受けて立ちましょう！」

自分の言った言葉に、ふと思考が立ち止まる。今、私はこの勝負を、『面白い』と言ったのか……？ 胸の中を覆っていた黒い感情はいつの間にか姿を消していることに気づく。代わりに胸を満たしているのは高鳴るような興奮だった。

「いくよ、シャウラさん！」

渚さんの声に、思考を切り替える。今は余計なことを考えている暇はない。そうだ。相手が何者であっても、私は前に進むしかないの

だ。『格闘戦最強』であるために！

「リミッター、解除！」

リミッターを切った！

今までも鋭かった渚さんの機動だが、それはすべて自分の体が壊れない程度の、余裕を持った機動だったはずだ。その余裕を、渚さんは手放した。それは一歩間違えば、自壊の危険を含んだ行動。次の攻撃には、渚さんのすべてを賭けた一撃がくる。自然、私は身構え、渚さんと私の間にソードビットを配置する。

「スキル！ 発動おおう！ 『じいいん！ らああい』！」

神雷！ 渚さんの二つ名、『白光』の元になったスキルだ。

「降りよ雷！ 神鳴る力！」

天を覆う黒雲から、渚さんに雷が落ちる。その全身から、紫電が迸る。

『白光』の渚！ 推して参る！」

既に辺りは薄暗くなっている。足元から迫る溶岩と、光を放つ渚さんの周りだけが切り取られたように明るい。その闇を切り裂いて、光に吸い寄せられるように、駆け廻るソードビット。残された三機のビットが時間差で、刃を振るう。だが、それは瞬時に叩き落とされる。速い！

「なんだどう!? 今のタイミングで、三機まとめて墜とすのか!?!」

シロが背中中で驚嘆の声を上げる。渚さんに残された片腕と両足が、まさしく稲妻のように振るわれたのだ。

炎が次々と降ってくる。足元からはせり上がってくる溶岩。炎と炎に挟まれて、残りの時間が少ないことは目に見えて分かる。その炎をかき分けるようにして、突撃してくる巨躯の天使。

紫電を纏って、右拳が迫る。鬼姫が受ける。重い。両のサブアームを同時に振るって、帳尻を合わせる。次に振るわれたのは、左脚。咄嗟に張ったバリアを引き裂いて、迫る。左肩のシールドで受ける。装甲板の碎ける感覚が、支持アーム越しに伝わる。次いで、右脚。その大質量は、それだけでも凶器だ。蹴り上げられたその脚に、支持アームが根元から引き千切られる。瞬間を縫ってビームガンを撃ち込み

反撃。が、確かに胴を捉えたその一撃にも、まったく怯まない。上げられた脚が振り下ろされる。アームガードを的確に、踵が打ち下ろす。渚さんの長い髪が、目の前に広がる。その後を追うようにして、下から思い切り蹴り上げられる。体が、思い切り持ち上げられる。決して軽くはない重量の装備を背負った私の体が、自分の意思に反して宙を舞う。

「ダイナミック！ ライトニング！ オーバー！ いっけえええツ！」

紫電が弾け、まるで渚さんの体が巨大な鳳凰のように見えた。これが、『白光』と謳われる渚さんの本気……！

だが、私だってまだ負けていない！既にLPはぎりぎりだ。それでもなお、ここで引くわけにはいかない。渚さんに背負うものがあるように、私にだって引けない理由がある！

「……迎え撃つ！ 『無銘！ 大顎』！」

事この場面に及んでも、闘志は果てなく燃え上がる。それはきつと、渚さんも同じだろう。

ダイナミック・ライトニング・オーバーを繰り出す渚さんの脚を、鬼姫の形作る大顎が挟み込む。奇しくも、互いの二つ名の元になったスキルを真つ向から撃ち合う形だ。

渚さんの背から長く引かれる光の尾。その力のすべてを受け止めるのは、主の作ってくれた双刀。そしてそれを振るう技は、主が組み立ててくれた、私だけの技。それが決して、この場で劣るとは思わない！

「でやあああああつ!!」

「うおおおおおああつ!!」

ぶつかり合う力と力。互いの限界に迫る我慢比べ。

白い光と青い光が渦を巻く。その奔流の中で、私の意識も、光の中に溶けていった。

武装を解いてケースに納めると、シャウを手に乗せた。申し訳なさそうな顔の相棒に、気にするな、と指の腹を頭に乗せる。

「なんだか、初めてバトルをした日もこんな感じだったな。覚えてるか?」

「はい。そのときも、負け戦でしたから……よく覚えています」

あの時とは舞台の大きさも、相手の強さも、まったく違うんだけどな。

「仕方ないさ、フィールドの当たり外れもある。反省会は後でやるとして、今は少し切り変えよう」

「はい……申し訳ありませんでした……」

「なんで謝るんだ?」

俺の声は、自分でも感じるくらい間抜けた響きを含んでいた。だが、それも仕方ないと思う。それくらい、俺には謝られる心当たりがなかったのだから。

試合の結果は、判定負けだった。最後のラッシュでLPが削られていたのも敗因だったが、もうひとつの要因はほぼ常にシャウのLPを削っていたフィールドダメージによるものだ。まあ、それがなかったら負けなかったかと言われると微妙だが。それでもいい勝負であったのは間違いないし、シャウが謝る理由にはならない。首をかしげていると手の平に水滴が落ちてきた。

「私は、勝ちたかった……勝って、主が『格闘戦最強』の神姫のマスターだって、示したかった……! そうでないと、私は、不良品の私は、主の元にいる理由がなくなってしまおう! だから、私は……私……」

シャウの目からは、大粒の涙が零れ落ちている。

「主は私を救ってくれた……不良品として、廃棄されるはずだった私を……それなのに、私は何も持っていないから、何も主に返せないから! せめて、主の望まれる私でありたかった……『格闘戦最強』と呼ばれる神姫になることぐらいしか……出来ることが思いつかなくて……でも、出来なかった……ごめんなさい、主……ごめんなさい……」

俺はハンマーで頭をぶん殴られたような気がした。俺は間抜けか。一年以上も、誰よりも傍にいたはずなのに、自分の神姫がこんなにも思いつめていることに気づきもしなかったなんて。

『格闘戦最強』。それはシャウが起動した当初、最新型だったエスパディアのセールストークだ。シャウの初期不良が発覚した日、俺は確かに言った。目指してみようか、と……どんな形であれ、シャウはそれにすがって今日までいたのだということを、ようやく、ようやく俺は知ったのだ。

軽い気持ちでそう言った俺を、ぶん殴ってやりたい。後悔で頭が塗り潰されそうだ。でも今はそんなことに取られる時間はない。この、誠実過ぎる相棒に、何か声をかけてやらなければ。それが出来るのは、俺しかないのだ。その一言を探すために、俺の頭はフル回転する。

「シャウ……こつちを向いてくれ」

うつむいて涙を零していたシャウが、顔を上げる。その頬にははつきりと、涙の筋が刻まれている。

「謝ることなんかない。シャウ。俺はお前が傍にいてくれるだけで満足なんだ。格闘戦で最強の神姫でなくてもいい。お前がお前のままでいてくれる。それだけで、俺は十分に救われている」

「救うだなんて、そんな……私なんてただの不良品で、主にしてさし上げられることなんて、何もないのに……」

「何かをしてくれなくてもいい。ただ、傍にいます。それだけだっていい。それだけで、俺は返しきれないほどのものをもらっているんだ」

それは、間違いなく俺の本心だった。

何の目的があって神姫を買ったわけじゃなかった。それでも。そんな俺を主と仰いでくれた。ただ、傍にいてくれた。それだけで、俺がどれだけ救われただろう！

「今だってそうだ。お前がいてくれたから、俺はこんな素晴らしい舞台上で上がることが出来た。いろんな人達とつながることが出来た！」

日野だって、花道だって、お前がいなかったら、きつとこんな付き合い方は出来てなかっただろう。それも全部、お前という存在がいたから出来たんだ。シャウ、何もないなんて、言わないでくれ。お前のおかげで、俺はこんなにも救われているんだ」

頭の中がまとまらない。それでも、俺は繰り返し、これだけは伝え

ないといけないと思った。俺は、お前の存在に、救われていたんだって！俺は、お前のおかげで、今の俺でいられるんだって！

気がついた時には、シャウの涙は止まっていた。代わりに、俺の目から涙が溢れていた。

「あるじ……なんで泣くんですか……？」

「分かるもんか……ただ、俺の、今の気持ちを伝えないといけないと思っただら……とまんね……」

涙は、止まらなかった。しばらく俺達はそのまま対戦筐体を占拠してしまった。準備の都合があるので、大会が同じ筐体を連続で使用しないように設定していたおかげで助かったが、もしそうだったらさぞかし迷惑だったことだろう。お互いの涙が収まったころ、俺達はようやく筐体の外に出た。

「やあ、シャウラさん！」

そこにはさつきまで戦っていた、黒い髪のアーンヴァル Mk 2 がいた。傍らに立っている男性がオーナーだろうか。

「渚、さん……？ どうして……？」

「あなた達と少しお話したくって、待ってたのよ」

「聞き耳を立てるような真似をしてごめんなさい。なんだか、簡単に立ち入っちゃいけない話題のような気がしたので」

「いえ、こちらこそすみません、長く待たせてしまったみたいで」

俺の目はまだ泣き腫らして赤いままだ。失礼かとも思ったが、他にどうしようもない。

「あのね、シャウラさんのマスターさん、オーナーカードを交換してほしいんだけど、あるかしら？」

「オーナーカード……？」

散々泣いたせいか、まだ頭がぼんやりしている。昨日作った名刺のことだと思いきすまで、たっぷり間を取ってしまった。

「ああ、あります。でも、何で俺達と交換を……？」

「決まってるじゃない、あなた達とのバトルが、とっても楽しかったから！ね、オーナー？」

「ああ、渚さんの言う通り。こんなにバトルロンドが楽しかったのは、

近年にちよつと思ひ出せないくらいだ。そんな素敵なマスターと神姫なら、交換をしない方がどうかしている。勿論、君達が構わないなら、だけど」

嫌であるうはずがない。さっきの勝負は思い出しても背が震える。これほどバトルロンドを楽しめたのなんて、初めてかもしれない。むしろこちらからお願ひしたいくらいだ。俺は鞆の中から名刺入れを取り出し、オーナーカードを渡す。

「ありがとう、これが自分のオーナーカードだ。もつとも、残念だけど今日は遠征の身なんで、頻繁に直接会うのは難しそうだけれど……気が向いたらオンラインの対戦でも相手してやってくれるかい？」

「勿論。むしろ、俺の方からお願ひしたいくらいです」

「ね、シャウラさん。楽しかったねえ」

渚さんの笑顔がシャウに向けられる。が、当のシャウは困ったような表情を浮かべている。

「渚さん、ごめんなさい、私……」

「ありや、シャウラさんは楽しんでくれなかつたのかな……？」

「違うんです、私、今日まで……今の今まで、バトルロンドを楽しむものだと思つていなくて……話すとき長くなるんですけど、でも、きつと、今日のバトルは、初めて、楽しいと思えて……だから、えつと……」

シャウも言葉がまとまらないらしい。それもそうだ。今日の俺達にはいろんなことが一度にありすぎた。

「いいんだよ、シャウ。楽しかつたんだろ？　なら、それでいいのさ」

「主……でも……」

「シャウラさんも、楽しかつたんでしょ？」

渚さんの笑顔が、ぱあつと輝くようだ。それにつられて、曇りがちだったシャウの顔にも、笑顔が戻りつつある。

「はい、楽しかつた、です……」

よかつた。まだちよつときこちないが、シャウは元気を取り戻したようだ。

「それじゃシャウラさん、あたし達、もう友達だね！」

「ともだち……？」

「そう、友達！ 仲よくしてね！」

「主、いいの、ですか？ 私なんか、友達を、作っても……？」

大分重症だったんだな。今更ながら、自分の鈍感さを恥じる気持ちで一杯だ。

「いいんじゃないか、自分で決めて。俺がどうこう言うまでもなく、渚さんはそのつもりらしいけど」

シャウの視線が渚さんの目を見つめる。渚さんは渚さんで、まっすぐな視線を、シャウに送ってくれている。

「私なんかで……いえ、私でよければ、その、喜んで……」

「決まりだねっ！ よろしく、シャウラさん！」

「ええ、よろしく、渚さん」

「ついでのようで悪いけど、自分もよろしく、深波君」

「ええ、よろしくお願いします」

マスター同士も握手をする。鶴畑興紀のときのような、表面上のものじゃない。心がつながるような、がっしりとした握手。

「本来なら最初に言うべきだったんですけど、準々決勝進出、おめでとうございませう」

「ありがとう。でも、自分としてはいまいち今回の決着には納得していないからね。エスパディアは火山フィールドでは不利だし。機会があれば、もう一度是非対戦したい。今度は、有利不利のない条件で」

「ありがとうございます。俺の方こそ、ぜひお願いします」

「君の値打ちまで下げないように、頑張らないとな。ね、渚さん」

「そうだね！ シャウラさん、応援してね！」

「勿論です」

とりあえず進行の迷惑にならないように、控室に向かって歩き始める。今日は一戦しかバトルは出来なかったが、その収穫は、並のバトルをどれだけ積み重ねてもたどり着けなかったかもしれない。

『白光』の渚さんと、そのオーナーMk. Aさん。この二人には感謝をしてもし足りないくらいだ。

俺達は控室で別れると、別の部屋にそれぞれ入っていった。今試合をやっているのは、花道の飛鳥、白雪とたつひと氏のツガル、シルビ

アの試合だ。途中から見て分からなくならないかと心配したが、その心配は、残念な方向で必要なかった。

「なんだよ、お前も負けたのにずいぶんすっきりした顔してんじやねーか」

「内容が内容だったからな」

「そりゃあ皮肉か？ ぼろくそ負けた俺に対するよおー」

飛鳥の得意とするのは中距離から近距離だが、ツガルの得意とするのは近距離と遠距離で間がない。そこを衝く作戦の花道だったが、逆に振り回されて自分の良さを封じられたまま負けてしまった。

「そりゃあ、『天雷』も一撃も決まらなかったしよー。今回はしようがねー、やっぱファーストリーガーは強ええわ」

「まあ仕方ない、そんなこともあるさ。後は日野の試合だが……あと三試合か。今のうちに目いっぱい他の神姫の戦いっぷりを見ておこうか、シャウ」

「はい、主」

「俺飲み物買ってくるからよー、戻ったらちゃんと混ぜろよなー。行くぞ、白雪」

「はい、にいさま」

あいつ、自分のメイン神姫に『にいさま』なんて呼ばせてるのか、知らなかった……。

そして、夕方。

「いやー、負けた負けた。全国高校生大会でもこんなには負けねーってくらい見事に負けたな！」

「それだけ負けたのは花道でしょ。俺はほら、『ガトリングストーム』には勝ったし」

「その次の鶴畑の次男坊には負けてたじゃねーか」

「そうだね、あれは相性が悪かった。逆に花道があの手と当たってたら、勝てる目は十分にあったと思うよ」

「まあ結果だけ見れば、俺と花道は一回戦敗退。日野は準々決勝敗退。

まあ、そこそこだろう」

「むしろ、一番注目されたのは君なんじゃないの?」

「何でそう思うんだ、日野?」

「君は試合してたから知らないだろうけど、君達の試合の盛り上がり、あれはもう決勝とか準決勝くらいの見せ場だよ」

「ああ観客席の方、めっちゃ興奮してたもんな。もしかしたら取材とか来るかもしれないぞ?」

「勘弁してくれ……せつかく宗旨替えをしようとしているのに」

そう、もう俺とシャウの間に『格闘戦最強』という呪いは必要ない。シャウはシャウのまま、目指すべきところを決められるようになったのだ。

「シャウ。シャウは今後、何を目標にしたい?」

「私が決めてよろしいのですか? それなら、一つ案はありますが」

「お、一体なんだ? 聞かせてくれよ」

「ふふ、主もよくご存じのはず。『格闘戦、最強』。もう一度目指します」

「シャウ、それは無理に目指す必要はないって、あれほど……」

「はい、分かっています。でも、格闘戦最強を目指して戦った、渚さんとのバトルは楽しかった。だから、私は格闘戦最強を目指し続けますよ。それが楽しいということが、分かっただけじゃありませんから」

「そういうことか」

「いけませんでした?」

「いや、いい」

俺は無言で肩の上のシャウに人差し指を差し出す。シャウもその指先に、拳を合わせる。

「これからもよろしくな、シャウ」

「こちらこそよろしくお願いします、主」

「当然俺達とも、だろ?」

「まさかそんな薄情なこと言わないよね?」

花道が拳を差し出し、日野がそれに合わせる。二人は笑顔で視線を送ってくる。俺はやれやれと歎息をひとつつくと反対の拳で合わせ

る。

「いいかお前ら、卒業しても、俺達は仲間だかな！」

「暑苦しいな、いつそこれからも神姫バトルしようぜ、くらいにしておけばいいのに」

「やる機会や時間は変わるけど、俺達は神姫でつながってる。そういうことでもいいんでしょ？」

「おう、そういうことだ！」

夕日に暮れなぞむ会場を後にする。花道が今日も祝勝会場を押さえていたらしいので、今日は残念会兼進路決定祝いだ。

まったく。こういう空気に触れるのを極力避けていたのが馬鹿馬鹿しくなるくらい、俺は引き返せないほどこっち側の人間だった。

許されるなら。そう、許されるなら……。

俺はこっち側の人間でありたい……。

・番外ノ1

さあ、決勝トーナメント第六試合は、Kブロック代表K選手対Lブロック代表日野司選手！

K選手とその神姫ミル選手、予選ではまさに嵐のような圧倒的な戦い方を見せてくれました！ そのメイン武装はガトリングのみ！

しかし驚くなかれその量は背に十二門、サブアーム六門、両手に二門の計二十門！ その二つ名の通り嵐のように吹き荒れる弾丸で、ごり押しように対戦相手を下してきました！ なお、プロフィールによりますとミル選手、胸はAAカップだそうです！ こんなことを特筆するあたり、マスターの人間性が垣間見えますね！

一方の日野選手とパートナーリリイ選手、全国高校生大会でも活躍を見せてくれたコンビです！ 予選でも危うげのない戦いぶり、安定して勝利を収めてきました！ その正当な戦法は、全国のイーダ使いのまさにお手本として高い評価を得ています！ 近寄ることさえ難しいミル選手のガトリングの前にどのような攻略法を示してくれるのか、今から気になるところであります！

流石は鳳凰杯。観客の数もそうだが、その盛り上がりも目を見張るものがある。それだけ質の高い試合が行われているということでもあるし、この様子なら今回の春の陣も大成功と言っていいたいだろう。

まあ、せっかく出場した友人たちが一足早く敗退してしまったのは残念だったけど、それでもその試合内容は見事の一言だった。俺も、その盛り上がりにも水を差さないように、精々頑張らなければ。

「よろしく」

「……」

筐体に入る前に、対戦相手の姿が見えたので挨拶をして手を伸ばす。その肩には相棒の神姫『ガトリングストーム』のミルさんが乗っている。

「……よろしくお願いします」

手どころか、オーナーらしい男性は返事すら返さない。肩に乗った

神姫が返事と共に、深々と頭を下げる。それさえも無視するかのよう
に、男性は無言のままさっさと筐体に入ってしまった。どうやら、あま
り気分の良い相手ではないらしいね……。歎息をひとつ吐くと、俺も
筐体の中に入る。

「何という無礼な振る舞いのですの、あのオーナー！ ツカサ、あなたは
余所であんな振る舞いはしていないでしょうね！」

「ご機嫌斜めだね、リリイ」

「当り前ですわ、仮にも私のマスターにあんな振る舞い、腹を立てて当
然でしょう！」

その様子に、俺の方が苦笑いを返す。こんなことは別によくあるこ
とで、目くじら立てるようなことでもないんだけどね。

「まあ、その怒りにやり場があるだけましだね。どのみち今から対戦
するんだ、思う存分ぶつけておいでよ」

「そうさせてもらいますわ。あの無礼なオーナーに、ひと泡吹かせて
やりましょう！」

「そうだね、『ハイウェイ・スター』がどれほどのものか、教育してや
ろう」

それだけ言うと、俺はリリイの体を筐体に接続する。さあ、試合の
始まりだ。

「めんどくせえステージに当たったなー、これあー」

バトルステージは「廃墟の都市」。ビルやらなんやらが朽ちたまま
林立するステージだ。しかもその、ビル街に放り出されたとあっちゃ
あ、やる気も駄々下がりつてもんだ。特にミルのやつは移動速度がと
にかく遅い。開けたところに出るまでは、まだ相当かかるだろう。め
んどくせえ。

「おいミル、その辺のビルの三つ四つ、吹き飛ばしちまえよ。見晴らし
が悪いと、めんどくせえだろーが」

『でもオーナー、私にはそんな破壊力のある武装は積まれていません
が……』

「うっせえ、口答えすんじゃねえよ。お前は黙って私の言う通りにし

てりやいいんだよ、オーナーが黒つつたらカラスも黒いんだよ！」
『……申し訳ありません、オーナー』

「……突っ込めよ！ カラスは元から黒いだろうが！ 馬鹿にしてんのか！」

ミルが困ったような顔で謝罪の言葉を並べる。こうやってミルのやつを困らせるのが、私の仄暗い愉しみだ。

「ぐちゃぐちゃ言ってるねえで、とにかく、開けたところに出ろ。道路だろうがなんだろうが、見晴らしのいいところに出ちまえがこつちのもんだ」

「はい、オーナー」

イライラするようすつトロい動きで、ハイウェイを登っていく。実はヴァローナ型は、重装備や索敵が苦手だ。だが、そんなことは関係ない。この装備の目の前に出りやあ、どんな相手でもあつという間にミンチだ。それはこの大会の予選でも変わらない。リアルバトルと違って重量制限なんかがありやがるせいで、ミルの装備を全部載せられなかったのは残念だが、まあ関係ない。どのみち私達の前に吹き荒れる、暴風雨の前に立っていられるやつなぎ、いやしないのだから。

「見つけましたわ」

『じゃあ身を隠して。今回はそこまで精密に狙う必要はないし、移動速度は最低ランクだ。簡単だろう？』

「言ってくれますわね。それなら代わりに狙いをつけてくださいませんこと？」

「まったく、厳しいね、君は」

手元に送られてきたのは、サイドボードに設定してあつたシユラム R v G N D ランチャーだ。これならば、目標まで曲線を描いて弾頭を撃ち込むことが出来る。ビルの陰に身を隠すと、私は送られてきたランチャーの砲口を、天に向けてかざした。大体の位置を狙って、引き金を引く。追いつけるように弾頭を次々に撃ち込む。あの足ではそうそう速くは動けまい。足場を少々乱してやる。それくらいでもい

いのだ。空になった弾倉に新しい弾頭を詰め、もう一度、微妙に射角を変えて撃ち出した。

「つたく、イーダ型だってえから真正面から来てくれるのかと思ってたらよー、狙撃たあめんどくせえことしてくれんじやあねーか。なあ、ミル」

『はい、オーナー』

「そう思うんならよー、あんなグレネードぐれえ撃ち落として見せろつつーんだよ！ ああ？」

『……申し訳ありません』

あのイーダ型、こここそしやがって。姿を隠したまま、曲射でこつちを狙い撃ってきやがる。しかもミルは細かい狙いをつけるのは苦手だ。あんな小さい的を狙い撃つような真似は出来ないだろう。それを承知で、無理な指示を出す。

神姫バトルは私にとっては、暗い愉しみの発露の場だ。そうでなければ、こんな本気も出せないようなお遊びの場に、誰が好き好んで来るものか。

爆撃が飛んでくるのも、十度目を超えたか。撃ちもらしが至近距離で炸裂する。ダメージは軽微だろうが、足場が悪くなると、重量のあるミルには不利だ。

「おいおいミルよお、私は飛んでくるグレネードは撃ち落とせ、つつつたんだぜ。聞いてなかったのかよ？」

『申し訳ありません、すぐに……』

「まあ所詮お遊びだし、負けたって構わねえんだけどよ、次から一発しくじる度に、一発殴るからな。そのつもりでやれ」

『はい、オーナー』

ガトリングから吐き出された弾が、分厚い弾幕を形成する。『ガトリングストーム』。誰がつけたかは知らないが、このあだ名だけは気に入っている。そう呼ばれることが、この遊びに興じる理由の一つであるのかもしれない。ミルをいたぶるだけならば、別に場所はどこでも、事足りるのだ。

「足場だけは選べよ、ミル。ただでさえ重てえんだからよ、転びでもしたら砲身歪むぞ、分かってんのか？」

『はい、オーナー』

調教の甲斐あって、ミルは自分の意志のようなものがほとんどない。いいことだ。神姫つてのは、これぐらいで丁度いい。実際はミルのやつが転倒しようが、どうでもいいところはある。この試合はバーチャルだし、こけたところで実害が出るわけでもない。むしろ、ミルを飛ばす口実が出来た、くらいのもんだ。

ミルがのそのそと、弾幕を張りながら動く。少しでも足場のいい方へ。あんな適当な指示でも、私の指示には忠実だ。それもまあ、調教の成果だろう。

爆撃を避けられる位置に入ったのか、少しの間爆撃がやむ。ようやく前に出てくる気になったか。幸い周りはハイウェイの上で、開けている。なるほど、この舗装された道路なら、向こうの土俵だろう。ここに追い込むつもりで爆撃なんて方法をとったのか。だが、だからどうだと言うのだ。私達の作る嵐の前には、重装甲の神姫ですら物の数ではない。後は姿を現すまで、ミルをいたぶりながら待つだけだ。

「さて、身支度は整ったかい、お嬢様」

『ええ、ドレスの仕上がりは上々ですよ。それじゃあ、参りませうか』

お互いにわざと芝居がかった台詞を投げ合う。相手がこちらの望んだ場所に入ったのは、着弾観測と索敵に使ったぶちますいーんずによって確認している。お手本だとか、正統派だとか言われるが、実はそんな正当な手段よりも、こうした地味な策の積み重ねの方が自分の本領だと思っている。

リリースがサイドボードから装備を切り替え、トライク・モードに変形させる。これがイーダ型のバトルモード。そして、スキルの第一段階だ。来たとき同様、倒壊しかかって斜めになったビルの上を駆け降りる。このステージでは陸戦でも、この方法を使えばビルの上から上られることは、ネットでもあまり知られていない。が、陸戦中心の神

姫にとっては重要だ。高所を押さえての砲撃なんかはあまり使う場面はないが、選択肢を増やすためにも、こうした知識があると便利なのだ。それにイーダ型は本来、索敵もあまり得意ではない。今回は不要だったが、相手の位置を探るためも、視点を高くするのは有効だ。早くに相手の位置を把握することで、使える道路も変わってくる。それを事前に組み立てるのは、マスターの手腕だと思っている。

ビルを駆け降りて、通常の道路に乗る。ここまで来れば、あとは相手のヴァローナまでは一本道だ。

最後に大きく曲がったジャンクションを駆け上る。

天を裂く雷鳴のような銃声が轟く。大量に積まれたご自慢のガトリングがお出迎えだ。

「一気に駆けてくれ、リリー！」

弾幕にさらされる時間がわずかでも短くなるように、最後まで姿を隠していられるこのエリアに相手を追い込んだ。ここなら段差の関係で、ぎりぎりまで相手は射角が取れない。

『お仕置きの時間ですわ！ スキル発動！ 『スリルドライブ』！』

トライク・ヴィシユヴァルパー全体がスキルの光に包まれる。これはトライクにハイパーアーマーを付与して、少しの間移動速度と攻撃力を上げるスキルだ。なぜ速度と攻撃力がセットで上がるのか。それは言うまでもない。

「行け、リリー！」

まるで要塞のような数の砲口を向けるヴァローナに、さらに加速しながら突っ込んでいく。短時間でいい、ハイパーアーマーで耐えてくれ！

ヴィシユヴァルパーの装甲に、次々と弾痕が刻み込まれていく。それはまるで、激しい暴風雨にさらされて、雨滴が表面を打つかのようだ。ここだけは、賭けだった。トライクが耐えられなければ、この賭けは俺達の負けだ。いくらハイパーアーマーと言えど、ダメージを完全に無効化することは出来ない。

果たして、その時は予想よりも早く訪れた。前輪を支える副腕の根元に、被弾。イーダのサブアーム、エアロチャクラムは他の機種の子

ブームに比べて華奢で、構造上の強度も高くない。それを認めた一瞬、俺の頭に敗北の二文字がよぎる。だが……。

『これしきのことです！ 負けませんわ！』

前輪のサスペンションが、一瞬深く沈みこむ。次の瞬間、リリイは走りながら右の前輪を持ち上げ、片輪走行で残された道を走る！ 持ち上げられたエアロチャクラムが、吹き飛んで後方に流れていく。その次の瞬間、ヴィシユヴァルパーがヴァローナ型に激突し、そのまま遮音壁を突き破ってハイウェイ下まで落下する！

これがこのエリアに追い込んだ、二つ目の理由だ。あの重装甲では、いくらスリルドライブを使って攻撃力を上乘せしても、一撃では仕留めきれないだろう。そして、その要塞のごとき砲火から二回目の突撃のチャンスが得られるとも思えない。一撃で、少なくとも行動不能になるくらいのダメージを重装甲の目標に与えるには……簡単だ。高いところから落として、自重をダメージに換算してもらえばいい。しかも今なら、上から乗ったヴィシユヴァルパーが押しつぶしてくれというおまけつきだ。

『スキル発動、『アーナンタ∞アサルト』！』

ウチのお嬢様はまだ容赦をする気がないらしい。追撃スキルで到着するその瞬間までアサルトカービンを撃ち込んでいる。

そして、到着！ 地面に大穴を穿ち、自分の装甲とヴィシユヴァルパーに挟まれて、完全に潰されている。

『2P リリイ WIN』。その文字がハイウェイにかかる虹のように眩しかった。

武装セットを片づけてケースに収めると、リリイを連れて筐体が出る。そこには先ほど会った男性と、ヴァローナ型の神姫がいた。あまりにも険悪なムードで、一瞬声をかけるのをためらったほどだ。

「ミルよお、お前、負けんなったのに、何負けちまってんだよお」
「申し訳ありつ……ありまつ……せんでした」

神姫を乱暴に鷲掴みにし、謝罪の言葉を遮るように指で頬を叩いている。

「何をやっているんだ！」

語気が荒くなる。その様子に、相手もようやくこちらに視線を向ける。

「余所の人は黙っててもらえないかねー、これは私と神姫の問題なんだからさあ……そうだろ、ミル」

「はい……オーナー……ですの、どうかお引き取りを……」

「余計なことかもしれないが、これは下手をしたら神姫虐待行為として警察に通報されるレベルの事案だ。見過ごすわけにはいかない……！」

「で、どうするつもりよ」

「実行委員会に申し立てさせてもらおう。警察沙汰になれば試合中のデータを警察に提出してもらえるだろう。会話ログやカメラからの様子だけでも、証拠につながるような言動は出てくるはずだ」

「おいおいおい、本気かよ、兄ちゃん。たかが神姫に、そこまでするか……いや、そういや去年の一斉摘発のときにもそんなようなことをしたやつがいたって聞いたなあ……」

「何をぶつぶつと……」

「あー分かった、今後二度とこのようなことはしないよ。だから警察沙汰にはしないでくれ。ミル、オーナーカードを開示して。よかつたら連絡先を交換させてくれ。もし万が一何かあったら、君の所に連絡させる。とりあえずそれで手打ちにしてくれないか？ 頼むよ」

「急に態度が変わりましたわね……」

「ならば、連絡先は交換しましょう。ミルさん、と言いましたね。何か自分に不利益なことがあったら、ためらわず連絡をください。それじゃあ」

その場を離れると、リリイが耳の横でこそそそと話しかけてくる。

「あれだけで本当によかつたんですの？」

「いや、一時しのぎだろう。とりあえず運営委員の方にも申し立てるけど、そこどまり、かもね。積極的に警察に通報してくれるとは思えないし」

人格と技量が正比例するなんてのは幻想にすぎない。トッププレ

イヤーの中にだって、人格的に危うかったり、神姫の扱いがひどかったりする人間はいる。結局は、人間が神姫とどのような関係を築こうとしているか、それ次第なのだ。

「やれやれ、せっかく勝ったのに、なんとも後味が良くないね」

「仕方ありませんわ。さ、ツカサ。運営本部の方に行きましよう。さっきの娘、これで少しでも救われるといいんですけど……」

おそらく、無理だろう。神姫虐待は人間への虐待以上に潜在化しやすいし、仮に表面に出たとしても「合意があった」とされやすい。神姫とは基本的にオーナーに対して否を告げられない立場なのだ。それが分かっているからなおさら、さっきの神姫に救いがあることを願わずにはいられない。

「……こんなことをするキャラじゃ、なかったはずなんだけれど、ね」「何か言いました?」

「いや、何でもないよ。さ、早く運営に報告して、もうひとつの報告もしに戻ろう」

「報告なんて。きつと私の勝利を、ちゃんと見てくださってますわ。だって、ツカサのお友達なのでしょう?」

その通りだ。だが、それでも、直接、勝った、と言いたいじゃないか。そのためにも、気乗りのしないことは手早く済ませてしまうに限る。運営本部までの道々、脚が早まるのを感じていた。

「眼鏡がほしい？」

「はい、駄目ですか……？」

「いや別に駄目ではないけど、あれって確か特に装備効果のないアクセサリー扱いじゃなかったっけ……？」

「いえ、その、戦術的な効果ではなくてですね……」

シャウが自分から物をほしがるなんて珍しいこともあるものだ。しかしその割に、いまいち歯切れがよくない。確かにほしい物の話をするときには、もともと控え目過ぎると言うか、なかなか欲求を出せない方ではあったのだが……？

「その……おかしいでしょうか……お洒落と言うか、着けてみたくて、ですね……」

そういうことか。別に構わないのではないだろうか。むしろウチの神姫は揃いも揃って自分の身の回りに気を使わない方だ。アルに至っては、一度服がほしいというのでどんなものか聞いてみたら、上揃いのイモジャージがいいと言う。まあそんな物でもせっかくだし、と思つて買い与えたら、日々着たきり雀で何をするにもその格好のままになつてしまった。まあアルが家の中のことなんて、寝転がりながら特撮鑑賞くらいしかかないのは確かなのだが、それにしたつて神姫とは言え女の子なのだから、もう少し何とかならないものなのだろうか、と思う。

「うん、いいんじゃないの。それにしたつて、シャウの方からほしいものがあるなんて、珍しいね？」

「ええ、実は、TVを見ていて、いいな、と思ひまして……」

そうだったのか。俺はウチではせいぜいニュースくらいしか見ないのだが、もしかしたら昼間俺が大学に行っている間に何か見ているのかもしれない。昼ドラのようなものに興味があるとは流石に思わないが、流行りの俳優なんかにも興味があったりするのだろうか。

「いいじゃない。ちなみに何て人？ 俺の知ってる人かな？」

「はい、ええと、確かお名前は……アルキオネ、あの方、お名前は何と

「言いましたっけ？」

「んー？ 中の人なら、ウラタロス。役者さんの方なら……」

うむ。もう分かった。言われてみれば最近確かにその作品が流れてることが多いな、とは思っていたのだが。そうかー、シャウもハマってたかー。

「うーん、久しぶりに外に出た気がするねー」

「アルはもつと外に出た方がいいと思うぞ。いくら運動不足とかそういうものに縁がないからって、あまりにも外に出なさ過ぎだ。そのうち歩き方まで忘れちゃうんじゃないか？」

そんなわけで、最寄りの神姫センターまでシャウとアルを連れて、買い出しだ。アルも伴っているのは、さっきの言葉の通り、あまりにも外に出なさ過ぎるためだ。俺の記憶もあいまいだが、もしかしなくてもたつぷり数カ月は引き籠っていたはずで、たまにバトルに出るミーシャとはそこが決定的に違う。ちなみに、ジャージは無理やり引っぺがして洗濯した。それもやはり、数ヶ月振りだろう。

「いらつしやーせー……ってなんだ、お前らかよ」

「花ちゃん、おつすー」

「おはようございます、花道様」

「花道、お前はもう少し客に対する態度を考えた方がいい」

アルバイトから正社員になった花道は、一応は真面目に社会人をしているようだが、俺や日野の前では完全にただの不良店員である。いかに半常連みたいな客であったとしても、もう少し他の客からみたらどう見えるかという視点を持った方が……。

「で、今日は何か探してんのか？ 今日の大会にはエントリーしてなかったろ」

「ああ、今日はちよつと、眼鏡を探しにな……公式パーツなら、ここでも扱ってたな、と思つて」

「なんだ、眼鏡属性にでも目覚めたのか？」

「そうらしいな、俺がじゃないけれど」

適当にあしらいながら、売り場の方に進んでいく。眼鏡や猫耳な

ど、いわゆる萌え要素のようなものを取り込もうという動きは公式にも存在し、バトルロンドでも使用可能な耐久性を持ったアクセサリーや服なども、限りはあるが公式から発売されている。そういうところは前世紀から受け継いだ、萌え文化の影響が未だに残っているのだろう。

「さて、どんなものがいいかな」

「つても、あんまり形に種類はないんだねー。色違いばかりじゃん」

「まあ、アクセサリー自体がリペイント商法みたいなものだからな……」

とは言っても、色のバリエーションがあるというのも馬鹿にならないセールスポイントではある。使っている銃が何色であっても性能に大差ないが、身に着けるアクセサリーの色が何色であるかは重要なポイントだ、と語ってくれたのは誰であったか……。

「そうですね……あんまり目立たない色のものもいいんですけど……」

「まあ、試しなんだし、いくつか試着してみたらいいんじゃないの？」

花道、ちよつと出してもらえるか？」

「あいよー」

そう言うと花道はショーケースの鍵を開け、見本の商品を出してくれた。ひとつひとつはとても小さく、くしやみのひとつでもしたらなくしてしまいそうな大きさだ。

「シャウ、どれがいい？」

「マスター、ボクこれがいいー、ヒゲメガネー」

「そういうのは買いません。買っても絶対使わないだろ、お前」

「ちえー、こういうのは持っていることそれ自体に価値があるのにさー」

「花道様、色はここにあっていいですか？　もう少し淡い色があると嬉しいのですけれど……」

「いやー、シャウちゃんにやあ悪いけど、あるだけだなー。なんだつたらお前、色ぐらい塗ってやれよ。塗装ぐれー出来んだろ」

「まあ、それは、出来るけど……」

「いえ、でも私は主が用意してくれるだけでも満足ですし……それでしたら、この銀縁のアンダーリムを頂けますか？」

そう言うと、シャウは金属で出来た眼鏡をひとつ差し出した。

「毎度ー。つってもこいつは商品見本だから、組立てが必要だけれどな」

「マジでか。こんな細かいのに組み立てが必要なのか？」

「ラジオペンチで顔の幅に合わせて曲げてやるだけだよ。神姫によって、頭の大きさが結構違うだろう」

「ああ、びつくりした。そうだよな、流石にこのサイズでそれはないよな」

一瞬驚いてしまったが、それぐらいなら何とでもなる。支払いを済ませて商品を受け取ると、俺達はさつさと店を出た。さつそく帰って、組立てと、仕込みをしてやらないとな。

夜。結局、すべての作業をこなしていたら日が暮れてしまった。作業量としては大したことはなかったはずなのだが……。

「まーすたー、シャウラ、訓練終わったみたいだよー」

「おう、ありがとう。こつちもちょうど乾燥まで終わったところだよ」

「んじゃ、こつちに呼んじやっていいねー？」

「ああ、頼む」

しかし、筆を使って塗装をするのなんて久しぶりだったな。最近まで塗装が必要な時は学校の作業室でエアブラシを借りてたから、勘を取り戻すまでちよつとかかかってしまった……。

「お呼びですか、主」

「ああ、完成したよ。着けてあげるから、ちよつとこつちに来てくれる？」

「眼鏡、完成したんですね、ありがとうございます」

心なしか、作業机まで寄ってくるシャウの足取りが弾んでるように見えた。足元まで来てくれたシャウが差し出された俺の手の平に乗り、机の上にちよこんと座る。

「それじゃあ、前髪が付いたままだと邪魔だから、いったんメンテナンス

スモードに切り替えるからね。前髪を一回外さないと、着けられないから」

「ええ、お願いします」

そう言うと、シャウは目を閉じる。

さて、つと……。

「メンテナンスモード終了。起動します」

私の口から自動音声流れる。瞳が開いて、周囲の光が一気に飛び込んで来る。光量調整、完了。主の顔が、普段よりも近い気がするのは、作業机の上だからか。

「主、どうでしょう。眼鏡、変じやないでしょうか？」

「うん、そう言うと思って、手鏡を用意してあるよ。自分で確認してごらん」

そう言うと主は、引き出しから手鏡をひとつ差し出してくれる。そんなことを言われても、自分ではおかしいかどうかなんて分からないから聞いているのに。ちよつと不満を感じながらも、差し出された鏡の前に立つ。そこに映し出されたのは……。

「主、これは……」

「うん、ついでだったから、作ってみたんだけど、どうかな。変じやない？」

「変だなんて、そんな、ありがとうございます！ 私……嬉しいです……」

鏡の中の私は、前髪に一筋、青いメツシユが入っていた。その下には昼間選んだ、アンダーリムの眼鏡をかけている。鏡の前で一回転して、姿を確認。すると、後ろ髪にも手が入っていて、長いヘアパーツが追加されているではないか！

「まあ、バトルロンドのときはヘッドパーツ被っちゃうから、隠れちゃうけれどね。でもせっかくシャウの方からお洒落なんてことを言い出してくれたんだし、まあついでに」

ついでだなんて主はおっしゃっているけれど、よく見ると、随所に微妙に元の髪型から手が入っているのが分かる。特に、メツシユの

入った辺りと、まとめられた後ろの長い髪の毛の辺りは、それが顕著だ。

「主、このヘアパーツ、大切にしますね」

「……まあ、それだけ喜んでくれると、こつちもやった甲斐があるな」

そう言っつて横を向いた主の頬は、少し赤くなっているように見え
た。

「分かっているよ、用意はしとく。日野は初めてなんだろう？ そしたら日野の分は……え？ 事前に買ってくるのか？ まあいいけど、あれだって値段はそれなりだぞ。何か初心者向けの機体貸してやれよ……俺？ 俺は自分用のしか……ああ、分かった分かった、まあ本人が納得して買うって言うてるんならそれでいい。それじゃあその時に。ああ、またな」

一息置いて、通話を切る。電話の相手は花道だ。

「ずいぶん長いお電話でしたね。何かあったんですか？」

「いや、今度の予定の確認さ。来週の土曜はバトルロンドじゃなく、ちよつと目先の変わったゲームをしようってことになった。場所もいつもの所じゃなくて、M駅の大きなゲームセンターだって」

花道が誘ってきたのは、神姫と他のフィギュアロボットを組み合わせたレギュレーションのバトルゲームだ。流行りのタイトルだと、ナノロットとか、G&S、レジェンド・バトルというあたりが挙げられるが、要は神姫とマスターが同じ視点で一緒に戦うバトルシステムのゲームだ。

「私は構いませんけれど、珍しいですね。他のフィギュアロボットを使うゲームだなんて」

「ああ、夏にバトルロンドにも新しくマスターが神姫の操作をするシステムが実装されるだろう？ で、日野はそういうシステムのゲームをやったことがないって言うから、実装前に軽くどんな感じなのか触ってみたいんだってさ」

ちよくちよく色々なゲームを摘まんでいる花道と違い、日野は一度惚れこんだら、それ一筋だ。まあ、フィギュアロボットによるバトルゲームなんて大なり小なり金食い虫だし、その判断は堅実ではあるのだが。

「でも、主はそういうバトルゲーム用のフィギュアロボットなんて、お持ちなんですか？ あれ、結構高いのでは？」

そう、神姫に比べれば高度なAIが載っていない分価格は控えめだ

が、それだって千円や二千円の世界ではない。が、そこは問題ない。「ああ、言ったことなかったか。後ろの本棚に飾ってある、それが俺の機体さ」

俺は本棚の中でアクリルのケースに入れて飾ってある、模型を指差した。

「レジエンド・バトル用の、W。俺の持ちキャラなんだよ」

別に黙っていたつもりはないが、積極的に言うつもりもなかったのは確かだ。数年前の機体だが、定期的なメンテナンスは怠っていない。今でも、十分現役で通用するはずだ。

とは言え、操作する俺の方にはブランクもそれなりにあるが、今回は試合というわけでもない。まあ、それなりに動けば十分だろう。

「その模型、ロボットバトル用だったのですか？」

「まあ、シャウが来てからは一度もそういう用途では使ってなかったからね。知らなくても無理はないさ。メンテなんか、シャウが訓練してるときに済ましてたしね」

それこそ、これの用途を知っていたのは、普段訓練には興味のないアルくらいのもだろう。アクリルのケースを開いて、ふたつあるうちの片方を手に取る。これを本来の用途で使うのは、本当に久しぶりだ。胸の奥の方が、ずきん、と痛んだ気がしたが、気のせいだろう。当日は約束より少し早く出向いて、動作確認くらいは済ませておいた方がいいかもしれない。

「そうそう、その日は一応日野が満足するまでやるつもりだから、一人で相手するんじゃないかもしれない。アルも一緒に行くからね」「えー、ボクはパスで。その日は朝から特撮を見る予定があつてだね……」

アルはTVの方を向いたまま、振り向きもせずに返事をしてくる。「どうせ俺のコレクションなんだから、いつでも見られるだろ。俺と花道だと、遠距離に対応出来る神姫が少ないんだから、手を貸してくれ」

「もー、しょうがないな。特別だぞー？」

「ご主人、自分も行つていいツスか？」

「勿論。パワープレイで相手出来るのはミーシャだけだから、喜ばれると思うし」

「へへへ……頑張るツスー!」

ミーシャがにへ、と笑顔を向けてくる。

とりあえず、来週までに全員の装備も含めて、もう一度メンテを入れておくか。

「来週の土曜、ね……」

ヘッドホンを外すと、キーボードに向かって指示する内容を打ち込んだ。

これでいい。そのための機体はもうとっくに手配済みだ。後は指示の通りに動いてくれればいい。

部屋の中は暗く、PCのモニタが唯一の明りだった。目を閉じて、天を仰ぐ。が、すぐにあの男の顔が頭をよぎる。その途端に、胸の奥に閉じ込めた痛みが暴れ出す。

デスクのサイドボードから、鎮痛剤を取り出して飲み下す。しかし、薬で痛みを抑えてしまうのが少し残念にも思えた。この痛みこそが、今、僕が生きている証なのだから。

しかし、その、同じ痛みを抱えているはずの男は、それを忘れてしまったらしい。思い出させてやらなくては。僕と同じく、あいつもこの痛みから逃れて生きることなど、許されてはいないのだ。

思い出させてやらなければならない。この、かきむしるような痛みを。胸の奥を焼く、苦しみを。その上で……。

「……死ねよ、ツクヤ」

そうだ、あの男は、死ななければならない。それも、ただ安らかに死ぬことなんて許されない。この痛みも、苦しみも、すべてを思い出させて、存分に噛みしめさせて、その上で殺してやる。

それまでの間。そう、それまでの、ほんの短い間だけならば、許してやろう。

その笑顔も。その幸せも。

謳歌するといい。よく味わうといい。

「そのすべてを、今度は僕が壊してやる……!」
それを思うと、口の端が、きゆうつと釣り上がった。

七月の半ば。

俺達はM駅前の大きなゲームセンターに来ていた。俺と花道は大きなケースを抱えている。花道は神姫二体分、俺は三体分の武装をフルセットで抱えているのだから、仕方ないと言えば仕方がない。一方、日野は比較的荷物が少ない。神姫の武装もリリイの分だけだし、新しく買ったというファイギュアロボットも一体だけだからだ。

「さーて、筐体は空いてるかな、つと……」

花道がずんずんと奥の方に入っていく。今日はそれぞれのファイギュアロボットが直に戦う、リアル・レギュレーションでのバトルを予定しているため、使う筐体も、バトルフィールドまで据え付けられた大型の筐体だ。バトルランド用の筐体はこの手のファイギュアバトルゲームの筐体としては据え付けのロッカーもないし、あまり大きい方ではないというのもあるが、やはりフィールド据え付け型は大きな施設にしか導入されていない。

「早く来いよ、ちようど空いてるぜー」

「相変わらずだな、花道。遠足に来た小学生か」

「仕方ないよ、それだけ楽しみなんでしょ」

俺と日野が苦笑いをするのを気に留める風もなく、店の奥から大きな声で手招きしている。

「ところで、今更聞くのもなんだけど、なんでわざわざリアル・レギュレーションだったの？」

「ああ、新しいシステムがどんなものか知りたくて、つてことだったかな。リアルだと、自分の感覚をファイギュアに接続するつてのがどんなものか、よく分かるだろうと思つてさ。バーチャルだと、結局その感覚はよく分からないだろうし」

「そうそう、これはやっぱり実際にやってみなくちゃ分からないと思つて。それに、ここならバーチャル用の筐体もあるから、やっぱりバーチャルで、つてことになつても大丈夫だしな。でもリアルが出来る筐体は少なーからよ、逆だと店変えたりしなきゃなんなくて、面倒

くせーからな」

「なるほどね。まあ、何にせよ、実際体験してみた方が早いわけだ」
「そーゆーこった」

花道はさつきと筐体の奥の席に陣取り、白雪と自分の機体の準備を始めている。それに倣って、日野もリリイと、買ったばかりだというフィギュアの準備を始める。

「お、日野はレジエンド・バトル用のを買ったのか」

「うん、G&Sは機体の種類やオプションが多すぎて把握するのが大変そうだったからね。そこまでやり込むつもりは、今のところなし」

それもいい判断だろう。G&Sは同じ機体でも選択出来る装備が豊富にあり、それが人気の一つでもある。だが一方でこれから始める初心者は何から手に取っていいか、選択するまでのハードルが高いということでもある。

「それで選んだのが電王ってのがまた日野らしいな」

「あれ、良くなかった？ 何かフォームチェンジで遠距離も近距離も対応してる、ってのが面白そうだったから」

その触れ込みは間違いではないが、その分特徴がはっきり分かれていて、扱いが難しいという面もあるのだが。まあ、日野なら大丈夫だろう。

「だからG&Sにしときゃあ良かったのによー。ザク使ってりやあ間違いはないぜ？」

それも確かに正論だ。花道の使っている機体はシンプルな性能だが、使用可能なオプションの量が半端ではなく、日野の選んだ機体とは違った意味で様々な局面に対応出来る機体だ。それだけに、愛用するのは初心者から玄人まで、幅広い。

とりあえず初めてプレイする日野をフォローしつつ、自分の支度も整える。今日はすぐ交代することも考えられるので、シャウだけでなくアルもミーシャもあらかじめフル装備にしようことにした。花道も、白雪のセッティングを終えてアーク型の梅夜の装備を組み立てている。

「こんな感じでもいいのかな？」

「そう、それであればグローブとゴーグルをつけて……それでいい、後は指示に従えばスタート出来るから。あ、ちゃんとシートベルトしとけよ。初めてだと、分かっても体の方が反応して動いちやうことがあるから」

「結構ドキドキするね、これ」

そう言うとき日野はゲーム開始の操作を始める。一番乗りでバトルフィールドに出たのは、日野とリリイだ。俺達もうちよつと支度にかかる。まあ、初めての感覚を堪能するといいだろう。

「んじや、二人は交代までちよつと待っててくれな。まあ、一回二回やって、すぐ交代するだろうから」

「あいあい、ごゆっくりー」

「これだどご主人と一緒に戦えるんスね！ くうー、燃えてくるツス！」

アルはフル装備なのに器用に横になって、だらけている。ミーシャはハンマーをぶんぶん振り回し、早くもやる気満々だ。

「主、私も支度出来ましたよ」

「よし、じゃあ、さくつと行ってこようか」

そう言うと、俺もシートベルトを固定し、スタート操作をする。意識が溶け出していくこの感覚も数年ぶりだ。俺はゆっくりと目を閉じ、開く。すると、その時にはもうフィギュアロボットの方に視覚が移っている。一応待ち合わせの前に一回、動作確認でプレイしてみるつもりだったが、それがなくても、自分でも驚くくらい操作感が鮮明に甦ってきた。体が覚えている、というやつだろう。

「よう、来たな」

話しかけてきたのは花道の機体、ザクだ。

「すごいね、これ。本当に自分の体を動かしてるみたいな感覚なんだ？」

興奮した様子で話しかけてくるのは、日野の電王。初めて自分以外の体を、自分の意思通りに動かせるという感覚は、ちよつとした感動ものだろう。俺も初めてプレイした時はそうだった。

「まあ、本当に同じサイズで自由に動かせるんですね。どうかしら、ツカサ。私と同じサイズの体になった感想は？」

「いやすごいよ、リリイ。これはちよつと感動ものだね。花道たちも、こんな面白い感覚ならばもつと早く教えてくれればよかったのに」「にいさまは結構早くから勧めていましたけれどね」

白雪がひそつと言う。確かに、日野の性格なら勧められたことも忘れていそうだ。

「主がWに……なんだか、これはこれで素敵な感覚ですね……！」

シャウも何やら感動している。

「なんだ、シャウラちゃんも初めてなのか？」

「ええ、主と来る時はいつもバトルル Rond でしたので……」

「まあ、そうか。そうだな……」

「ねえ、二人とも、早く始めようよ。ちよつとこれは楽しそうだ」

日野はさつきからずつと興奮した様子だ。

「おお、じゃあまあ、始めるか。とりあえず今日は三組いるから、誰か半分に分かれて、即席で二チーム作ってスリーオンスリーでやるのがセオリーかなー。いきなり三つ巴はちよつとハードルが高けーだろ」「それじゃあ、にいさまと私に分かれましようか。他のチームには、それぞれ初めての方が混じってるので、その方がやりやすいでしょう」

流石に、白雪はこのゲームをやり慣れているようだ。そうになると、完全に初心者の日野の方に花道が入った方がバランスがいいかな。神姫がいかに優れたAIを持っていると言っても、咄嗟の判断や発想力という面では人間の思考には一歩譲るところがある。でもそうすると、航空戦力である白雪とシャウを独占してしまうし、そういう意味ではバランスが悪いか？

『here come new challenger!』

効果音と共に、視界の中央に挑戦者の乱入を告げるメッセージが表示される。

「うん？ 花道、乱入制限かけなかったのか？」

「いや、かけたと思ったけど……あれ、俺あかけなかったか？」

乱入制限とは文字通り、新しい挑戦者の乱入に制限をかける機能の

ことだ。リアル・レギュレーションでは、実際にフィギュアが破損する可能性が、ゼロではない。実際にはゲームマスター側が参加機体のAIを管理し、脱落した機体への攻撃や、試合終了までの復帰制限など、さまざまな管理をしいて、破損率はかなり低い。それでも、無制限な乱入を制限し、参加するプレイヤーに心理的な安全を保証する機能が、乱入制限だ。それをかけなかったのなら、どんな強機体に乱入されても文句は言えない。

「どうする？ 一応事情を伝えて抜けてもらうか」

「おいおい、三人がかりで早々に退場願うってー手もあるんだぜ？」

「花道、流石にそれは悪いでしょ……」

どう対処するかを話している俺達を見て、白雪が、ポンチヨのようなものを頭からかぶった乱入者の機体に近づく。

「あ……」

不用意だ。一瞬、俺の感覚が白雪の迂闊さを咎めた。が、まだ乱入者の神姫がフィールドに入っていない。ゲームスタート前だという事実が、白雪を止めさせなかった。

次の瞬間。白雪が、一撃の元に地に伏せた。

剛腕一閃、という風でもない。ただ、邪魔な虫を払った。乱入者の、そんな何気ない一撃で、白雪は意識を失ったように地を舐めた。

「白雪いッー！」

「え!? まだゲーム開始前なのに!？」

馬鹿な。あり得ない。ゲーム開始前の攻撃はゲームマスターによつて完全に禁止されていて、攻撃を仕掛けようとしてもロックがかかるはずだ。遠距離武器は引き金を引けず、近接武器ならそれを振るう腕がロックされる。そもそも攻撃行動自体が取れないはずなのだ。「お前らの中によ、ミナミ、つて奴がいるだろう? 用があるのはそいつだけなんだけどよ、他の奴は邪魔だから、出ていってもらえないもんかね」

「何言つてやがる、手前えー！」

花道のザクが、ヒートホークを掲げて突進する。が、やはり肩と肘の関節がロックされ、ヒートホークを振り下せない。しかし、乱入者の機体が腕を振り払うと、目の前で立ち尽くしているザクを殴り倒した。

「ああ、悪いな。邪魔だったんでつい殴り倒しちゃった。お前は、違いな。ミナミじゃない。そっちの二人。どっちかがミナミだろう? そうじゃないに方は悪いんだが、こいつを抱えて、出ていってもらえんかな」

「ツカサ、右にー！」

咄嗟に電王が右に避ける。その陰からリリーの遠隔操作するヴィシユヴァルーパーが飛び出して体当たりを仕掛ける。だが、それすらも急激にブレーキがかかり、当たる直前に止まってしまう。

「無駄だ。まだ試合が始まってないだろう? お前らの攻撃はゲームマスターによつてロックされている。俺に攻撃は出来んよ」

事もなげにそう言う乱入者だが、それなら白雪や花道が殴り倒されているわけではない。矛盾している。

「リリー、とりあえず白雪を頼む。花道、動けるか」

「……おう、あんだけぶん殴られたのに、ダメージが入ってね……」
白雪もそうだ。確認出来るステータスはまだ試合準備中で、体力ゲージは微塵も減っていない。しかし、白雪の方は一向に起き上がる気配を見せない。

「そりや当然だ。さつきも言ったろう。まだゲームは始まってないんだ。その状態で体力ゲージが減るわけがない。まあ、目を覚ますかどうかは別だがな」

「なんだと？」

「神姫つつたつて、中身は機械だからな。停止信号を打ち込んでやりやあ、簡単に止められる。そうすりやあ、もう撃墜扱いだ。ゲームの終了まで、復帰は出来ない」

停止信号。俺にはすぐに思い当たるものがあつた。アンジェリクスの使っていた装備、『ブラックアウトカーテン』。確かにあれを使えば、神姫は無条件に制圧出来る。しかし、それは使えればの話だ。この手のゲームではレギュレーション違反として、そもそもゲームマスターが参加を拒否出来るはずだ。さつきから、何かがおかしい。ゲームマスターの管理下ではあり得ないことばかりだ。

「まさか、お前、ゲームマスターを……」

「ほう、察しのいいのもいるみたいじゃないか。その通り。簡単に言えば、そういうことだ」

「どう言うことだよ、日野！ 俺にも分かるように言え！」

花道ががなり立てる。日野もどうやら俺と同じことを考えているらしいが、それこそあり得ない。

「ふん、頭の回らない奴もいるようだな。ミナミって奴が相手強いと聞いていたから、周りも似たようなレベルかと思っていたが、その他大勢はそんなもんか」

「その他だと！ 手前え！」

再び、突進。今度は体ごとぶつかっていく構えだ。スパイクアーマーを突き出すようにして、突っ込んでいく。だが……。

「これだから頭の回らない奴は嫌になる。無駄だ、と言っているだろう」

やはり直前で動けなくなってしまう。動きの止まったザクが強かに殴りつけられる。

「ゲームマスターを掌握しているんだよ、俺は」

やはり、俺と日野の思っていた通りらしい。ゲームマスターの制限下にあるはずの、あり得ないはずの出来事が起きすぎている。そう考えないと、つじつまが合わない。しかし、逆にそうであるならば、ふたつの疑問が沸き起こる。

『なぜ』『どうやって』そんなことをしているんだ……?」

俺はふたつの疑問を口にする。目的と方法。このふたつが分からない。ゲームマスターへのハッキングだって、とてもじゃないが一般レベルの人間には不可能な方法だ。特にこの手のゲームは、一時的には言え人間の感覚器官に作用している。それを管理するゲームマスターには、かなり厳重なプロテクトが採用されているはずだ。

「もつともな疑問だ。目的は、さっきから言ってるだろう? そつちの、頭の回る方のどつちか、ミナミってんだらう? そいつだよ。方法は、まあ、企業秘密だな」

そう言うと、乱入者の機体は、白雪の頭の上に足をかけた。

「気が長い方だと思われたくはないんでな。そろそろ決めてくれ、邪魔な連中。出て行ってくれるのか、くれないのか。拒否するんなら、見ての通り、手荒な真似をしなきゃならなくなる」

「……心当たりは?」

「さあな。そんなものは、ないよ」

日野の問いかけに、静かに答えた。少なくとも、思い当たる範囲にこんな大掛かりな当たり方をされるような覚えはない。

「そうだな、一応誠意は見せておかにやあならんか。素直にどいてくれるんなら、こんな手荒な真似は止そう。ついでに、掌握しているゲームマスターの機能も開放して、普通にバトルが出来るようにしようじゃないか。さっきも言ったが、俺の目的はミナミって奴一人だ。素直に譲ってくれるんなら、他の奴には手は出さないと約束しよう」

しばしの沈黙。しかし、それと裏腹に花道の腹の中が煮えたぎっているのが、ひしひしと伝わってくる。

「本当によー、俺らが出ていきやあ、白雪は放してくれんのかよ……」
「当然だ。むしろ、邪魔だからな。関係ない連中にはさっさと出て行ってもらいたい、これが偽らざる本音って奴だ。出ていってくれる気になったか？」

「そんなもんよー……断るに決まっただろうが！ 手前を殴り倒して、白雪も助ける！ その汚え足、どげやがれ！」

「……これだから馬鹿の相手は疲れる。もういい、お前は寝てろ。話が進まん」

今まで以上に強かな一撃が、花道のザクの頭部を打ち砕く。そんな馬鹿な。物理破壊が出来るほどの攻撃が出来ることもそうだが。それほどの威力の攻撃には、ゲームマスターによる、安全措施が入るはずだ……。

「ゲームマスターを掌握しているということは、だ。安全措施を取らせないようにすることも出来るんだよ。今の一撃が神姫相手だったら、どういうことになっていたか。頭の回る方の連中なら、分かってもらえるかな」

つまりそれは、神姫を、破壊することが出来る、と言うことだ。それも、神姫をロストするレベルの、致命傷を与えることが出来るという宣告。

「頭の回る方。お前が決める。今出ていくのか、痛い目を見てから出ていくのか」

結局出ていくことには変わりはないのかよ。口の中でそう毒づくが、結論が変わるわけではない。とりあえず、当面の答えなら一つしかないのだから。

「リリイ、白雪を回収して。俺は花道のザクを回収するから」

「ツカサ!? まさか、あんな奴の言う通りにするつもりですの!?!」

「いいんだ、リリイ。今は白雪と花道の方が重要だ。それに、素直に二人を返してくれるかどうか、まだ確証がないしな」

非難の声を上げるリリイに、俺が代わりに答える。

「……流石に頭が回るな」

「そりやどうも」

「どういうことですか？」

シャウが疑念を露わにする。

「まあ、種明かしを先にしてやると、だ。その二人は今、撃破扱いになって復帰に制限がかかっている。つまり、運び出しても意識が戻らない、つてことだ。勿論、戻してやることは簡単だが、そうすると、今度は目標に逃げられるかもしれない、つてリスクが付いてくるもんだな。まあ、人質みたいなもんさ。仕事は確実にこなさないと、面倒くさいだろう」

やはり、そういう仕組みだったか。そうでなければ、あまりに簡単にこの状況はひっくり返ってしまう。俺が応じなければ、花道たちは返つてこない。それぐらいのことはしなければ、俺自身が逃げるという選択肢は消せないだろう。

「日野、花道と白雪は頼む……」

「それは分かっているけど……大丈夫なのかい？」

「まあ、まだ相手の要求も分からないしな。なるようにはなるだろう。とりあえず運び出してやってくれ。ゲートから出れば、もしかしたら花道も白雪も意識が戻るかもしれない」

言っておいてなんだが、それはないだろう。わざわざ取った人質を、そんな簡単に返すことはないだろうから。

リリイが白雪を、電王がザクをそれぞれに抱えて、ゲートの方に向かう。

「さて、もう一人邪魔者がいるが、そいつは出ていってはくれないのかな」

「世迷い事を。私は主の望むものを裁つ刃。貴様のような不屈き者を主と二人になど出来るものか」

「主の望むものを裁つ刃、ね。良く仕込まれた鈍らだな」

その言葉に、反射的にシャウが鬼姫を振りかぶって一撃を狙い、飛びかかる。だが……。

「所詮は玩具よ」

刃が届くよりも早く、拳が触れる。

「シャウ！」

「これでようやく二人きりだ。手間をかけさせてくれるな、まったくやつと本題だ」

シャウが、地面に転がる。まるで、倒れたマネキンのように、動かない。その様に、目の前が赤くなったようにさえ感じた。

「こんなことまでして、一体俺に何の用があるっていうんだ……？」

声が震えているのは、恐怖なんかじゃない。俺の我慢も、限界だ。

「まあ、いくつかあるんだがな。一番手っ取り早いのは、さっきの頭の足りない方と同じように、お前さんにもサーバーから出られなくなつてもらおう、つてのがいいかな。そうすりゃ後は依頼人がやりたいようにやってくれる」

ということとは、花道も白雪も、サーバー内に取り残されているということか。ゲームマスターが正常なら、それはゲーム終了までの一時的な処置で、終了時に本体もしくは操作する機体の方に戻されるはずだ。が、ゲームマスターが掌握されている今は、どうなるかは分からない。

「嫌だと言ったら」

「まあ、急にそんなことを言われてもおとなしく聞く気にはならんだろうな。こっちもそのつもりでこの機体を受け取ってる」

戦う気も満々ということか。全容は見えないが、自信がないようには見えない。

「そうそう、お友達やら神姫やらだが、この機体が止まればゲームマスターは復旧するように出来ている。つまり、言うことを聞きたくもなしにお友達も助けたい、なんて我儘も、一つは通す目がある、つてことだけは教えておいてやる。そうでないと、本気でやれないだろうからな」

つまりはこういうことか。『花道達を取り返したかったら、この乱入者をぶちのめせばいい』。単純なことで結構だ。花道あたりなら喜んでそうするだろう。

「わざわざご丁寧にも。なんでそんなことを教えてくれるんだ？」

「やりあうんなら、お互い本気じゃないと面白くないだろう？　まあ、

本気を出したとして、この機体を倒すことが出来るのなら、だがね」
乱入者の機体が、被っていたポンチョを脱ぎ捨てる。

「ザンダクロス……」

「武装の少ないその玩具で、強化セラミックの複合装甲を纏ったこの機体に勝てるかな……？」

拳が、硬質な装甲を叩く。余裕を見せるその仕草とは裏腹に、響いた音は硬質だった。

ザンダクロス。それは前世紀のアニメ映画の登場したスーパーロボットの名だ。数を頼みに押し寄せる敵の小型ロボットを文字通り薙ぎ倒し、迫りくる巨大ロボットを千切っては投げ、地球の平和を守るために活躍した、文字通りスーパーロボットであった。俺も子供の頃、それこそ夢中になってその活躍を楽しんでいた。

「まさか、こんなところでザンダクロスと戦う羽目になるなんてな……」

様々な作品が商品化される昨今では、むしろ、フィギュアロボットにならない作品の方が少ないとさえ言われている。それでも、フィギュアロボットバトルにザンダクロスを使ってくるなんて、相当に珍しい部類だ。

「よく知ってるな。お前も、子供の頃に見ていた口か。まあ、そうであつても、手加減はせんが」

スーパーロボットであるザンダクロスには、武装が少ない。しかし、俺の記憶が確かなら、遠距離攻撃にも腹部のレーザーキャノンやミサイルで対応出来るはずだ。射撃武器が全くないのは不利。俺は腰に巻かれているWドライバーのガイアメモリを入れ替えた。

『サイクロン！』

『トリガー！』

ガイアウイスパールと呼ばれる機械音声か、新たな姿の名を呼ぶ。半身が緑で、半身が青。このフォームは、素早い連射を得意とする、遠距離型だ。胸から『トリガーマグナム』を引き抜き、引き金を絞る。「なんだ、その豆鉄砲は。そんなものでザンダクロスの装甲を抜けると思うなよ」

元々ザンダクロスは単騎で大勢の敵と戦う作品のロボットだ。いわゆるスーパーロボット系で、装甲の厚さには定評がある。しかも、相手の言が確かなら、強化セラミック製の複合装甲。そんなものは、もはやフィギュアバトルで持ち出されるような代物じゃない。その装甲を誇示するかのようには、ザンダクロスは特に防御する風もなく、

トリガーマグナムのエネルギー弾を受けながらゆつくりと歩み寄ってくる。

後ろに下がりながらも、射撃の手は緩めない。だが、もとよりリアル・レギュレーションのフィールドはさほど広いものでもない。すぐに背後に壁が迫ってくる。

「どうした、少しは手ごたえがあると聞いていたが、まさかそんな程度じゃあるまいな。俺を失望させないでくれよ?」

その言葉と共に、胸のハッチが開き、大量のマイクロミサイルが吐き出される。このフォームの防御力は紙装甲だ。耐えきれない。

『ルナ!』

『トリガー!』

再びフォームを変える。青い半身はそのままに、もう半身が黄金色に変化する。このフォームでは、トリガーマグナムから撃ち出す弾に、追尾性を持たせることが出来る。吐き出された光弾は、目の前に迫るミサイルを次々と撃ち落としていく。次いで、ザンダクロス本体にも黄金色の弾丸が牙を剥く。

「足りないよ、そんな火力では。豆鉄砲をいくら撃ったところで!」

残っていたわずかな距離を、背面のバーニアを吹かして一足飛びに駆け寄る。その右拳は、大きく振りかぶられている。だが、そんな動きで捉えられると思うなよ。

一直線に振り下ろされた拳を、壁を蹴ってかわす。サイクロンの特性が『速さ』だったように、ルナの特性は『変幻』だ。意表を衝くような動きこそ、ルナの真骨頂。空中で、再度メモリチェンジ。

「そんなに火力が恋しいなら、お熱いの、お見舞いしてやるぜ」

『ヒート!』

『トリガー!』

黄金色の片側が、今度は真紅に変わる。ヒートは炎と熱を操るメモリ。このフォームは不安定だが、それゆえに最大の火力を引き出せるフォームでもある。フォームチェンジに使ったトリガーメモリを、腰のマキシマムスロットに挿し直す。このスロットに挿されたメモリは、その力を最大限に引き出すことが出来る。バトルロンドで言うス

キルのようなものだ。

『トリガー！ マキシマムドライブ！』

「行くぜ……トリガー・エクスプローション！」

拳を振るった勢いで、背を向けていたザンダクロスに向けて、引き金を引く。一瞬の溜めの後、巨大な火球がザンダクロスの背後から襲いかかった。

「むうん！」

背中越しに迫る火球を、裏拳気味の剛腕が横に薙ぐ。一瞬広がった爆発は、しかしザンダクロスの前にはその用をなさなかった。

「一撃が狙えなかったから大火力？ セオリー通りで欠伸が出るぞ」

「火遊びはママに怒られちゃうか……？ 安心しな、本当にお熱いのはここからさー！」

『ヒート！』

『メタル！』

体の青が硬質な銀色に変わり、俺の背には打撃武器『メタルシャフト』が下げられている。メタルは闘士の記憶を宿したメモリで、防御力は随一だ。遠距離でだめなら、男らしく殴り合いといこうじゃないか！ちようど開いた距離が好都合だ。もう一発、かましてやるぜ！

『メタル！ マキシマムドライブ！』

二発目のマキシマムドライブに、手にしたメタルシャフトの両端が、激しく炎を吹き上げる！

「次はコイツだ……メタルブランディング！」

炎を纏ったシャフトを連続で撃ちつける。右かと思えば左、上かと思えば下に、息を吐く暇もないくらいに、激しく。ザンダクロスの両手も、ガードのために上げられている。その守りを正面から抜くのは、やはり困難だ。だが、どんなに堅くても、操っているのは人間だということとは変わらない。

『ヒート！』

『ジョーカー！』

ジョーカーは切り札の記憶。すなわち、勝負を決める一撃を打ち込むときのフォームだ。半身が真紅で、もう片側が黒。その右手が炎を

纏い、両腕を盾にして身を守るザンダクロスのガードの下からアツパーカッツを狙う！

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

『ジョーカーグレネイド！ 燃えたる……？！』

ガードの隙間に割り込まれた拳が、ザンダクロスの顎を揺さぶる。いかに装甲が堅くても、そのダメージに繋がれている人間の方はそうはいかない。強かに顎を打ち抜かれれば、しばらくは脳震盪を起こしてろくに動けないはずだ。そこを、決める！

『サイクロン！』

『ジョーカー！』

これが一番の基本の形だ。そして、一番の必殺技を撃てるフォーム。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

「喰らわせてやるぜ！ ジョーカーエクストリーム！」

Wの周囲に巻き起こる風。それに運ばれるように垂直に飛ぶと、W自身が左右に半身ずつ分かれる。そして、そのまま時間差で、二発の飛び蹴り。意識が揺れているザンダクロスが、受けられるわけもない！ 足から撃ちこまれたエネルギーが、ザンダクロスを巻き込んで爆発する。

それを背に受けながら、立ち上がるW。

「こんなもんか？」

そのさらに後ろで、ほぼ無傷に近いザンダクロスが立ち上がった。

「軽口ばかりでダメージもみんな浅い。ハードボイルド気取りだとは聞いていたが、半熟卵だな」

おいおい、Wの必殺技を連続で食らったのに、全然効いてないのか。鈍いのか、堅いのか……。

「失望だな。所詮は過去の遺物か。もういい、さっさとケリをつけて、仕舞いにしよう」

まったく、誰に聞いていたのか知らないが、言いたい放題言ってくるじゃないか。

「まあそう言うなよ、もう少し付き合っていけ……Wの力は、こんなも

んじや終わらないぜ！」

ザンダクロスには、ダメージが入っているようには見えない。しかし、これ以上火力のある技は今のWにはない。それなら、どうするか……簡単だ。今のWを超えればいい。

再びゆつくりとこちらに向かつてくるザンダクロス。だが、そこに一羽の鳥が襲いかかる。

「なんだ、支援メカか？　こんな低火力で、足止めのつもりか？」

「足止めね……足どころか、息の根まで止めてやるぜ。来い、エクストリーム！」

黒い鳥が、Wの頭上で舞う。そして、そのまま腰のWドライバーに収まる。そして、翼と胴体が開き、そのシルエットが『X』の字を形作る。

「パワーアップフォームか。なるほど、そっちが真骨頂、ということかな？」

「サイクロン・ジョーカー・エクストリーム……行くぜ、ここからが本番だ！」

全身に配置された『X』の意匠が輝く。俺は専用武器、『プリズムビッカー』と『ビツカーシールド』を構えた。

パワーアップフォーム。それはレジェンド・バトルにおいて、特定のキャラクターのステータスが上がり、特別な技が解放されたりする、ボーナススキルだ。デメリットがある場合もあるが、多くの場合はゲーム的な縛りとして、制限時間が設けられている。それは、エクストリームにおいても同様だ。

制限時間は、約五分。その間に、ザンダクロスの頑強な装甲を突破し、勝負を決めなければならぬ。そうでなければ、通常のスキルでさえ傷ひとつ付かなかったザンダクロスを攻略することは叶わない。そのためには、どうすればいいか……。

「感じるな、考えろ。勝利への道筋を」

その昔、教えてもらった言葉を、口の中で転がす。この言葉が、困難な試合に臨む前の俺のお守り代わりだった。そして、今も。

「さあ、行くぜ……ハードボイルドにな……」

ハードボイルドを気取った台詞は、昔の癖だ。今となってはただの虚仮だったということがよく分かる。だが、それでも染み付いた習性のように、気取った台詞が口を衝く。

「口ばかりは達者だな。大層なことを言う前に、このザンダクロスの装甲に傷ひとつでもつけて見せろ」

重厚な鎧を纏った戦士のような威圧を放ちながら、ザンダクロスが突撃してくる。その大振りの一撃を避けるが、床面に敷き詰められた瓦礫が大きく弾け飛ぶ。決して装甲だけが取り柄というわけではない。まったく、厄介だ。だが、それを乗り越えないことには花道も、白雪も、そしてシャウも取り戻せない。

「プリズムビッカー！」

手に握られた、エクストリーム専用の剣、プリズムビッカー。その攻撃力は、エクストリームになって強化されたこともあり、通常フォームのWとは比べ物にならない。だが、それすらも硬質な手ごたえと共に弾き返される。

「無駄だ。その程度では」

通常、胴体部分には駆動の中核となるパーツが組み込まれていることが多い。だが、それゆえ頑強な装甲に覆われていることも、また多い。逆に言えば、これだけ頑丈であるということは、そこそが心臓部であるはずだ。相手はその装甲に、絶対の自信を持っている。それこそが、いわば俺のつけ入る隙になる。

振るわれる拳を、ビツカーシールドで受け流す。その隙に、二閃、三閃と剣を振るう。だが、胸の装甲は堅く、手ごたえと言うには足りない。それでも、俺は剣を振るう。パワータイプのザンダクロスを相手取るのに、この距離は危険だ。しかし、そこに留まるしか勝機はない。再び振るわれる鉄拳。それを受けたビツカーシールドごと、俺の体が吹き飛ばされる。受け流すのをしくじった。だが、ダメージ自体はない。距離が開いたのを契機に、ザンダクロスの腹が開く。あそこには、レーザーキャノンが格納されていたはずだ。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

『サイクロン！ マキシマムドライブ！』

『ヒート！ マキシマムドライブ！』

『ルナ！ マキシマムドライブ！』

寸刻の間に、四本のガイアメモリをビツカーシールドに挿入。ガイアウィスパーが響き、四本のメモリの力が最大限に引き出される。通常フォームでは困難な、二本以上のメモリのマキシマムを同時に扱えるのが、エクストリームの特徴だ。

「ビツカー！ ファイナリユージョン！」

シールドから放たれる虹色の光と、ザンダクロスの腹から放たれる白い閃光が、二人の間でぶつかり合う。力の奔流が押し合い、どちらが押し込まれるともなく、爆発する。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

『サイクロン！ マキシマムドライブ！』

『ヒート！ マキシマムドライブ！』

『ルナ！ マキシマムドライブ！』

その炎に紛れて、一気に距離を詰める。同時に、再び四本のメモリの力を引き出す。

「ビツカー！ チャージ・ブレイク！」

七色の光を纏った剣撃が、ザンダクロスの胸部装甲を捉える。次いで起こる爆発が、ザンダクロスを飲み込む。だが、これで終わらせはしない。

『プリズム！ マキシマムドライブ！』

「止めだ……プリズム・ブレイク！」

腰のマキシマムスロットに挿入しておいた、もう一本のメモリ。その最大限の力を受けて、もう一撃、プリズムシールドで殴りつける。今の俺に出来る、最大級の攻撃だ。煙がもうもうと立ち込め、ザンダクロスの姿は確認出来ない。

「やったか……？」

少なくとも、無事なままとは思えない。そう呟いた刹那、煙を切つて無数のマイクロミサイルが飛来する。

回避しようとした刹那、俺の後ろにシャウが倒れていることを思い出す。避けるわけにはいかない。シールドを構えて防御姿勢をとるが、ビツカーシールドは小型の盾だ。防御性能が高いものではない。それを承知でも、シャウを庇わないわけにはいかなかった。解放されたとは言っても、ゲームマスターが未だ相手の制圧下にあるかもしれない。もしそうならば、ダウンしたシャウへの攻撃が通らないとは言い切れないのだ。

「くっ……」

爆炎の中から、装甲板に覆われた腕が現れる。その腕は俺の頭を掴むと、そのまま地面に叩きつける。声を出す暇もなく、二発、三発、繰り返し頭の芯まで震わせる衝撃が襲う。そして、そのまま空中に投げ出される。

「普通に相手をしてたら、さっきのでケリがついててもおかしくなかったんだろな。だが、俺の機体も特別製だ。押しがもうひとつ、足りなかったな」

まったくの無傷ではないのだろう。しかし、外から見ればそれがどの程度だか分からない。それくらいに、ザンダクロスの動きからは、ダメージが感じられなかった。

ザンダクロスが、近寄ってくる。俺は痛みのまだ抜けない体を無理やり起こそうとする。が、その脇腹にザンダクロスの蹴りが突き刺さる。再び地面を転がされる俺を、ザンダクロスの大きな脚が踏みつける。

「ぐっ、ああっ！」

「脆いな。まあ、所詮は玩具か」

べき、めき、と表面装甲が砕けていく音が聞こえてくる。それでも、胸にかかる圧力は徐々にその力を増し続けている。

突如、胸にかかる力が消えた。その次の瞬間、サッカーボールを蹴飛ばすように機械の脚が俺を蹴り飛ばす。それを防ぐ術が、今の俺には残されていなかった。

ふと視界に、地面と天井以外の影が映った。シャウだ。シャウも、今はバッテリーが切れたように、まったく動かない。打ち捨てられたマネキンのようだ。気づくと俺は、うつ伏せのままシャウに向かって手を伸ばしていた。

「シャウ……」

その声が届いているかは分からない。しかし、仮にゲームマスターの統制下でサーバーに意識が残されているのなら、その感覚器官は生きているはずなのだ。単に、撃破扱いならば、体が動かさないだけで、復帰処理がされれば、また元通りに動けるはずなのだ。

「がああっ！」

背中に衝撃が走る。踏みつけられたのだ。

「動かない玩具の相手なんかしてる場合かよ、ずいぶん余裕だな」

背中から押しつぶされて、息さえ出来なくなるようだ。が、それでも俺は手を伸ばすのをやめなかった。もう少し。あと少しで手が届く。

「シャウ……！」

「あ、る、じ」

シャウが、一言、確かに喋った。そして、ゆっくりと、俺の方に向けて手を伸ばした。指先が、触れあう。その瞬間。俺の体が、輝きに満ちた。

「なんだ？ パワーアップフォームの上にもう一段階あつたのか？」
咄嗟に踏みつけていた足を離し、距離を開ける。まさか自爆のような真似をするまいとは思ったが、何が起きているか分からないときは離脱して距離を取る。戦術の基本だ。

依頼主が自ら手をかけたというこの機体、何を恐れてのことか普通では考えられないほどのカスタムが施されていた。これならどんな相手でも、性能差で圧倒出来る、そう感じてしまうほどに。なにせ、装甲の材質がすでにホビーバトルで使われるその範疇を超えている。普通なら装甲は消耗品だ。そこに金と手間を惜しまずかけるなど、常識では考えられない。その事実が既に、このザンダクロスの完成度の高さを物語っている。

その上、ゲームマスターにハッキングをかけて、支配下に置くことまで出来ることあつては、負けることなど考えられない。ゲームの根幹であるルールを支配出来るのも同じだ。

が、それでは面白くない。普段は裏でフィギュアバトルをして、小金を稼ぐ生活だが、せっかく舞い込んできたチャンスだ。相手は往年の天才プレイヤー。本来なら雲の上の存在だ。それをこの手で倒すことが出来れば、裏での評価も上がるというものだ。それが例え、機体の性能頼りだったとしても勝てば官軍という言葉もある。今後もこのザンダクロスを使えば、裏バトルで一攫千金を狙うのも、決して夢物語ではない。言うなれば、これは最初の一步だ。それぐらいは、実力で勝ち取りたい。

そうは言っても、負ければすべてを失ってしまう。そうなる前には再度ゲームマスターを掌握することも当然考えてある。掌握するのに必要な時間は一分とかからない。もつとも、この調子ではその必要もないだろうが。なにせ、この機体の動きは鈍重だが、相手のパワーアップフォームの必殺技さえ受け切ったのだ。もはや怖いものなどない。性能差で圧殺してしまえるのだ。

そう思った次の瞬間。相手の一撃でザンダクロスは吹き飛ばされ

ていた。

翼を広げる。

体が軽い。そして、何より力が漲っている。これは、Wの隠しフォームか。黄金に輝くそのフォームの名は「サイクロンジョーカー・ゴールド・エクストリーム」。なるほど、パートナーである神姫との接触を条件に、一定時間開放になるパワーアップスキル……そう考えればあり得そうなことだ。

視線を上げると、シャウは物言わぬマネキンのように動かない。もう少し待っててくれ。すぐに解放してやる。

翼が風をはらんではためく。

制限時間は……残り、六十秒。

大幅に強化された、エクストリームのさらに上。ひと駆けで、ザンダクロスの懐に飛び込む。世界が遅く感じる。そんな錯覚を引き起こすほどに、速い。

拳を振るう。その一撃だけでも、通常のフォームとは出力がけた違いだと分かる。二撃、三撃。正中線に狙いを絞って叩き込む。後ろに飛び退り、距離を取ろうとするザンダクロス。だが、逃がさない。跳躍し、羽ばたく。加速のついた飛び蹴りが、

胸板に突き刺さる。

「ぐうううっ……！」

うめき声をあげながら、堪える。確かに、破壊力は上がっている。残り、三十秒。まだだ。このペースでは、足りない。それを覆すためには、賭けるしかない。

「次の一撃が、俺の最後の攻撃だ。決めてやるぜ……！」

「最後、だど……？　いくらパワーが上がったからと言って、もう俺を攻略したつもりか？」

「分かってねえな……つもりじゃあない、お前は既に、攻略されてる……行くぜ……！」

『サイクロン・エクストリーム！　マキシマムドライブ！』

ガイアウイスパーと共に、右腕をかざす。巻き起こる竜巻が、ザン

ダクロスを飲み込んでいく。

「サイクロン！ ストームテンペスト！」

さらに風の勢いは強くなり、地面に散った瓦礫を巻き込みながら大きく成長する。

「こんな、子供だましで！ ザンダクロスを、攻略したつもりか！ 笑わせるなあッ！」

両腕を交差して、防御姿勢を取るザンダクロス。その様はまさに鉄壁の要塞だ。だが、それでも。

「慌てるなよ、本番は、ここからだ！」

『ジョーカー・エクストリーム！ マキシマムドライブ！』

空気を切り裂く風音の中、ガイアウイスパーが叫ぶ。翼がひとときわ力強く羽ばたく。その勢いを加えて、竜巻の中心部に突撃する。

「ジョーカー・マキシマム・エクストリーム！」

紫に燃えるエネルギーを纏い、一本の矢のようにザンダクロスの両腕を蹴り飛ばす。さらに、羽ばたく。加速。そのまま、蹴りを乱打する。両腕を弾き飛ばし、腹に、胸に、顔に、ただひたすらに蹴りを叩き込む！

「ぐっ、がっ、あああッ！」

「うおおおおあああああッ!!」

その蹴りの威力に、宙に打ち上げられるザンダクロス。それを追って、乱打、乱打、乱打。途切れる暇もないくらい、ただ、それだけを繰り返す。

三……。

二……。

一……。

視界の隅に表示されたパワーアップフォームの有効時間が、静かに、ゼロを表示した。

黄金色に輝いていたWの体が、急激にその光を失う。それと共に、姿も元のWのものに戻っていた。

勝った。その瞬間、確信した。

通常のWの攻撃では、このザンダクロスの装甲は傷付けられない。それは散々証明してきたことだ。そうであれば、負ける道理などどこにもない。

「凌ぎ切ったぞ……！ 最後の攻撃とやらを！」

「ああ……、そうだな……」

相手の声は諦めたような響きを含んでいる。観念したか。

背面のブースターを使つて、崩れた姿勢を立て直す。そして、大きく拳を振りかぶる。

「これで、終わりだ！」

「ああ……お前がな！」

『ルナ！』

『ジョーカー！』

メモリを挿し替えたのか。半身が黄金色、半身が黒の姿に変わる。まだ何か企んでいるのか。無駄なことを。しかし、次の瞬間、Wの腕が、脚が、まるで大蛇のように体に絡みついてくる。なんだ、これは！

「確かに堅い装甲だったよ。だが、これだけ集中して攻撃すれば、歪むくらいはしてくれただみたいだな」

「なんだと……！ 言われて、改めて気づく。胸の装甲が歪んでいる！」

「構造的に、ここが心臓部だ。だが、どうやってもこいつが邪魔だった。そいつが、どうしても壊せない。なら、どうするか……邪魔者が壊せないなら、剥ぎ取つてやればいい！」

左の手が、歪んだ装甲の隙間に刺し込まれる。ベキベキという破壊音と共に、胸の装甲板が剥ぎ取られる。

「だからといって、何だと言うのだ！」

力づくで、絡みついたWを引き剥がす。そうだ。装甲板が一枚むしられたから何だと言うのだ。第一、こいつにはもう攻撃するほどの力も残されていないではないか。掴んだWの体を、思い切り地面に叩きつける。どうだ、もう碌々動けないではないか。

「無駄な抵抗をしくさって……手間ばかりかけさせてくれるなよ」

「無駄でもないさ……いいぞ、アル」

そう呟いた刹那、銃声が一発響いた。

俺の言葉を合図に、アルのライフルが装甲を剥がされた、無防備な胸に撃ち込まれる。

強化セラミック製の複合装甲……あの装甲を抜くのは、神姫の手持ち武器ではどうにもならなかつただろう。だが、その邪魔な装甲がなかつたら？ アルの手持ち火器でも、内部の機器には通じる可能性が高い。ならば、俺の役目は、その道を開くことだ。そして思った通り、アルは俺の意図を汲んでくれた。

「貴様、最後の攻撃だなんて……！」

「あれ、釣られちゃった？ 駄目だよ、敵の言葉なんて素直に信じたら」

「くそっ、この餓鬼！」

ようやく着地したザンダクロスが、未だ立ち上がれない俺の腹を蹴りつける。胃の中がひっくり返るような衝撃が襲ってくる。

ザンダクロスの動きに、乱れはない。しかし、胴体には心臓部が格納されているはずだ。それが、動きにおかしなところが見られないのならば、その心臓部は、動力系ではない。つまり……。

「お前さ……もうゲームマスターに干渉出来ないだろう……？」

「……なんだと？」

動力系以外で、守らなければならない、心臓部。システムを妨害しつつ、単騎で暴れ回るコンセプトのザンダクロス。その、肝となる部分。それは、ゲームマスターへの干渉を可能とするシステムだ。どういう理屈なのかは分からないが、ザンダクロスが停止すればゲームマスターも復旧する、と奴は言っていた。ならば、そのシステムを物理

破壊してしまっても、結果は同じだろう？

「この餓鬼……！ やつてくれたな……！」

「これで、後は真正面から戦うしかないぜ……？」

「もう碌に動けもしない癖に、気取るんじゃない！」

目の前で、大きく拳を振りかぶるザンダクロス。もうそれを避けることも、受けることも出来なさそうだ。だが、次の瞬間、俺の視界には青い機影が横切った。その影は鋭い一撃で、ザンダクロスを吹き飛ばす。

「よお、どうだい、目覚めの気分は」

「最悪ですね。これ以上悪い目覚めなんて、ちよつとないと思いますよ」

「それはよかった。それじゃあ、俺は少し眠るぜ……」

「ええ、お休みなさい。次に目を覚ます時には、すべて終わっていますから、ご安心ください」

そう言うと、頼もしい俺の相棒は、背を向けた。

「よくも主をここまで痛めつけてくれましたね……許しません！」

「それは、ボクも同感だね」

もう一人の相棒も到着だ。これなら安心出来る。

「シヤウラ、こういうときはなんて言うか、知ってるだろう？」

「ええ、こういうときは、こう言うんですよね、アルキオネ」

二人が、ザンダクロスの方に向き直る。

「「さあ、お前の罪を……数えろ！」」

アルキオネの張る弾幕を背に、鬼姫を振るう。その一撃一撃に、渾身の怒りを込めて。狙いは一点。主がその扉を開けてくれた、その胸の奥だ。相手も弱点を背負っていることを自覚しているのか、ほとんど攻撃に回ってこない。

「くそがつー！ ちよろちよろとー！」

胸のハッチが開き、マイクロミサイルがばら撒かれる。が、すべてのミサイルが瞬時に撃ち抜かれ、叩き落とされる。アルキオネも本気だ。さつきからの援護射撃も、私の機動を邪魔しないように、しかしほぼすべて胸の大穴を狙って撃たれている。それをすべて受け切ろうとすれば、ほとんどその場に釘づけにされてしまう。

確かに、堅い装甲だ。鬼姫と言えど、そう簡単に両断することは出来ない。しかし、いかに強靱な装甲を纏っているようにも、全身をすべて装甲で覆っているわけではない。怒りで燃える私の頭の中は、それでも氷のように冷静だった。防御が自慢の相手ならば、まずはその防御を剥ぎ取る。

分かっています、主。主が今まで教えてくれたことは、すべて私の中に収まっています。主が育ててくれたこの技。この技で、この相手を打ち倒して御覧に入れます。だから、今は安心してお休みください。目が覚めた時には、すべて終わっていますから。

「シロ、ソードビットー！」

「任せろ嬢ちゃん、一発、かましてやるぜ！」

光の尾を引いて、六機のビットが走る。その役目は、相手の攻撃を誘うことだ。亀のように守りを固める隙のない相手なら、まずその一手目は、その動きを誘うこと。相手に隙がないのなら、作るのが技だ。

ソードビットが時間差で、相手の顔を狙う。装甲に覆われていない部分。そのひとつは複数のセンサーが載せられた頭部だ。カメラの類は、自慢のセラミック装甲とやらでも庇い切れまい。ほとんど動くことが出来ない相手の目の前を、これ見よがしに狙って動くビット。剣閃が走り、カメラアイのうち一基を貫く。

「ぐっ、うおおおッ!？」

これが、一手目。まだだ。まだ狙って、シロ。頭の中で思い描いた軌跡を、ソードビットがなぞる。サブカメラを狙った一撃は、しかし勢いが足りなかった。分厚い装甲に覆われた腕が振るわれ、ソードビットを叩き落とす。これが、二手目だ。

「シロ、今！」

「おうともよー！」

伸ばした腕の内側、肘の関節をピンポイントで狙う。装甲で覆われていない部分、関節は、そのふたつ目だ。伸ばし切った関節の内側から放たれた剣撃が、肘から先を千切り取る。アルキオネの火線は胸に集中したままだ。もう片方の腕は、胸の大穴を庇うためにも動かせない。

苦し紛れに、腹のハッチを開き、レーザーキャノンが放たれる。だが、狙いも甘い。今更そんな火力に頼ったところで、もう既に詰んでいるこの状況は変わらない。

罠というものは、そこにあると分かっていたらばかからずに済むというものではない。本当の罠とは、そこにあると分かっていたにもかかわらず、してしまうものなのだ。

レーザーの光が収まるのと同時に、三手目を狙う。鬼姫を振りかぶり、一撃を加える。だが、残った腕がそれを阻止する。それこそが、本当の狙いだ。

腕を振り上げて鬼姫を防いだ隙に、アルキオネの放った光弾が胸を穿つ。その一撃に、ザンダクロスの動きが止まる。このタイミングだ！

「スキル発動! 『無銘：大顎』！」

サブアームにつながれた鬼姫が、巨大な鋏を形作る。装甲のない関節部、その中でも致命の一撃を狙う。

「行っけえ、嬢ちゃん！」

「おおおおおッ！」

「くっ、くそおおおおおッ！」

関節部分は、その強靭な装甲に比べて、微塵の苦も無く切り裂かれ

た。寸刻の間、飛ばされた首が宙を舞う。
勝負のついた瞬間だった。

意識が体に戻ると同時に、相手はセンターの職員に呼ばれた警察に確保された。日野は警察から事情を聴取されていて、花道と俺は念のために病院で検査を受けることになった。

しかし分からないことだらけだ。一体あいつは、何の目的でこんなことをしたのだろう。この時代、人の感覚を接続するタイプのゲームは、メーカー側で厳重に管理されており、ゲームマスターに対するハッキングは実際に被害者がいなくても他者を害する行為として認識されていて、単なる不正アクセス禁止法よりも重い量刑が科されることが通例らしい。つまり、リスクが大きすぎるのだ。しかも、そこまでのことをしておきながら、目的がさっぱり読めないままだ。狙いが俺らしいのは確かだが、警察の方でも黙秘をしているらしく、聞き出すことは出来ていないらしい。

ようやく検査と簡単な聴取を終えて家に帰りつくと、携帯に榊刑事から着信が残っていた。こんなときに、とも思ったが、今日のことと関係があるかもしれない。疲労感を押ししてリダイヤルをかける。

「もしもし、榊刑事ですか？ 何か連絡を頂いたようで……」

『ああ、つかまってよかったよ。君、今日は災難だったね』

やはり今日のことと関係がある様だ。

「ええ、出来たら今日はおとなしくしていたところだったんですがね」

『はっはっは、君も中々言うようになったねえ』

それに関しては知り合って以来の俺の扱いを考えてみてくれ、と言いたい。が、今日の本題はそこじゃないはずだ。

「……で、何か用があったんじゃないんですか？」

『おう、そうそう。今日のこと、ひとつだけ犯人が目的について喋ったそうだ』

「何ですか」

俺の声が、真剣なものになったのが自分でも分かった。一体、何が

目的でこんなことをしたと言うのか……。

『とりあえず、こっちでは何のことだか分からないので、聞いたまま、君に伝えようと思うんだが。何か思い当たる節があったら教えてくれ。いいかね?』

前置きが長いのは榊刑事の悪い癖だ。が、今はそれにも付き合うほかはない。俺がうなずくと、電話口で榊刑事が一言、言った。

『あの痛みを思い出せ、君の永遠の相棒より、だそうだ。何か分かるかね?』

あの痛み。永遠の相棒。まさか。いや、そんなはずはない。そんなはずは……。

『もしもし? どうした?』

「いえ……残念ですが、特に思い当たることはありませんね……」

嘘だ。俺は、嘘を吐いた。勤めて口調が変わらないよう、細心の注意を払って。

『そうか。じゃあまあ、何か思い出したら、いつでもいい。連絡してくれ。とりあえず、今日のところの用事はそれだけだ。ゆっくり休んでくれよ』

「ええ、ありがとうございます。それじゃあ……」

永遠の相棒。

俺の、永遠の相棒……

『感じるな、考えろ。勝利への道筋を』

俺の脳裏に、一瞬、ある男の記憶が甦る。

それは、俺にとって、消し難い痛みの記憶だった。

その日の夜、シャウ達を一足先にスリープモードにした後、俺は一人でPCを立ち上げた。どうしても気になることがあったからだ。

ウェブブラウザを開き、今は使われていないアドレスのメール受信ボックスを開く。そこには、一件の新着メールがあった。差出人は、確認するまでもない。このアドレスを知っているのは、今はもう限られた人間だけだ。

マウスを操作する手が震えるのが分かった。だが、逃げるわけにはいかない。俺は意を決して、メールを開く。モニタに、文面が表示される。

『――やあ、久しぶりだね、ツクヤ。』

このメールを読んでいるということは、無事に家まで帰ってきた、ということなんだろうね、おめでどう。腕は鈍っていないようで、安心したよ。

そうそう、先日のホウオウハイも見せてもらったよ。相変わらずの活躍で、何よりだ。

さて、本題だが、もう分かっていると思う。

ツクヤ、僕は君が救われていることを許した覚えはない。よって、君の幸せな生活を、破壊してやることにした。

君も、君の友人も、君の神姫も、許さない。

君を救う、すべての存在を、許さない。

そのすべてを、破壊してやる。

君ももうハイスクールを出たのなら、そろそろ理解出来るだろう。世の中には、小金のために犯罪に手を染める人間なんて、ちよつとした伝手さえあればいくらでも探すことが出来る。

君の日常を破壊することなんて、今の僕にとっては簡単なんだよ、ツクヤ。

止めたければ、来るといい。昔、よく使った、バーチャルファイルドを整備しておく。

日時は、一週間後の、午後九時。

それまでに君が接触したものは、自動的にこの報復の対象に取るから、そのつもりでいることだ。

それじゃあ、一週間後に、会うのを楽しみにしているよ。それまで精々、自分の罪を噛みしめて過ごしてくれ。

君の、永遠の相棒より。憎悪を込めて』

英文でしたためられたそのメールを、俺は二度、読み返した。そして、疑念が確信に変わった。やっぱり、お前だったのか。だとしたら、これは俺の責任だ。俺が、止めなければならぬ。

俺はブラウザを閉じると、テキストメモを呼び出した。短い文面の手紙をしたためると、モニタの電源をそのままにして、立ち上がる。

今日使ったWは、手ひどく破壊されていた。腹に食らった一撃が致命的で、ドライバー部分が破壊されしまったのだ。これではバトルに使うことは出来ても、Wの真価を發揮することは出来ない。しかし、決着をつけるためにも、Wの代わりは必要だ。俺は本棚に飾られているアクリルケースから、もう一体のファイギュアを取り出した。

「結局、これが俺の切り札、か……」

俺は持ち運び用のケースの中身をWから入れ替える。このことに、すべて決着がついたら、きちんと修理してやろう。それまで、しばらくの間そのままにすることを、許してくれ。声には出さず、許しを乞う。作業台の上のトレイを一枚取ると、その上にWを載せて台に戻す。

最低限の身支度をすると、腹の辺りが痛んだ。今日のバトルのダメージが残っているのだろう。だが、この程度ならば一週間後のバトルには支障はないはずだ。

部屋の明かりを落とすと、静かに部屋を出る。何も言わずに家を出るなんて、神姫が家に来てからはついぞなかったことだ。それを変に感じるくらいには、一人ではない生活に馴染んできていたということだろう。

ずきん、と胸が痛んだ気がした。それは、今までに数えきれなく

らい感じてきたそれとは、少し、違うように思えた。

もし、すべてのことに始まりがあるのなら。
きっとその日がすべての始まりだったのだろう。

俺の名は深波月夜。

これは、俺を取り戻す物語だ。

『Winner、『変幻』の深波月夜！ 圧倒的！ 他を寄せ付けない強さ！ 今回もチャンプに王手をかける！』

ジャツジが俺の勝利を宣言する。拍手と歓声に片手を上げて応え、壇上から降りる。

ここではレジェンド・バトルというゲームの全世界大会が行われている。大会日程は順調に進み、今準決勝の第一試合が終わったところだ。

2030年代、世界はフィギュアバトルブームを迎えた。全高20cmに満たないフィギュアロボットに詰め込めるだけの最新技術を詰め込んで作られたバトルゲームサービスは世界的な人気を呼び、特にこの日本では前世紀からのオタクブームとあいまって、実に様々なサービスが隆盛した。レジェンド・バトルもそのひとつで、世界的な人気を誇る特撮をモチーフにすえたゲームだ。プレイヤーは自分たちで作ったフィギュアを操り、バトルを繰り広げる。キャラクターも原作を忠実に再現したものや独創性にあふれたものなど、レギュレーションに沿って様々に作られるため、作り手の技術も問われるのがこのゲームの魅力だ。

「流石じゃないか、ツクヤ。次の展開が読めなくてはらはらしたぞ？」

控え室に帰ると、相棒が俺を迎えてくれた。

「嘘付け。試合が始まるまで、俺の作ったライダーは負けない！ つて豪語してたのは誰だったかな」

「そりゃあ僕の作るライダーは最高さ。問題は使い手の技量だろ？」

「なら何も問題ないな」

相棒……ロストマンは笑った。

このゲームではフィギュアロボを作るビルダーと、フィギュアを操作するプレイヤーが存在する。勿論一人でそれをこなすプレイヤーもいるが、俺達は相棒がビルダーで、俺がプレイヤーだ。

ロストマンは本国では名の知れた技術者らしい。フィギュアロボットによるバトルゲームがこれほどに隆盛を極めたのも、彼の天才的な技術によって安価な製法が確立されたためらしいが、よくは知らない。俺に分かっているのは、彼が俺の相棒で、俺のために最高のモデルを用意してくれる、最高のビルダーだということだけだし、それで充分だ。

「次の試合だけど、勝っていいのか、ロストマン？」

「何を言ってるんだ、ツクヤ？ いつも言ってるだろ、相手が誰であっても、試合では叩きのめせ！ ってな」

「それがお前の、唯一の妹でもか？」

「ふむ、逆に聞こうか。手加減の上で君に勝って、喜ぶような性格かね？ 君の恋人殿は」

「違う。少なくともあいつは、ただ勝っただけで喜ぶような相手ではないことは確かだ。」

「で、今回のあいつの機体は、お前が調整したのか？」

「それについては、コメントを控えよう」

そう言って、にやりと笑う。この調子だと、相手の機体のコンディションは最高だと思っていた方がよさそうだ。

「試合の様子、見なくていいのかい、ツクヤ？」

「必要ないだろ。どっちが勝っても、決勝でやることは変わりない。ロストマンこそ、見なくていいのか？」

「言っただろ？ 俺の作るライダーは最高だ。どんな相手であつても、負けはしないさ」

「語るに落ちたな、相棒」

おっと、しまった、と自分の口を押さえる。これで俺より八つも年上で、世界的な天才技術者と称されているというのだから、どうも信

じがたい。

「まったく、それで俺が勝てなかったらどうするつもりなんだか。俺が情に流されることだって、あるかもしれないんだぜ」

「いつも言ってるだろ、ツクヤ。感じるな、かんぐ」

「考えろ、勝利への道筋を、だろ?」

「分かっているじゃないか」

ロストマンの言葉を遮って先を続けると、満足そうな笑みを浮かべながら、そう返してくる。

話に興じていると、突然会場の方から大歓声が響いてくる。どうやら、反対ブロックの準決勝に決着がついたようだ。

「さあ、決勝の準備は整った様だぞ、ツクヤ。君の方の準備はいいかい?」

「聞くまでもないな、俺の準備はとっくに出来てるぜ、相棒」

ばたばたと、足音が近づいてくる。やれやれ、せっかく決めていたってのに、騒がしいのが来やがった。

「ツクヤ、兄さん、勝ったわよ! 決勝進出! これで決勝は、どっちが勝っても兄さんの機体が世界一だわ!」

「おめでどう、リサ! よくやったね」

「リサ……負けねえぜ。分かっているとと思うが、手加減なんかしてもらえるととは思わないことだ……」

「またそんなこと言って。年相応のことを言ってるときはカワイイのに。そんな妙な大人びたことばかり言ってるの、カワイくないよ、ツクヤ」

「女には分からねえか……これが、ハードボイルド、つて奴なのによ……」

俺が背を向けると、後ろから思い切りハグをしてくるリサ。

「もう、照れてるの、ツクヤ?」

「そんなじゃねえ、べたべたするなよ! 相棒、どうにか言ってやってくれ!」

「ふむ、リサ、バージンロードを歩くのは、僕に務めさせてくれるかな? ロバート叔父に任せるには、大役すぎるからね」

「サンキュー、兄さん！ その時はぜひよろしく頼むわね！」

ロバートというのは、ロストマンとリサの養父だと聞いた。ロストマンもリサも、あまり昔のことは話したがらないが、幼い頃に両親と死別し、養父母の家で育つたらしい。両親とも健在な俺からは考えられないことなので、その話題には努めて触れないようにしている。だが、彼ら自身は平気でその名前を出してきたりする。

「それじゃあツクヤ、決勝の舞台でね！ 私、負けないから！ 兄さん、祝勝会の場所は、もう予約してあるかしら？」

「大丈夫、抜かりはないよ、リサ。どっちが勝っても、今日は盛大にやろうじゃないか」

この妹の前では、ロストマンも大概だ。まあ、確かにこの試合で勝つた方が今期の世界一、という晴れの舞台なのだから、ビルダーとして参加しているロストマンも嬉しいのは間違いないのだろう。

何より、世界的な流行を受けてこの種のゲームでも競技人口の多いものはかなりしっかりした賞金制度が取られている。今回も流石に世界タイトルマッチなだけあって、優勝すれば俺達には中学生には過ぎた金額が手に入ることになっている。

「まったく、集中力を乱されちゃったぜ……」

「いいじゃないか、張り詰めっぱなしじゃあ体に毒だ。僕から見ても、君らはよくお似合いだと思うよ」

「からかってるのか、相棒？」

「とんでもない。心底、そう思うのさ。妹には、幸せになってもらいたいからね」

呟くようにそう言ったロストマンの目は、遠いどこかを眺めているようだった。

「だったら少しはリサにも、ハードボイルドってものが分かるようになってほしいもんだね」

「伝えておくよ。日本では『習うより慣れろ』って言うんだろう？」

微妙に違う気もするが、まあいいことにする。

「さて、ツクヤ。そろそろ決勝、どっちで行くか決めたかい？」

「ああ、リサには悪いが、勝ちにいくな。決勝では、ジョーカーを使う」

「君が決めることだ、否定はしないが、Wの方が良くはないか？」

ジョーカーでは君の得意の変幻の戦い方が出来ないんじゃないかね」「大丈夫さ、相棒。ジョーカーは、なんて言うか、俺と合う。使っていて、しつくりくるんだな。ジョーカーなら、俺の力を引き出してくれるし、俺ならジョーカーの力を生かせる。そんな気がするんだ」

「まったく、ビルダー冥利に尽きることを言ってくれんじゃないか、ツクヤ。そこまで言われたら、君の決定に異を挟むことは出来ないな」机の上に置いてある、二体のフィギュアロボットは共にロストマンが作ったものだ。Wとジョーカー。普段なら、Wを使うことが多い。メモリチェンジによる豊富なフォームを戦況に合わせて使い分け、対策を絞らせないのが俺の戦い方で、『変幻』の二つ名の由来でもある。でも、俺自身はどちらかと言うとジョーカーを使う方が好みだった。決勝では、ジョーカーを使いたい。

「それじゃあ、行ってくるぜ、相棒」

「ああ、これが終われば、世界一だな、ツクヤ」

拳を合わせて、控室を出る。そう、あと一戦で、世界一になる。俺は、そうであることが当然のように感じた。俺の手には、切り札が握られている。勝つのは、もはや必然だ。俺は早足に、試合会場へと向かった。

試合会場に入ると、けたたましいぐらいの大歓声が俺達を迎える。その中にはマイクを通して実況をする声も混じっているが、壇上ではそれさえよく聞き取れない。

「ツクヤ、負けないからね！」

「それはこっちの台詞だぜ、リサ」

試合前の握手を交わす。実況がロストマンの名前を出したのが辛うじて聞き取れた。おそらくリサがロストマンの実妹であるとか、二人の使っている機体がロストマンの手によるものだとか、そういったことを喋っているのだろう。が、そんなことはどうでもよかった。早く、試合がしたい。

筐体に入り込むと、いつもの手順でセットアップを行うのだが、そ

れすらももどかしい。俺の心は、逸っていた。ヘッドセットとグローブを装着し、意識が電子の海の溶けていくのを待つ。まるで透明で重さのない幕を被せられたような感覚も、慣れたものだ。

視界が、バーチャルのそれに切り替わる。目の前にいたライダーは、なでしこ。なるほど、リサも決勝に合わせてモデルを変えてきたか。元々リサはフォーゼ系のライダーを使うのが得意だ。それをわざわざ選択肢の狭まるなでしこに切り替えてきたのは、それだけ彼女にも、こだわるものがあつたのだろう。銀色のメタリックなボディが眩しく感じる。

「手加減はいらないよ、ツクヤ！」

「言つたらろ……手加減なんて、しないってな……」

俺の使うモデル、ジョーカーは本来はないはずのフェルト帽を被っている。アンテナの部分にはそれを逃がすように切りこみが入っていて、深く被れるようになっていて。その帽子のつばに手を当てて、直すような仕草をすると、改めてなでしこの方に向き直る。

『Get Ready : FIGHT!』

試合開始の合図と共に、俺は黒い帽子を高く投げ上げた。

試合開始早々に、なでしこはまっすぐ突っ込んで来る。お互いフォームチェンジなどの選択肢の少ないモデルだ。真正面から向かってくるのは、選択肢としては悪くない。特になでしこは女性素体を使った珍しいタイプで、攻撃力や耐久力よりも素早さに優れたモデルだ。その速さを生かして、こちらを掻き回す作戦だろう。

「はあッ！」

さっそく繰り出される連打に、両手で対応する。流石に速い。軽い連打だ。苦もなく捌く。が、一瞬その手が深く戻される。

『ロケット、オン！』

鋭い一撃に、ロケットモジュールが加わり重さが加算される。警戒が出来ていたから一瞬早く反応出来たが、本来遠距離から距離を詰めるのに使われるロケットモジュールを、至近距離から攻撃力を上げるためだけに使ってくるか。一手目から中々大胆な手を打ってくる。

さらに左のジャブを主体とした、連打。どうやら右の大砲として、ロケットモジュールを残してくるようだ。打ち合いの最中に一瞬、わざと隙を作る。その隙に、リサは食いついた。再びロケットモジュールを点火し、一撃を狙ってくる。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

『ライダー……キック！』

しかし、こちらもただ防ぐだけではない。腰のマキシマムスロットに挿入されたメモリの力を、最大限に引き出す。紫に燃えるエネルギーを纏った回し蹴りが、アッパー気味に降り上げられるロケットモジュールの一撃を迎撃する。

寸刻押し合うが、力比べには体格に劣るリサが不利だ。そのことは、お互い充分に分かっている。ロケットモジュールのアフターバーナーを切ると同時に飛び退り、距離を取る。

『ランチャー、オン！』

その刹那、なでしこの右脚にランチャーモジュールが装着され、ミサイルが四基放たれる。咄嗟に防御姿勢を取る。至近距離で爆発し、

空気の振動が腹の奥底まで揺さぶってくるようだ。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

爆撃に寸刻空けず、なでしこに向かつて飛びこむ。空中でマキシマムスロットを操作し、飛び蹴りを放つ。

「とおッ！」

ランチャーモジュールを解除し、後ろに飛び退ることでそれをかわす。なでしこの代わりに、地面にクレーターを穿つ。

「流石ツクヤ、一筋縄ではいかないわね」

「お互いにな。いい腕だ、リサ」

激しい乱打戦だ。観客は今頃大熱狂だろう。俺自身も昂ぶっているのが分かる。ガードに使った腕の痺れを、忘れるくらいに。

「行くよ、ツクヤ！」

「来い、リサ！」

『ロケット、オン！ リミットブレイク！』

開いた距離を、右腕に装備したロケットモジュールを点火して一気に詰めてくる。

「ライダー、ロケット、パンチ！」

大推力で一気に加速したロケットモジュールが飛んで来る。それを最低限の動きでかわすと、突き出された右腕を取り、背負い投げの要領で投げ飛ばす。

「くうッ！」

推力をそのまま地面に向けてやったのだが、叩きつけられる直前、地面すれすれでロケットモジュールの向きを変えてうまく上空に逃げる。だが、ただ逃がすわけにはいかない。三度、マキシマムスロットを叩く。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

「ライダー……パンチ！」

追いかけるように上空に飛び、拳で追撃。右腕を引っ張られるようにして宙を飛ぶなでしこの右脇腹に、突き刺さる。確かな手ごたえが、拳を通じて感じ取れる。

「くうッ、そおおッ！」

なでしこが両足を振りまわし、回転する。飛び退くようにして離れると、そのまま回転を続けて上昇する。

『リミットブレイク!』

「ライダー、大回転、ロケット、パーンチ!」

竜巻のような勢いで、回転しながら知っ込んで来るロケットモジュール。この勢いは、受けたら危険だ。本能的に大きく跳ぶ。寸刻待たずに、俺のいた場所を銀色の竜巻がえぐり去っていく。スピードタイプのなでしこにしては、意外なほどの破壊力だ。

「中々の威力だな。だが、当たりさえしなければ!」

そのままの勢いで距離を開けるなでしこが、再度ランチャーモジュールのスイッチを入れる。白煙を引いてミサイルが襲いかかってくるが、そのスピードはそれほど速くはない。逆になでしこに向かって、駆ける。背後で巻き起こる爆風が、瓦礫を背中にぶつけてくる。

跳ぶ。空中で姿勢を整え、蹴りの姿勢。なでしこも、姿勢だけは蹴りの構えを取る。ランチャーモジュールをそのままに、ロケットモジュールのスイッチが入る。なるほど、そうくるか……!」

「ライダー……キック!」

「ライダー、ロケットキック!」

互いの脚が、腹に突き刺さる。お互いの蹴りの威力を加算した衝撃が、背中に抜ける。

「ぐ……ッ!」

「う……ッ!」

弾け合うように、互いの体が宙に放り出される。突き抜けるような痛みが、後から襲ってきた。やはり、破壊力が想像していたよりも大きい。流石ロストマンのチューンした機体だ。速度に特化したフレームのなでしこに、ここまでの攻撃力を持たせることが出来るとは。

だが、速度の上に攻撃力まで乗せてあるのならば、防御や耐久までは手が回らないはずだ。既に、こちらの有効打が二発は入っている。それでもなでしこの動きには大きなダメージが入っているようには

見られない。その辺りはリサの操作の巧みさか。空中でトンボを切り、着地。なでしこも一拍遅れて、着地する。

「やるな、リサ……！」

思わず、称賛の声が口を衝く。

「……もう一発、行くよー！ ライダー、ロケットミサイル！」

なでしこが掲げた右腕から、ロケットモジュールがこちらに向かって飛んで来る。その横腹を殴り抜けるようにして、駆ける。だが、ロケットモジュールの影から、ランチャーモジュールのミサイルが顔を出す。単騎でスクリーンプレイとは、やってくれる！ 咄嗟に身を捻り、横に飛ぶ。そのすぐ脇で、炸裂するミサイルの爆風が肌を刺す。だが、駆ける脚は止まらない。そのままの勢いで、跳ぶ。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

「もう一丁いくぜ、ライダー、キック！」

駆けながら、マキシマムスロットを叩く。全身から燃え上がる紫のエネルギーが、右脚に集約される。

『リミットブレイク！』

「受けて立つ！ ライダー、パンチ！」

ロケットモジュールが装備された右腕が、蹴り足を迎撃する。圧縮された空気が、爆発するような衝撃が全身を駆け巡る。それは、迎撃したリサもそうだろう。互いの口からは、苦痛とも、気合とも取れる声が、大きく漏れ聞こえてくる。だが、力押しならばこちらが有利だ。基礎骨格であるフレームがそもそも違うのだ。そこから生じる優劣は、気合や根性で覆し切れるものではない。

しかし、押し負けたのは俺の方だった。長大なロケットモジュールが、俺の体ごと押し返す。

「……何だと？」

「もらったあッ！」

馬鹿な。いくらロストマンのチューンした機体であったとしても、ここまでのパワーをあの細いフレームに乗せることが出来るものなのか？

着地した右脚に、違和感を覚える。今のダメージで、どこか痛めた

らしい。しかしリサの攻め手には容赦がない。なるほど、いい攻めだ。片足の動きを奪われて、相手にはダメージの跡も見えない。しかし、俺の胸に燃え上がるのはなおも闘志だ。リサがこれほどの腕になっているとは。そんなリサと、この舞台上で戦えるとは！ その興奮が、一層俺の闘志を掻き立てる！

「ライダー、ロケット、パーンチッ！」

加速をつけたロケットモジュールと共に、なでしこが体ごと突っ込んで来る。左足で体重を支え、半身で迎え撃つ。ロケットモジュールの速度は確かに脅威だが、その一撃は逸らせてしまえばそう簡単に止めることは出来ない。その隙に、わずかでも体勢を立て直せる。

果たして、ロケットの先端を、俺の拳が捉えることは出来た。横腹を叩いて、そのまま勢いを逸らす！

「甘いよ、ツクヤー！」

何となでしこは、その勢いを殺すどころか、勢いのままにさらに捻りを加える。ロケットモジュールが横から俺に叩き付けられる。内臓を全部ひっくり返したような痛みと共に、深々と右腹に突き刺さる。だが……。

「掛ったな、リサ……！」

ロケットモジュールから弾き飛ばされぬよう、左手でしっかりとロケットを掴む。その間に……。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

右腕はマキシマムスロットを素早く叩く。そして、そのまま……。

「ライダー、パンチ」

紫に燃える拳が、ロケットモジュールの装甲板を突き破る！

「うあああッ！」

互いの体が、制御を失ったロケットによって空中に運ばれる。しかし、まだ終わらない！

「もう一丁、行くぜ、リサ……！」

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

「ライダー……パンチ！」

再度の、マキシマム。なでしこの華奢な体が、宙に舞った。ダメー

ジで解除されたロケットモジュールを失い、両者共に寄り添うように地を舐める。

先に立ちあがったのは、なでしこだ。まったく、ロストマンの技術には舌を巻く。これほどの耐久力まで備えているとは。だが、俺のジョーカーとてロストマンの作。後は、使い手の技量の差。そして、それならば俺も負けるわけにはいかない！

後を追うように、俺も立ち上がる。もはや全身に痛まない場所はない。それでも。右脚には、すでに力が入らない。それでも！

「最後の勝負だ……来いよ、リサ……！」

「うん……行くよ、ツクヤ！」

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

『ロケット！ リミットブレイク！』

加速するなでしこが迫る。そうだ、来い。もう俺は、駆けるだけの力もない。だが、残っている分は全部ここで使い切ってやる。そう、俺の全部を、リサ、お前にやる！

「ライダー……パアンチツ!!」

二人の声が、奇しくも重なった。

決着がついた。

俺が痛む脚を引きずって、筐体から出てくると、大歓声が俺を迎えてくれた。

最後の一撃、リサの攻撃をスリッピングで避け、クロスカウンター気味に入ったライダーパンチ。それがそのまま勝負を分けた。

優勝は、俺だ。世界一のプレイヤーになった、という事実を、俺は噛みしめた。

俺は、拳を掲げる。歓声が一層高まる。体中は痛み、右脚には力が入らない。それでも、この場で格好をつけなければ、いつそうするんだ？ 俺の顔には、自然と笑顔が浮かんでいた。

最高の気分だ。俺の手には、相棒である世界最高のビルダーの、最高傑作が握られている。そして最高のライバル達との戦いを経て、俺が最高のプレイヤーだと認められたのだ。

相棒、見ているか。俺はやっと、お前と釣り合うだけの人間だと、証明されたぞ。お前が世界一のビルダーで、俺が世界一のプレイヤーだ。

そして、リサだ。リサがあれほどに強いなんて、思わなかった。普段練習なんかにも付き合うが、ここまで登ってくるとは思わなかった。ましてや、ここまで好勝負を演じるまでの力を隠しているなんて、露とも思わなかったのだ。

リサが出てきたら、どうしてやろう。ハグでもしてやろうか。普段は俺の方からすることなんてないからな。どんな顔をするだろう。きつと、目を白黒させて、でも喜んでくれるに違いない。こんな壇上でそんなことをするのは、ハードボイルドらしくないか？ でも、今はそういう気分なのだ。たまには、そう、たまには、そういうことがあってもいいだろう。

リサが、出てこないことに気付いたのは、その時だ。もしかして、負けたことを悔しがっているのだろうか。まさか泣くほど悔しがってはいないだろうが。もしそうだとしたら、何と声をかけたらいいのだ

？ どんないい慰めも、嫌味になつてしまふかもしれない。いや、いいや。そうであつたら、無言で抱きしめてやろう。俺は、リサの筐体を覗いた。

「筐体の中には、血が、溢れていた。」

リサは、ヘッドセットもグローブもそのまま、シートベルトをして、座っていた。腕は力なく垂れ下がり、鼻と口からは血がこぼれている。

「リサ……？」

返事の代わりに、口からは血泡がごぼり、と湧き上がった。

それからどうなつたか、不思議なくらい覚えていない。気が付いたら、俺も病院にいて、痛めた右脚に湿布と包帯が巻かれていた。

病院の廊下には、ロストマンが立っている。その目からは、奇妙なくらい生気が感じられなかった。

来てくれたのか、ロストマン。そう言いかかったその時、ロストマンの目が俺を捉えた。この距離からでも、はつきりと分かるほど、その瞳は怒りに燃えていた……。

ロストマンは早足で、俺の方にやってくる。その両手が、俺の胸ぐらを掴む。支えきれず、俺は呆気なく壁に背をぶつける。

「ロストマン……」

「ツクヤ……」

互いの名を呼び合う。が、やはりロストマンの言葉には、抑え切れない炎が宿っていた。不意に、頬に痛みが走り、転んだ。何が起こつたのか分からず、ロストマンの姿を改めて見る。それでようやく、殴られたのだと理解した。

「ロスト……」

「ツクヤあ……い！」

胸ぐらを掴まれ、立たされ、壁に押し付けられる。ゆっくりと、頬がジンジンと痛む。ロストマンの黒い瞳からは、涙が流れ始めた。

「リサが……死んだ……」

え？ その言葉の意味が、俺には分からなかった。何を言ってるんだ、ロストマン？ リサなら、さつきまで俺と試合をしていたじゃないか。見ていなかったのか？ あんなにいい勝負だったのに。

それを言おうとした瞬間、溢れ出すように投げ出された腕。担架の上で眠るリサ……。

「嘘だ」

そう言った俺の声は、震えていた。

「ツクヤ……」

「俺を騙そうとしてる……」

「ツクヤ」

「何を言ってるんだ、ロストマン？ だって、だって……」

「ツクヤ！」

もう一度、俺の背が壁に叩きつけられる。

「ふざけるな……ツクヤ……！」

ロストマンと、目が合う。その声も、真っ赤に燃えるような怒気をはらんでいた。

「なんで……たかがゲームで、死ななけりやならないんだ！ リサは……俺の妹なんだぞ！ たった一人の、俺の、大事な……！」

うつむいたロストマンの頭が、俺の胸に押し付けられる。俺も、ロストマンも、震えている。

嗚咽が、聞こえてくる。ロストマンの、だろうか。それとも、俺の……？

「お前が……殺したんだ、ツクヤ……！」

湧き上がる嗚咽を押しつけるようにして、ロストマンが声を絞り出す。やはり、俺にはロストマンが何を言っているのか、分からなかった。

「お前が殺したんだ！ ツクヤ！ お前が！！ リサを！！」

俺は何も言い返せなかった。いや、返す言葉を持っていなかった。俺の頭の中をどう見返しても、悲痛な叫びを上げる相棒にかける言葉は見つからなかった。いや、違う。頭の中を探る余裕すら、俺にはな

かった。ただ、ロストマンの言葉を理解しようとするだけで、精一杯だった。

「なんとか言えよ……言えよ！」

その細腕からは意外なほど、ロストマンの拳は強かった。その騒ぎを聞き付けて、看護師が出てくるまで、俺はロストマンに殴られていた。

過剰同調、という症例がある。

感覚を同調させて操作を行う機器に対し、適当以上に同調してしまい、感覚や神経が機器と自分自身を区別出来なくなる現象を、そう呼ぶ。

それは、自分自身の体を扱うのと同じ感覚で機器を操作出来るという利点もあるが、本質的には危険な現象だ。それは、機器が破損した場合、自分自身が負傷した場合と『神経そのものが区別出来ない』という、その一点に尽きる。

過剰同調を発症すると、機器側の物理破損に伴って、物理的には何の負荷もかかっている神経が、自壊してしまう。つまり、物理的な痛みを感じるようになるのだ。

これが酷くなった場合、神経だけでなく、細胞そのものが自壊するという例も、ごく少数であるが報告されている。つまり、健康な体が勝手に自壊するのである。

リサの場合も、そうだった。より自分の操作感に合う機体を求め、リサはなでしこにたどり着いた。しかし、なでしこリサは、過剰に同調してしまった。その機体の損傷を、リサ自身が区別出来なくなつたのだ。

感覚同調型のフィギュアバトルで、過剰同調が報告されたことはないそう。リサの例が、世界初の事例となるらしい。

「馬鹿だな……そんなことで世界一になって、どうするんだよ、リサ……」

俺は一人、部屋の中で呟いた。

リサの死は、誰もが予見出来なかった事故として扱われた。しかし、誰もがそれで割り切れるわけではない。少なくとも、俺自身はリサの死を割り切れることは出来なかった。

あの日以来、俺はレジェンド・バトルに関わるのをやめた。持っていたバトル用のモデルも、それに関連する書籍も、すべて処分した。それまでバトル競技にのみ邁進していた俺の部屋は、ずいぶん殺風景

になってしまった。処分出来なかったのは、工具類とPC周りの機器。そして、あの日の大会で使っていたWと、リサの命を奪ったジョーカーだけだった。これだけは、俺自身への戒めとして、持つておくのだと決めた。俺が、リサのことを忘れてしまわないように。俺が殺したことを、忘れてしまわないように……。

夏が終わり、秋が来て、冬が過ぎた。俺はかねてからの予定通り、フィギュアバトリングの強豪校に進学した。唯一予定と違ったのは、俺がバトリングの活動に参加しなかった、ということだけだ。そのために親元を離れ、県外に一人で暮らすことまでしたというのに。

新しい学校の中でも、俺は浮いていた。この学校では強豪校らしく、誰もかれもが何らかのフィギュアバトリングに興味を持っていた。当然、俺が人を殺したことも、誰もが知っているだろう。俺はそう理解していた。

それならそれでよかった。もう、あんな思いをするのは嫌だった。もう、誰も傍にはいない。それならば、誰も失うこともない。

ただ、学校のカリキュラムに遅れないようにするだけの日々。それが、どのくらい続いたろう。ある日、俺は二人の男子生徒に声をかけられた。

「お前さ、神姫とかに興味ねーか？」

夏休みも終わって秋学期が始まる頃だった。こんな顔、クラスにいただろうか。正直、半年経っても俺はクラスメイトの顔も名前も覚えていなかった。端から人と関わるつもりがなかったのだ。それも当然と言えた。

「花道、いきなりそんなこと言っちゃって伝わらないでしょ」

「なんでだよ、日野。俺はいつも大体こんな感じだろーが」

耳慣れない名前だった。どうやらクラスは違うらしい。二人はこの学校の神姫部に所属しているらしく、そこでもらった何かという大会の観戦券が余ったそうだった。

「まあ、興味があったらでいいんだけど、一緒にどう？ あ、俺は日野司っていうんだ。こっちの、花道と同じで君の隣のクラスなんだけど」

「おう、俺は花道賢人ってんだけどよ。お前さ、まだどこの部にも入ってねーだろ？ 今時期、そういうやつは貴重だよ。下心としては、ウチの部活に入ってもらえたら、って思ってるんだけどよ」

神姫……流石に、この学校にいればその存在は嫌でも耳にする。生活サポートアンドロイドとして販売されている、MMSの一種だ。この学校の就職先にも、神姫に関連した企業は少なくないし、俺も何も考えずにそのどこかに就職するのだろう。そんな風に思っていた。「そうだな、部活に入るかどうかは別にしてもいいんなら」

自己紹介を簡単に済ませて、俺はそう答えた。将来のことなんてそんなに真面目に考えているわけではなかったが、それでも将来的には、なんらかの関わりは持つことになるのだろう。それならば、見に行くのも悪くはない。それに。興味が無い分野ならば、あの日を思い出すこともないだろう。もし思い出してしまうようなら、途中で帰ってしまったって構わない。別に、知り合いでも何でもない相手なんだから。

そんな軽い気持ちで、俺は二人の誘いを受けた。

それ以来、俺達は何となくつるむようになった。花道と日野の二人はそれぞれ自分の神姫を購入し、事あるごとにその話をしている。そんな日々が、一年ほど過ぎた。知り合いとも呼べなかった二人は、今は友人と呼べる程度の付き合いをしている。

二人からは、幾度となく、神姫を買わないのかと聞かれた。が、俺自身は未だに神姫を持っていない。そのことに、取り立てて理由があるわけではない。ただなんとなく、アンドロイドとはいえ、常に誰かが傍にいたいと思ってしまうからなのだろうと思っていた。ロストマンと、リサ。相棒と、恋人がいた日のことを。

そして、夏休みのある日。

この日だけは、俺は予定を入れない。その日の予定だけは、もう、決まっているからだ。

晴れた、夏の日だった。あの日と同じように、強い日差しに蝉の声

が聞こえる。

途中で買ってきた花を、墓前に供える。八月の十日。今日はあの大会のあった日。そして、俺がリサを殺してしまった日だ。

墓前で何をするわけでもない。それでも、ここに来ることを欠かそうとは思わなかった。ただ、ここに来る。そして、リサを偲ぶ。それだけでいい。そして、ここで決してリサに許しを請うことだけはするまい。そう、決めていた。誰が許しても、俺が、俺を許さない。それだけは、決めていた。

「帰るか……また、来る」

気が付いた時には、夏の日が傾き始めていた。今の住まいから、ここまでは一時間半ほどかかる。途中で、Y駅を乗り換えに使わないといけない。そこまで戻る頃には、日はすっかり暮れていた。

どこか食事でも、と思ったが、もとより食欲があるわけではない。適当にぶらついて、気が付くといつも訪れていた家電量販店の中にいた。なんとなく足の向くままに歩いていただけなのだが、何のことはない、通い慣れた道を辿っていただけなのだ。そこは、リサと、ロストマンと、幾度となくパーツやフィギュアロボットを買いに来た店だ。

懐かしさを感じるほどここに来なかったわけではないが、見慣れているはずのパーツ売り場は場所が変わっていた。

「これは、武装神姫、か……」

新しく作られた売り場に展開されていたのは、花道や日野に勧められていた、武装神姫。その最新モデルだ。

「エスパディア……?」

何とはなしに、そのパッケージを手にとってみる。フルパッケージと銘打たれたその商品は、素体や武装といった、武装神姫を始めるのに必要なものは一式そろえられたものようだ。

「何か、お探ですか?」

「え……いえ、特に」

「武装神姫、こちら、お勧めですよ。新商品でここまでお安くしているのは、他店ではちよつとないんじゃないですかね」

「はあ……」

俺の気のない返事にも、販売員の入店章を着けたお兄さんは熱心にセールストークを展開してくれた。一時間ほども、捕まって話し込んでいたろうか。気が付くと、俺の手にはパッケージとレシートが握られていた。安い買い物でもないが、幸いレジエンド・バトルの賞金はほとんど手つかずで、俺の口座で眠っている。一人暮らしの生活費としては、余裕は十分にあるのだ。

結局腹には何も収めることなく、家に向かう電車に乗ってしまった。まあ、途中のコンビニで何か買って帰ればいいだろう。

しかし、衝動買いのようなものとはいえ、遂に神姫を買ってしまった。これは、どうしたものだろうか。まあ、買ってしまった以上は、開封もするだろうし、起動もするのだろうか……。

「あ、名前を考えないといけないのか……」

名前……しかし、浮かんでくる名前はリサにまつわるものばかりだ。いくらリサのことを忘れないと言っても、それは流石に悪趣味というものだ。

帰りの電車を降りるまで、携帯を使っているいろいろ調べてみるが、いまいちどれもピンとこない。今日は、そういうことに向かない日なのかもしれない。そう思って天を仰ぐと、星が瞬いていた。都心に近いこの場所ではさほど大きく見えるわけではない。

『私？ 蠍座だよ！ ツクヤは何座？』

そんな他愛もないことを、リサと話したことがある。蠍座。そういえばリサが使っていたフォーゼやなでしこは、星座や宇宙に関わりの深いモデルだった。

蠍座。蠍座の星といえば、アンタレスが有名だが、女の子の名前としてそれはどうなんだろう。手元の携帯端末で、手早く検索する。蠍座を構成する星の名前が羅列される。アンタレス、アクラブ、ジュバ、サルガス……。その中に、ひとつ、俺の気持ちに引っかかるものがあった。

「シャウラ……」

蠍座の、尻尾の先を構成する星。意味は『毒針』。ちようどいいじや

ないか。俺はこの先に、俺を蝕む毒を宿し続ける。リサを意味するその毒を、俺は飲み続けるのだ。

次の日の夕方。俺は武装神姫を起動した。

「君の名前、何？」

少しぶっきらぼうな言い方に、俺は静かに笑い返す。

「君の名前は——」

俺は、すべてを失った。

これは、俺を取り戻す物語だ。

なくしたものをすべて、清算するための物語だ。

俺の名前は、深波月夜。

今は、ただの神姫マスターだ。

今までは。

スリープモードが解除され、私は目を開ける。今日の目覚めも良好だ。神姫の中にはキラクターとして朝が弱いとか、目覚めが悪いという個性を持った神姫もいるらしいが、私はそうではなかった。その点はCSCを選んでくれた主に感謝している。毎朝だらしのない姿を見られるなんて、私にはちよつと耐えられそうもない。

そこでふと、今朝は携帯電話の目覚ましアラームが鳴らなかつたことに気づく。主はいつもご自分の携帯電話を目覚まし代わりに使っていて、朝はその音が聞こえてくるはずなのだが……もう起きておられるのだろうか。

「主、もうお目覚めですか？」

布団の方に近寄って、声をかける。が、主からの返事はない。もしかして、アラームをかけ忘れたか、それとも寝ぼけてアラームだけ止めてしまわれたのだろうか。今日は月曜日だから、講義は朝からあるはずだ。

「主、お目覚めですか？ お時間ですよ」

もう一度、声をかける。が、やはり返事はない。仕方なく、枕の方まで近寄ってみる。今日は珍しく、頭まで布団をかぶっている。まるで子供のようなその様子に、少し笑みがこぼれる。

「主、起きてください。朝ですよ」

布団の端をめくる。しかし、薄いかけ布団の向こうに主の姿はなかった。辺りをよく見回すと、携帯電話や主の鞆もない。

「今日はもう出かけられてしまったのでしょうか……？」

いつもなら私より早く目覚められることはあっても、こんなに早くお出かけになることはないのに。そういうことがあるときは、前の日には教えてくださるし、それで翌日の私の起床時間を変更したりもするのだ。何か急なことがあって、取るものもとりあえず出かけられたのだろうか。それとも、昨日はいろいろなことがあったので、伝え忘れてしまったのだろうか……。

普段と違うことに違和感を覚えつつも、今日主が帰ってきたら尋ね

てみることにしよう、と思考を切り替える。幸い月曜は朝の時間だけしか講義はないはずだ。いつもなら、遅くとも三時頃には帰ってこられる。主が大学生になられてからは、講義の終わる時間は不規則になったが、大抵主はまっすぐ帰ってきて、その後の時間をバトルロンドの訓練や、作業にあてられている。お休み前などはたまにお伴をして、その足でパーツの買い出しやゲームセンターまでバトルロンドをしに行くこともあるが、昨日の今日だし、今日のところは用事もないだろう。

「姉さん、おはようツス」

「あら、メサルティム。主を見かけませんでしたか。もうお出かけになっちゃってしまっているようなんですけど」

「いや、自分も起きたばっかツスから……今朝は見てねツス」

首を横に振るメサルティム。頭につけられたツインテールパーツが、ふるふると振れる。

「そうですか。何事もないとよいのですけれど」

「そうツスね。昨日も変なことがあったばっかだし、心配ツス……でも今日はご主人早く帰って来る日だし、帰ってきたら聞いてみたらいいツスよ」

「……そうですね」

アルキオネはまだスリープモードのままだし、メサルティムも知らないのならば仕方がない。いつも通りに過ごしていれば、主もすぐに帰ってくるだろう。

「それじゃあメサルティム、今日の訓練を始めましょうか」

「うツス、お願いするツス！」

トレーニングマシンを起動して、準備を整える。その時に、おや、と思う。PCの電源が入りっぱなしになっていたのだ。珍しいこともある。主は普段、そんなことはないのに……。

「姉さん、こっち支度出来たツスよ」

「ええ、メサルティム、PCの電源、入れてくれましたか？」

「いや、自分じゃねツス。電源、入ったままだったんスか？」

「ええ。主が消し忘れたのでしょうか」

「珍しいツスね。いつもちやんと消してあるのに」

「メサルタイムも首をかしげる。まあ、そういうこともあるのでしようけれど……。」

「やっぱり昨日のことがあったんで、ご主人もお疲れだったんじゃないんすかね?」

「そうなのでしようか」

それならそれで、心配ではある。昨日の『襲撃』としか言いようのない事件は、明らかに主に狙いを絞っていたのだ。そう言っても、主にも、勿論私たちにも、そんなことをされる心当たりはない。その辺りのことは警察が調べてくれるのだろうけれど、はつきりしたことが分かるまではやはり不安だ。

「でも、ご主人じゃなかったら、逆に怖ええツス。それも帰ってきたら、聞いてみるツスよ」

「そうですね、そうしましょうか」

主がいらないところで考えていても仕方がない。私はメサルタイムを促すと、クレイドルに座る。バーチャル空間につながると、不安を頭の隅に追いやった。

「シャウラー、マスターからは何にも言ってきてない?」

「いえ、特に何も……どうかしましたか、アルキオネ?」

「いやー、今日は遅いんだなー、と思って。もう四時になるじゃない?」

言われてみればそうだ。私達神姫は日本標準時の時計にリンクしているので、時間を間違えるということはない。

「いつもならさ、月曜日はもう帰ってきてるころじゃない」

「ええ、そのはずなんですけれど。ちよつとPCの方もチェックしてみましようか」

神姫はクレイドルに接続すれば、簡単なウェブブラウジングぐらいなら出来る。それでもメールソフトなどはPCを使った方が手軽だし、便利だ。少々マウスやキーボードが大きくて、素早い操作が難しいのは難点だけれど、有線で接続すれば、思考をそのまま入力出来る。

背中のコネクタとPCを接続し、ブラウザを立ち上げようとする、スクリーンセーバーが切り替わる。そこに表示されていたのは……。

「アルキオネー・メサルタイム！ ちよつと、来てください！」

そこに表示された文面を読んだ私は、大きな声を上げる。有無を言わさない私の様子に、二人は急いでPCの前に集まる。

「どうしたのさ、大きな声出したりして？」

「何かあったんスか？」

「これ、読んでください……」

私の声は、震えていた。

PCの画面に表示されていたのは、主が書いたと思われる、手紙……。

「これ……どういふことだよ、シャウラ……」

「何なんスか、これ……」

「分かりません……分かりませんが……これが、本当に主が書いたものだしたら……」

自分の想像に、震える。もし、本当に主がこれを書いたのだとしたら、主は、もうここに、戻ってこないかもしれない……。

その想像には、二人も行きついたようだ。が、誰も口には出さなかつた……。

『シャウ、アル、ミーシャ。三人へ。』

ありがとう。

一緒にいてくれて。

ありがとう。

俺を生かしてくれて。

ありがとう。

仲間と繋げてくれて。

そして。

さよなら』

風が吹く。

日が暮れても、この蒸し暑さは何も変わらないだろう。それでも、うすら寒く感じてしまうのは、多分、気温のせいではない。

そろそろ行かなければ。この墓地から出るバスは、日が落ちる頃にはなくなってしまう。

花を供えられた墓石の前で、ゆっくりと立ち上がる。供えたのは、ロストマンだろうか。

「リサ……俺は……」

最後に、俺は、初めてリサに許しを請うた。

外が、明るくなってきた。

結局、主からは何の連絡もなく、そして、帰ってくることもなかった。こちらからも何度も主の携帯にメールを打ってみたが、返事は未だにない。

夕方頃から、私達は交代で休むことにした。主が深夜に帰ってくることがあっても、誰かが起きているようにしたかった。結局、そうはならなかったけれど。

こんなことは、私が主の所に来て以来、一度だってなかった。一体、主に何があつたのだろうか……。

「主、今どちらにおられるのでしょうか……」

寒い時期でないのは救いだった。しかし、心配の種がひとつ減っただけで、根本的な不安は募るばかりだった。

「姉さん、起きたツス。ご主人、帰ってきたツスか？」

「メサルティム……いえ、まだ……」

私は、力なく答えた。時計は、そろそろ朝の五時になろうとしている。

「そうツスか……ご主人どこ行っちゃったんスカね……」

そんなことを言われても、私だって知りたい。そんな思いが頭を過ぎる程度には、私の神経も消耗していた。

「メサルティム、少し、主の持ち物を調べてみましょうか。もしかしたら、何か行き先の分かるようなものがあるかも知れませんし……」

「そう、ツスね。チーグルつけてくるツス。あつた方が楽ツスから」

そう言うともサルティムは、自分の装備であるサブアームを着けに行つた。せめて、ご友人の連絡先だけでも分かるといいのだけれど、望みは薄い。日野様とも花道様とも、主は携帯電話で連絡を取り合うことはあつても、その他の連絡手段を使っているところを見たことがない。

「準備、出来たツス。どこから探すんスカ」

「そうですね、机周りから、手をつけましょうか」

と試みてみたところで、やはりと言うか、学習のための道具や教本などが出てくるばかりで、手がかりになりそうなものは何も無い。

「姉さん、ご主人、実家の方にいる、ってことはないんスカね？」

「ご実家……？」

「そうツス。ご主人だつて、一人暮らしをしてるってことは、両親がいるはずじゃないツスカ。何か理由があつて、そう、例えば急な呼び出しとかで、そつちに帰つてゐるってことはないツスカね……？」

ご実家。言われてみれば、主がご両親の話をされているのを聞いたことが無い。いや、そもそも、ご家族の話をされていること自体、聞いたことが無い……。

確かに、主にもご両親がいるはずだ。でも、どこに？ 連絡先は？

そもそも、ご健在なのだろうか？ 私は改めて、愕然とする。私は、主のことを、何も知らないのだ。分かつていたのはバトルロンドにまつわることだけで、家族構成も、交友関係も、バトルロンドに関わらないことは何も知らない！

「姉さん、ご主人のご実家の連絡先とか、知らないツスカ？ ……姉さん？」

「いえ、大丈夫……ただ、私も、貴女と同じで、主のことを何も知らない……」

そう、二年もの間、誰よりも近くにいたはずなのに。あんなにも傍にいたはずなのに……。

「それじゃあ、やっぱり、警察とか……姉さんを頼れば、事情も説明しやすいツスし……」

榊刑事のことも、考えないではなかった。だが、私はやはり連絡先を知らないのだ。その伝手をなくして、神姫が警察に通報をしたとして、何と説明すればいいのだろう。いや、それ以前に……。

「メサルティム……貴女、知っていますか……」

「え、何を、ツスカ？」

気づいてしまった。私は、いえ、私も……。

「私……主の、名前を、聞いたことが無い……」

そう。この家の中では、主の名を呼ぶ者はいない。ゲームセンター

や神姫センターでは、主はプレイヤーネームで呼ばれている。深波、月夜と。でもそれは、主の本名ではないはずなのだ。

絶望感に近い感覚が、一息に襲ってきた。その感覚は、一瞬で私の心を飲み込み、希望の灯を吹き消した。

突然、私の足元に水滴が落ちてきた。それが、私の目からこぼれた涙だと気づくまで、しばらくかかった。

「姉さん……う？　大丈夫ツスか？」

主がいないというだけでこんなにも心細く、こんなにも寂しく、こんなにも不安になるなんて、思ってもいなかった。私は、こんなにも小さくて、弱い。そんな感情が、次々と湧き上がってくる。

「姉さん、少し、休んだ方がいいツスよ。自分とアルキオネさんが起きてるんで、休んでくださいツス。ご主人が帰ってきたらすぐに起こしてあげるツス」

「ええ、ありがとう、メサルタイム……そうさせてください……」

涙は、止まらなかつた。バッテリーの残量が心もとないのもあったが、私は倒れ込むようにクレイドルに横になった。充電完了と共に目が覚めるように設定すると、瞼を閉じた。

夢を、見た。

夢の中で私は、主の隣にいた。

主の肩に乗り、日差しの中を歩いていた。

『。』

主が、何かを言った。しかし、私はそれを聞き取れなかつた。

何とおっしゃったんですか、主？

『。』

もう一度、主が同じ言葉を繰り返す。同じことを喋ってくれているのは分かる。なのに、何とやっているのかだけが分からない。私は、少し困ったような表情を浮かべる。

辺りが、徐々に暗くなっていく。急に、私だけが主の肩から取り残されて宙に浮かぶ。

主、待って、待ってください！

主と視線が絡む。しかし、主はそのまま離れていく。少し悲しそうな頬笑みを浮かべて、遠く、闇に吞まれていく。

待って、待って！ 行かないでください、主！

私の声は、もう主には届かない。それだけが、痛いほどはつきりと分かった。主の姿が、見えなくなる。もう、私の喉から、声が出なかった。

「待って、主！」

はつと目を見開くと、そこには見知った天井があつた。クレイドルから体を起こすと、私の目からはやっぱり涙が零れ落ちた。

「あ、シャウラ、起きた？」

その視界に、ひよっこりとアルキオネが入ってくる。その表情は、普段と比べると、どこか陰が入っている気がする。

「アルキオネ、主は……？」

「ううん、まだ何にも。シャウラのメールアドレスもチェックしてるんだけどね……」

アルキオネの表情が、はつきりと曇る。

「そう、ですか……」

ゆっくりと、立ち上がる。目をこすった手の甲は、涙で濡れていた。「その様子だと、手がかりになるようなものも見つかってないのでしようね……」

「うん……ごめんな」

「止してください、貴女が謝るようなことでもないのに……」

そう言いながらも、その気持ちはよく分かった。もし私が逆の立場だったとしても、きっと同じように謝罪の言葉を口にしていたろう。

「アルキオネ……私達は、何だったんでしょうね……」

「え？」

「主にとって、私達は、何だったんでしょう。こんなにも、簡単に、放り出していけるような、そんなものだったんでしょうか……」

私の声は、思っていた以上に沈んでいた……それでも、それを問わずにはいられなかった。こんな声は、とてもではないがメサルティム

には聞かせられない。

「そんな、簡単なことのわけ、ないじゃないか」

「でも……私は、主のことを何も知らなくて……バトルロンドのことしか、私は、知らなくて……」

声が、湿り気を帯びる。目尻には、また涙がたまっていた。

「それがマスターにとつて、生活のすべてだったんだろう？ それは二年間、マスターと一緒に戦ってた、シャウラの方が良く分かってるんじゃないか？ その生活のすべてを置いていったんだ。きつと簡単なことじゃないさ……ボクは、そう思うよ」

アルキオネは、そう言つて微笑んだ。私は、初めて、この娘の明るさに救われたような気がした……。

バトルロンド……そうだな。そう言えば……。

「武装ケース……」

「え？」

「武装ケースの中に、オーナーカードが入ってる……」

そう。春の鳳凰杯以来、主が私の武装と一緒に、持ち歩いていたオーナーカード。あれ以来交換をする機会もなかったけれど、昨日の事件のときにも、確かあったはず……。

私は急いで自分の武装ケースを開く。開封する手順ももどかしく、全身で蓋を持ち上げる。ケースの蓋の側に設えられたポケットに、アルミで出来た名刺入れが入っている。あった……。

「でもシャウラ、マスターの連絡先が分かったって、今は仕方がないんじゃないあ……」

「違うんです、アルキオネ……この中には……」

私は、その中から、一枚のカードを取り出した。

「オーナー、メールが入ってるよー？」

「んー、今ちよつと手が離せないんだ。誰からだか分かる？」

「ちよつと待ってねー……んー？ 知らないアドレスからだ……あ！

これ、シャウラさんのマスターさんからだよー！

「ああ、深波君からか。久しぶりだな、何の用だろう？」

「開いちやっついていい、オーナー?」

「そうだな、彼からならば渚さんに関係ない用件ってことはないだろう。ちよつと先に見てくれるかい?」

「はいはい、何だろうなー、久しぶりだなー」

名前を聞いて、久しぶりに春の鳳凰杯でのバトルを思い出す。あれは本当に胸が躍るような熱い戦いだった。あれ以来忙しい日が続いて、オーナーカードを交換したにも関わらず連絡も取れないままになっっていて、心苦しく思っていたのだが……。

「ちよつと、オーナー! こつち来て! 早く!」

「ど……どうしたんだ、渚さん!」

「いいから早く! シャウラさんが、大変なの!」

『マスターMk. A様。渚さん。』

突然こんなメールを差し上げるご無礼、お許しください。

でも、今の私達には、他に頼るあてがなく、本当に困っています。どうか、お力をお貸しください。

実は今、私達の主である深波が、昨日から行方知れずになっています。携帯電話も持って行かれたようですが、連絡も取れません。

警察に連絡をするにしても、今の我が家には神姫だけしかおらず、近くの知り人も連絡先が分からず、頼れる状態になって途方に暮れています。

どうか、お知恵をお貸しください。

シャウラ』

その日、飛び込んできたメールの内容に、自分も渚さんも驚いた。深波君が行方不明というのも、今のシャウラさんの状況にも。

とにかく、状況がよく分からない。仕事場には遅れる旨の連絡を入れ、シャウラさんが送ってきたメールに返信をする。

『シャウラさん。』

連絡、ありがとう。自分たちのことを思い出してくれて、嬉しい。早速だけれど、君たちの状況がよく分からない。

出来るなら直接話がしたいのだけれど、通話が出来る環境はあるだろうか。

多分だけれど、PCの中に通話ツールか何かがあるはずだ。バーチャルで遠隔地の相手と対戦しようとしたら、その手のものが必要だからだ。探してみてくださいないか？

見つけたら改めて、連絡をください。

Mk. A』

手早くメールをしたためて送信する。とにかく今は、正確に状況を知ることが先決だ。もし本当に行方不明ということになっても、果たして法的には物に過ぎない神姫が搜索願いを出したり出来るのだろうか。

「渚さん、どうなんだろう？ 神姫でもそういう手続きって、出来るもんなのかな？」

「うーん、一応同居しているAIからの通報事例がないわけじゃないんだけど、搜索願いみたいなものは通常親族から出るのが一般的だから……一番は深波さんの家族と連絡を取るのがいいんだけど……」

それは理想だが、おそらくそれが出来ないから、わざわざ自分のように、普段絡みのない人間に連絡をしてきたのだろう。

それは裏を返せば、それだけシャウラさん達の状況がひっ迫しているということでもある。とにかく、今はシャウラさん達からの連絡を待つしかない。気ばかり急ぐが、そうであってもどうしようもないのだ。今は必要になるであろう情報を調べておくくらいしか出来ない。

「オーナー、シャウラさん達、大丈夫かな……？」

「分からないけど、何か手を貸せることがあるはずだ。今は、それをしておくしかない」

キーボードを叩きながら、渚さんに返事をする。渚さんの声は、不安で曇っていた。

『You gat mail!』

電子音声が、メールが届いたことを告げる。果たしてそれは、シャウラさん達からだった。

Mk. A様からは、すぐに返信が来た。

通信ツール……確かに主はその手のものを使ってはいなかったが、イヤホンマイクを持っていた。その類いのツールがある可能性は高い。

PCの中を検索すると……あった。少し古いものだが、これで大丈夫だろうか。メールでその通話ツールの名前と、これで大丈夫かを確認する。

僅かな間を開けて返信が返ってくる。大丈夫なようで、アカウント名と一緒に記載されている。そのアカウントにコールをすると、すぐに通話状態になる。

『もしもし、シャウラさん?』

「はい。申し訳ありません、マスターMk。A様。でも、他に頼れる方もいなくて……」

その声に、ほんの少し、安堵する。もしかしたら、主の行方について、心当たりがあるかもしれない。あまりにも安直な考えだったが、そんな思いにさえすがってしまふほど、私は消耗していた。

『シャウラさん、大丈夫？ あたし、渚だよ』

「ああ、渚さん……本当に、こんな連絡をして申し訳ありません……」
『シャウラさん、まずは、状況を教えてほしい。自分達はそこに行くことは出来そうにないけど、出来る限りのことはするから』

その言葉が、弱った心に染み渡る様に広がっていく。

Mk。A様に促され、分かっている限りの状況を伝える。主が昨日の朝から行方が分からないこと。PC上に書き置きがあつたこと。一昨日の『襲撃』のこと。主のご家族やご友人のことが、何も分からないこと。そして、主自身のことも、碌に分からないこと……。

そのことに、後悔と、羞恥が混じった感情が湧き上がる。自分の主のことも碌に知らずに、何が主の望むものを裁つ刃か。何が『青裁ち鋏』か。だが、それでも伝える。まるで、懺悔をしているような気分だ。だが、それでもいい。私ひとりの懺悔で、主が救われるなら、私なんてすべてを捧げても構わない。

『ふむ……シャウラさん、これは素人考えだけど、おそらく、一昨日に起こった襲撃がきっかけになっているんだと思う。で、その担当の刑事さんとは面識があるんだよね？』

「ええ、榊刑事……直接の連絡先は主の携帯がないので分かりませんが……」

『ならば、その刑事さんの所属している警察署は分からないかな。あとは、よく会った場所とか……』

「あ、喫茶店「COL」！ あそこのマスターなら、榊刑事と連絡が取れるー！」

『そのマスターに連絡は取れそう？ 刑事さんと直接話が出来るとうになるんなら、後は直接部屋を見てもらえるだろう。その方が早いだろうしね』

「ありがとうございます、マスターM k. A様、渚さん……本当に助かりました……」

『何ほどのこともしていないよ。それと、シャウラさん。自分はマスターなんて呼ばれるほど大した人間じゃない。せめて、M k. Aさん、とか呼んでくれたら助かる。いろいろこそばゆくて』

「承知しました、M k. A様。とにかく一度、喫茶「COL」のマスターに連絡を入れてみます。それと……もしお嫌でなければ、この後分かったこともご連絡させてください。今の我が家には神姫しかおらず、どこかで人間の常識と齟齬が出ないとも限りませんので……」

『それぐらいなら、喜んで。むしろ今日は一日休みにしてしまっただ、いつでも連絡をください。何か役に立てるかもしれない』

「本当にありがとうございます。またすぐ、追って連絡します。それでは」

通話を切ると、横でアルキオネとメサルティムがPCと有線で繋がり、K 駅前の喫茶「COL」の連絡先を調べてくれていた。次は、あのマスターだ。アルキオネ達がすぐに喫茶店の電話番号を入力する。

「もしもし? 喫茶「COL」でございます。シャウラ? 神姫?」

……ああ、榊の奴に付き合ってくれたあの男の子の神姫さんか! 久しぶりだね、どうかしたかい? ……なに、行方不明? で、榊の連絡先がほしいと。よし、わしに任せてくれ。今から……そうだな、十五分ほどしたらもう一度電話をかけてもらえるかい。それまでに榊の奴をここに呼んじまうから……なあに、気にすることはないんだ、どうせもうちよつとすると昼飯に出ちまって、捕まえづらいからな。その前に、店の方から誘っておくだけのことさ。それじゃあ、十五分後にね。あ、あとシャウラちゃん! あんまり気を落とすなよ! あの子ならきつと大丈夫だから! それじゃ」

電話を切ると、すぐにそのまま手慣れた番号を打ち込む。コール音を挟み、聞きなれた男の声だ。

『もしもし? マスター? どうしたんですか、工作中ですよ』

「そのお仕事に関係のある話だ。たまにうちの店に顔を出してた男の

子、シャウラちゃんって神姫を連れてる……」

『深波くんですか？ 彼に何か？』

『どうもこうも、今、行方が分からんらしい。お前、ちよつとこつちの店に来てシャウラちゃん達と直接話して、一緒に考えてやれ』

『やれやれ……今からですか。まあ、急いで行きますけれどね。やつといってもらうこともあるんで、十分後にお店に行きますよ』

『おう、なるべく早く頼むぞ、榊』

『まったく、人使いの荒いことだ』

「回り回ってきて、お前の番が来ただけさ」

そう言うのと、榊の奴は苦笑して、電話を切った。

予告していた時間より早く姿を現したのは、榊なりに気にかけている証拠だろう。

「マスター、コーヒーください」

「まったく、なんでもないときにもこの店に来てコーヒーを飲もうという気にはならんもんかね。いつもいつも厄介事と一緒に店に来おつてからに」

「回り回って、そういう役目になっただけですよ、マスターが」

さっきの意趣返しか、そんなことを言いよる。まったく口ばかり達者な奴だ。コーヒーの支度をし終えると、また電話が鳴る。

「はい喫茶……ああ、待つとつたよ。今代わる。榊、ほれ」

「もしもし、お電話代わりました、榊です。シャウラさん？ ええ、とりあえずマスターからは、深波君が行方不明、とだけ……成程、昨日から。それで、どこに行ったか心当たりは……分からない。書き置き？ 成程、それならいつそ、そつちに見に行つた方が早そうだね。今からそつちに直接行きましょう。住所は分かります？ はい、はい、分かりました。それだと、一時間……一時間半くらいかな、とにかくそのくらいで着けると思うので。はい、不安なのは分かるけど、まずはそつちに行つてから……ええ、それじゃよろしくお願いしますよ。それじゃ、また」

「どうだったね」

「いや、相当参ってますね。まあ、昨日の今日だし、仕方がないんです

けど」

「何かあったのか」

「ええ、まあ……熱いな、コーヒー……」

「馬鹿もん、わしが一度でも、客に冷めたコーヒーなんぞ出したことがあったか」

そう言うのと、榊は困ったように頭を搔いた。

「こいつは参ったな。先に車、手配してきちまうか」

「何だ、コーヒーくらい飲んでいけ」

「じゃあ、ちよつと電話だけ……」

そう言うのと榊は懐から取り出した携帯電話で何やら話し始めた。その電話をしている間、榊の顔は、刑事の顔をしていた。

『I P WIN』

その表示が出るとすぐ、サレンダーボタンを押してゲームから離脱する。グローブとゴーグルを外して所定の位置に戻すと、誰にも声をかけずに、さつさと店を出る。帽子を目深に被り、マスクと眼鏡……分かりやすい不審者だな、と心の中で自嘲する。

ジョーカーの動作チェックは順調だった。当然だ。あれほど因縁のある機体であるにも関わらず、いや、だからこそコンデイションを保つことには細心の注意を払い続けてきたのだ。

ロストマンの指定した日まで、まだ時間はある。その間は、とりあえず転々とするしかあるまい。一か所にとどまれば、迷惑がかかるかもしれない。

シャウ達は、心配しているだろう。でも、一緒にいるわけにはいかなかった。万が一にも、シャウ達を失うわけにはいかない。

リサをなくした後、何者でもなくなってしまった俺を、俺として生かしてくれたのは、シャウ達だった。シャウ達がいなければ、俺は一人で生きることが良しとしたまま、自分の殻の中に閉じこもっていただろう。

今だって、リサを忘れたわけではない。それでも、その痛みと共に生きることは出来る。それを気付かせてくれたのは、シャウ達だ。

「ロストマン……」

俺は数年ぶりに相棒の名を口に出す。ロストマンが俺を許していないのは分かる。しかし、それでシャウ達を巻き込むのは許せなかった。ロストマンは俺を許さないだけでなく、俺を救うすべてを許さないと言ったのだ。

自分だけであるならば、あるいはロストマンに捧げてしまったかもしれない。しかし、周りをも巻き込んで復讐するというのならば、止めなければならぬ。そのためには……。

「俺のすべてを、賭けてやる……」

俺は再び、呟いた。

「で、榊さん、なんでここに転がり込んで来るんですかねえ……」
「いいじゃないか菊川くん、どうせ今週一杯は帰れないんだろう？
その忙しい合間で悪いとは思ってるんだが、ちよこつと間借りさせ
てくれよ」

一通り我が家で現状を話した後、私達は東京にある、Front
Lineの研究施設に連れてこられた。月に一度はメサルタイムの
検査でお世話になっている、菊川研究員の所属する研究施設だ。

「榊さん、本当にここを警察のための喫茶室なんかだと、勘違いして
いるでしょう。これでもね、ここは最先端の研究施設で、本来ならそ
うそう簡単に入れるような所じゃないんですよ？」

「まあまあ、そこは持ちつ持たれつといこうじゃないか、ねえ、ハッ
カーの菊川くん？ 君が大手を振って娑婆にいられるのも、どこかの
ボンクラ刑事が君のことをほったらかしているおかげだ。違うかね
？」

「そういうこと、言い出しますか!? しかも今！ あのねえ、今本当に
忙しいんですよ！ そうでなくても上は現場を無視してMK2を販
売開始にしちゃうし、おかげで武装の生産は間に合わないし……知っ
てますか？ 今ウチがなんて叩かれてるか……老舗がついに完全版
商法に手を出した、なんて言われてるんですよ！ まったく、上も
ユーザーも、現場の苦労なんて分かっちゃいないんだ。それをその上
こんな厄介事まで持ち込まれて……」

「ご高説は今度、充分に拝聴させてもらうよ。とりあえずでいいんだ、
とりあえずで。まあ、個人的には後々君の手腕をちよこつとお借りす
ることになるかもしれないが」

「そんなこと言って、ちよつとで済んだ試しなんか、一度もないじゃな
いですか！ ええ、いいですよ、どのみちあんたみたいな
不良警官に尻尾を掴まれた時点で僕の人生はお先真つ暗なんだから。
その代わり、気まぐれに逮捕状を持ってここに来るような真似だけは
しないで下さいよ、本当に」

「あの……聞いてはいけない会話の様な気がするのですが……大丈夫なのですか？」

「ん？ まあ、こうやってお互いに冗談を言い合う関係なんだと思っ
ていてくれ。勿論、菊川くんの名誉のためにも、くだらない冗談を広
めるようなことはしないように頼むぜ？」

そう言うのと榊刑事は人差し指を立て、自分の唇に当てる仕草をし、
微笑んだ。

「……しかし、意外だったね。君達は何か、深波くんの過去のことを聞
いているんだと思っただが」

主の、過去。榊刑事はここに来るまでの道すがらで、簡単に教えて
くれた。主が、元世界一位になるほどのプレイヤーだったこと。ある
事件をきっかけに、一切表舞台から姿を消したこと。

「深波月夜とロストマン……ちよつと古いゲームファンなら、まあど
こかで聞いたことのある名前だな。こんなおじさんでも、顔と名前は
知っているくらいに、ね」

ロストマン……かつて主が相棒と呼んだ人。そして、おそらく先日
の、主を襲撃した事件の首謀者。

「まあ、彼が永遠の相棒、という言葉に何の反応も示さなかったんで、
何かあるだろうとは思っていたが。まさか君達を置いて行方を眩ま
すとは思わなかった。その点に関しては、不用意な伝え方をしたこと
を、君達に謝罪せねばならないね。本当に済まなかった」

「そんな過ぎちやっただこととはどうでもいいんだ。ボクはどっちかって
いうと、この先どうなるのかの方が気がなるんだけど？」

私達に向かって頭を下げる榊刑事だが、アルキオネの辛辣とも取れ
る声が迎え撃つ。

「そうツスね……自分も、それが気になるツス……ご主人は、どうなっ
ちやっただんスか？」

「ふむ、きつき、君達の家を簡単に調べた時にメモしてきたんだがね。
ブラウザの表示履歴だ」

そう言うと、榊刑事は空いているPCを立ち上げると、手慣れた様
子でアドレスを打ち込んでいく。

「これは……?」

「まあ御覧の通り、フリーメールのアドレスだね。アカウントはこれだが、パスは……菊川くん、どうにかならないかね?」

「えー、その年頃の子なんかは、好きな子の名前でも入れりゃあ開くと思いますよー。後は勝手にどうぞー」

「ふむ……当時の深波くんの恋人ね……」

そう呟いて、榊刑事はキーボードを叩く。R、I、S、A……開いた。なんでそんなことを知っているのかといぶかしむ私の視線に、有名なカップルだったからね、と榊刑事が付け加える。

そこに表示されたメールのリストの、最新の一件だけがつい先日の日付だった。それをクリックすると、本文が表示される。

「ほう、これは、中々の文面だね」

「一週間後の、午後九時……」

そこに英文で書かれていたのは、主に対する恨みを綴った、ロストマンの犯行予告とでも言うべき文章だった。

「このために、マスターはボクらを置いて出ていったってこと?」

「自分達を守るために、置いていった、ってことツスか……?」

「まあ、そういうことだろうね。そのことは、彼の近くにいた君達の方が確証を持てるんじゃないのかい?」

ほとんど同時に疑問を口にしたアルキオネとメサルティムに、榊刑事が答える。

それでも、私にはわかには信じられなかった。アルキオネが言ったように、私達が大事なのだとしたら、それを捨てていくようなことが、本当に出来るのだろうか。

「なににせよ、君達のご主人様が動くであろう時間は分かったわけだ。後はその時に、迎えに行けばいい。それまではちよつと間があるけれど、なあに、一週間ぐらいならあつという間さ」

「それまでの間、主を探すことは出来ないのですか?」

「ふむ、個人的にそうしてあげることは出来なくはないんだが、何せ警察としてはまだ彼の搜索願いを受理したわけではないからね。何より、法的には物である君達武装神姫からは、緊急時以外での通報は受

けられない、って規定がある。まあ、この辺は法整備が追い付いていない部分だと、僕個人は思うのだがね」

「警察ってのは案外、役に立たないんスね」

メサルタイムの悪意のない言葉も、この場では辛辣に響く。でも、そこに込められた思ひは私達の心を代弁したものであつた。

「いやまったく、耳が痛いね。公僕としては、申し訳ない限りだよ」

「でも、迎えに行くつたって、ここに書かれてる場所がどこだかなんて、分からないじゃないのさ。何か調べるあてはあるの？」

「まあ、その辺は任せてくれよ。これでも一応、僕の個人的なお願いを聞いてくれそうなり合いくらいは、何人かいるのさ」

「榊さん、数に入れないで下さいよ、僕のこと」

榊刑事の言葉に、菊川研究員が声を上げる。それを聞いて榊刑事は笑い声をあげるが、菊川研究員はともそんな気分にはなれないように、忙しそうにキーボードを叩いている。

「まあ、数に入れさせてくれれば頼もしいが、今回はよしとしよう。鑑識課の方に詳しい友人がいるのでね、個人的に頼んでみるさ。とりあえず今は、シャウラさん達の面倒を見てもらえるだけでよしとしよう。それに、最終的には菊川くんに頼らざるを得ない場面も出てくるだろうしね」

「榊さん、先に言つときますけれどね、本当に、今回だけは勘弁してくださいよ。そんな暇があつたらね、僕は半日でも、自宅の布団で眠りたいんですよ」

「なに、君の手腕ならそんなに手間のかかるようなことじゃないさ。

これでも僕はね、君の技術だけは、本当に評価しているんだよ」

「榊さんに評価されても、僕はちつつつつつとも、嬉しくないってことだけは覚えといてくださいよ」

「まあまあ、持ちつ持たれつ、つてことで、ひとつ頼むぜ」

「あーあ、まったく、とんだ不良警官だ」

「褒め言葉として、受け取っておくよ」

榊刑事と菊川研究員の会話は、相変わらず立ち入れないような冗談が飛び交っている。

「まあ、そんな話は置いておいてだね。とりあえずこれで、当座の衣食住は心配ないだろう。あと何か必要なものはあるかね？　あるなら明日の夜にはなるが、向こうの家から持ってこよう」

「それは大丈夫ですが……主を迎えに行くという話、どこまで本気なのですか？」

「どこまでも、さ。そのための道は、菊川くんが頑張って作ってくれるよ」

そう言うと榊刑事は、その顔に似合わずウインクをして見せた。

メールに記載された日までは、過ぎてしまえばあつという間だった。焦れるときが多かったが、それでも時間は過ぎていくものだ。

「さて、これから君達のご主人様を迎えに行くわけだが、準備はいいかね？」

「ええ」

「ここまでやってきて、駄目ってことはないでしょ？」

「準備完了、ツス」

榊刑事の問いかけに、三人がそれぞれに答えると、榊刑事が結構、とうなずく。三人はそれぞれ、自宅から持ち出した武装を纏っている。「それじゃ、簡単にだが今回の作戦をおさらいしよう。まあ、作戦と言っても複雑なことは何もないんだがね」

三人の顔を、榊刑事が見渡す。

「今回の作戦は、至ってシンプル。君達が二手に分かれて、一方は深波くんを迎えに行く。そしてもう一方は、その侵入口を確保する。それだけだ」

その話は、すでに何度か聞いている。つまりは主がいると思われる電腦空間に対してハッキングを仕掛け、データとして侵入しているであろう主を回収する、というものだ。

「おそらくだが相手も横槍が入らないように工夫はしていることだろう。ファイアウォールや、ウイルス対策ソフトのようなものの抵抗が予想される。侵入口を、それらの抵抗から守るディフェンスが必要だ。それを、アルくと、ミーシャちゃんが担当する」

アルキオネと、メサルタイムがうなずく。その目は、決意のようなものに溢れていた。

「回収役は、シャウラさんが担当。ファイアウォールなどを破りながら、電腦空間の奥深くまで侵入し、深波くんを連れて戻る」

私も、うなずく。言っていることは簡単だが、それぞれに防衛プログラムはあるだろう。それらに、いわば私達自身がウイルスとして侵入し、ハッキングを行わなければならない。

「電腦空間でも、神姫はプログラムとして機能する。つまり、君達はバーチャルでバトルをするように戦うことが出来る。そこまではいいね?」

「勿論ツス」

「で、何か問題があるのかな?」

「ふむ。問題と言うか、だがね。まあ、簡単に言ってしまうえば、おそろく君達が相手をしなければならぬ、防衛プログラムについて、だ。事前に調べてもらったところによると、それほど複雑なプログラムではないらしい。が、とにかく数が多いんだな。おそらく、多重起動が可能なプログラムを立ち上げて、数にものを言わせてくれることが予想される。つまりディフェンスの二人は、シャウラさんと深波くんが戻ってくるまでは戦いつばなしになるってことだな」

「はい、今のクツソ忙しいさなかに、僕が調べました」

半ば死んだような眼で、菊川研究員が会話に割り込む。

「はい、ありがとうございます。感謝してるよ菊川くん。で、だ。シャウラさんには、一刻も早く、行って、戻ってきてもらわないとならないのだが……こちらもおそらくだが、ファイアウォールの他に、ロストマンの抵抗が予想される。まあ、彼の狙いは深波くんの命らしいからね、当然と言えば当然だが。それを撃退して、深波くんを連れ出す必要がある。いいかね?」

「はい」

私は、うなづく。私の装備は、主の組んだ高速装備。それにウエストアーマーと、左肩のソードビットコンテナ。アイシールドと、アームガードだ。それに今回は、右肩にGNソードIVフルセイバーを載せている。

「しかし、シャウラさん、本当にその装備で行くのかい? 元になったキット、ずいぶん古いぜ。よく整備されているけど、こう言っちゃあなんだが、ソードビットコンテナなんか、骨董品だ。使い慣れたのは分かるけど、新しいものを使うつもりはないのかい?」

菊川さんが、その声をかけてくる。確かに、このソードビットは大振りだし、出力もその割に高いとは言えない。Front Line

社が先だつて発売したアーソナル Mk 2 用の装備にも、『リアーナ』という名前の小型のソードビットがあつたはずだ。ここは Front line の研究室だし、武装の開発も行っているのだから、頼めば貸してくれるのかもしれない。それでも。

「いえ、私を使うのに、速度と機動力を載せるのならば、この装備しか考えられません。一息に、主の元まで駆け抜けるのみ！」

「いい覚悟だ。それじゃ、僕はちよつと用事があるので、これで失礼するよ。あとのことは菊川くんがやってくれる。よろしく頼むよ、菊川くん？」

「はいはい、まったく本当なら今頃は……二週間ぶりに布団に入るはずだったのに……」

榊刑事が部屋を出ていき、菊川研究員がぶつぶつと文句を言いながら、キーボードを叩く。時計は午後八時四十五分……。

「あと十五分だね、シャウラ」

「アルキオネ、以前私が、貴女のことを嫌いだ、と言つたのを覚えていますか？」

「なんだよ、急に。よく覚えてるよ。そのときも、ここにいたね」

「私、あの時から変わりました。あのとき、貴女のことを嫌いだと言つたのは、貴女に対する嫉妬だった。それに気づいた時から、いつかあなたに謝りたいと思つていました。ごめんなさい、アルキオネ」

「なんなんだよ、今日は……変だぞ、シャウラ」

「丁度いい機会だったから、伝えておきたかつたのですよ」

「なら、ボクもひとつだけ……あのとき、シャウラを嫌いだつて言つたのは、やきもちだつたんだよ。マスターは、いつもシャウラのことを気にかけて、ボクのこととはほつたらかしみたいに感じてたから……今はそんなことないけど、ボクも、謝りたいつて思つてた。ごめんな」

視線が、絡む。どちらからともなく、笑みがこぼれる。

「姉さん達、なんでそう死亡フラグみたいなのを臆面もなく立ててるんスか。駄目ツスよ、絶対みんなで、帰ってくるんスから」

「言われるまでもなく、そのつもりですよ、メサルティム」

「そんなこと言って、真っ先にやられちゃうなよー？ この中じゃ、メサルタイムが一番勝率悪いんだからなー」

「総戦闘回数ひと桁のアルキオネさんに言われたくねーツス。これでも自分は、勝利回数だけならアルキオネさんより高けーんスよ？」

また、笑いがこぼれる。これから行くのは戦場だと言うのに、この弛緩した空気は何なのだろう。だが、それは決して悪いものではない。

「全員で、帰ってくるぞー？」

「うツス。それだけは、間違いなく果たすツスよ！」

「ええ、戻ってくるときは、四人で」

三人が、拳を合わせる。四人で、帰ってくる。約束だ。

「お話中悪いんだけど、回線、開けたよ。有線で繋いでくれるかい？」

順番に、電脳空間に送り込む。それと、僕が出来るのはあくまで君達に回線を繋げて、助言をする程度で、直接的な支援は出来ないからね」
「ありがとうございます、充分です」

三人で、それぞれに背中のコネクタにコードを接続し、PCと繋がる。

「それじゃあ、三人とも、頑張つてね。僕から言えることはそれだけだ」

「ご親切に、ありがとうございます、菊川研究員。感謝してもし尽くせません」

「感謝なんかしなくていいよ、僕としてはメサルタイムくんになくなられると、論文の研究症例が減ってしまうから、それは避けたいし。それに、僕が手を貸さなくても、榊さんなら何とかしちゃうでしょ」
「それでも、私は貴方に、感謝を伝えたいのですよ」

「まあ、悪い気はしないね。でも、それは君のご主人様を取り返すまで取っておきなよ。それじゃ、送るよっ」

「お願いします」

菊川研究員の指が、エンターキーを叩く。私の意識が、電脳空間に溶け出していく。良い旅を。瞳を閉じる最後の瞬間、菊川研究員が、そう、言った気がした。

時間は、午後八時四十五分。

「そろそろ、か……」

インターネットカフェの一室で、俺はネット対戦の準備を整える。対戦用の設備も、今やこんな場末のネットカフェでも貸してくれるようになった。

「楽な時代になったな……」

コード類を所定の個所に接続し、帽子を被ったジョーカーもそれに繋ぐ。ジョーカーの、光の灯らない眼を覗きこむと、その複眼に俺の顔が映る。寸刻、それが知らない男の顔に見えたのは、気のせいだろう。それは、リサを殺した『凶器』でもあった。

「……とんだ切り札もあつたものだな、まったく」

ぼそりと、呟く。キーボードで、所定のアドレスを入力する。そこは数年前、俺とロストマンが打ち合わせや訓練で使っていたバーチャルフィールドだ。接続したのを確認し、ゴーグルとグローブを着ける。

俺を襲撃した男は、俺をサーバーから出られないようにするつもりだった。その目論見は、こちらからサーバーに接続して乗り込んでいく状況では、叶っているのも同じことだ。ロストマンが何を狙っているのかは分からないが、少なくとも穏やかな談笑は期待しない方がよさそうだ。

「さあ、行くぜ、相棒」

口を衝いて出た言葉、それは一体、誰に向けた言葉だったのか。俺自身にも、分からなかった。

薄暗い空に、荒れ果てた大地。その中にひとときわ目を引く、巨大な門扉。私達が目を開けた時に見えたものが、それだった。ここが電脳空間への入り口なのだろうか。普段のバーチャルバトルと、感覚的な違いがないことに、逆に戸惑う。

「この扉を破って、入っていけばいいんスカね？」

「多分、そういうことだと思っけど……？」

二人もやはり戸惑っているようだ。

『そういうことだよ。その扉は疑似的に可視化された、防衛プログラム……まあ、ファイアウォールだね。それに攻撃を始めた瞬間から、君達は敵性プログラムと認識されて、ワクチンプログラムの攻撃が始まるはずだ』

躊躇する私達に、菊川研究員の声が聞こえてくる。どうやらオンラインで音声だけ送ってきてくれていているらしい。

「そういうことなら、さっさと穴を開けてやろうか。ここから先は、シャウラが駆ければいいんだろ」

『そういうこと。この先はシャウラさん自身がアリアドネの糸玉だ。戻りのルートで抵抗されることはないから、帰りのことは心配しなくていいよ』

それは正直に言って、助かる。フルセイバーは元から、使い捨てにして運用することを想定している。帰りの道行でも使うとなると、フルセイバーを大胆に使うことが出来ない、心配していたのだ。

「それじゃ、一丁やってやるツス。行くツスよ！」

メサルティムが、チーグルサブアームに握られたジレーザロケットハンマーを振りかぶる。その後ろでは、アルキオネが射撃の体勢に入った。

「スキル発動！ 『アポカリプス・エクゼキューション』！」

「こつちも発動！ 『ファイアフライシユート』！」

メサルティムが駆けけながら横薙ぎに一撃、次いで跳び上がり、重力を加えた重い一撃で扉を叩く。さらにそれを追って、アルキオネの

放ったマイクロミサイルと両肩のアトラスランチャーが襲う。大きく歪んだ扉に、一気に突っ込む。

「スキル発動……『セブンスソード』！」

ビットと合体し長大なバスターソードとなったGNソードVを振るう。その一撃で、扉は両断され、私はそのまま門の中に駆け込んだ。『さあ、出てくるよ、注意して』

菊川研究員の注意に時を同じくして、無数のネイキッドが姿を現す。それを、門の外にいる二人が、次々になぎ倒す。

「行くツス、姉さん！」

「マスターのこと、頼んだよ！」

返事は返さず、振り返ることもしない。ただ、その声に応えるように、バーニアを吹かして一層加速した。

「こんな場所だった、かな……」

時間通りに指定されたバトルフィールドに入ったつもりだったが、その場所は俺の記憶にあるものとはずいぶん違っていた。

広大な空間に、何本もの柱だけが立っている。壁と、天井と、柱しか見えないその空間は、さながらどこかの地下神殿のようにも見えた。

「ようこそ、ツクヤ」

その声に振り返る。一段高いその場所に立っていたのは……。

「シャドームーン……ロストマンか？」

「ああ、そうさ。久しぶりだね、ツクヤ」

耳慣れた、相棒の声。それを発しているのは、銀色の鎧に身を包み、真紅の剣を携えた機体だった。ロストマンがまだプレイヤーとして活躍していたころ、シャドームーンを使っていたという話は、聞いたことがあった。

「ロストマン……俺は……」

俺は、ロストマンの方に歩み寄った。ロストマンの声は、記憶の中にあつたロストマンの声そのままだった。それは、最高のビルダーで、相棒で、兄貴分で……ロストマンがいて、俺がいて、リサがいた、

あの頃のままの声だった。

「俺は……」

「ツクヤ。元氣そうで、何よりだよ」

優しい、声だった。あの頃のままの、声だった。

俺は、何のためにここに来たのだろうか。ロストマンは、あの頃から何も変わっていないからではないか。俺が、勝手に思い込んで、ロストマンを悪者にしていただけなのではないか。だって、相棒はこんなにも、相棒のままだったのに……。

銀色の姿が、ロストマンとだぶって見える。その姿が、ゆっくりこつちに歩み寄ってくる。済まない、ロストマン。俺がそう言おうとした、その時だった。

「神姫、始めたんだって、ツクヤ？　ホウオウハイの放送、見させてもらったよ。初出場で決勝トーナメントまで残ったんだってな。流石だよ」

「あ、ああ……」

そんなことより、昔の話がしたかった。俺の罪を、お前に謝りたい。リサがいなくなったあの日から、俺達は一度も言葉を交わしていなかった。そのことを、謝りたい。その間の時間を、取り戻したい。しかし、俺が口を開こうとするタイミングで、ロストマンは言葉を継いだ。

「いい笑顔だった。ツクヤの笑顔を、久しぶりに見たという気がしたよ。まあ、実際僕が君の顔を見るのなんて、数年ぶりなんだけどね。」
そんなところまで見ていたのか。俺は、視線を逸らした。その瞬間だった。

いつの間にか、壁に寄り添っていた。何かで壁に押し付けられている。頬は、ジンジンと熱く、壁の冷たい感触がやけに対照的だ。その冷たい壁が、床だと気づいたのは、数秒経ってからだった。頬の熱さが、痛みだと気づくのさらに数秒。ロストマンの操作するシャドームーンに殴られたのだと気づくには、たつぷり十数秒はかかっていた。

「いい笑顔だったよ、本当に。純粹にバトルを競技として楽しんでい

る顔だった。でも、忘れてしまったのかい、ツクヤ？ 君はそのバトル競技で、人を一人、殺してるんだってことを。もう、忘れてしまったのかな？ リサを、妹を、その手にかけてたって事実を、さ」

ロストマンの声は、変わらず優しかった。しかし、さっきまでとは比べ物にならないくらいに、その声は俺の心をえぐった。

「忘れてしまったのなら、思い出すといい。存分に、思い出させてあげよう。君は、人殺しなんだよ、ツクヤ。俺の大事な妹を殺した、大罪人さ。その君が、楽しそうに、のうのうとバトル競技の世界に戻ってくる？ そんなこと、許されるはずがないだろう。いや、世界の誰が許しても、僕も、リサも、決して君を許したりしない。そうさ、君が、君だけが、何を勝手に救われたつもりでいるんだ！ 忘れてしまったのなら、思い出させてやる。すべてをなくす痛みを。かきむしっても消えない苦しみを。今の君の、すべてを壊すことだな！」

燃え盛るような感情が、溢れてくるようだった。その声からは、殺してもなお飽き足りないというほどの憎悪が、痛いくらいに感じられた。

「ロストマン、俺は……」

「ああ、言わなくていい。何も、言わなくていいんだ、ツクヤ。君から聞きたいことなど、何ひとつない。ただ君は、おとなしく、僕にすべてを差し出せばいい。いや、別におとなしくする必要はないか。君がどうしようも関係なく、僕がすべてをさらっていくからな、あのときの、君みたいに」

シャドームーンが、携えていた真紅の剣『サタンサーベル』の切っ先を、俺の方に向ける。視線から、声から、その仕草まで、すべてが敵意に満ち満ちていた。

「ロストマン、俺の命ひとつならともかく、俺は、すべてを差し出すつもりはない。お前にそんなことをさせるつもりも。だから、止める。お前を倒してでも……」

「ああ、そのことなんだがね、ツクヤ。先に言っておくよ。僕も、出来たんだよ。リサと同じ、過剰同調が。まあ、普通は狙って出来るものでもないのだからうけれど」

「な……」

俺は、言葉に詰まる。首をもたげた闘志が、水をかけられたように感じた。

「それに、知っているんだぜ、ツクヤ。その左頬、痛むだろう?」

「ああ、さつき誰かさんが強かにぶん殴ってくれたからな」

「それが過剰同調だよ。つまり、俺も君も、ここで倒れるということ
は、死ぬ、ってことさ」

ロストマンの声が、嘲笑うように、そう告げた。

過剰同調は、機体設定ごとの微細な感覚の差異が、自分自身の体の感覚と寸分の狂いもなくなったときにのみ起こりうる。

その最先端の病理に、僕は挑んだ。しかしそれは、過剰同調を防ぐとか、それによる事故をなくすとか、そんな崇高な目的があったわけじゃない。ただ、同じ病理を抱えているであろう男を殴る。そのためだけに、僕は幾億幾兆とある微細な設定の差異を、僕の体に合わせるための調整を繰り返した。

同調率が高まるほど、その機体は自在に操ることが出来る。その代償として、機体が損傷した場合には、同じだけの痛みを引き受けることになる。だが、それでも良かった。そんなデメリットは、今回は無視出来る。ただ、自分の意のままに、思い描いた動きを再現出来る機体。それだけを追求すればよかった。

そんな機体の開発を始めて、三月。それは意外なほどにあっけなく完成した。僕の体を動かすのと、寸分たがわぬ感覚で動かし得る機体。それが、このシャドームーンだ。

かつて、最愛の妹リサが、唯一の相棒ツクヤが、ただ自分の理想を体現する機体を求めたように。その時の経験が、シャドームーンを開発する際の指標になった。リサの、ツクヤの、その時の経験を、自分の体に置き換えた。それは決して簡単な作業ではなかったが、世界の賢たる僕には、なし得ないことではなかったのだ。

「だからね、条件は対等なんだよ、ツクヤ。この場では、僕達は互いの命をベットして、戦うことが出来る」

「何を言ってるんだ、ロストマン……そんなこと、出来るわけがないだろう！」

「そんなことってのは、過剰同調の再現のことかな？ それとも、互いの命を賭けて戦うことかな？ 甘いね。前者は僕の天才を以てすれば、不可能なことじゃあなかった。過剰同調も三例目だしね。後者は……リサを殺した君には、言うまでもないことだろ？」

薄く笑いを浮かべたが、残念なことに鉄の仮面で覆われたシャドー
ムーンの表情は変わらない。

「さあ、御託は終わりだ。戦おうじゃないか、ツクヤ。そのつもりで来たんじゃないのか？」

「だからって、俺は、お前を、お前まで……」

やれやれだ。かつての相棒はここまで煮え切らない男だったか？

まるで生煮えの卵じゃないか。

「なら、ひとつ教えてやろう、ツクヤ。君がここで負けたら、その後に僕が、どうするつもりかを」

その声に、うつむいたジョーカーがこちらに視線を向ける。僕は、意識の中で、画面を操作する。地下神殿の壁に、ある映像が映し出された。

「これは……!」

「よく知っているだろう？ 君が今住んでいる、アパルトマンの部屋だよ。少々直接的に過ぎたが、君の家には僕の手の者が仕掛けた、盗聴器と監視カメラがある。こんな事が出来るってことは、他に、どんなことが出来るんだろうね？」

「……なにを、するつもりなんだ」

無機質な仮面の奥に火が灯ったように見える。いいぞ、それを、僕は待っていた。でも、まだまだ足りないな。僕は、言葉を継いだ。

「言ったら、ツクヤ。僕は、君を救うすべてのものを許さない、ってね。正直に言くと、だ。君を、今殺すつもりはないんだよ。君に死んでもらうのは、君が痛みと苦しみを、存分に噛みしめた後じゃないと意味がないからね。そのためには、まあ四肢のひとつももいで、動けなくなってくれる程度でいい。その後で……」

また、僕の口に薄い笑いが乗るのが分かった。でもツクヤ、君は、そんな気分じゃあないだろう……？

「君の、少ない友人にも。君の、神姫にも。ひどい目にあってもらうさ。君にはその様を鑑賞してもらって、まあ、死んでもらうのはその後だね」

「ロストマン、貴様……!」

いいぞ、瞳がめらめらと、燃えるようじゃないか。ようやくやる気になってくれたか。そうじゃないと、意味がない。君が本気で抗って、それでも尚どうすることも出来ずにすべてを僕にさらわれる。そうでなくては、僕の苦しみは伝えきれないだろう？

「どうだい、少しはやる気になってくれたかな？」

「俺の命はともかく、他の誰かまで巻き込むのは、許さない……」

「許さなければ、どうするね、ツクヤ？」

「お前を止める。例えそれが、お前の命を奪うことになっても……」

ジョーカーが、その頭に被っていたフェルト帽を投げ捨てた。ああ、その仕草だ。僕の妹を殺した、あのジョーカーが目の前にいる。そう思うと、僕の胸は興奮に高鳴った。

「どりゃああッス！」

メサルティムが、体ごと矢のような勢いで突っ込んでいく。ドロップキックだ。その着地の隙を埋めるように、マイクロミサイルが降り注ぐ。

「さらさらさら、まだまだ行くよー！」

追加されたブースターを吹かしながら、所狭しと駆けまわり、弾丸をばらまく。着剣されたアサルトライフルと、ビームライフル『アクティオン』。左腕にはランチャー『グラント』。両肩の『アトラス』には追加装甲が貼られている。ヘッドバイザーはノーマルのカブト型ヘッドギアより索敵性能の高い、マスターお手製のバイザーで、モノゴグルが追加されている。この日のために、というわけではないものの、単純にオリジナルのレッグパーツをはいていた頃よりはバージョンアップされている。

マイクロミサイルの爆炎が消えた後からわらわらと集まってくるのは、防衛プログラムの操るネイキッドだ。それらの一体一体は大した武装も持たず、動きも緩慢。相手をするのはさほどに難しいことではない。何せこっちは、二人とは言え一騎当千の神姫なのだ。旧態依然とした自律プログラムのネイキッドなど、大したことはない。そう、一体一体なら。問題となるのは、その数だ。

「確かに榊サンも数が多いって言ってたけどさあ……こんなに多いとは、思わないでしょ」

その数は、まるで町一つが汚染された後のゾンビ映画のようだ。次から次へと、それこそ無数に湧き出てくるようにして、ネイキッドは現れる。

ミーシャのハンマーが振るわれると、ネイキッドの体が弾け飛ぶ。吹き飛んだネイキッドが、他の連中にぶつかると、それでも、表情のない有象無象の大軍団は行進をやめない。

「いくらなんでも、これは、キリがねーッス！」

「泣き言言わないの。無双ゲームするような感覚で、ドーンとやっちやいなよ」

口を動かすだけじゃない、両肩のアトラスランチャーが火を噴き、ゾンビよろしく迫ってくるネイキッドの一角を吹き散らす。

「そうは言っても、自分はもともと一対一で戦ったことしかねーッス！」

「勝利回数はボクより多いんじゃないやなかったの？ だったら簡単にそんなこと言わないんだよ！」

ハンマーの尻が火を噴く。その名の通りジレーザの機械式ロケットの勢いが、最前面の一角を切り崩す。が、切り込むことは出来ない。今回のボク達の役割は、シャウラの突入した門の入り口を守ることだ。メサルティムもそれは分かっているようで、敵の前面を乱すと、また戻ってくる。そうしないと、周りを押し包まれてしまうのだ。そうなれば、いくら相手が有象無象といえども、無事では済まない。その戻り際を追ってくるネイキッドに、次々とアサルトライフルを打ち込んで蹴散らす。さつきから、その繰り返しだ。

「泣き言は言わねーつもりッスけどね、それにしたって、これはねーッス！」

「それが、泣き言って言うんだぞー？」

両手と両肩、腰とすべて狙いを違えて、それぞれに敵を狙う。今この状況では、狙いなんか多少外れたって構いやしない。どうせ誰かに当たるんだからとにかく、味方を撃ちさえしなければいい。

それにしたって、攻め手がメサルタイム一人、支援がボク一人つてのが辛い。とにかく、攻めるにしても守るにしても、点でしか場を支えられない。メサルタイムは特に、多数を相手にしての戦いには向かない。点なら点で構わないのだが、それならそれで、手がもう二、三本必要だ。

「ま、帳尻は現場で合わすしかないんだけどねー」

足りないと言えば手が生えてくるでもなし、苦しいのは端から覚悟の上だ。苦しいと言ったって、この苦しさが何ほどのものかというのだ。マスターがいなくなつた日の。誰も帰つてこなかった夜の。シャウラが涙を流した朝の。あの苦しみに比べて、どれほどのものだって言うんだ。

「……ちよーつとむかむかしてきたからね、八つ当たりしちやうぞー？ 『ファイアフライシユート』！」

ファイアフライシユートは、乱射乱撃を得意とする、ランサメントの本領発揮だ。全身に装備した火器が一斉に火を噴き、速射能力が一時的に高まる。弾丸がメサルタイムの横をすり抜けて、前面に出てきたネイキッドが、蹴散らされる。

「あぶねーッス！ 間違つても、後ろから撃たないでくださいッスよ!」
「失礼だなー、チミは。一度でもボクが後ろから誰かを撃つたことがあつたかねー？」

「とりあえず今は、自分に当たらなきゃ何でもいいッス、それだけはお願ひするッスよー！」

「まつたく、調子のいい奴だなー。特別だぞー？」

得意の軽口と共に、トリガーを引き絞る。立て続けにネイキッドが三、四体倒れていく。

かと言つて、この調子でばらまき続ければ、早晚弾切れを起こすことは間違いない。それでも、弾薬の節約なんて考えようものなら、メサルタイム共々あつという間にネイキッドの餌食だ。

「シャウラ、なる早で戻ってきてくれよな」

つい、口を衝いて本音が漏れる。メサルタイムには、多分聞こえてないだろう。それだけは、救いだつた。

壁の様子が、次々に後ろに流れて消える。その模様の一つ一つが、ミサイルランチャーや砲塔だ。手に構えたGNガンブレイドとアームビームガンでは碌に狙いはつけられないが、相手はそのほとんどが大型目標だ。多少狙いが甘くても、当たりはする。

「嬢ちゃん、ミサイル、来るぞ！」

「シールド、張ります！」

周辺の状況把握も、独力では一苦労だ。今はシロがビットコントロールの補助と共に、周辺警戒をしてくれている。思考がリンクしているシロとは別に言葉をかわす必要はなかったが、それでもお互い声に出して会話をしていた。

「前方一五〇〇、ファイアウォール！ こいつは破壊しねえと、抜かれそうにねえぞ」

『セブンスソード』で抜きます。ビットをこっちに」

右手に携えたGNソードVが、長大なバスターソードに変化する。そこからさらにグリップが折れ、刀身が開く。

「バスターライフル、征きます！」

エネルギーの奔流が、前方に放たれる。立ちふさがる壁はその一撃で大きな穴を穿たれる。だが、その周辺に配置された砲塔からは、絶え間なく火線が伸びている。

「フルセイバーが盾にしかありませんね……まあ、いちいち小物を相手にする余裕なんて、ないのですけど」

「一気に駆け抜けるには、それしかねえだろう。この先はまだまだあることだしよ……つと、また来るぞ、シールド、頼むぜ」

その声に、エネルギーの障壁を張る。爆炎が緑の光に遮られ、半球を描く。その合間を縫って、飛来するネイキッドをソードビットが切り裂いていく。

「まったく、数ばかりは出てくるんだから……」

ガンブレイドが吐き出した光弾が、前方のランチャーを破壊する。しかし、一基や二基を潰したところで攻め手が緩むのは寸刻だけだ。

「……嬢ちゃん、何を迷ってやがるんでえ」

「シロ……いえ、何でも……」

「誤魔化すたあねえ、互いに、頭ん中は繋がってるんだ。吐き出してもらった方が、こつちとしちやあ楽でいい」

「……主にとって、私達は……私は、何なのか、考えていました。私は、主にとつては、簡単に置いていけるほどのものだったのか、それが……」

「下らねえ」

重い口を開く私に、シロは一言、断ずる。

「そんなこたあ、兄さんを目の前にして、直接聞いてやりやあ済むこつた。そのために、嬢ちゃんは今兄さんの所に向かっているんだろうがよ。違うかい？」

会話の合間に、襲ってくるミサイルをシールドで防ぐ。激しい爆発音は、門を潜ってからこつち、途切れることがない。

「それを、聞くのが、怖い……」

「何言つてやがる。ならそのもやもや、腹ん中に呑み込んで、表に出すんじゃねえよ。そんなぐちやぐちやした思いで心中されたら、巻き添え食らう方はたまつたもんじゃねえや」

シロは話しながらも、ソードビットを振るう。迫ってくるネイキツドは、近寄ることも許さない、と言うように。

「だがよ、一言、言つてやるんなら、だ。ここまで一人の神姫に入れ込む野郎が、それを置いていくなんざ、並大抵のことじゃなかったんだろうさ。少なくとも、兄さんがあなたにかけた手間は、片手間なんかじゃあなかつたらうぜ。文字通り、自分の生活そのものを嬢ちゃん一人に賭けてなきや、出来ねえ芸当だ。それだけは、言つといてやらあ」

そう、その労力が並大抵のものでないのなんて、重々承知している。それでも私の胸には、重い不安がのしかかってくるのだ。

「第一だ、痴話げんかは猫も食わねえ。そんな話なら、兄さんが帰ってきてから、時間のあるときにでもやってくれ。そら、また来るぞ」

その声に、意識を外に振り向ける。飛んできた弾をシールドで受けると、反撃のビームガンでランチャーを黙らせる。

「痴話げんかだなんて、そんなんじや……」

「そんなんさ。痴話げんかじゃなかったら、何だっけ言うんでえ、まったく……」

シロの声からは、呆れたような響きを感じられた。

「そら、次の壁、見えてくるぞ。こっちから振っというてなんだが、そんな話なら後にしてくれや」

「……はい、征きますー！」

私は右肩に装備されたGNソードⅣの柄を握った。

赤く輝く刃が、空を斬る度に煌めく。その刃は、素手で受ければただでは済まない。それを大きな動きで回避する。こちらは徒手空拳だ。サタンサーベルの間合いを掻い潜り、密着距離まで近づかねばその威力は生かせない。

「どうした、ツクヤ。君の腕前はその程度だったか？　それとも、世界一のプレイヤーの技術とは、こんなビルダー崩れの手が簡単に届いてしまう程度のものだったのかな？」

「言ってくれるじゃないか……！」

頭上から振り下された刃を、裏拳気味の拳で打ち払う。そのまま体を捻る勢いに乗せ。上段蹴り。だが、シャドームーンもそれに合わせて蹴りを放つ。その動きは、いかに俺がブランク明けとはいえど、なら遜色のない動きだった。寸刻、お互いに力で押し合い、同時に後ろに飛び退る。

「心配だな、体調でも悪いのかい、ツクヤ？　本気でかかってきてくれていいんだぞ？」

好き放題に言ってくれる……だが、それに容易な反論を許さないほど、シャドームーンは強かった。

「心配するなよ、知ってるだろ、俺は尻上がりだからな」

「そうだったかな？　初耳だった気がするね」

サタンサーベルが空を斬る。その音がここまで届いてくるようだ。一度振り下ろしたサタンサーベルを再びまっすぐ構え直す。それを正面から見据え、腰のマキシマムスロットに手を伸ばす。

『マキシマムドライブ！』

「ふん、いちいち起動しないとスキルを使えないとは、ジョーカーは不便だな」

そう言うと、腰に巻かれたベルトの中央、月の石が輝いて、シャドームーンの全身から闇色の衣が噴き出したように纏わりつく。

「その点、僕のシャドームーンのスキルはパッシブだ。僕が望めば、いつでも自由にキングストーンの力を引き出すことが出来る……」

それでも、前に出なければ始まらない。俺は寸刻腰を溜めると、弾き出されたように飛ぶ。

「ライダー、パンチ！」

「ふん、わざわざ撃墜されに跳ぶか。ご苦労なことだな」

シャドームーンの左手が掲げられ、そこから雷光が迸る。無数に枝分かれした雷光が、俺の体を貫く。

「ぐうっ……い！」

拳を構えた俺の体が、空中に縫いつけられる。

「それ！」

腕が振るわれると、それと同じ軌道で俺の体も放り出される。受け止めた柱が、粉々に砕け散るほどの力で叩き付けられる。咄嗟に体を庇うが、それにしてもなんて力だ。

「スロースタートなのは構わないが、早めにエンジンをかけることを勧めるよ、ツクヤ」

俺を嘲笑うかのように、シャドームーンがゆっくりと近づいてくる。俺は構えを取る。

「そうでないと、体が温まる前に、死んでしまうぞ？」

鋭く打ちこまれる真紅の刃。しかし、それをただ受けるわけにはいかない。

「ッ……い！」

「……なんだと？」

剣の動きが、止まる。俺の両掌が、サタンサーベルを挟み込んで受け止めたのだ。

「無刀取り……い！」

「世界一位のプレイヤーを、舐めるからこうなる……い！」

剣を押さえたまま、密着する。この距離は、俺のものだ。膝蹴りが、銀色の装甲の切れ目、脇腹に突き刺さる。

「ぐっ……い！」

二度、三度、膝が打ちつけられる。それを嫌がるように、シャドームーンが飛び退る。サタンサーベルを取り落とさなかったのは、褒めてやるぜ、ロストマン……。

「過剰同調？ そんな取ってつけたような条件が同じになれば、勝てるでも思ったのか、ロストマン？ 俺も、リサも、決しておまえの機体があつたから勝ち進めたわけじゃあないぜ。勝って驕らず、負けに腐らず、ただ勝利への筋道を考え抜いてきたからこそ、あの舞台にまで進めたんだ。何年かの間、そんなことも忘れちまったのか？ それを俺達に教えてくれたのは、お前だったのに！」

「貴様が、リサの名を語るんじゃない、ツクヤ！」

怒りに任せて、駆ける。迂闊だぜ、ロストマン……！ 大振りのサタンサーベルが、振り下ろされる。もらった！ 半身にずらし、それを避ける。そのまま右拳を突き出す。狙うは、顔面。

「甘いよ、ツクヤ」

サタンサーベルを思い切り振り下した勢いをそのままに、シャドームーンの体が一回転。その踵に備えられたレッグトリガーが俺の肩に鋭く叩き付けられる。俺は呻きと共に、地を舐める。

「挑発が安いんだよ。そういう小技も、たまに使うと効果的。そう教えたのも、僕だったろう、ツクヤ？ 君はそういうところでも、熱心な生徒だったもんな？」

「役者は、上がったようだな」

「アカデミー賞ものだろう？」

頭に血が上がったように見えたのは、ブラフか……！ その声には、勝ち誇ったような色が見える。そして、再び左腕が掲げられた。

大きく振りかぶって、渾身の力でハンマーを振る。それに合わせて、ロケットを点火。ストラフ自慢のパワーアームの力を、さらに上回る力で振り回されたハンマーが、目の前のネイキッド数体を巻き込んでいく。それでも、山のように押し寄せるネイキッド共の数はまったく減つたようには見えない。

「まったく、数の暴力とはよく言ったものツス……」

吹き飛ばされた数体の後ろに、機関銃を構えたネイキッド達が整列している。まずい。一斉に放たれた銃弾を、パワーアームとハンマーで庇うことで受ける。しかし、集中砲火を浴びたのは一瞬だ。すぐに

アルキオネさんの支援が、敵の砲列を崩してくれる。

「助かったツス！」

「いいんだけどねー、そろそろこっちもカンバンなんだよなー……」

既に使い切ってしまったのだろう、アクティオンやグラントはパージされている。追加のブースターが載せられたアトラスは健在だが、さつきから両肩のそれは沈黙したままだ。

「後ろ、危ねツス！」

その声に反応し、アルキオネさんが咄嗟に銃剣の着いたアサルトライフルを振り回す。背後に迫っていたネイキッドが、その一撃で切り払われる。

「このボクに、サーベルを使わせるとは……！」

「そんなこと言ってる暇、ねーツス！ まだまだ来るツスよ！」

一体どれくらいかのネイキッドを打ち倒したのだろう。三桁まで数えたのは覚えているが、それから先は数えるのをやめてしまった。それほどの数を倒しても、後から後から湧きあがってくる敵の数は、一向に減る様子を見せない。

また何体かのネイキッドが、一斉に跳びかかってくる。タイミングを合わせて攻められるのが、一番厄介だ。一体をハンマーで、もう一体を抜き手で屠る。三体目は、素体腕で構えたヴズイルフで撃ち抜く。これで、奥の手に取っておいたりボルバーの残弾は空っぽだ。

背中の向こうでは、アルキオネさんが銃剣で格闘戦を挑んでいるのが視界に入る。向こうも弾切れらしい。

「ぬおりゃああツス！」

手近にいた一体を掴み、振り回してアルキオネさんの方に投げつける。それでアルキオネさんの背後を狙っていた何体かが巻き込まれ、体勢を崩す。その何体かを、いつの間にか取り出したりボルバーで撃ち抜いていく。

「まったく、最後のお守りまで使っちゃったよ！」

それはご主人が買ってくれた、お守りなのだと言っていた気がする。最後の最後までリボルバーを抜かないって決めてるんだ。そんなことを言っていた。今がその、最後の最後、ということか。アル

キオネさんが格闘戦でこのゾンビの群れのようなネイキッドに劣るとは思わないが、もう支援はあてに出来ないと思っていた方がいい。「ふんぬううう！」

迫ってきた一群に、もう一度フルスイングを見舞う。が、ハンマーの柄はその一撃に耐えられず、中ほどから二つに折れる。耐久性には定評のあるジレーザロケットハンマーだが、過酷な使用に耐えられなかったらしい。

「なんだか、自分、いつもこれ壊してる気がするツス……！」

一群を乗り越えてきたネイキッドの頭に、折れたハンマーの柄を突き刺す。が、これでもう徒手空拳だ。後は敵の持っている武器を奪うぐらいしかないが、倒した敵はその装備品共々ポリゴンの屑になって、分解されてしまう。それを考えたら、実用的な考えではないのかもしれない。

「まったく、八方ふさがりもいいところツスな……！」

地を這うように跳び出すと、そこにたまたまいたネイキッドの脚を掴み思い切り振り回す。数体をなぎ倒すと、サブアームで振り回していたネイキッドが、ポリゴンに分解される。どうやら、機能が停止したらしい。

姉さんなら、もう少し違う戦い方をするのだろうか。そもそも、姉さんのメイン武器は刀剣類だ。あれはそう簡単に使い減りしない。推進剤の類は心配があるが、それがなくなってもリアユニットとサブアームさえ切り離せば、経戦能力は維持される。

今度は、同時に跳びかかってきたネイキッドをサブアームで貫く。武器がないのなら、自分の体を武器にするより他にない。とにかく、自分出来るのは、一分でも、一秒でも長く、姉さんの飛び込んだ門を守ることだけだ。両の腕に突き刺さったネイキッドが、ポリゴン屑になってかき消える。その陰から見えたのは、ランチャーを構える、別のネイキッドの姿だった。

「そろそろだぞ、嬢ちゃん！ もうすぐ、最後の防壁だ！ もうすぐだぞ！」

「ええ、シロ……！」

シールドの出力装置は連続使用のせいで、かなりの熱を持っていく。もうそろそろ、限界が近いのだろう。それは、私自身の体にも同じことが言えた。ロストしたパーツはないが、全身が傷だらけで、推進剤も心許ない。まったく、データだけのバーチャルであるはずなのに、こういうところまで限界が設定されているのは厄介極まる。

「ソードビットも出力低下……いよいよとなったら、直接ぶつけるしかありませんね」

もはやセブンスソードは、発動さえ出来ないだろう。GNガンブレイドはとつくにエネルギー切れを起こし、ただの飾りになり果てている。

「！ 避けるー！」

シロの声に、咄嗟にロールして回避軌道を取る。強大なエネルギーを秘めたビームが、寸刻前に私のいた辺りを薙いでいく。それも、連続で、幾筋も。

「最後の関門、というわけですか」

「気を抜くな。こいつはこっちの準備が万端でも、抜けるかどうか怪しいところだぞ……！」

中央に巨大な門扉。その周囲には四基の長大な砲を構えた、堅牢な防衛システムがそこにあつた。しかもご丁寧に、中央の門扉は固く閉ざされ、私のものよりはるかに強力そうなエネルギーシールドに覆われている。

「正面突破は、許してくれそうにありませんね？」

「だが、ありやあ時間稼ぎの役目も大きいはずだ。周りの馬鹿でかい砲から順にぶっ壊していきやあ、真ん中の口も開くだろうさ」

そういうことなら、話は早い。もはやほとんどエネルギー刃を展開出来なくなつたGNソードIVを構え、突撃する。そこに、寸刻、砲口に光が灯る。背中に背負つた主翼の角度を変え、急降下。その影を追うように、四門の砲が、咆えた。あんなもの、今の出力が下がっているシールドでは、どうやっても受けられはしない。すべてを、避けるしかないのだ。

「でやあああッ！」

先手必勝だ。消耗戦になれば、とてもではないが物量で押し切られてしまう。騎兵槍のように、突き出したGNソードⅣを砲門の内の一基に突き立てる。装甲はそれほど頑丈ではない。これなら。

「おおおおおッ！」

切っ先を突き立てたまま、駆ける。装甲板をバリバリと引き裂きながら、根元まで達する。そのまま離脱。一瞬前まで砲塔だったものは爆散し、中程から折れ飛んだ。

「まだこちらの攻撃は有効ですね。ビット、どうですか？」

「最悪、ぶち当ててやりやあいんだろう？　一基だけなら受け持つてやるぜ！」

「結構。征きますよ！」

私に先んじて、六機のソードビットが駆ける。それを追うように、私。だが、突如砲塔の付け根部分が口を開ける。

「ちいつ、あんなどころにミサイルランチャー隠してやがったかよー！」
「シロ、ビット、集中！」

根元というのが逆にありがたい。シロのコントロールするソードビットが、弾頭を出したばかりのランチャーに吸い込まれてゆく。寸置きかず、爆発。巻き起こった大爆発に、根元から砲塔が折れて落ちる。

「もう、一本！」

だが、こちらの砲塔はから展開したのは対空機銃だ。いくつかの火線が複雑に私を狙ってくる。

「シールド、ぜえん、かあい！」

弱々しいバリアフィールドが前面に展開する。それで防げるところまで行く。足元に深く突き立てたGNソードⅣをそのままに、また根元まで、駆ける。

「シールド、抜けちまうぞ！　嬢ちゃん！」

「ここだけは、一緒に持って行かせてもらう！」

三本目の砲塔が、傾いた。しかし対空火砲は足元から崩れながらも、なお火線を吐き出し続ける。

「うあッ！」

「嬢ちゃん、大丈夫か！」

「ええ、アイシールドは割れましたけど……他機能、損傷軽微！ 征けますー！」

だが、もう一度加速して突撃が出来るほどの余裕はない。今ここから、最低限度の加速を得て、四本目の砲塔を破壊せねば。

四本目の砲塔には、ランチャーだ。吐き出されたミサイルの渦に頭から突っ込んでいく構えになる。

「シロ、ビット、一機だけ生きてます。預けますよー！」

「こうなりやイチバチだ！ 狙うぜえー！」

ランチャーに一基のソードビットを放り込む。一、二発は暴発しただろうか。しかし残りのミサイルは私に向かって飛んで来る。

「サブアームで展開するジューダイクスを盾にして、突っ込みます！」

間に張ったシールドでは、もはやミサイルの爆発は防げない。ならば、受け止める。普段、剣でやるのと同様に、最低限の力をかけて、受けた瞬間に流す！ 果たしてそれは、二基のミサイルを逸らせ、間をすり抜けることに成功した！

「……でえ、最後おッ！」

渾身の力で、ランチャーの発射口にGNソードIVを突き立てる。バキバキと装甲板ごと切り裂かれたのは砲塔部分だけでなくGNソードの方もだ。引き抜いた時にはビーム刃は完全に停止していて、ただ剣の形をしたスクラップ寸前だった。

これで、中央を覆っていたエネルギーフィールドが消えた。後はあの巨大な門扉を……

「妙だ、嬢ちゃん、動いてやがるぞ……」

「もう門が開くのですか？ 早すぎるような……」

「なんだかやべえ、飛べー！」

シロの声に緊急離脱。開いた門扉の奥から姿を現したのは……。

『おおおおおあああああ!!』

「スターバスター……こんなもん載せてやがったのかあッ！」

それは、熱と光を纏った咆哮を発する兵器だった。よく見れば周り

の装飾も、まるで巨大な人の顔のように見える。その口部分から放たれるスターバスターは、こんなボロボロの神姫一体、掠めただけでも分解出来てしまうだろう。

「あれを、この装備で抜け、ってか、嬢ちゃん？」

「ええ、他に方法は、ありませんから……！」

片側だけ割れたバイザー越しに、最終防衛プログラムの最後の姿をねめつける。

「あの向こうに主がいるのなら、私がそこに向かうのに、何のためらいもない。征きますよ、シロ！」

「やれやれ、そうは言っても、もうお役に立てることなんざ周辺警戒ぐれえのもんだぜ？」

「充分。それでは、参ります！」

スターバスターは、一撃一撃に多大なエネルギーを使う。乱射は不可能。そのエネルギーチャージの隙を叩く！ 私は肩の上に、スクラップ同然のGNソードを抱え上げた。駆ける。装飾のせいかな、一番装甲の薄そうな目を狙って、駆ける。跳びかかり、GNソードIVを突き立てる。が、突いた先から崩れるような手ごたえ。刺さらなかったわけではないが、致命の一撃とは程遠い。もう一発がいる。

だが、無慈悲にも巨大なレリーフの口は開き始めた。スターバスターが来る！

「嬢ちゃん、緊急回避！ 回避いッ！」

一瞬早く宙に躍り出るが、そのすぐ後を追ってまたあの砲口が唸る。

『おおおおおあああああ!!』

「くううっ……！」

一瞬早く駆け始めたのが幸いした。機動制御のために振り回したサブアームを一本持っていかれただけで済んだのだ。だが……。

今ので残っているのは鬼姫ふた振りと、ジュダイクスがひと振り。GNソードVはエネルギーを切らしたし、IVは相手の目玉に突き立ちたままだ。

遠い。後一枚の壁が、ものすごく遠い。しかしそれを抜けねば奥に

は進めない。」

「シロ、次のスターバスターのときに、一撃、賭けます」

「何を言ってるやがる。スターバスターのエネルギーを利用するのは手だが、そこに当てる武器は碌なのが残ってるねえんだぞ、本気か？」

「策が、あります」

そう言って私は三度、最終防衛プログラムに立ち向かった。

爆発が収まった。咄嗟に横にいたネイキッドを引っ掴み、盾にしたので直撃は免れたが……。

「これを連続してやられると、大分しんどいッスな……」

そうぼやきながらも、近くに寄ってくる敵から順に処理し続けている。だが、飛び道具、それも高威力武器を抱えてくる相手に関しては、正直お手上げだ。

それでも自分はまだましな方だろう。自分より防御性能の劣るアルキオネさんは、もつと厳しいはずだ。と、背中越しにばきん、と硬質なものの折れる音が聞こえる。視線を投げると、アルキオネさんの銃剣が、折れていた。先端を欠いた剣で必死に応戦しているが、もはや時間の問題だった。

「アルキオネさん！ 今、行くッス！」

両手に一体ずつ抱えたネイキッドを放り投げ、少しでも道を作る。だが、そんなか細い道は殺到する群れの前では何の意味も持たない。視界は文字通り、ネイキッドに埋め尽くされている。その海に、アルキオネさんが吞まれる。

「くっそ！ どくッス！ 邪魔すんじゃねッスよ！ アルキオネさん！」

返事はこない。それどころか、亡者のように寄ってくるネイキッドの海に、自分も引きずり込まれそうになっている。

「アルキオネさん！」

もう、声が届いているかも分からない。感情のないネイキッドの顔が、無数に寄ってくる。

「うわあああッ！」

叫んだ。それは、恐怖だっただろうか。その声は誰の耳にも届いていないようにさえ感じられた。

『おおおおおおあああああ!!』

再度、スターバスターが放たれる。その余波だけでも、今の私が受

けるのは相当負担がかかる。

「どうするつもりだ嬢ちゃん、策があると言ったな。どうやってあの装甲を抜くつもりでえ？」

「装甲の薄い眼窩に、GNソードが突き立っています。あれを、もう一段深く突き刺す。ジュダイクスを鎚にして、叩き込みます」

「成程、完璧な作戦だな。相手の対空砲火が完璧だつてことに目をつぶればよ」

周囲に隠されていた対空砲は、まるでハリネズミのようだった。一基一基の攻撃力はさほどでもないようだが、それでも無数とも思えるほどの火線が私の行こうとしている道をふさいでいる。

「それでも、行くしかありません。シロ、シールドはどれくらい保ちますか？」

「いいとこ二秒か三秒か……期待する方がどうかじてるぜ。裸で突っ込むのと変わりねえ」

「後は、物理装甲でどうにかするしかない、ということですね……」
あまりもたもたしてはられない。既に、砲口部分には次のスターバスターのチャージが始まっている。

「主、今、参ります……！」

足場を蹴る。無数の弾幕の中に頭から突っ込む格好だ。張られたシールドは途切れ途切れで、いかにも頼りない。それでも、左肩の物理シールドを重ねて、何とか誤魔化そうとする。バチバチと、シールドを引き裂き、その下の装甲にまで攻撃が通ってくる。後三〇〇。それだけのわずかな距離が、これまで感じたことがないくらいに遠い。

「シールド、ロスト！ 限界だ、嬢ちゃん！」

「だからと言って、引けません！ 突っ切ります！」

嵐の中に、小舟で向かうような心地だ。無数の弾が、私の体を叩く。それでも、前に進まなければ。残っていたアイシールドの半分も、砕ける。

主、今、参ります――。

「さあ……そろそろ終わりかな、ツクヤ？」

シャドームーンの左手から放たれていた、雷光が収まる。支えを失ったが、俺の体は重力に逆らってその場にあった。俺の体は、柱の中ほどに半分ほど埋め込まれてしまっていた。

「なんだ、返事をする元気もなくなったのかい？ しつかりしてくれよ、ツクヤ。まだショータイムはこれからなんだぜ？」

ロストマンの軽い口調が、耳に障る。だが、腹立たしいほど、体が動かない。

「ふむ、そうだな。あんまりお楽しみを先送りにするのも悪いし、一部先行公開といこうか。ツクヤ、顔を上げてごらん」

俺は、何とか顔を持ち上げる。視線の先に映し出されていたのは、ミーシャとアルだ。周りには無数のネイキッドが、獲物にたかるカラスのように群がっている。

「こいつら、どこにいると思う？ このバーチャルワールドに向かって回線をこじ開けようとしているんだ。君を助けるつもりなのかな？ たったこればかりの数で、ご苦労なことだよ。もつとも、ここに繋いでくれれば、サーバーごとデータを消してしまうのも簡単だ」

「なんだと……ロストマン！」

「ああ、大丈夫、心配するな。順番としては君の方が後だ。君にはそこで、彼女達が壊れていく様を楽しんでもらわなけりやならんからな。」

「やめろよ……やめろよ！」

俺の声に、シャドームーンは満足げにうなづく。だが。

「それが通ると、思うのかよ、ツクヤ？」

ロストマンは、半ば笑いながらそう言った。その声は、どこまでも無慈悲だった。

爆風が、不意に至近距離で起こった。最初はボクを狙ったものかと思っただが、違う。立て続けに起こったそれは、明らかにボクを避けていた。

「何が……」

何が、あった。いや、それより、門は、メサルティムは、無事なのか。周囲を見渡すと、次々とネイキツドが蹴散らされている！でも、誰が？ ここには、ボクとメサルティムしかいないはず……。

『インパルスドライブ』！ シュート！』

輝くエネルギー弾が、ネイキツドの群れに撃ち込まれる。

『風、躡、華、斬』！』

鋭い刃状のエネルギーが、ネイキツドを薙ぐ。

「舞い散りなさい、『ブーケット・オブ・リリアヌ』！」

金色に輝く光弾が舞い、そこからさらに光線が飛ぶ。

「渚つち……ブラック、レグルスも……？」

「スキル発動、『最果てにて輝ける槍』……！』

向こうでは、地を這う衝撃波が、ネイキツドを蹴散らしている。

『すーぱーねこ乱舞』！ 拳だけが武器じゃねえってところ、見せてやるのだ！』、

拳が、蹴りが、目の前のネイキツド達を屠っていく。

「梅夜、白雪、行きますわよ！ 『スリスタライブ』！」

「しくじるんじゃねえぞ、リリイ！ 『ロードファイター』！」

「……『天雷』、発動！」

赤と緑の、二台のトライクがネイキツド達をはね飛ばしていく。その後ろから、白い機影が三六式航空爆弾を落として生き残りを狩っていく。

「アンジェリクスに、オレンジ……それに、花ちゃんと日野つちのころの……？」

『やあ、どうやら間にあつたようだね、アルくん？』

その声は、榊サンだ。

『ようやくこつちの準備が整ったのだけど、いやあ、間一髪、つてところかな?』

『どうして……? 警察は動けないって……?』

『なに、僕は警察である前に、一個人だしね。それに、ちよつと深波くんに因縁がありそうで、暇してる連中に声をかけて回っただけさ。方法は、まあ、菊川くんが回線を開いてくれて、ね』

『榊さん、この貸しは本当に高くつけどきますからね』

『ははは、忘れないように心掛けるよ。さあ、アンジェリクス、相手は有象無象だ。思う様、やってしまっておくれ』

『ええ、シロウ。いつもあなたは迷惑をかけてばかりなのだから、こういうところで恩を返さねばね。長顎アントニオ!』

『こつちにストラーフも埋まつたのだ!』

『……オレンジ、さん? 何でここに?』

『そつちの刑事さんから、声がかかってよ。相変わらずこんなヤベーことに首突っ込んでんだな、つて笑ってやろうと思つたんだが……あのヤローはここにはいねえんじゃねえか』

『そんなこと言つて、マスターが一番心配してたのだ』

『馬鹿つ、てめ、オレンジ!』

『あのエスパディアの娘もいないのね、残念だわ』

『げっ……! レグルス……さん、も、来てたツスカ……』

メサルティムは顔色をなくしている。そりゃあ、あの二人は派手に戦つて以来、顔を合わせていないのだから、無理もない。

『大丈夫だったかよ、アルちゃん』

『花ちゃんと日野つちも、榊サンから呼ばれたの?』

『いや、俺と花道は、今週、連絡取れなくつて、おかしいと思つて君達の家の方に行つたんだよ』

『そんで刑事サンから、二人してこの事を聞いたつてーわけだ』

『まったく、水くせえ。こんな事になつてんなら、さっさと俺やアニキのところ連絡入れりゃ良かったんだ』

『……梅夜、それが出来なかつたから、困つてたんだと思う』

『なんにせよ、ここを守ればいいんですのね? 楽勝ですわ』

「二人は少し休んで。あたし達が頑張るから！」

「渚っち……ありがとう……」

『お礼の言葉は、深波君が帰ってきてからまとめて受け取るよ。さあ、行くぞ、渚さん』

「オーケー、オーナー！ 燃えてきた！」

「こつちも行くぞ、オレンジ。先頭は任せた」

「分かっているのだ、ブラック！ みんなまとめて、燃やし尽くしてやるのだ！」

「さあて、やってやろうか！ 白雪、どつちが多く墜としたか、勝負だ！」

「……梅夜、不真面目過ぎ」

「結果がついてくるんなら、何でも構いませんわ。行きますわよ！」

『それじゃ、僕達も行くか、アンジェリクス』

「ええ、シロウ」

「じゃあ、オーナー、私もちよつと、踊ってくるわ」

『おう、今日は遠慮はいらねえ、思い切りやってこいよ』

「何だ、これは……」

思わず、僕は呟いた。何なのだ。こんなことは、このショーの筋書きにはないはずだ。圧倒的な物量に、ただ圧殺されるだけの様を、ツクヤに見せつける。それだけのはずだったのに。

「く、つく、ははは……」

「何を笑っているんだ、ツクヤ」

「とんだショーがあつたものだな、と思つてよ……」

その言葉に、左手を掲げる。弾ける紫電がジョーカーを捉え、今度は床に叩きつける。足元に転がったジョーカーを、そのまま、強かに踏みつける。

「勘違いするなよ、ツクヤ……こんなもの、ただターゲットが一所に集まってくれたっただけのことなんだぜ……？」

「急に役者が落ちたな。まるでどこぞの三文芝居の定型句だ」

挑発だ。分かっている。しかし、頭に血が上るのを抑えることが出

来なかった。横腹を強かに蹴りつける。ジョーカーの黒い体躯が、床を転がる。が、ゆつくりと、ジョーカーは立ち上がる……。

「そんなに甘くはないようだが、ロストマン……」

「ふん、甘いのは君の方だよ、ツクヤ。僕が、こんな事態を想定してなかったと、本気で思うのかい？」

頭の中で、最終防衛システムを起動する。そう、僕にはまだこれが残っている。これはまさに最後の奥の手だ。だが、それが残っているというのに、なぜ胸がこんなにもざわめくんだ？

「祈れ、ツクヤ。あそこに集まった者達は、皆、生贄の祭壇に捧げられるのを待つだけの羊どもだ。何人たりとも、生かしては帰さない」

「そうか。なら、早くここを片づけて、向こうに駆けつけてやらなきやあな」

減らず口を。どうやら、もう一度力の差を見せつけて、ツクヤの反撃の芽を摘んでやらねばならないようだ。僕は、サタンサーベルを大きく振ると、もう一度、ジョーカーに向きあった。

暗い空が、荒れた大地が、揺れる。唐突に始まったそれに、神姫全員が身構える。

『シロウ？ これは？』

『何か、門の方から出てきますわ！』

それは巨大なムカデのような機体だった。だが、よく見ればその胴はさつきまで屠っていた、ネイキッドと同じものだということが分かる。そしてそこから生えている腕は、ストラーフのチーグル同様、硬質で長大で、鋭い爪を持っていた。

『なんだ、コイツあ？』

『気ん持ち悪いいッス！』

『でっけえムカデ、いや、連結された神姫なのだ？』

その巨体は、尻尾部分が無限に続いているかのようで、一種、醜悪な竜のような禍々しさを備えていた。

『来るよ！ みんな気をつけて！』

凶悪な咆哮を上げ、腕という刃を煌めかせながら胴が地面を薙いで

いく。

『こういうの、趣味じゃない……』

『美しさに欠けるわね。作った人間の趣味が透けて見えるみたいだわあ』

『同感だなー、ちやつちやつと片付けちやおう』

ふむ、これは、少々厄介かもしれないね……インカムマイクを摘まむと、位置を直しながら菊川くんと呼び掛ける。

「あー、菊川くん。これは、どうしたらいいと思うね？」

『ちよつと今調べてますから、急かさないでくださいよー！』

「いやなに、さつきまであれほど湧いてきたネイキッドが、一体も出てきてないしね？ 尋常な相手じゃあないように思ったんだが」

『あつ……これはやばい奴……』

菊川くんが、思わずといった風に呟く。が、その発見はあまり芳しくないことであるようだね。

『榊さん、みなさん、よく聞いてくださいね……今から、そいつへの対処法を連絡します！』

『何だつてんだ、ただブツ壊すだけじゃ、駄目だつてのかい』

『ええと、まず前提なんです……そいつは、倒せません！ さつきまで無限に湧いてきたネイキッド達のリソースを使って、無限に修復しています！』

『じゃあ、追いつけばいいんですのね？』

『そういうわけにも……相手の狙いは、極論ゲートの破壊なので、向こうに追いつくだけでは、不十分です……』

『まだるっこしいのだ、はつきり言ったらどうなのだ？』

『つまり、皆さんはその、倒せない相手を、ひたすら釘づけにして、耐えてもらうしか……』

菊川くんの声はまるで叱られることの方かっている子供のよう徐々に小さく、消えていった。なるほど、想像していた以上にタフでハードな状況らしいね。

『はい出たー、クソゲー乙ー』

『アルキオネさん、言ってる場合じゃねッス！』

『門が壊されちゃったら、どうなるのかしらあ?』

『その場合、侵入してるシャウラさんとの回線が切断され……深波君とシャウラさんが、戻ってこられなくなります……』

『それで、己達はいつまで耐えればいいのか?』

『シャウラさんが戻ってくるか……それか、プログラムを管理してる大元……多分深波君が戦っている相手ですが、それが消えるかするまでは……』

『それは……大変なのでは……』

再び、漆黒の龍虫がその長い胴を振るう。これだけの質量では、受け止めることもままなるまい。重量級であるはずの『ビアンキ』でさえ、その体長の前には小さく見えてしまう。

『とにかく、攻撃能力を奪えばいいんだな。ならば、攻めるに限る!』
ブラックの言う通りだ。その声に、めいめいに攻撃態勢を取る神姫達。アルくんは他の神姫から武器弾薬を分けてもらったようだ。今はその手にOS-36 アサルトカービンを構えている。だが、その巨軀の前では、神姫達の攻撃はまさに、螻蛄の斧だった。

シャドームーンの振るう、サタンサーベルを避ける。しかし、背にあった柱さえ、その刃は簡単に切り裂いてしまう。この攻撃力とリーチの差は、本当に厄介だ。サタンサーベルをまず何とかしなければ。
「こんな復讐で、リサが本当に喜ぶと思ってるのか、ロストマン!」
「安い挑発だな、だが、乗ってやるよ、ツクヤ。これは復讐なんかじゃない、清算だよ」

「清算だと?」

サタンサーベルを突き出しながら、ロストマンが謳う。

「そう、清算だ。僕はね、別に奪われたものを取り戻したいとか、リサが喜ぶとか、そんなことで動いてるわけじゃないんだ。ただ、人生の負債を清算したい、それだけなんだよ。借りを作ったままにしておくのは、主義じゃないんでね」

「ならば、俺だけを狙えばよかった。俺の命だけならば、俺は、喜んで差し出したのに!」

「君が、そういう奴だからさ、ツクヤ！」

一層深く、真紅の刃が切り込んで来る。それを、体を大きく振って避ける。サタンサーベルは自在に振るわれている。紙一重で避けては、それに次ぐ一撃を避けられない。

「それでは、君は救われてしまうだろう？ 君は、俺と一緒に地獄に落ちるんだよ。安らかに天に召されるなんて、許されるはずがない。君は、大事なものを守れなかったという新たな罪にまみれて、地獄に行くんだ、君の罪だけが清算されるなんてこと、許されない！」

「俺の、罪か……」

俺は、大きく飛び退く。俺の、罪。

「そうだな、お前の言う通りだ、ロストマン……」

「やつと観念する気になったかい？」

言葉とは裏腹に、シャドームーンの挙措には、隙がない。当然だ。本音ではそんなこと、思ってもいないだろう。だが。

「俺は、リサの命を奪った。相棒の心が、闇に堕ちるのを救えなかった。そのせいで、大事なものを危険にさらした」

「何を言ってるんだ、ツクヤ……？」

俺は、続けた。

銀色の仮面が、首を傾げたように傾く。

「俺の罪は、十字架として、背負っていく……！ 俺は、俺の罪を数えたぞ、ロストマン……」

「何を……」

「次は……お前の罪を、数えろ」

「っ、そんな言葉で、お前の罪を清算をしたつもりか、ツクヤあああ！

お前！ 一人が！ 勝手に救われた気になりやがって！」

激昂するロストマンの声。駆ける。まっすぐに振り下ろされる刃。その合間に、腰を叩く。

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

燃え上がる紫のエネルギーが、右の腕に宿る。

「ライダー、チョップ！」

下から切り払うような、手刀。燃える刃が、緋い剣を打つ。甲高い

音。寸刻、時が止まる。折れ飛んだサタンサーベルの刃が、神殿の床に突き立った。

「馬鹿な、サタンサーベルを押し折っただと!？」

「やっつと、この距離まで近づけたな、ロストマン……」

サタンサーベルの邪魔はもう入らない。俺は、堅く握った拳をシヤドームーンの頬に叩きつけた。

サブアームに備えられたジュダイクスが、GNソードⅣの柄尻を叩いた。そこまでたどり着けたのは、もはや奇跡だったと言っている。

「う……嬢ちゃん、動けるか……?」

「シロ……ええ、まだ、行けますよ……」

翼にも、何発も入ってしまった。右脚は、膝から先が千切れ飛んでいた。が、菊川研究員は言っていた。帰りのことは心配しなくていいと。それが確かなら、この扉一枚こじ開ければ、何とかなるはずだ。まだ動ける。まだ飛べる。歪んだ門扉の隙間に、杖代わりに使っていた鬼姫を食いこませる。重い。だが、後これ一枚なのだ。急がなければ、主が危ない目に遭っていないとも限らない。

「主、今、参りますから……」

どうか、どうかご無事でいてください。

私には、貴方が必要です。

食い込んだ鬼姫を、ここで動かす。ぎ、ぎ、と重い音を立てて、扉が開く。その奥には、闇よりなお黒い、漆黒が広がっていた。

「同時に仕掛けるぞ、『風躡華斬』！」

「行くのだ！ 『すーぱーねこパンチ』！」

ブラックとオレンジが、スキルを放つ。その間も絶え間なく白雪とアルキオネが弾幕を張る。

たわんだ身体が、のたうち回る。それだけで、刃を纏った大蛇が暴れ回るようなものだ。それに巻き込まれないように距離を開ける。幸いなことに、門は相手の長い胴の根元にある。よほど迂回して回り込まなければ、門自体には攻撃は当たらないだろう。

「動きから見ると、目的は門というよりは私達を狙っているようですわね」

「まあ、その方が助かるのは確かかねえ……」

エアロヴァジュラを振るうリリーの声に、レグルスが答える。今はただ自分達の身を庇うので精いっぱいだが、この上門まであの巨体から守り抜くのは、困難だった。

「ブーストナツクル！ あつちに、行けえ！」

「こつちに来られても困るッス！」

白と黒の拳が、連結された胴体を打つ。だが、並の神姫素体なら千切れてしまうような攻撃も、傷を負う傍から修復されてしまう。

「おらおら、どんどん行くぜ！ 『オーバードロードバースト』！」

「スキルなら、弾切れ関係なく撃てちゃうんだよねー、『ファイアフライシユート』！」

「これも持って行きなさい、『最果てにて輝ける槍』！」

梅夜、アルキオネ、アンジェリクスが遠距離攻撃で大火力を打ち込む。すかさず白雪も、三六式航空爆弾を二発落とし、追撃する。

『ちくしょう、キリがねーじゃねーかよ！』

『花道、怒っても仕方がない。相手はもともとチートしてるんだ、抑えるしかない』

『賢しいこと言ってるけどよ、これあ、ジリ貧、つて奴なんじゃねえのかよ？ どうなんだよ、刑事サンよ？ 俺もレグルスも、負けるとこ

ろまで付き合うつもりはないぜ?』

マスター達も焦れてくる。当然だ。そもそも、もとより倒せる相手ではないのだ。それはある意味で、天災を相手にすること似ていた。

『ブラック、攻め手を削ることも出来ないか。あのムカデの足みたいな部分を斬り落とすとか』

「やっってはみるが、望み薄だぞ、マスター」

「まあ、乗るだけは乗ってみようかしらあ。起きなさい、『バルディッシュ』!」

スキルが巻き起こした風の刃と、死天使の作り出した光の刃が大ムカデの脚を数本ずつ、まとめて叩き斬る。が、その動きはまったくそれを意に介さず蠢き続ける。そして、気づけば裁ち落された脚がどこだったのか、分からなくなってしまう。ただ見失ったというだけではない、まったく違いがなくなってしまうのだ。

打てる手は打っている。しかし、こちらには少しずつではあるが、ダメージが蓄積されてきている。状況はどう鼻屑目に見ても、不利だった。

「あの胴体を千切ってやったらどうだろうね、オーナー?」

『危険すぎる、ダイナミック・ライトニングでも貫けるかどうか……それに、万一あの中に取り残されたら、ただじゃ済まないぞ』

「活路は前にあり。少なくとも、押し返すぐらいのことはして見せないで、本当にジリ貧になっちゃうよ」

『それを試すにしても、単独では出来ないな。即席であっても、他との連携で挑まないで、押し返すことも出来そうにない』

「それは、確かに」

「なら、ボクらで援護しようか」

「それなら、自分が注意を引きつけるツス」

アルキオネとメサルティムが、それぞれ名乗りを上げる。決まりだ。それに各自が乗ることになった。

「……行きます」

「リリアーナ、行きなさい」

白雪とレグルスが戦端を開く。飛行型の二人を追うように、頭部分が大きいくうねる。flak 17 1. 5mm機関砲とリリアーナのビームの間隙を縫うように、リリーのヴィシユヴァルーパーと、メサルティムが駆ける。

「こつちですわー！」

「こつちを向くツス！」

リリエアロチャクラムとメサルティムのチーグル、二対のサブアームがそれぞれに伸びるムカデの足を千切り取る。それを嫌ったか、頭部分が大きく口を開けて迫る。

「大口開けやがって、その中なら効くだろうよ！ 喰らえー！『インフアニット∞アサルト』！」

「借りものだけど、ついでにいつちやうよー、『アーナンタ∞アサルト』！」

梅夜とアルキオネが、追撃のスキルを放つ。大きく開かれた口の中に立て続けに銃弾が呑みこまれていく。だが、大ムカデは開かれた口を閉じることなく、逆に咆哮と共に火球を吐き出す。

「させませんよ、『最果てにて輝ける槍』！」

衝撃波が、火球を吹き散らす。爆炎が大ムカデの眼前に広がる。その際に。

「遅れるなよ『獣牙！ 爆熱拳』！」

「行くのだ！ 『すーぱーねこキック』！」

「ダイナミック・ライトニング！ 喰らええッ！」

爆炎を裂いて、三人が飛びこむ。三方向から挟み込むように、首に当たる部分を激しく穿つ。その連携に耐えきれないというように、龍虫の頭が胴から離れる。

「どうだー！」

しかし、叫ぶ渚の体を、千切れた傷口がさらに開き、噛みつく。切断面が、新たな口になって襲いかかってきたのだ。頭の方はざらざらとした灰のようなものに変換され、崩れて消えた。

「うあああああッ！」

「渚っちー！」

「首を落として、助けますわよ！ 『ドウルガースレイ』！」

「……『飛燕』！」

リリイと白雪がスキルを使って斬りつける。新たに付けられた傷口に、アンジェリクスとメサルティムが取り付き、力づくで引き千切り『ビアンキ』を引きずり出す。

「大丈夫ツスカ、渚さん！」

「うん、ありがとう……」

「まだ来ます！ 伸びろ、長顎！」

再び傷口を新たな口にして襲いかかってくる様は、不死の蛇龍のようすら思える。それを、アンジェリクスが槍を伸ばして迎え撃つが、明らかに火力が足りない。その巨体をそのまま武器にして叩き付けられると、どうにもならず吹き飛ばされてしまう。

「クソツタレ！ 少しはじっとしてろ！」

「同感だわあ」

リリアーナのトークンがぶつけられ、それを追うように梅夜と白雪の火線が巨体を捉える。それをさらに追いかけて、オレンジとブラックが胴体に傷を刻んでいく。が、散発的な攻撃ではすぐに再生が始まってしまう。逆に、大きくのたうつその巨体にはじかれ、傷を負うのはこっちの神姫達だ。なにしろその体から無数に生える脚は、一本一本がストラーフのパワーアームと同じ。それ自体が高い攻撃力を持っているのだ。

大きく開けられた口から、火球が、二発、三発。それを、飛び退いてかわす神姫達。それを追いかけるように、頭を伸ばす。

「だああ、寄ってくるんじゃないやねえ！」

「しつこいんですわよ！」

バトロクロスやヴィシユヴァルパーの巨体では、大ムカデの攻撃を避けるのもままならない。立体的な回避が出来るわけではないのだ。

「危ない！ 『インパルスドライブ』！」

「……『極光』！」

渚と白雪のスキルが、割って入る。その攻撃に動きは止めたが、改

めて火球を吐く。爆発を避けるトライクが、大きく傾く。

「こつちですー！」

「そつちには行かせねーッス！」

アンジェリクスとメサルティムが、龍虫の注意を引こうと、正面から仕掛ける。寸刻空けず、巨体が、地を叩く。それに巻き込まれるような形で、二人が吹き飛ばされる。

「こんのお、『ファイアフライシユート』！」

アルキオネが最大火力を放つ。だが、その傷もすぐに消えてしまう。そもそも、ダメージを与えることが意味をなさないのだ。全員の顔に、徒勞の色が見える。

「マスター、シャウラ、早く帰ってこいよ……！」

アルキオネの眩きは、誰の耳に入ることもなく、たちこめる土埃に飲まれていった。

拳が、唸る。密着距離はジョーカーの間合いだ。が、シャドームーンも決してそれに劣らない。拳が拳を打ち、攻守を入れ替えながら決定打を狙う。互いに、大きく振りかぶった一撃。テレフォンパンチだが、鏡に写したように左右が異なる。拳と拳がぶつかる。寸刻、押し合う。めきめきという音が、聞こえてきそうなほどに、お互いに力を込める。が、どちらからともなく、飛び退る。

「いくぜ、ロストマン」

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

開けた距離を詰めるように、跳ぶ。

「ライダー、キック！」

「シャドーパンチ！」

空中で放たれた、紫のエネルギーを纏った蹴りを、青白い光を放つ銀色の拳が迎え撃つ。

「ぐ、っ……！」

「ぬ、う……！」

互いに吹き飛ばされるような形で、再度、距離が開ける。だが、互いに視線は外さない。即座に、次の手を打ち合う。

「シャドーキック！」

「ライダーパンチ！」

両足をそろえ、青白い光を放つ蹴り。それに、跳びながら突き出した拳をぶつける。マキシマムドライブは間に合わない。力負けしたのは、俺の方だ。大きく後ろに退く俺を、シャドームーンの両掌から放たれる雷光が追撃する。咄嗟に体を庇うが、ダメージは免れない。「サタンサーベルを折っただけで、勝てると思っていたのか、ツクヤ」「そこまで甘くは、してくれないだろうか？」

当然だ、と吐き捨てるロストマン。シャドームーンは、ジョーカーで言うところのマキシマムドライブを常時発動出来る。その点では、一手、俺より早いのだ。単純な力押しを繰り返すだけでは、一手分、俺の方が不利になる。それを覆すためには、攻め続けるしかない。だが、そのことはロストマンも十分承知している。

「シャドーキック！」

だから、逆に攻め込んで来る。攻めることが、俺の攻め手を途切れさせる最良の手だということが分かっているのだ。一度は挑発に乗ってくれたが、殴り倒されたことで逆に冷静さを取り戻してしまっただようだ。それでも、引くわけにはいかない。

「ライダー、キック！」

矢のように飛んで来るドロップキックを、回し蹴りで迎え撃つ。だが、威力はやはり相手の方が上だ。大きく姿勢を崩す俺に、さらに銀色の拳が追い打ちをかける。上半身を逸らすようにして、拳を避ける。が、シャドームーンの腕から伸びるエルボートリガーがジョーカーの複眼の、表面を掠める。反射的に、視界を外す。その隙を、ロストマンは見逃さなかった。返す拳が、頬に叩き付けられる。体が、寸刻宙を舞う。鋭い痛みが、遅れて襲ってくる。

「痛いだろう、ツクヤ？ 当然だ。僕達は今、生身と同じ感覚で殴り合っているんだからな」

倒れた俺を、シャドームーンの緑の目が見下ろしてくる。

「その痛みも、よく噛みしめてくれよ。まあ、そんな痛みなんてリサの感じた痛みの、ほんの一部にも満たないだろうかね」

「ずいぶん今更な講釈だな……そんなのは、最初の内に済ませておくべきだったんじゃないか……？」

「いつだって同じさ。結局、君は死ぬ。見てみるがいい。君を助けに来た神姫達の姿。僕の用意した防衛プログラム『センチピード』の前には、手も足も出ない。多少元気に歯向かったところで、結局は同じことだ。君はそれをここから見てることしか出来ない。今、何とかここと向こうを繋ごうと頑張ってるのもいるようだが……まあ、最後の壁は破れないさ」

「何だと……？」

全身から悲鳴を上げる体を、何とか起こす。

「すべての基幹プログラムは、僕と共にある。『センチピード』も、ここを護っている防衛プログラムも、大元はすべてこのシャドームーンの中だ。それがどういうことだか、分かるだろう？」

「ああ、よく分かったよ……何が何でも、お前を倒さなきゃならないってことがな」

神殿の壁に大写しにされている、醜悪な大ムカデがのたうつ度に、集まった神姫達が弾かれ、傷を負っていく。それを止めるためにも、終わらせなければならぬ。

「ロストマン、そろそろ終わらせてもらうぜ……お前の退屈な講義に付き合うのも飽きてきた」

「そうかい？ 僕としてはまだまだこれから。まずはあの神姫達が潰されていくところを見てもらわないと始まらないと思っっているんだが？」

「やれやれ、随分、悪趣味になったもんだ」

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！』

ガイアウイスパーが、メモリの力を引き出したことを告げる。だが、まだまだ。最大限の力を引き出しただけでは、足りない……！ 俺はさらにもう一度、マキシマムスロットを叩く！

『ジョーカー！ マキシマムドライブ！ マキシマムドライブ！ マキシマムドライブ！ マキシマムドライブ！ マキシマムドライブ！ マキシマムドライブ！ マキシマムドライブ……！ マキシマムドライブ……！』

「ツインマキシマムだと……？　正気か、ジョーカー、はそんなことが出来るように設計されてないんだぜ？」

ガイアウイスパーは、壊れたように同じ言葉を繰り返す。それに呼応するように、俺の身体を狂おしいまでのエネルギーが迸る。全身が、自分のエネルギーで燃やしつくされるようだ。

「君が自滅するのは構わないんだが、それでは足りないのだがね。覚悟の上で、潔く散る、なんて展開は、僕としては最も避けてほしい筋書きなのだが……仕方ないな、終わりにしようか」

腰のキングストーンが輝く。それに呼応して、シャドームーンの全身からも闇色のエネルギーが吹き上がる。

「終わりにしよう、ロストマン……」

「ああ、さよならだ、ツクヤ……」

跳ぶ。我知らず、吼える。互いに、拳。燃え上がる紫紺の力。切り札の名を冠する力が、腕を焼く。突き刺さる。互いに、胸。頑丈な強化骨格をも、砕けよとばかりに。距離が、開く。まだ終わらない。

跳ぶ。渾身の、蹴り。燃える紫紺の炎を纏って。己自身も焦がすほどの力。蒼く輝く拳が、迎え撃つ。ぶつかり合う力。互いの体以外に、逃げ場はなく。

さらに、跳ぶ。渾身の力を振り切って。突き出すは、やはり互いに、拳。輝きが、消える。構うものか。燃え尽きるまで、撃てばいい。ただ、最大限を、越えて……。

炎が、消えた。

フレームを砕く手応えが、確かに拳に伝わってきた。それは、ロストマンの、相棒の命を砕く手応えだった。寸刻、お互い動かない。が、銀色の月は静かに、膝から、地に墜ちた。

「ロストマン、済まない、俺は、ずっとそれだけをお前に伝えたかった……」

「謝るなよ、ツクヤ。何を言われても、僕が君を許せないのは変わらないんだから……」

「そうか……」

「そうさ……」

シャドームーンが、地に伏せる。それと同時に、足元が揺れる。それと共に、柱が、天井が、壁が、崩れて落ち始める。オブジェクトがデータの塊に分解され始めている。

「このサーバーは、僕が負けたら、自動的にデータが破壊されるようにしてあったのさ……残念だったな、ツクヤ。君の、勝ちだ。でも、君の意識だけは、意地でも地獄まで一緒に連れて行くよ……」

「そうか」

地に伏せたまま、ロストマンが呟くようにそう言った。成程、ロストマンらしいと言えば、らしい。ロストマンの目的は最終的には俺の命なのだから、当然の保険と言えるかもしれない。

「……残念だな、驚かないのかい？」

「いいさ。言っただろ、俺の命で済むんなら、最初からお前にくれてやるつもりだった。先に行って待っていてくれよ、ロストマン。リサと、二人で……」

笑う。その言葉に、相棒は笑った。

「馬鹿なことを言うなよ、ツクヤ。リサは、天国だ。僕と一緒にには、待てないさ」

「……そうだな」

沈黙。わずかに残された時間に、互いに交わす言葉は持たなかった。周囲の崩壊は、続いている。

「炎の中で、待ってるよ、相棒」

「ああ。じゃあな、相棒」

天井の崩落が始まった。

疲れた。

それだけを、思った。もうこれで、終わりにしてもいい。俺が生きている理由なんて、もう何も残っていない。

そうだ。あのときもそう思った。リサを失い、相棒をなくし、バトル競技を捨てたあの日。あの日俺はすべてをなくしたんだ。

ロストマン。なくした者。それは相棒の名でもあったが、俺自身の

ことをも指していたのじゃないか。

ひとときわ、激しい崩落。瓦礫が横たわった影の月を埋めていく。崩れた上にあるのもまた、闇だった。光はない。俺の心と同じように。なくした者の心に広がる、闇のように。ただ、殻を破れば、黒々としたものだけが広がっていく。相応しいのかもしれない。こんな風景が、俺達の最後には。

投げ捨てた帽子を拾い、天を仰ぐ。

目を閉じる。閉じた先にもまた、闇。

そうだ。俺には、光なんて残されていない。

行く先は、同じ、黒い地獄の炎の中、だ。

不意に、瞼の上に、明るさを感じる。

馬鹿な。こんな心の中の奥底にまで、届く光があるはずがない。

目を、開く。闇色の天蓋に、わずかに亀裂が走る。そこから漏れているのは、白色の光……。

「……じ……」

聞こえる。声が。

呼んでいる、声が！

「……るじ……」

この声は。この声は！

「主！」

天が、割れる。そこから飛び込んできたのは、シャウだ。

馬鹿だな、こんなに傷だらけになって。全身ぼろぼろで、サブアームもない。機械脚も、片方は膝から下が欠けている。

そんなになつてまで、俺のところに来ようとしたのか。そんなになつてまで俺を探したのか。

「……無事ですか、主！……どこがおかしいところは……主？」

懐かしい声だった。

一週間程度しか離れていないのに。

自分から、離れることを決めたのに。

シャウの声が、たまらなく懐かしかった。

俺は持っていた帽子で、顔を覆った。

声は、出なかった。ただ、シャウの胸に、俺はすがりついていた。シャウも、それを黙って受け止めてくれた。

突如、大ムカデはその動きを止めた。寸刻の沈黙の後、咆哮を上げ、龍虫がのたうち回る。

「今度は何ですか?!」

「何か仕掛けてきやがるぞ! 気をつけろ!」

「いや……これは……!」

めいめいが、声を上げる。だが、蛇龍の体が少しずつ、本当に少しずつ灰のようになり、無数にある足の先から崩れていくんだ。

「マスターが、やったんだ……」

「じゃあ、終わったのねえ……」

「やった……やったツス!」

それが、勝利を告げるものだ、ボク達は思った。一瞬にして湧き上がる歓声と解放感。

だが、そうじゃなかった。世界が、揺れ始めた。ボク達の勝利は、この大ムカデを倒すことじゃなかったんだ。

不意に、足元の地面が、空が、崩れ出す。すべてが、何もない空間に、虚無に、飲まれていく。

『いけない、データサーバーの崩壊が始まった! みんな、早く非難するんだ、巻き込まれたら君達の意識まで消されてしまう!』

菊川サンの悲鳴じみた声が響く。その声に、他の神姫達は離脱の姿勢を取った。

「待ってよ、まだ、シャウラが! マスターが!」

ボクは、必死に声を上げる。まだ、門からはシャウラ達が戻ってくるはずだ。それを待たないでは帰れない!

「そんなこと言ってる場合じゃねえだろ! 死にてえのか!」

「ここにいるのは危険ですわ! そんなことも分かりませんか?!」

そんなことは分かっている。でも、それとこれとは話が別だ。他の神姫達から離れようとするボクの肩を、渚つちが掴む。

「アルキオネさん、はやく!」

「放せよ渚っち！ マスターが！ マスター！」

いくら重量装備とはいえ、力では『ビアンキ』には敵わない。何とかして制止を振り切ろうとするボクを、渚っちが無理やり抑え込む。

「お前もこっちに来るのだ！ 巻き込まれたら死んじゃうのだ！」

「いやッス！ご主人と、姉さんを、待たないと！ 放すッス！」

「オレンジ、引っ張れ！ 力づくでも連れ出すぞ！」

向こうでも、メサルティムが無理やりに引きずられていく。最初から戦っていたボクラ二人には、碌に抵抗する力も残されていない。それでも、ボクラは、待たないといけない。最後まで、二人を待たないといけない！

「……いけない、門が崩れる」

「はやく、こっちへ！」

白雪とアンジェリクスが、このサーバーの出口を指差す。ボクも、メサルティムも、何とか崩れそうな門に向かおうとするが、叶わない。足元の揺れが、一層激しくなる。

「姉さん！」

「マスター！」

叫ぶ声が、重なった。

崩れ落ちる、門。門扉は落ち、支柱は歪み、その姿をとどめなくなる最後の一瞬。流星が、夜を切り裂いた。

「なんだ、大げさなお出迎えだな……皆、わざわざ集まってくれたのか」

「怒られますよ、そんなこと言ってる……みんな、必死だったんでしようから」

足元には、みんないた。日野のリリイも、花道の梅夜と白雪も。菱木さんのオレンジとブラックもいる。レグルス達も来てくれたんだな。榊刑事、アンジェリクスと一緒に連れて来てくれたのか。渚さんもいるのは、なんでだ？ シャウが声をかけたのだろうか。一番ありがたい相手だが、どうやって……？

「なあ、シャウ」

「はい」

「どれだけ連中に頭を下げたら、足りるかな……？」

「分かりませんが、そんなこと……でも、私も一緒に頭を下げて回りますよ。主の行くところなら、どこへでも、一緒に参ります」

「そうか……」

「はい」

ゆっくりとうなずくと、シャウは、優しく微笑んでくれた。

「……帰って、来れたな……」

「ええ、お互い、無事に……」

「シャウ」

「何ですか？」

「……ただいま」

「お帰り……なさい……」

相棒、少し。もう少しの間、待っていてくれ。

そんなには待たせないつもりだが。

でも、俺は、もう少しだけ、こっちにいるよ。

そう、新しい光を、見つけたんだ……。

砕けた空が、欠片になって白い空間に降り注ぐ。

まるで光に、包まれていくようだ。

俺は、そう思った。

崩壊するバーチャル空間から逃げ込んだ先は、バトルロンドのテイルルームだった。落ち着く空間に戻ってきて全員がめいめいに互いの無事を喜んでいる。

『お疲れ様』

『……決着は、ついたのかよ?』

「日野、花道……ああ、ついたよ。お前達にまで、迷惑をかけたな、済まん」

『へっ、何言ってるんだよ。言ったら、俺達は仲間だって。こんなの、なんてことねえよ。むしろ、頼ってるんだ』

『まったくだよ、花道、心配して大変だったんだよ? 君は知らないだろうけど、花道はずっと、レジエンド・バトル世界チャンピオンの君の、ファンだったんだぜ』

『手前え! 日野! それは言わない約束だろ!』

……初めて聞いた。会った時から花道達は、俺の過去のことをまったく知らないのだと思っていたし、事実そんなそぶりはまったく見せたことがなかった。だからこそこの二人の前では、俺は過去の罪に怯えずにいられたのに。

『まったく、律儀だよ、花道も。知ってるって言ったら君が気にするだろうって、ずっと黙ってたんだから。君が入学当初、ふさぎこんでいたときだって……』

『だーっ! もう、やめだ、やめ! 全部終わったんだろ? なら辛気臭せー話はおしまいだ!』

照れちやつて、と、日野が茶化する。まったく、この二人も俺には過ぎた友人達だ。そのありがたさが、胸に来る。

『俺とレグルスにも、恩に着てもらおうか?』

『そうね、私達はまだ、刑期が全うされてないからねえ……』

この二人が来てくれたのは、良い意味でも悪い意味でも予想外だった。むしろ、俺のことを恨んでいても、おかしくないのだが……。

『一応、その辺の取引で出してもらえてるんでな、これが終わったらま

た檻の中ではあるが』

『貴女の首を狩るのは、出てくるまで待つてあげてあげるわあ』

『……謹んで遠慮させていただきます』

シャウが答える。正直、レグルスにルール無用で絡まれ続けるなんて、俺にとつてもゾツとしない話だ。

『俺らのことまで忘れていないだろうな？』

『覚えてますよ、菱木さん。ブラックとオレンジには手を焼いたし、俺も直接殴られているんだ。忘れられるわけないでしょ』

『まあ、今回は自分の借りを返しに来ただけだからよー。これでチャラにしてもらうぜ？』

『構いませんよ、俺としては貸し借りのつもりがなかったんで、来てくれてたこと自体意外でしたけど』

俺は、あつという間に今回の作戦に参加してくれたメンバーに取り囲まれてしまう。もっとも、今回の目標は他ならぬ俺自身だったのだから、それも仕方ない。全員が浅からぬ因縁と共に、何がしかの思いを抱いているはずだ。その中でも……。

『しかし、MK、Aさんと渚さんまで来てくれるとは思わなかった』

彼は、わざわざ地方から協力してくれたという。その意味でも、今回の作戦では、一番苦勞をかけただろう。

『本当にご面倒をおかけしました』

『いや、いいんだよ。刑事さんが君の家を調べた時に、PCの履歴から自分の連絡先を見つけたらしくくてね、声をかけてくれたんだ。大変だったね、深波君』

『ええ、ご心配をおかけしました』

ちく、と胸が痛む。この、針の刺さるような痛みは、俺の背負うべき罪だろう。

『とところでさ、ひとつお願いがあるんだけど、いいかな？』

『ええ、俺に出来ることなら、何でも言うってください。お二人には、返し切れない借りが出来ましたから』

じゃあ、お言葉に甘えて、とMK、Aさんがはにかむ。とは言っても、俺に出来ることなんて限りがあるのだが。

『せっかく顔を合わせたんだ、どうだろう、バトルロンドを、一戦』
『勿論、二人さえよければだけれど。どうか？』

渚さんも、目を輝かせてそう言う。一瞬、俺は面食らってしまった。シャウもそうだが、渚さんだって全身は傷だらけだ。特に左のサブアームは外から見たって損傷が大きい。

『いやあ、あれから何度も君達のデータを使ってトレーニングマシンで再現してみたんだが、どうにも納得がいなくてね。あの日、試合には勝ったけど、勝負に勝った気がなくて、ずっともやもやしていたんだ。駄目、かな？』

俺は歎息をひとつ吐く。俺達の恩人にそんなことを言われたら、断ることなんて出来るはずもない。まして、そこまで惚れ込んでもらえているのなら、バトルロンドのプレイヤー冥利に尽きるというものだ。

「シャウ、いけるか？」

俺は、相棒に声をかける。勿論、シャウはぼろぼろだ。サブアームも片方欠けているし、強化脚も片足は膝から下が無い。飛行装備も、限界が近いだろう

『ええ、主が望むのならば、いつでも。それに……』

シャウは笑顔で答える。俺達のお決まりのやり取りだ。だが、珍しく、シャウがそれに言葉を継いだ。

「それに？」

「私も、渚さん。貴女と、決着をつけたかった！」

是非もなし、ということだろうか。あの日の決着は、二人にとって、意味をなさないものだったのだろう。

『おいおい、本気かよ。あれだけダメージ食った後なんだぜ？』

『もったいねーな、こんなカードなら、裏で流しても金が取れるつてのに』

他のマスターも、口々に笑う。たしかに、普通なら、日を改めて、というのがいいところだろう。でも、俺には、俺達には、今日この日が良かった。

『ふむ、それじゃあ僭越ながら、僕が合図をしようか。準備は、いいか

ね?』

そう言ってくれたのは、榊刑事だ。

「シャウ、ビットは残ってない。ビームガンで牽制して、間合いを詰める」

『承知!』

『渚さん、左腕はダメージで碌に動かないぞ。当然そっちから攻められる。回り込まれないように注意して』

『了解!』

『それでは……始め!』

開始の合図が響いた。

開幕から激しい打ち合い。シャウは、三刀。しかし、片足すら欠いた状態でバランスを取るのには難しい。一方で渚さんも、主体となるのは片腕のみ。脚にも少なからぬダメージがあるようで、得意の足技は鳴りを潜めている。

どちらも本調子でないのは傍目にも明らかだ。当然だ。あれだけの長い戦いの後なのだ。こんなにぼろぼろの状態で、なおバトルをしようという方がどうかしてる。

それでも。

「AMABCを活かせ! 変則機動がエスパディアの真骨頂だ。相手を振り回せ」

『はい、主!』

『ライトニングドライブを撃つ余裕は残ってないぞ! 相手に寄ってもらってからが勝負だ』

『オーケー、オーナー!』

うるさいぐらいに周囲を飛び回る。その機動は、普段の鋭さが見る影もない。それを迎撃する『ビアンキ』。やはり、雷光のようだった剛腕は、明らかにダメージで動きが鈍い。左右の連携も、片腕が死んでる今となっては望むべくもない。

それでも。

『おいおい……』

『まったく、クレイジーな連中だぜ』

『シャウラちゃん、笑ってる……』

『渚さんも、だね』

二人の神姫からは、笑みがこぼれていた。その笑顔から繰り出される一撃は、どちらも必倒。しかし、その一撃が相手を捉えることはない。

「いいぞ、こっちのサブアームはもう半分死んでる。盾に使ってしまえ。本命は鬼姫だ!」

『ええ、狙っていきます!』

『小さく、細かく! 迎撃の基本を思い出せ、渚さん! ただし、全部当たってる気で!』

『分かってるよ! まだまだいけるからね!』

楽しいな。

——ああ、楽しい。

あなたも、そう思いますか。

——勿論だとも。

こんな、限界ぎりぎりのバトルなのに。

——だから、いいんだろう?

ええ、確かに。

——これだから。

ああ、これだから。

「武装神姫は、やめられない!」

「そろそろ限界だ、リアパーツが保たないぞ、シャウ。決めに行け」

『承知です、主!』

『渚さん、相手は全部賭けで来るぞ。出し惜しみはなしだ』

『元から、そのつもりだつて!』

開いた距離を、詰めずに構える。それは、互いの二つ名の元になった大技の構え。

『スキル!』

声が、重なる。全身から、光が燃え上がる。

『決めます！』『無銘！』『大顎！』

『迎え撃つ！』『神雷』！』『発動！』

片や、刃が重なり、蒼の裁ち鋏を形作る。片や、雷を受け、白い閃光を身に纏う。

『ライトニング・ダイナミック・オーバー！！』『いつけええええ！！』

『呑み込め！』『大顎！！』『やあああああ！！』

白い光が、飛ぶ。

蒼い光が、口を開く。

寸刻、ぶつかる。そして――。

俺は、すべてを失った。

だが、それは過去の話だ。

これは、俺を取り戻す物語。

なくしたものをすべて、新たに得るまでの物語。

俺の名前は、深波月夜。

今は、ただの神姫マスターだ。

そして、これからも。

「蠍の尻尾」了。